

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第161集

なごやじょうさんのまるいせき
名古屋城三の丸遺跡Ⅷ

2008

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県埋蔵文化財センターによる名古屋城三の丸遺跡の発掘調査は、今回で第8次となります。この広大な遺跡には名古屋城が築かれた江戸時代ばかりでなく、それ以前の戦国期の那古野城の築城があり、中世の寺院跡、古墳時代・弥生時代の建物跡や墓が検出されるなど、調査のたびに各時代の人々の暮らしの有り様が鮮やかに立ち現れてきます。

今回の調査でも、文字通り「新しい」発見がありました。第二次大戦時、おそらく終戦間際に陸軍により築造された幾つもの防空壕です。「爆撃の跡」といったような戦争の惨禍を直接に示す資料ではありませんが、残されていた当時のモノが伝える兵士の「日常性」に愕然とし、少なからずショックを受けました。「昭和」という考古学の世界では極めて新しい時代、しかも「戦争」の痕跡と向き合う貴重な機会であったと考えています。

戦後60年を過ぎた今日、これら大切な歴史を語る情報も大部分が伝聞による知識になりつつあります。こうした出土資料および掘り出された地点の歴史が伝える意味は、更に重要度を増すことになるでしょう。

調査にあたりまして、関係諸機関、周辺地域のみならず多大なご協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げます。

今回の調査成果が、地域の歴史理解と埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成20年3月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 林 良三

例 言

1. 本書は愛知県名古屋市中区丸の内内に所在する名古屋城三の丸遺跡（なごやじょうさんのまるいせき；県遺跡番号 007027）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、名古屋高等・地方・簡易裁判所庁舎増築に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局営繕部より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査面積は計 1,089 m²である。
3. 発掘調査は平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月の期間で実施した。また、整理および報告書作成作業は、平成 19 年 4 月から平成 20 年 3 月にかけて実施した。
4. 現地における発掘調査は、朝日航洋株式会社の支援を受けて行い、池本正明（主査）・加藤博紀（調査研究員；現 県立津島東高等学校教諭）・武部真木（調査研究員）が担当した。なお、支援スタッフは第 1 章 1 に記す通りである。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、名古屋市教育委員会、国土交通省中部地方整備局営繕部、名古屋高裁・地方・簡易裁判所をはじめとして、多くの関係諸機関の協力を得た。
6. 本書の執筆は、鈴木正貴・加藤博紀・鬼頭 剛・蔭山誠一・川添和暁・武部真木が分担し、編集は武部が行った。なお自然科学分析結果は（株）パレオ・ラボの報告書を掲載した。
7. 整理作業は武部が担当した。作業にあたっては下記の方々、関係機関の助力を得た。
今田清美、時田典子、水野留香、堀田春美、小川あかね、前田弘子、村上志穂子（以上整理補助員）
（株）パレオ・ラボ、（株）テイケイトレード、写真工房 遊、（株）東都文化財保存研究所
8. 本書に示す座標数値は国土交通省に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。表記は世界測地系を用いている。
9. 遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理を行った。
10. 写真および図面などの調査に関わる記録類は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
（財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4161）
11. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24（0567-67-4164）
12. 本書を作成するにあたり、下記の方々から多大なご指導とご助言を得た。
記して感謝したい。（五十音順、敬称略）
浅川範之 伊藤秋男 伊藤厚史 井上喜久男 大西雅広 金子健一 神戸聖吾
佐藤公保 仲野泰裕 中村隆雄、菊池 実 橋崎彰一 服部 郁 藤澤良祐
森本伊知郎 山下峰司 渡辺 誠

目次

第1章 調査の概要

1 調査の経緯と経過	(加藤)	1
2 周辺の自然環境	(鬼頭)	5
3 遺跡周辺の歴史的環境	(加藤)	8

第2章 遺構

1 遺構の概要と基本層序	(武部)	16
2 中世・戦国時代	(武部)	22
3 江戸時代	(武部)	26
4 近代以降	(武部)	33

第3章 出土遺物

1 出土状況の概要	(武部)	36
2 土器・陶磁器	(武部)	36
3 ガラス製品・その他	(鈴木・武部)	100
4 金属関連資料	(陸山)	105
5 石器・石製品	(川添・武部)	113

第4章 自然科学分析

1 土師質鍋付着物の放射性炭素年代測定	(株)バレオ・ラボ	115
2 動物遺体の同定(戦国期・近世・近代)	(株)バレオ・ラボ	118

第5章 総括 (武部) 126

付表

登録遺物一覧表

図版

基本平面図

写真図版(遺構・遺物)

写真図版 目次

- 遺構 1
- 1 調査区南東隅（北西から）
 - 2 調査区全景（西から）
- 遺構 2
- 3 戦国期の堀（605SD ほか、北から）
 - 4 堀（605SD 北壁での断面、南から）
 - 5 堀（605SD ベルト断面、北から）
 - 6 溝（606SD-e 地点断面、南から）
- 遺構 3
- 7 上面 東半部分
（戦国期の堀・区画溝検出状況、北から）
 - 8 溝（東西にのびる 603SD、東から）
 - 9 溝（南北にのびる 606SD、南から）
 - 10 溝断面（603SD 東壁にて、西から）
 - 11 溝断面（606SD-a 地点、北から）
 - 12 溝断面（606SD-b 地点、南から）
- 遺構 4
- 13 下面完掘状況
（戦国期の堀・区画溝、北東から）
 - 14 溝断面（607SD、東から）
 - 15 堀断面（606SD-f 地点、北壁にて、南から）
 - 16 溝完掘状況（607SD、西から）
- 遺構 5
- 17 屋敷境の溝と柱穴列（北から）
 - 18 調査区北東隅壁面（南から）
 - 19 土坑完掘状況（085SK、北から）
 - 20 土坑遺物出土状況
（085SK ベルト南側部分、東から）
- 遺構 6
- 21 調査区北西部廃棄土坑群（西から）
 - 22 土坑遺物出土状態（492SK、北から）
 - 23 土坑断面（389SK、南東から）
 - 24 土坑完掘状況と調査区北壁
（387SK、492SK 付近、南から）
 - 25 土坑完掘状況と壁面
（389SK、南から）
- 26 土坑遺物出土状態と壁面（380SK、南から）
- 遺構 7
- 27 土坑検出状況
（413SK 上層掘削段階、南東から）
 - 28 土坑遺物出土状態
（413SK の椀瓦と焼土塊、北から）
 - 29 土坑完掘状況（413SK、東から）
 - 30 土坑遺物出土状態
（153SK 脆衣埋納遺構か、東から）
 - 31 土坑遺物出土状態（387SK、南東から）
 - 32 土坑ベルト断面（387SK、東から）
 - 33 地下室断面（381SK、南から）
- 遺構 8
- 34 地下室完掘状況（381SK、南東から）
 - 35 下層遺物出土状態（381SK、東から）
 - 36 礎石を伴う土坑（460SK、北から）
 - 37 礎石を伴う土坑（120SK、北から）
 - 38 礎石を伴う土坑（326SK、南から）
 - 39 礎石を伴う土坑（412SK、東から）
 - 40 礎石を伴う土坑（460SK、北から）
 - 41 礎石を伴う土坑（408SK、南から）
 - 42 礎石を伴う土坑（409SK、東から）
 - 43 礎石を伴う土坑（495SK、北から）
- 遺構 9
- 44 版築状埋土断面（196SK、手前が東）
 - 45 土坑最下層（196SK、上から）
 - 46 版築状埋土（部分）と段削り出し
（196SK、南から）
 - 47 土坑検出状況（196SK、北西から）
 - 48 版築状埋土最下層（194SK 付近、南から）
 - 49 土坑断面（832SK、東壁にて）
 - 50 土坑最下層（553SK、西から）
- 遺構 10
- 51 溝完掘状況（026SD、027SD 重複、東から）
 - 52 溝断面（東壁 026SD、027SD 付近、西から）
 - 53 調査区南東隅壁面（西から）

54	調査区南壁面 (606SD 付近, 北から)	遺物 1	磁器染付碗類
55	石材廃棄 検出状況 (001SD,002SD, 北西から)	遺物 2	磁器染付碗皿類
56	石材廃棄状況 (001SD 部分, 北から)	遺物 3	磁器染付・青磁・陶器
遺構 11		遺物 4	陶器碗類
57	防空壕埋土 (090SD, 西から)	遺物 5	陶器碗皿類
58	防空壕出入口スロープ (340SX, 北から)	遺物 6	陶器碗皿類
59	防空壕完掘状況 (090SD, 西から)	遺物 7	陶器類 (灯火具・その他)
60	防空壕と地下室(340SX と 381SK, 北東から)	遺物 8	陶器類 (その他)
61	防空壕と当時の掘削痕(340SX 周辺, 北から)	遺物 9	陶器類 (その他)
62	産業廃棄物の分別 (煉瓦, 石材, コンクリート, 鉄筋等)	遺物 10	陶器類 (貯蔵・調理具)
遺構 12		遺物 11	土師質製品 (鍋・釜・皿・その他)
63	上面完掘状況 (南東から)	遺物 12	土師質製品 (皿・その他)・玩具類
64	下面完掘状況 (東半部分, 北から)	遺物 13	玩具類・瓦・近代陶磁器・石器
遺構 13		遺物 14	近代陶磁器
65	下面完掘状況 (中央部分, 北から)	遺物 15	近代陶磁器
66	下面完掘状況 (西半部分, 北から)	遺物 16	歯ブラシ・近代陶磁器・金属製品
		遺物 17	金属製品
		遺物 18	ガラス製品

挿図 目次

図1	愛知県的位置	1	図36	389SK 出土陶磁器 6 (S=1/3)	54
図2	名古屋城域の発掘調査地点	2	図37	381SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	55
図3	調査区的位置	3	図38	381SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	56
図4	名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図	6	図39	381SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)	57
図5	調査地点屋敷削り推定図	8	図40	381SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)	58
図6	1910年(明治10)の名古屋城	11	図41	381SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)	59
図7	1921年(大正10)の名古屋城	11	図42	381SK 出土陶磁器 6 (S=1/3)	60
図8	1945年(昭和20)の名古屋城	12	図43	381SK 出土陶磁器 7 (S=1/3)	61
図9	基本層序概念図	16	図44	492SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	62
図10	南壁土層断面図 (S=1/40)	17	図45	492SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	63
図11	東壁土層断面図-1 (S=1/80)	17	図46	492SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)	64
図12	東壁土層断面図-2 (注記)	18	図47	492SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)	65
図13	北壁土層断面図-1 (S=1/80)	19	図48	492SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)	66
図14	北壁土層断面図-2 (S=1/80)	20	図49	387SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	67
図15	北壁土層断面図-3 (注記)	21	図50	387SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	68
図16	北壁土層断面図-4 (注記)	22	図51	387SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)	69
図17	堀 605SD 断面図 (S=1/40)	23	図52	387SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)	70
図18	区画溝 607SD・603SD・606SD-a 断面図 (S=1/40)	24	図53	387SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)	71
図19	196SK 断面図-1 (S=1/40)	26	図54	413SK 出土陶磁器 (S=1/3)	72
図20	196SK 断面図-2 (S=1/40)	27	図55	北西部土坑群出土陶磁器 1 (S=1/3)	73
図21	土坑 389SK・381SK 断面図 (S=1/40)	28	図56	北西部土坑群出土陶磁器 2 (S=1/3)	74
図22	土坑 492SK 遺物出土状態 (S=1/30)	29	図57	包含層 (北西部土坑群) 出土陶磁器 (S=1/3)	75
図23	土坑 387SK 遺物出土状態 (S=1/30)	30	図58	110SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	76
図24	土坑 413SK 断面図 (S=1/30)	31	図59	110SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	77
図25	防空壕配置図	33	図60	110SK 出土陶磁器 2 (S=1/2.1/3)	78
図26	中世・戦国時代の陶磁器 (S=1/3)	37	図61	085SK 出土陶磁器 (S=1/3)	79
図27	466SE 出土陶磁器 1 (S=1/3)	45	図62	北東部土坑群出土陶磁器 1 (S=1/3)	80
図28	466SE 出土陶磁器 2 (S=1/3)	46	図63	北東部土坑群出土陶磁器 2 (S=1/3)	81
図29	466SE 出土陶磁器 3 (S=1/3)	47	図64	包含層 (北東部土坑群) 出土陶磁器 1 (S=1/3)	82
図30	466SE 出土陶磁器 4 (S=1/3)	48	図65	包含層 (北東部土坑群) 出土陶磁器 2 (S=1/3)	83
図31	389SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)	49	図66	包含層 (北東部土坑群) 出土陶磁器 3 (S=1/3)	84
図32	389SK 出土陶磁器 2 (S=1/3)	50	図67	その他の地点の出土陶磁器 (S=1/3)	85
図33	389SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)	51			
図34	389SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)	52			
図35	389SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)	53			

図 68	389SK 出土平瓦・丸瓦 (S=1/4)	86	図 83	その他の素材の製品 (S=1/3)	105
図 69	389SK 出土軒丸瓦・丸瓦・軒棧瓦 (S=1/4)	87	図 84	金属製品 1 (S=1/3)	107
図 70	381SK 出土軒棧瓦 (S=1/4)	88	図 85	金属製品 2 (S=1/3)	108
図 71	380SK・492SK・413SK 出土軒棧瓦 (S=1/4)	89	図 86	金属製品 3 (S=1/3,1/4)	109
図 72	飾り瓦・刻印 (S=1/4)	90	図 87	金属製品 4 (S=1/4)	110
図 73	近代 出土陶磁器 1 (S=1/3)	91	図 88	寛永通宝拓本 (S=1/1)	112
図 74	近代 出土陶磁器 2 (S=1/3)	92	図 89	勝川遺跡出土蹄鉄 (S=1/4)	112
図 75	近代 出土陶磁器 3 (S=1/3)	93	図 90	石器 (S=1/2,1/3)	113
図 76	近代 出土陶磁器 4 (S=1/3)	94	図 91	石製品 (S=1/3)	114
図 77	近代 出土陶磁器 5 (S=1/3)	95	図 92	暦年較正結果	117
図 78	近代 出土陶磁器 6 (S=1/3)	96	図 93	検出された貝類	123
図 79	近代 出土陶磁器 7 (S=1/3)	97	図 94	検出された魚類骨	124
図 80	各遺跡ガラス瓶組成	98	図 95	検出された爬虫類と哺乳類骨	125
図 81	ガラス製品 1 (S=1/3)	99	図 96	中世・戦国期主要遺構の変遷	126
図 82	ガラス製品 2 (S=1/3)	101	図 97	武家屋敷南辺境界の推定図	128
		102	図 98	屋敷地 1・2 境界の推定図	129
		103			

挿表 目次

表1	調査日誌抄	3	表11	近世陶磁器組成表(387SK)	42
表2	調査担当者	3	表12	名古屋城三の丸遺跡のガラス製品組成表	104
表3	名古屋城三の丸遺跡周辺で みられる地質	5	表13	測定試料及び処理	115
表4	屋敷地拝領者の変遷	9	表14	放射性炭素年代測定及び 暦年校正の結果	116
表5	拝領した尾張藩士の事跡	9	表15	動物遺体種名表	119
表6	関連年表-1(明治から終戦まで)	14	表16	貝類数量表	120
表7	関連年表-2(明治から終戦まで)	15	表17	魚類数量表	124
表8	近世陶磁器組成表(466SE)	39	表18	爬虫類および哺乳類数量表	124
表9	近世陶磁器組成表(389SK)	40	表19	防空壕の構造と規模	130
表10	近世陶磁器組成表(381SK)	41			

第1章 調査の概要

1 調査の経緯と経過

名古屋市内の中心部に位置する著名な史跡、近世名古屋城の敷地のうち、本丸と二之丸の東側および南側に設けられた「三之丸」が名古屋城三の丸遺跡の範囲である。遺跡の調査は、これまでに18次（二の丸地区も含めると21次）に及ぶ（図2）。1975年に開始されて以来、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、愛知県埋蔵文化財センターなどにより断続的に調査が行われている。

平成17（2005）年度、愛知県教育委員会へ当該地点の埋蔵文化財所在の照会があり、依頼を受けた愛知県教育委員会が現地において遺跡の有無確認調査を行った。その結果により当該範囲は発掘調査の必要があると判断された。今回の調査は、名古屋高等・地方・簡易裁判所庁舎増築に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局営繕部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として（財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが行った。

調査期間は平成18年11月～平成19年3月であり、調査面積は、1089㎡である。調査は池本正明（主査）・加藤博紀（調査研究員）・武部真木（調査研究員）が担当して行った。また、調査の支援を（株）朝日航洋に委託して行った。スタッフは表2に示す通りである。

平成19（2007）年度4月より整理作業を開始し、年度内に報告書を作成・刊行した。資料整理作業にあたっては、科学分析を（株）パレオ・ラボに依頼し、遺物実測およびデジタルトレース業務はテイケイトレード（株）、遺物の写真撮影を写真工房遊、金子知久氏に委託して行った。

（加藤博紀）

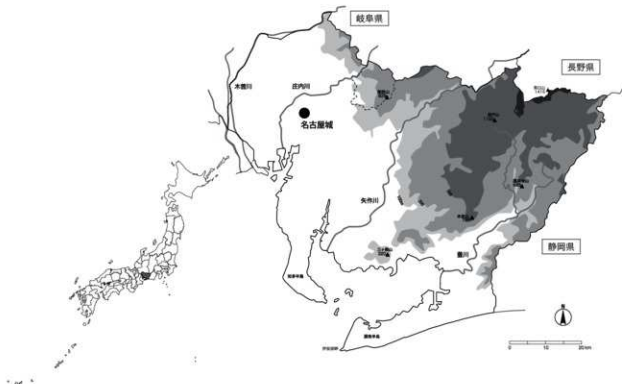
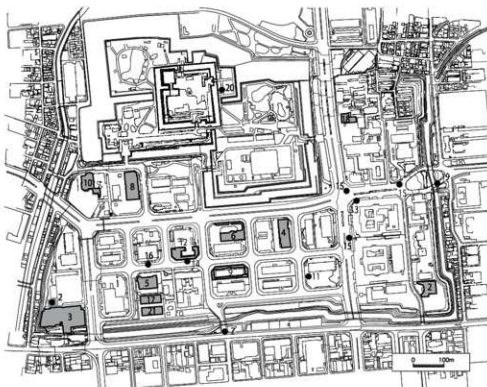


図1 愛知県的位置



地点名	調査年	調査主体	文 献
1 名古屋城二の丸庭園地点	1975	名古屋市教育委員会	『名古屋城二ノ丸庭園発掘調査概要報告書』
2 名古屋市公館地点	1987～1988	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡1・2・3調査の概要』
3 愛知南蔵院書庫地点	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡1』
4 名古屋第一地方合同庁舎地	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡II』
5 藤島家庭裁判所地点	1990～1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡III』
6 愛知南蔵院本部地点	1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡IV』
7 本町御門地点	1991	名古屋市教育委員会	『名古屋城本町御門跡発掘調査概要報告書』
8 中部電力地下変電所地点	1992～1993	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査報告書—遺構編・遺物編』
9 愛知南三の丸庁舎地点	1993～1994	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡V』
10 名古屋市産業室地点	1993～1994	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』
11 無縁院別当地点	1995	愛知県教育委員会	『代替無縁院別当建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
12 名城病院地点	1995～1996	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査報告書』
13 地下鉄出入口地点	1998	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査報告書』
14 下水道管築造地点	1999～2000	名古屋市教育委員会	『下水道工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』
15 NTT電話工事地点	2000	㈱/スコ	『名古屋城三の丸遺跡—平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
16 ガス管理施設工事地点	2001	㈱/スコ	『名古屋城三の丸遺跡—ガス管理施設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
17 地方精英裁判所庁舎地点	2001	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡VI』
18 国立名古屋病院地点	2002	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡VII』
19 東洋橋本交差点地点	2002	名古屋市教育委員会・㈱/スコ	『愛知県埋蔵文化財情報19』
20 名古屋城本丸勝手東門地点	2003・2005	名古屋市教育委員会・㈱/スコ	『特別史跡名古屋城本丸勝手馬出石垣修築工事発掘調査報告書—丸勝手東門地点の調査』
21 地方精英裁判所合同庁舎地点	2006～2007	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡VIII』

図2 名古屋城域の発掘調査地点

表1 調査日誌 抄

2006 (平18)	11月16日	作業工程等打ち合わせ
	11月22日	重機による表土剥ぎ
	11月30日	発掘作業員による掘削作業開始
	12月26日	産業廃棄物搬出開始
2007 (平19)	1月12日	伊藤淳史氏来訪
	1月16日	全体撮影（北館裁判所建物屋上から）
	1月17日	伊藤秋男氏来訪
	1月24日	小田寛貴氏来訪
	1月25日	ラジコンによる同化撮影・全体撮影（高所作業車から）
	1月26日	全体撮影（北館裁判所建物屋上から）・個別写真撮影
	2月8日	森本伊知郎氏来訪
	2月15日	安全パトロール
	2月20日	高木ひろし君来訪
	2月21日	横崎一氏による調査指導・ラジコンによる同化撮影
	2月22日	全体撮影（裁判所建物屋上および高所作業車から）
	3月11日	埋蔵文化財センター運営協議会視察
	3月2日	柴池実氏・伊藤淳史氏来訪
	3月3日	現地説明会
	3月6日	東郷雄輔様来訪
	3月7日	北郷雄輔様来訪
	3月13日	丹戸（466SE）断ち割り調査
	3月14日	渡辺誠氏による遺物指導
	3月15日	補足調査完了
	3月19日	埋め戻し

表2 調査担当者

愛知県埋蔵文化財センター 調査担当

主査	池本正明
調査研究員	加藤博紀
調査研究員	武部真木

支援スタッフ

現場代理人	浅田良治
調査補助員	楠部博世
測量技師	伊藤正博
測量助手	水野聡哉

朝日航洋株式会社 中部空情支社



図3 調査区的位置



- 1 調査前風景
- 2 表土掘削作業
- 3 調査区北方に見える名古屋城本丸
- 4 防空壕 (SX340) 掘削作業

5・6 2007年3月3日
現地説明会開催



2 周辺の自然環境

名古屋城三の丸遺跡は名古屋市中区丸の内にある。名古屋市は愛知県の西に位置し、名古屋城三の丸遺跡の調査地点は名古屋市中でも北西部にあたる（図4）。調査地点から約4.8km西には名古屋市内を流下する主要な河川のひとつである庄内川が南西へ流れ、庄内川からさらに西方約20.2kmには愛知県と岐阜県・三重県とを境する木曾川が、木曾川から約0.7km西には長良川、長良川よりさらに約3.7km西には揖斐川がそれぞれ南流し、伊勢湾にそそぎこんでいる。今回の調査地点は東海道本線・新幹線の名古屋駅から北東へ約1.8kmで、かつ現在の名古屋城天守閣から南へ約0.8kmの距離にある標高約13mの「熱田台地」とよばれる台地の北西縁辺部に立地する。台地の直下にひろがる標高およそ5.0mよりも低いところには地質図において白色で表される完新統が分布しており、いわゆる濃尾平野の沖積低地を形成している（図4）。調査地点での台地と沖積低地との標高差は約8mである。なお、熱田台地の西縁に沿って名古屋港へと流れる堀川は慶長十五年（1610年）の名古屋城の築城に伴い開削され、慶長十六年（1611年）に掘割りを終える人工的な水路である（服部、1981）。

名古屋城三の丸遺跡周辺地域の地下地質について、地層は全体として砂礫・泥互層からなり下位より東海層群（新第三系）、海部・弥富累層（中部更新統）、熱田層下部（上部更新統）、熱田層上部（上部更新統）、第一礫層（上部更新統）、濃尾層（最上部更新統）、南陽層（完新統）などの第四系の累層から構成される（表3・図1）。これらのうち中部更新統は丘陵～高位段丘を、上部更新統は中・低位段丘を、上部更新統最上部～完新統は沖積低地を構成している。名古屋城三の丸遺跡の立地する熱田台地は上部更新統の熱田層により構成されている。この熱田層および周辺地域の地形・地質に関しては松澤・嘉藤（1954）による記載以来、地質学的に多くの研究・報告が行なわれてきた（総理府資源調査会、1956；桑原、1968、1975；名古屋地盤調査会、1969；濃尾平野第四系研究グループ、1977；桑原ほか、1982；坂本ほか、1984；坂本ほか、1986）。桑原（1975）は熱田層を最下部層・下部層・

表3 名古屋城三の丸遺跡周辺でみられる地質

地質時代		層序	
新生代	第四紀	完新世	沖積層
		更新世	後期 鳥居松礫層（低位段丘礫層） 大管根礫層
			熱田層（中位段丘礫層）
	前期	八事層 唐山層	
新第三紀	鮮新世	東海層群	矢田川累層

坂本ほか（1984）、坂本ほか（1986）を参考に鬼頭が作成

上部層に区分した。熱田層最下部層は濃尾平野の中央部の地下にのみみられる砂層である。下部層は濃尾平野の地下全域に分布し、地表では熱田台地にのみ露出する海成粘土層である。熱田海進（濃尾平野地下第四系研究グループ、1977）とよばれる最終間氷期の海進堆積物と考えられる。本層上限面の深度は濃尾平野西縁部では-140mにおよぶが、熱田台地では10m以下である。上部層も濃尾平野の地下全域に分布する。地表では熱田台地と守山台地に露出する。主に砂層からなり、シルト・粘土層やレンズ状の礫層も挟まれる。層厚は濃尾平野西縁部で60m以上、熱田台地で30～40mであるという特徴をもつ。

今回の調査では自然科学的な解析を行なわなかったものの、北側に隣接した2001年の調査（松田編、2003）で実施した深掘により、標高7.97～11.20mまでに粗粒砂層と粘土層からなる深掘層序が得られている（鬼頭ほか、2003）。そこでは標高7.97～8.30mにみられる粗粒砂層中の標高8.01mの層準からは阿蘇4テフラ（Aso-4：86～90ka（kaは10³年前を表す地質年代単位）、その直上の標高8.18mの層準からは大山生竹テフラ（DNP：80±40ka（木村ほか、1999））とともに斜方輝石および単斜輝石を主体とし角閃石を含む特徴をもつ、岐阜県と長野県との県境をなす御嶽火山起源の御岳-奈川（On-Ng：約5万年前（中村ほか、1992））も含まれた。また、黒褐色シルト質

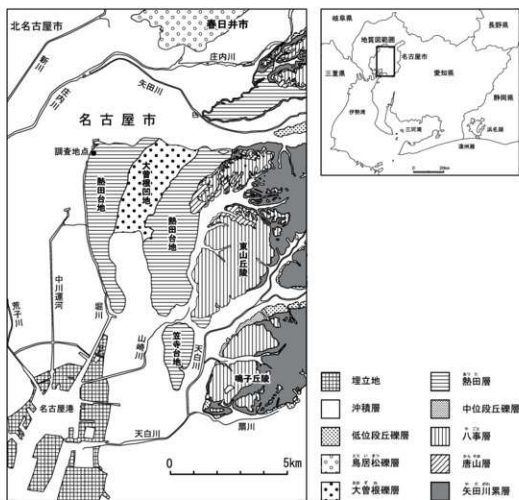


図4 名古屋城三の丸遺跡周辺の地質図

●が調査地点を示す。地質図は坂本ほか（1984）、坂本ほか（1986）を基に作成。

粘土層（標高 11.11～11.20m）の標高 11.15m からはバブルウォールタイプの火山ガラスが認められる始良 Tn テフラ（AT：約 2 万 4 千年前（村山ほか，1993））が検出され、さらに始良 Tn テフラが検出された層準よりも上位の標高 11.19m のシルト質粘土層の放射性炭素年代が暦年代較正值で 10890-10755 cal yrs BP(PLD-1594) を示し、阿蘇 4 テフラの約 9 万年前以降から始良 Tn テフラの約 2 万 5 千年前、放射性炭素年代測定値の約 1 万年前までの地質年代や数値年代が得られている。

（鬼頭 剛）

【文献】

- 服部証太郎，1981，特別史蹟 名古屋城年誌，名古屋城復興協会，303p.
- 木村純一・岡田昭明・中山謙博・梅田浩司・草野高志・麻原慶重・館野満美子・權原 徹，1999，大山および三瓶火山起源テフラのフィッシュトラック年代とその火山活動史における意義，第四紀研究，38，145-155.
- 鬼頭 剛・森 勇一・上田恭子，2003，名古屋城三の丸遺跡地下で確認された熱田層最上部層の層序と古環境，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集「名古屋城三の丸遺跡（VI）」，愛知県埋蔵文化財センター，46-56.
- 桑原 徹，1968，濃尾盆地と相動地塊運動，第四紀研究，7，235-247.
- 桑原 徹，1975，濃尾相動盆地の発生と地下の第四系，愛知県地盤沈下研究会報告書，愛知県，109-182.
- 桑原 徹・松井和夫・吉野道彦・牧野内 猛，1982，熱田層の層序と海水準変動，第四紀，第四紀研究連絡紙，22，111-124.
- 松田 訓編，2003，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集「名古屋城三の丸遺跡（VI）」，愛知県埋蔵文化財センター，60p.
- 松沢勲・藤藤良次郎，1954，名古屋及び付近の地質，同地質図，愛知県建築部。
- 中村俊夫・藤井登美夫・鹿野勘次・木曾谷第四紀協議会，1992，岐阜県八百津町の木曾川泥流堆積物から採取された埋没樹木の加速器 14C 年代，第四紀研究，31，1.
- 村山雄史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦，1993，西国沖ビストンコア試料を用いた AT 火山灰噴出年代の再検討 - タンデントロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の 14C 年代，地質雑報，99，787-798.
- 名古屋地盤調査研究会，1969，「名古屋地盤図」，コロナ社，東京，279p.
- 濃尾平野第四系研究グループ，1977，濃尾平野第四系の層序と微化石分析，地質学論集，14，161-183.
- 坂本 享・桑原 徹・永魚川淳二・高田康秀・脇田浩二・尾上 享，1984，名古屋北部地域の地質，地域地質研究報告（5 万分の 1 図幅），地質調査所，64p.
- 坂本 享・高田康秀・桑原 徹・永魚川淳二，1986，名古屋南部地域の地質，地域地質研究報告（5 万分の 1 図幅），地質調査所，55p.
- 総理府資源調査会事務局，1956，水害地域に関する調査研究 第 1 部，資源調査会資料，46，97p.

3 遺跡周辺の歴史的環境

名古屋城三の丸遺跡は近隣も含めると21次に亘り、愛知県埋蔵文化財センター、愛知県教育委員会および名古屋市教育委員会などにより発掘調査が実施されている。これらの調査によって、戦国期那古野城期・近世名古屋城期を中心に様々な知見をわれわれにもたらしてくれた。

今回の発掘調査においては、近世以前に加え、近代における三の丸区域の状況を明らかにすることができた。これまでの報告書において、既に近世以前の歴史的環境は語りつくされている感もあるため、ここでは近世以前は今回の調査範囲に関わることを中心に、近代は名古屋城三の丸遺跡範囲のほとんどを占めた旧陸軍第三師団を中心に概観しておく。

<戦国時代以前>

文献によると、名古屋台地の北端を占めた愛知郡那古野荘は、平安末期に白河院の近臣葉室顕隆の孫・東大寺別当顕恵が開発し、後白河上皇の女御建春門院に寄進した後、その子孫が領家職を相続し、鎌倉後期には美濃源氏の一族足助氏に渡った。その後、那古野は奉公衆・今川那古野氏の領地となった。

その後、今川那古野氏は嫡流の駿河国守護今川氏から氏豊を迎え、1522年(大永2)頃に尾張への押さえとして那古野城を築城したとされる。そして、1532年(天文元)または1538年(天文7)に織田信秀に城を奪われ、織田信秀の居城とされた。

この結果、今川那古野氏・織田氏の本拠とされた那古野城には交通路が集まり、旅宿や市が形成されていた情景などが近世の編纂書から窺うことができる。とくに、市場は、那古野に中市場・下市場・今市場という三つの存在が伝えられ、そして今市場の位置が、近世三之丸中小路と本丸から大手門にむかう南北路の交差点周辺と推測され、また天王坊(現在の東海農政局の地点)は近世名古屋城築城後も移転されることがなく、天王坊を中心に寺社や町並みがあったことが想定されている。今回の調査地点周辺は那古野城の一部に含まれるか、少なくとも地域の中心として多くの民家などがあったことが推測されよう。

<近世>

1582年(天正10)頃に那古野城が廃城された後、1609年(慶長14)に名古屋城築城が決定され、1615年(元和元)には本丸御殿が完成、二之丸殿社も1617年には完成し、1620年徳川義直が二之丸御殿に移った。

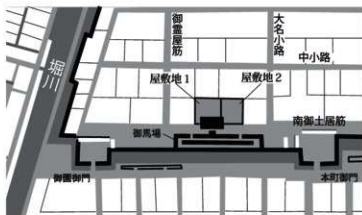


図5 調査地点屋敷割推定図 (享保末年絵図をもとに合成。御馬場北側が調査区)

表4 屋敷地拝領者の変遷

年代	1600	1700	1800	明治維新
屋敷地1	伊奈左門吉勝 伊奈左門吉次 伊奈源五右衛門定次	伊奈左助重定 伊奈源五右衛門定次	成瀬喜三郎正為 遠山彦左衛門景慶 横井伊織時申 津田幸次郎信周 津田兵部寛当 成瀬大膳正富 成瀬竹之助正惟 下条新内孝正 下条庄右衛門正春	成瀬吉太郎正敦 成瀬吉左衛門喬治 成瀬健之助喬長
屋敷地2	大道寺玄蕃直重 大道寺玄蕃直時	大道寺玄蕃直治 大道寺玄蕃直時	津田幸次郎信郷 津田幸次郎信周 成瀬内膳正富 津田又八寛当 生駒因幡致長 山邊主税英貞 寺尾悦之助実延 寺尾頼母好実 寺尾内匠威実	滝川幸次郎忠暁 下条庄右衛門正香 下条安吉正賀 下条庄右衛門正貞 滝川頼松忠貫

表5 拝領した尾張藩士の事跡

屋敷地	「倉庫御旗本」 にみる通称	拝領者の名前	土林河沼にみる事跡
1	伊奈左門	伊奈吉勝	松平忠吉時に属し、浜松で千石を賜り、同心頭となって五百石加増、義直に仕えて大坂役に従軍する。
	伊奈左門	伊奈吉次	父の家領を継いで寄合となる。寛永21年大番頭となる。 万治2年職を辞して寄合となる。
	伊奈源五右衛門	伊奈定次	瑞公の時に召しだされ御番頭、後に遺物御番となる。父の家領の内千二百石を賜る。
	伊奈左助	伊奈重定	定次の弟。家領を継いで寄合となる。元禄10年自裁。
	下条庄右衛門	下条正春	父の家領の内千二百石を賜り、寄合となる。天和元年御書院番頭、3年御用人となり後に堀公宛書(隠居の意)に仕える。元禄12年三百石加増、13年大寄合となる。
	下条新内	下条孝正	渡辺新左衛門の子。元禄16年召しだされ御小姓、宝永2年義父の家領の内千二百石を賜る。宝永4年御書院番頭、享保12年御用人となる。
2	大道寺玄蕃	大道寺直重	松平忠吉の時に二千石を賜り、義直に仕える。元和6年高廻廻番頭となり五百石を加増される。
	大道寺玄蕃	大道寺直時	父の遺言により二千石を賜り大御番頭となる。慶安2年同心頭となる。万治元年家老職となり千石を加増されるが、病身のため辞して受けなかった。
	大道寺玄蕃	大道寺直治	父の家領二千石を継ぐ。寛文9年近侍することを命ぜられ、寛文11年家老職となり千石を賜る。延宝5年従五位下。
	寺尾内匠	寺尾威実	延宝3年寺尾直龍見心し共に墨付する。その報酬として三千石を賜り大寄合となる。6年無流となる。元禄14年御廻同心頭となる。
	寺尾頼母	寺尾好実	宝永元年父の家領を継ぎ、寄合となる。3年に病歿によりその領を収公される。
	寺尾悦之助	寺尾実延	好実の家領の内、千五百石を賜り寄合となる。

同時に尾張藩上級藩士の拝領屋敷とされた三之丸区域も整備されていく。1663年(寛文3)には、それまで二之丸内にあった付家老の成瀬・竹腰の屋敷が三之丸へ移転されたことによる三之丸内の屋敷替の結果、ほぼ屋敷配置が固定されていく。なお、調査地点南側には「御馬場」がみえる(図5)。この「御馬場」は、『金城温故録』によると「追廻馬場」と記され、「三之丸内片端、本町御門より西御土居裾通り、大名小路筋より、元御堂屋筋の間、惣長百廿間・巾拾間(中土居巾一間玉縁中老間)片馬場、中四間宛。騎射の節は、御土居裾に的を建らる。此御馬場にて、明和三年頃迄は、御馬乗初、遊ばされ(源順公御代より向御屋敷馬場御殿にて御式あり)し趣き。近來は三八の日並、小笠原与十郎(騎射犬追物小笠原流師家)騎射稽古の馬場に借用を為す。」(原文は縦書。カッコ内は二段)とあり、1766年(明和3)頃まで藩主の行事にも利用された重要な馬場の一つであった。

今回の調査範囲に関してみると、図5のような屋敷地が想定され、この地には『金城温故録』によると表4のような藩士が屋敷地を拝領した。さらに『士林浜潤』によると、屋敷地を拝領・継承した藩士の事跡を知ることができる。これを表5にまとめる。

表5から見ていくと、屋敷地1に関しては、伊奈重定の自殺により同格で藩主の覚えめでたい下条正春へと屋敷替が行われているが、伊奈左門家と下条庄右衛門家とも千二百石の石高を有している。また、屋敷地2に関しては、千石の大道寺玄蕃家が二代に渡って家老職に就任し石高を増やしたことから、拝領屋敷地が南御土居筋の一番西(現在の愛知県図書館の地点)に移り幕末を迎える。かわつて1万石を有し家老職を任ぜられていた寺尾家が、直龍の乱心により三千石に石高を減らし、大道寺玄蕃家の跡地を拝領することになった。

近世前半に限って言えば、屋敷地1の拝領者は石高が千二百石で、非役の寄合から大番頭や御書院番頭、御用人などへ職をえていることから、格は番頭であったと考えられる。また、屋敷地2の拝領者は石高が二千〜三千石で、家老や触流の職をえていることから、格は家老であったと考えられる。いずれにせよ、千石以上の藩士は近世前半において80家内外しかおらず、すべての藩士の1割弱にあたる存在であり、今回の調査範囲を拝領した藩士たちについて言えば、屋敷地1は番頭、屋敷地2は家老の格を有した上級藩士が拝領していたと考えられる。

<近代>

1868年(慶応4)1月から始まる戊辰戦争で新政府軍は勝利をおさめた。しかし、この新政府軍は薩長土肥を中心とする藩軍の寄せ集めであり、新政府の直轄軍は全くない状況であった。

農民徴兵を想定した政府直轄軍創設の試みは、大村益次郎にはじまる。大村暗殺後は長州閩の山縣有朋に継承された。しかし、1871年(明治4)西郷隆盛の提案により薩長土三藩からの献兵による御親兵が設置された。この御親兵が日本陸軍の母胎となった。御親兵設置と平行して、同年4月に鎮台が設置された。当初2鎮台であったものは、廃藩置県に伴い8月に4鎮台に改められた。ただし、この時の鎮台兵は旧藩兵によって構成されていた。同じ頃、名古屋でも東京鎮台第三分営として政府直轄軍がおかれたが、やはり大垣・名古屋・安濃津の旧藩兵で構成される軍であった。その封建性を払拭すべく1872年(明治5)11月徴兵告諭、翌年1月に徴兵令が相次いで公布され、血税駆動や徴兵忌避といった農民の抵抗をうけながらも鎮台兵は徐々に旧藩兵から徴兵に切り替えられていった。

徴兵令と同時に名古屋・広島に鎮台が設置された。名古屋鎮台は、名古屋と金沢に師管をもち、名古屋の第六師管では歩兵第六聯隊・砲兵第一大隊・工兵第一小隊・輜重兵第一小隊という編成を有していた。これらの隊が旧名古屋城内に置かれたものと考えられる。

鎮台は、農民暴動や不平土族の反乱への鎮圧といった治安維持を目的としておかれたものであり、名古屋鎮台でも1876年（明治9）の伊勢暴動への鎮圧のために出動している。また、西南戦争にも名古屋鎮台兵が派遣された。この結果、大規模な不平土族の反乱はなくなった。その結果、陸軍は国内の治安維持を担う軍隊から外的脅威に備える軍隊、外征が可能な軍隊へと性格を変え始める。それが1888年（明治21）に切り替えられた師団制である。鎮台はすべて師団になったので、近衛師団を含め七個師団編成となった。

名古屋においても1885年に歩兵第五旅団司令部、1886年に第三師団司令部が三の丸に設置され、同年輜重兵第三大隊、1888年に工兵第三大隊、1892年に騎兵第三大隊・野砲兵第三聯隊が創設された。すべて三の丸に設けられたが、1910年（明治43）作成の「名古屋市實測図」（図6）から考えると、創設順に司令部から遠方へと設置されたものと考えられる。この配置状況が敗戦まで基本とされた。

1894年（明治27）甲午農民戦争を契機とし日清戦争が勃発した。そして、日本軍最初の本格的な外戦に勝利を収めた。当然、第三師団も出兵している。1896年から始まる戦後の軍備拡張によって五個師団が増設され、合計十三個師団編成で北清事変、日露戦争に臨むことになる。第三師団においても金沢の第六旅団を第九師団（金沢）に移譲し、豊橋に第十七旅団、守山に歩兵第三十三聯隊を創設した。また、騎兵第三大隊を騎兵第三聯隊に改編している。この体制で第三師団は日露戦争に出兵した。日露戦争は、日本軍にとって膨大な人的被害を与えた。そこで、戦争末期に四個師団を創設し、戦後に二個師団を増設した。第三師団においても、第十七旅団を第十五師団（豊橋）に移譲し、岐阜と久居に歩兵聯隊、飛行第一大隊を創設、野砲兵の増員がなされた。また、『第三師団戦史』や1921年（大正10）作成の「隣接町村併合記念名古屋市長図」（図7）によると、第三師団軍楽隊が日露戦争後から見える。



図8 1945年（昭和20）の名古屋城

（『名城郭内第3師団司令部周辺旧軍施設図』『中部地方建設局宮城事業三十五年史』を一部改変）

1912年（大正元）の二個師団増設問題を契機とする大正政変で藩閥官僚が批判の対象となった。この世論にもかかわらず、1915年には朝鮮に二個師団を増設して二十一個師団編成となり、ロシア革命への干渉のために1918年（大正8）8月シベリア出兵を実施した。しかし、大正デモクラシーの風潮、第1次世界大戦後の世界的な軍縮傾向と不況によって、陸軍も軍縮をせまられた。1922年（大正11）から小規模な軍縮は行われてきたが、1925年（大正14）陸相宇垣一成によって四個師団廃止を含む大規模な軍縮が実施に移された。この宇垣軍縮は、軍備近代化のために師団廃止などによって経費を産み出したものであり、地元の要望を受けて廃止される部隊駐屯地には別の部隊を移動させる配慮もなされた。第三師団においても、飛行聯隊が浜松に創設されるなどの近代化と同時に、工兵第三大隊も浜松に、騎兵第三聯隊が歩兵第三十三聯隊の久居移転によって空いた守山に移転した。また、『第三師団戦史』によると、第三師団軍楽隊が昭和初期に廃止されている。

以上の改編によって、三の丸においても大きな変動が生じた。工兵第三大隊の跡地は輜重兵第三聯隊と倉庫の敷地拡張に利用された他は、騎兵第三聯隊跡地は名古屋市役所（1933年（昭和8）竣工）・愛知県庁（1938年（昭和13）竣工）へ、軍楽隊跡地は招魂社（1935年（昭和10）遷座・1939年（昭和14）愛知県護国神社と改称）に利用された。この配置状況が戦後まで続く。（図8参照）

この後、日本は慢性的な中国との戦闘状態からアジア太平洋戦争に突入するが、第三師団も中国戦線を中心に1946年（昭和21）まで動員されることになる。戦局の悪化とともに、1944年7月にサイパンをアメリカ軍が制圧し、ここが日本本土に対する空襲の基地となった。そして、日本各地への本格的な空襲が始まった。

名古屋城域では1945年（昭和20）3月12日・同月19日・5月14日に空襲を受けた。護国神社は3月の空襲で、名古屋城天守閣は5月の空襲で炎上するが、調査地点も甚大な被害を受けたと考えられる。

（加藤博紀）

【引用・参考文献】

- 名古屋市、1998、『新修名古屋史第二巻』
- 名古屋市、2000、『新修名古屋史第五巻』
- 名古屋市、2003、『新修名古屋史第六巻』
- 名古屋市、1967、『名古屋叢書続編第十六巻金城園故録（四）』
- 名古屋市、1967、『名古屋叢書続編第十八巻士林浜洲（二）』
- 名古屋市、1968、『名古屋叢書続編第十九巻士林浜洲（三）』
- 林薫一編、1990、『新編尾張藩家臣団の研究』国書刊行会、p.138、197
- 名古屋城管理事務所、1979、『天守閣再建二十周年記念名古屋城古絵図』
- 陸上自衛隊第10師団司令部編、1965、『第三師団戦史』陸上自衛隊
- 社団法人營繕協会編、1986、『中部地方建設局營繕事業三十五年史』中部地方建設局
- 浅川龍之、2005、『兵闘』の考古学—考古資料にみる軍隊生活—「近現代考古学の射程—今なぜ近現代を語るのか—」六一書房
- 山中恒・山中典子、1999、『間違いだらけの少年日—戦後生活史の研究と手引き』須草書房
- 瀬戸市歴史民族資料館、1994、『戦争とやまもの』

表6 関連年表-1 (明治から終戦まで)

西暦	和暦	歴史事件	軍関連		その他
			名古屋(第1師団関連)	愛知県下	
1867	慶応2				
1868	明治元	王政復古の大号令、戊辰戦争			
1869	明治2				
1870	明治3				
1871	明治4	廃藩置県			
1872	明治5		8月東京鎮台第三分営設置		
1873	明治6	機兵令	7月第3軍管名古屋鎮台設置		
1874	明治7	佐賀の乱、台湾出兵	3月歩兵第6聯隊(名古屋) 軍旗授受		
1875	明治8	江華島事件			電信符号(電信用)使用が広がる
1876	明治9	新風連の乱、秋月の乱、萩の乱	12月伊勢勸勤親王のため歩兵第6聯隊派遣		
1877	明治10	西南戦争			
1878	明治11	竹橋事件			
1879	明治12				
1880	明治13				
1881	明治14				
1882	明治15	壬午軍乱			軍人勸諭発布
1883	明治16				
1884	明治17	加波山事件、秋父事件、飯田事件、甲申事変		8月豊橋に第18聯隊創設(歩兵第5旅団隷下)	
1885	明治18		8月歩兵第6旅団創設/歩兵第5旅団司令部設置		
1886	明治19		第3軍管名古屋鎮台を第3師団に改称改編、第3師団司令部設置、龍重兵第3大隊創設		
1887	明治20				
1888	明治21		工兵第3大隊創設		
1889	明治22	大日本帝国憲法発布			
1890	明治23				
1891	明治24				
1892	明治25		騎兵第3大隊創設、野砲兵第3聯隊創設		
1893	明治26				
1894	明治27	甲午農民戦争、日清戦争	2月出兵(～'95年1月)		アルミの実用化
1895	明治28	下関条約調印			
1896	明治29		騎兵第3大隊を騎兵第3聯隊に改編	守山に歩兵第33聯隊創設(歩兵第5旅団隷下)、第18聯隊を歩兵第17旅団(豊橋)隷下へ	
1897	明治30				
1898	明治31				
1899	明治32				
1900	明治33				
1901	明治34				
1902	明治35				
1903	明治36				
1904	明治37	日露戦争	2月出兵(～'06年1月)		陸軍兵器のアルミ化進む
1905	明治38	ポーツマス条約調印			
1906	明治39				
1907	明治40			第17旅団を第15師団(豊橋)移編	
1908	明治41				軍服内務省改正
1909	明治42				
1910	明治43	日韓併合条約			

表7 関連年表-2 (明治から統戦まで)

西暦	和暦	歴史事件	軍関連		その他
			名古屋 (第3師団関連)	愛知県下	
1911	明治44				
1912	大正元				
1913	大正2				軍服教育令制定
1914	大正3	第一次世界大戦参戦			
1915	大正4				
1916	大正5				
1917	大正6				
1918	大正7	シベリア出兵宣言	8月出兵 (～19年10月)		
1919	大正8	ヴェルサイユ条約			
1920	大正9				
1921	大正10	シベリア撤兵			
1922	大正11	ワシントン海軍軍縮条約・九ヶ国条約調印			
1923	大正12				
1924	大正13				
1925	大正14	宇垣軍縮	野砲兵第3聯隊野戦重砲兵第1隊団へ、野戦重砲兵第1隊団第3師団へ、工兵第3大隊浜松へ	歩兵第29旅団(舊機)第3師団へ、騎兵第3聯隊守山へ移転し第4旅団へ、騎兵第4旅団第3師団へ	治安維持法成立
1926	昭和元				
1927	昭和2				兵役法公布
1928	昭和3	張作霖爆殺事件	5月清南警備 (～29年5月)		
1929	昭和4	ニューヨーク株価大暴落、世界恐慌へ	防空演習始まる (第3師団、関連諸機関、市民参加)		
1930	昭和5				
1931	昭和6	満州事変			
1932	昭和7	五・一五事件、上海事変			
1933	昭和8	国際連盟脱退			
1934	昭和9	ワシントン海軍軍縮条約放棄	4月満州警備 (～36年5月)		
1935	昭和10				
1936	昭和11	二・二六事件			米穀自治管理法、重要物資統制法改正公布
1937	昭和12	盧溝橋事件、南京事件	8月日中戦争出兵 (～41年12月)		
1938	昭和13				国家総動員法が施行される。第1回指定代用品に「軍用食器」が指定される
1939	昭和14	ノモンハン事件、第二次世界大戦			国民徴用令、電力統制令、軍用品工場軍需工場査令、総動員物資使用規則など公布
1940	昭和15				警備品等製造販売制限規則
1941	昭和16	真珠湾攻撃	アジア太平洋戦争出兵、軍中・華南で戦闘 (～46年5月)		重要物資令・生活必需品物資統制令、国民学校令・会館閉鎖命令、重要産業団体令公布・治安維持法改正
1942	昭和17		4月名古屋初空襲		原子爆を恐る戦時疎民令が全業整備の対象となる
1943	昭和18	ガダルカナル島撤退			石油管理法、軍需会社法公布
1944	昭和19	サイパン島守備隊玉砕	1月名古屋お堀への網入れ/ (11月公共待避所整備指示) /12月空襲	12月東南海地震M8.0	
1945	昭和20	硫黄島守備隊玉砕、東京大空襲、広島・長崎に原爆、ポツダム宣言受諾、終戦	1月空襲/2月空襲/3月名古屋大空襲 (愛知県護国神社等焼失)4月空襲/5月空襲名古屋城焼失/6月空襲/7月空襲	1月三河地震M7.1	
1946	昭和21	日本国憲法公布	第3師団復員完了		

第2章 遺構

1 遺構の概要と基本層序

<主な遺構>

確認された主な遺構には、中世・戦国期堀（2条）と溝（3条）、近世では武家屋敷に伴う溝、井戸（1基）、土坑・ピット多数があり、近代以降では溝（管理設溝、建物基礎など）、防空壕（5基）ほか土坑・ピット多数がある。ピット状の小土坑の多くは、遺物も伴わず時期確定が困難である。ただし、埋土と検出状況の検討から中世以前に遡るものではなく、ほとんどが近世と近代に属するものと考えられる。

中世・戦国期の遺構群は、近世名古屋城築城以前に存在した「那古野城」の一端を構成していたものであり、区画施設（堀・溝）の規模、配置の軸線方向、成立の時期など、未だ不明部分の多い当該時期の研究に新たな情報を提供することになった。

近世名古屋城三之丸において、今回の調査地点は「南御土居筋」に面する武家屋敷にあたる。これまでの調査成果と絵図等の資料からは、道・屋敷の境界が調査区を分断するように東西方向に通ることが想定された。調査範囲には、南辺土塁に沿う主要な道「南御土居筋」と、これに南面する武家屋敷の境界と正面、所謂「屋敷表」に相当する空間が含まれることになる。調査の結果、近世段階の道と武家屋敷境界については、境界の施設そのものは確定できないまでも、概ねの位置を示すことが可能となった。また、遺構および遺物の分布は比較的希薄であり、「屋敷表」と「屋敷裏」での差異が明確に示されることとなったが、詳細には「表」の空間にも建物、近世中期・後期の産業土坑が配置される場合があったことが明らかになった。

調査地点は近代以降に激しく改変を受けている。なかでも旧陸軍に関連すると思われる削平が目立ち、これまでの三の丸調査では特に著しい地点といえる。その理由の一つには、この地点が近世の「道」と「屋敷表」であり、近代初期の時点で広い空間が比較的容易に確保できたためと考えられる。

<基本層序>

図9に示すように、調査時点の地表面は標高13m前後であった。近代以降の客土は場所により様相が異なり、調査区南半部分では標高11.8mのレベルで（幕末～）明治初期の整地層が比較的安定した状態で確認されている（図10）。同地点では戦国期の区画溝を削平する近世初期と思われる整地が標高11.5mのレベルで確認され、以後幕末まで数次の整地が行われている。

北半部分では幕末の整地面は確認で

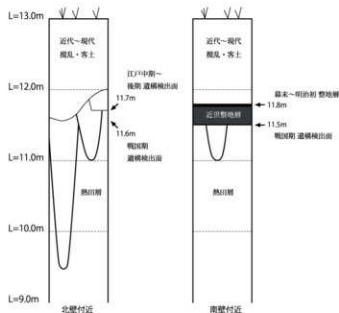


図9 基本層序概念図

きず、終戦前後の防空壕掘削と埋め戻しや建物建設等により攪拌されており、検出レベルは一定していない。北壁（図 13.14）において確認された近世中期段階の遺構（389SK）検出レベルは標高 11.7m、戦国期堀（605SD）の検出レベルは 11.6m であった。

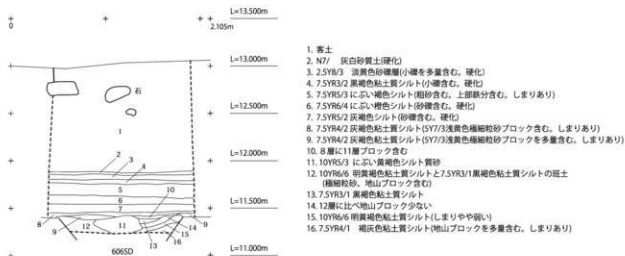


図 10 南壁 土層断面図-1 (S=1/40)

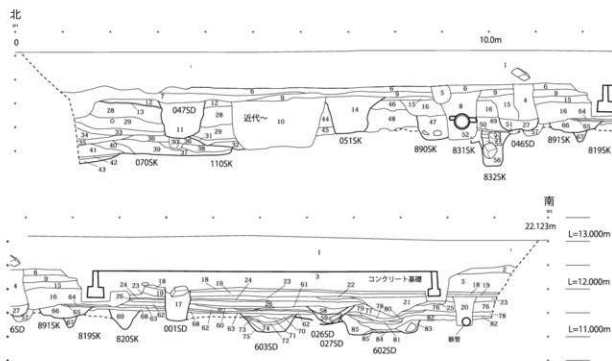


図 11 東壁 土層断面図-1 (S=1/80)

1. 客土
2. 整地土
3. 客土
4. 客土(コンクリート、レンガ、瓦、炭化物含む)
5. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト(地山ブロックを多量含む)
6. 7.5YR4/1 褐灰色シルト(腐植体多量含む)
7. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト(炭化物、小礫、地山ブロック含む)
8. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト(炭化物を多量含む、下水管理施設)
9. 7.5YR4/2 灰褐色細粒シルト(炭化物、地山ブロック含む)
10. 10YR4/2 灰褐色砂質シルト
炭化物を多量含む、遺物、土塊、レンガ含む、埋戻し
(下部で炭化物、小礫を多量含む、ビン含む)
11. 10YR4/2 灰褐色砂質シルト
(下部で炭化物、小礫を多量含む、ビン含む)
12. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト(炭化物、小礫、地山ブロック含む)
13. 10YR4/2 灰褐色シルト(炭化物層含む、一部被褥を受け赤褐色化)
14. 10YR4/3 に近い黄褐色細粒シルト
(下部で小礫を多量含む、しりあり)
15. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト
(炭化物層含む、地山ブロックを多量含む)
16. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト(炭化物、小礫を多量含む)
17. 2.5Y6/1 黄灰色細砂(15cm以上の硬さ含む、しりあり強い)
18. N/7 灰白砂質土(硬化)
19. 2.5Y8/3 淡黄色砂質シルト(小礫を多量含む、硬化)
20. 7.5YR5/2 灰褐色シルトと5Y7/3淡黄色極細粒砂の混合
小礫含む、水管理施設上)
21. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(小礫、炭化物充満、埋戻し)
22. 10Y5/1 褐色粘土質シルト(小礫多量、硬化)
23. 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト(硬化)
24. 7.5YR4/3 褐色シルト(7.5YR4/1褐色シルトブロック含む、硬化)
25. 10YR6/1 褐色シルト質粘土
26. 10YR4/3 に近い黄褐色シルト
小礫、地山ブロックを少量含む、しりあり)
27. 10YR4/2 灰褐色細粒シルト(小礫充満、地山ブロック含む)
28. 10YR4/2 灰褐色細粒シルト
(炭化物、地山ブロックを少量含む、粘性ややあり、しりあり、包含層)
29. 10YR4/3 に近い黄褐色細粒シルト
(炭化物、地山ブロックを微量含む、しりあり、包含層)
30. 10YR4/2 灰褐色シルト(瓦含む)
31. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト(遺物、炭化物、小礫含む、しりあり)
32. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山ブロック含む、しりあり)
33. 7.5YR4/2 灰褐色粘質シルト
(炭化物を多量含む、遺物、小礫含む、しりあり)
34. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(炭化物、地山ブロックを微量含む、しりあり)
35. 33層と同じ
36. 34層と同じ
37. 10YR4/3 に近い黄褐色砂質シルト(粗砂含む)
38. 33層に5Y6.5褐色粘土質シルトブロック含む
39. 7.5YR/1 褐色粘土質シルト(地山ブロックを少量含む、しりあり)
40. 10YR6/2 灰黄色極細粒砂(しりあり)
41. 39層と同じ
42. 7.5YR4/1 褐色粘土質シルト(炭化物を微量含む、しりあり)
43. 7.5YR4/1 褐色粘土質シルト(地山ブロック含む、しりあり)
44. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト(小礫を少量含む、しりあり)
45. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト
(炭化物、地山ブロックを少量含む、しりあり)
46. 7.5YR5/3 に近い黄褐色シルト(小礫、地山ブロックを少量含む、しりあり)
47. 10YR5/4 に近い黄褐色細粒シルト
(地山ブロックを多量含む、傘下の硬さ含む、しりあり)
48. 7.5YR4/3 褐色シルト(地山ブロックを少量含む、粘性ややあり)
49. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト(地山ブロック充満、しりあり)
50. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山ブロックを少量含む、しりあり)
51. 10YR4/4 褐色砂質シルト(地山ブロックを多量含む、しりあり)
52. 10YR4/2 灰褐色細粒シルト(地山ブロックを少量含む、しりあり)
53. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルトと5YR3/3淡黄色極細粒砂の混土
54. 10YR5/2 灰褐色細粒シルト
55. 2.5Y6/2 53層と同じ
56. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト
(地山ブロック、下部で5Y7/3淡黄色砂質シルトを多量含む)
57. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(地山ブロックを多量含む、しりあり)
58. 7.5YR/1 褐色粘土質シルト(しりあり)
59. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト(硬さ含む、しりあり)
60. 10YR7/4 に近い黄褐色砂質シルト(硬化)
61. 10YR6/3 に近い黄褐色シルト(硬化)
62. 10YR7/4 に近い黄褐色砂質シルト(硬化)
63. 10YR5/2 灰黄色粘土質シルト(小礫含む、硬化)
64. 10YR6/4 に近い黄褐色細粒砂(硬化)
65. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(小礫含む、硬化)
66. 10YR6/3 に近い黄褐色シルト(地山ブロックを多量含む)
67. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山ブロック含む)
68. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(小礫含む、粘性ややあり、硬化)
69. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトと
5Y7/3黄灰色極細粒砂の混土(しりあり)
70. 7.5YR/1 黄褐色シルトと10YR7/4に近い黄褐色粘土質の混土
(粘性ややあり、しりあり)
71. 7.5YR4/1 褐色シルトと10YR7/4に近い黄褐色粘土質の混土
(粘性ややあり、しりあり)
72. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト
(7.5YR4/1褐色粘土質シルトブロックを少量含む、粘性ややあり)
73. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト(しりあり)
74. 10YR6/6 明黄褐色シルト
(7.5YR4/1褐色シルトブロックを多量含む、粘性ややあり、しりありや弱い)
75. 10YR6/4 に近い黄褐色砂質シルト(粘性ややあり、しりありや弱い)
76. 10YR5/3 に近い黄褐色粘土質シルト(小礫を少量含む)
77. 10YR5/3 に近い黄褐色砂質シルト(小礫を少量含む、しりあり)
78. 10YR5/1 褐色シルト(粗粒砂、小礫含む、粘性ややあり、しりあり)
79. 2.5Y7/3 淡黄褐色細砂(しりあり)
80. 7.5Y6/2 灰褐色シルト
(10YR7/3灰白粘土質シルトブロックを少量含む、しりあり)
81. 10YR5/2 灰褐色細粒シルト(地山ブロックを少量含む、しりあり)
82. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト
(地山ブロックを少量含む、下部粘性強い、しりあり)
83. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト
(10YR5/4に近い黄褐色シルトブロック、地山ブロック含む、しりあり)
84. 7.5YR5/2 灰褐色粘土
85. 10YR5/2 灰黄色粘土質シルト
(地山ブロックを多量含む、しりあり)
86. 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト(しりあり)

図 12 東壁 土層断面図-2 (注記)

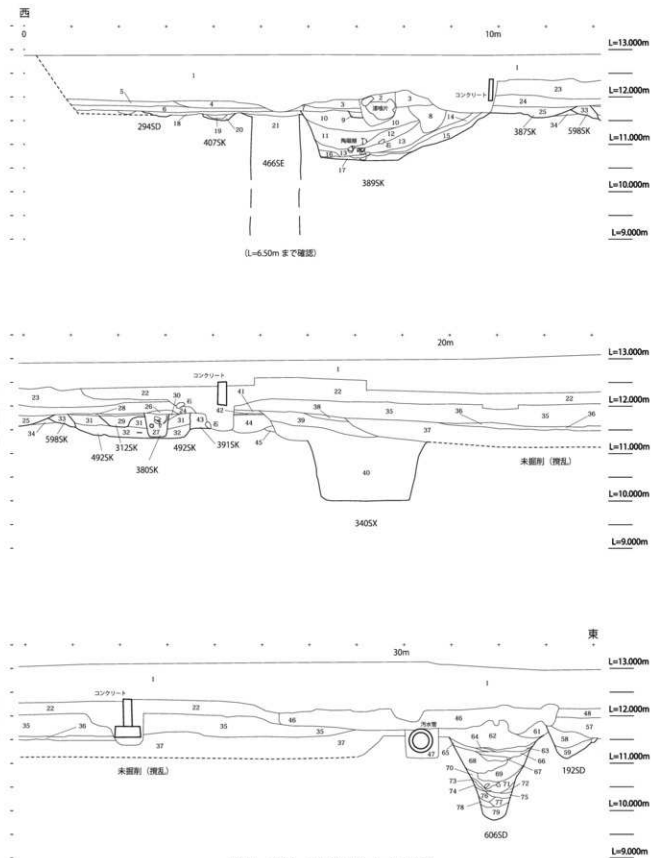
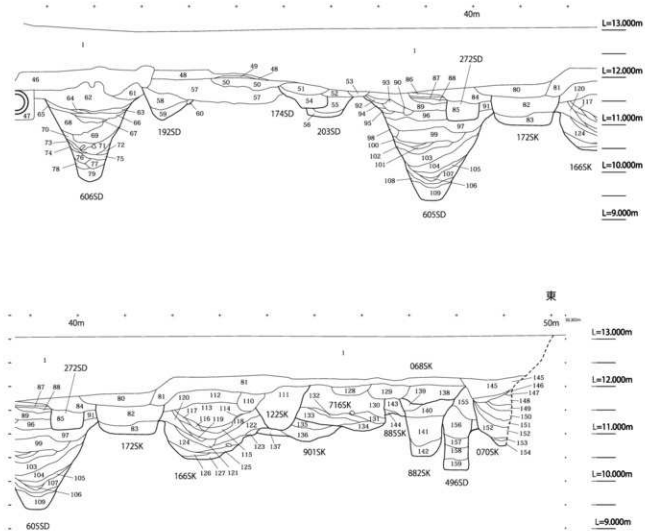


図13 北壁 土層断面図-1 (S=1/80)



1. 富士
2. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト(コンクリート、小礫含む)
3. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト(小礫含む)
4. 7.5YR5/1 褐色砂質土
5. 10YR5/3 にふい黄褐色シルトの混合(レンガ含む)
6. 7.5YR4/2 灰褐色、砂質シルト(小礫、炭化物を多量含む)
7. 6Mに比べ褐色弱い
8. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト(瓦、小礫含む、しりあり)
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土(小礫含む)
10. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト(遺物、小礫、炭化物含む、しりあり)
11. 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(遺物、小礫、炭化物含む、しりあり)
12. 10YR4/3 にふい黄褐色細粒砂(遺物、小礫、炭化物含む、しりあり)
13. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト(遺物、炭化物を多量含む、しりあり)
14. 7.5YR4/2 灰褐色細粒砂(炭化物含む、しりあり)
15. 7.5YR4/3 褐色砂質シルト(瓦を多量含む、5YR6/4にふい褐色シルト、炭化物含む、しりあり)
16. 7.5YR5/1 褐色シルト(焼山ブロックを多量含む。粘性ややあり、しりあり)
17. 2.5YR/3 灰黄褐色細粒砂と7.5YR5/1褐色シルトの混土(しりあり)
18. 10YR4/3 にふい黄褐色砂質シルト
19. 7.5YR4/2 灰褐色シルト
20. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(10YR6/6明黄褐色シルトブロックを多量含む)
21. 10YR4/1 褐色砂質シルト(炭化物、小礫、焼山ブロックを少量含む、しりあり)
22. 富士(コンクリート含む)
23. 富士
24. 10YR6/3 にふい黄褐色砂質土(レンガ、礫含む、しりあり)
25. 7.5YR4/1 褐色シルト(遺物を多量含む、0.5cm大の砂礫、炭化物含む、しりあり)
26. 10YR5/2 灰褐色シルト(0.1~0.3cmの砂礫含む、しりあり)
27. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト(遺物を多量、炭化物を少量含む、しりあり)
28. 10YR5/3 にふい黄褐色砂質シルト(細粒砂含む、しりあり)
29. 10YR5/3 にふい黄褐色シルト(炭化物を少量含む、しりあり)
30. 10YR6/3 にふい黄褐色砂質シルト(細粒砂含む、しりあり)
31. 7.5YR4/1 褐色シルト(炭化物、小礫含む、しりあり)
32. 31層に比べ炭化物を多量に含む
33. 10YR5/3 にふい黄褐色シルト(炭化物、焼山ブロックを少量含む、小礫含む、しりあり)
34. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(焼山ブロックを多量含む)
35. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土(砂利、礫、炭化物を多量含む)
36. 10YR5/3 にふい黄褐色シルトと5Y7/3淡黄色細粒砂の混土
37. 10YR5/3 にふい黄褐色細粒砂(炭化物、小礫、焼山ブロックを多量含む、しりあり)
38. 36層と同じ
39. 10YR5/2 灰黄褐色シルト(焼山ブロックを多量含む)
40. 10YR/4 にふい黄褐色シルトと5Y7/3淡黄色細粒砂の混土
41. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト(小礫含む)
42. 7.5YR5/1 褐色シルト
43. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(焼山ブロックを多量含む、炭化物含む、しりあり)
44. 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト(焼山ブロックを多量含む、小礫含む)
45. 10YR6/3 にふい黄褐色シルトと7.5YR4/2灰褐色シルトの混土
46. 富士
47. 下水管埋設土
48. 7.5YR4/1 褐色シルト
49. 10YR2/4 にふい黄褐色シルト
50. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土

図 14 北壁 土層断面図-2 (S=1/80)

51. 49層に互を多量含む
52. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山ブロックを多量、炭化物を微量含む。遺物含む、しりあり)
53. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山ブロックを多量含む)
54. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(地山ブロック、遺物含む。炭化物を微量含む、しりあり)
55. 7.5YR4/2 灰褐色シルトと10YR7/4にぶい黄褐色粘質土の斑土(炭化物を微量含む、しりあり)
56. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(地山ブロックを多量含む、しりあり)
57. 7.5YR4/1 褐色粘土質シルト(地山ブロックを多量、炭化物を微量含む、しりあり)
58. 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土と7.5YR4/1 褐色シルトと5Y7/3 淡黄色極細砂の斑土
59. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト(7.5YR4/1 褐色シルト、5Y7/3 淡黄色極細砂を多量含む、しりあり)
60. 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土と7.5YR4/1 褐色シルトの斑土
61. 10YR7/4 にぶい黄褐色粘質土と7.5YR4/1 褐色シルトの斑土
62. 7.5YR3/2 黒褐色シルト(極細砂含む。地山ブロックを微量含む、しりあり)
63. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(極細砂含む。地山ブロックを多量含む、しりあり)
64. 29層に比べ地山ブロック少ない
65. 7.5YR3/2 黒褐色シルト(地山ブロックを少量含む、しりあり)
66. 7.5YR3/2 黒褐色シルト(地山ブロックを多量含む。粘性ややあり、しりあり)
67. 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト(7.5YR3/2ブロックを多量含む。粘性ややあり、しりあり)
68. 7.5YR3/2 黒褐色シルトと10YR7/4にぶい黄褐色粘質土の斑土(炭化物を微量含む、しりあり)
69. 2.5Y7/4 淡黄色極細砂(5Y7/2 灰白色極細砂ブロック散見、しりあり)
70. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(10YR6/6 明黄褐色極細砂を多量含む。等大の礫含む、しりやや弱い)
71. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト(細粒砂、等大の礫含む。7.5YR3/1 黒褐色シルトブロックを少量含む)
72. 10YR7/6 暗黄褐色粘土質シルト(しりやや弱い)
73. 7.5Y2/1 黒色粘土質シルト(10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトを多量含む、5Y7/2 灰白色極細砂ブロックを含む、しりやや弱い)
74. 7.5Y2/1 黒色粘土質シルト(5Y7/2 灰白色シルト細粒砂含む)
75. 7.5Y2/1 黒色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質土の斑土(砂、5Y7/2 灰白色極細砂ブロックを多量含む)
76. 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト(41層をブロックを多量含む)
77. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト(7.5Y3/1 黒褐色シルトブロックを少量含む。粘性ややあり、しりやや弱い)
78. 76層に比べ7.5Y3/1 黒褐色シルトブロックを多量含む
79. 2.5Y6/3 淡黄色粘質土(地山ブロック散見。互含む)
80. 7.5YR5/3 褐色シルト(小礫を多量含む、互含む)
81. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(炭化物、地山ブロック含む)
82. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(互、小礫、地山ブロック含む、しりあり)
83. 7.5YR4/1 褐色シルト(小礫、地山ブロックを少量含む、しりあり)
84. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(炭化物、小礫、地山ブロックを少量含む、しりあり)
85. 7.5YR4/3 褐色シルト(地山)ブロックを多量、炭化物を少量含む、しりあり)
86. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト(7.5YR2 灰褐色シルトブロック含む、しりあり)
87. 7.5YR5/2 灰褐色シルトと7.5Y3/2 黒褐色シルトの斑土(極細砂含む、しりあり)
88. 2.5Y7/2 淡黄色極細砂と7.5YR5 灰褐色シルトの斑土(しりあり)
89. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト(10YR2/1 黒色シルトブロック、地山ブロックを多量含む、しりあり)
90. 7.5YR5/1 褐色シルトと2.5Y8/2 灰白色粘質土の斑土(しりあり)
91. 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト(地山ブロックを少量含む)
92. 7.5YR3/1 黒褐色シルト(10YR7/4にぶい黄褐色シルトブロックを多量含む。粘性ややあり)
93. 92層に比べ10YR7/4にぶい黄褐色シルトブロックが少ない
94. 92層に比べ粘性強い
95. 10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト
96. 10YR4/2 灰褐色シルト(地山ブロックを多量含む。極細砂含む)
97. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(7.5YR3/1 黒褐色シルトブロック、地山ブロックを多量含む)
98. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト(7.5YR3/1 黒褐色シルト、地山ブロックを少量含む、しりやや弱い)
99. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト(地山)ブロックを多量含む、しりやや弱い)
100. 10YR6/6 明黄褐色粘質シルト(地山)ブロックを少量含む、しり弱い)
101. 10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂(地山)ブロックを多量含む、しりやや弱い)
102. 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト(7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト含む。地山ブロックを少量含む、しりやや弱い)
103. 99層に比べ7.5YR3/1 黒褐色シルトブロックを多量含む
104. 7.5YR5/4 にぶい褐色粘土質シルト(7.5Y3/1 黒褐色シルトブロック、地山ブロックを多量含む、しりやや弱い)
105. 103層に比べ粘性ややあり
106. 2.5Y5/2 暗黄褐色極細砂(しり弱い)
107. 2.5Y7/3 淡黄色極細砂(しりやや弱い)
108. 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(しり弱い)
109. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂(7.5Y3/1 黒褐色ブロック含む、しりやや弱い)
110. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山)ブロックを少量、炭化物を微量含む、しりあり)
111. 10YR4/2 灰褐色シルト(地山)ブロック含む。小礫を少量、炭化物を微量含む、しりあり)
112. 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト(地山)ブロックを多量、炭化物を少量含む、しりあり)
113. 7.5YR5/1 褐色シルト(小礫、炭化物を少量含む、しりあり)
114. 7.5YR5/2 灰褐色シルト
115. 10YR7/1 灰白色粘質土(しりあり)
116. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(極細砂含む。炭化物を微量含む、しりあり)
117. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(しりあり)
118. 7.5YR5/1 褐色粘土質シルト(炭化物を少量、地山ブロックを少量含む、しりあり)
119. 7.5YR5/1 褐色粘土質シルト(炭を多量含む)
120. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山)ブロック含む、しりあり)
121. 7.5YR5/1 褐色粘土質シルト(炭化物を多量含む)
122. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山)ブロックを少量、炭化物を少量含む、しりあり)
123. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山)ブロックを多量含む)
124. 7.5YR5/1 褐色粘土質シルト(炭化物を多量、見、遺物含む)

図 15 北壁 土層断面図-3 (S=1/80)

125. 121層と同じ(遺物含む)
 126. 7.5YR5/1 褐色粘土質シルト(地山ブロック含む)
 127. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂(70層ブロック含む、しまりあり)
 128. 炭化物充満
 129. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(炭化物を少量含む、しまりあり)
 130. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(7.5YR4/1褐色シルトブロックを少量、炭化物、地山ブロックを少量含む、しまりあり)
 131. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト(7.5YR3/1黒褐色シルトブロック、地山ブロックを少量含む、しまりあり)
 132. 131層に比べ褐色強い
 133. 10YR/4 に近い黄褐色シルト(7.5YR5/2灰褐色シルト、7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを少量含む、粘性ややあり、しまりあり)
 134. 7.5YR5/2 灰褐色シルトと5Y7/2灰白色極細砂の混土(しまりあり)
 135. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト(地山ブロックを少量含む)
 136. 135層に比べ褐色強い
 137. 7.5YR5/2 灰褐色シルトと5Y7/2灰白色極細砂の混土(粘性ややあり)
 138. 10YR/4 に近い黄褐色シルト(炭化物、地山ブロックを少量含む)
 139. 10YR/4 に近い黄褐色シルト(地山ブロックを少量含む、粘性ややあり、しまりあり)
 140. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト(5YR/3淡黄色極細砂を少量含む、しまりやや弱い)
 141. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(地山ブロックを少量含む、粘性ややあり、しまりやや弱い)
 142. 7.5YR4/3 褐色粘土質シルト(地山ブロックを少量含む、しまりあり)
 143. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土(しまりあり)
 144. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(地山ブロックを少量含む、しまりあり)
 145. 10YR/3 暗褐色砂質土(炭化物、小礫、地山ブロック含む)
 146. 7.5YR4/2 灰褐色砂質土
 147. 10YR/4 2 灰黄褐色シルト(炭化物、地山ブロックを少量含む、粘性ややあり、しまりあり)
 148. 10YR/4 に近い黄褐色砂質シルト(炭化物、地山ブロックを少量含む、しまりあり)
 149. 7.5YR4/2 灰褐色砂質シルト(炭化物を少量含む、透性、小礫あり、しまりあり)
 150. 10YR/4 に近い黄褐色砂質シルト(炭化物、地山ブロックを少量含む、しまりあり)
 151. 149層と同じ
 152. 7.5YR5/1 褐色粘土質シルト(地山ブロックを少量含む、しまりあり)
 153. 7.5YR4/1 褐色砂質シルト(炭化物を少量含む、しまりあり)
 154. 7.5YR4/1 褐色砂質シルト(地山ブロック含む、しまりあり)
 155. 7.5YR4/2 灰褐色シルト(地山ブロック含む、粘性ややあり、しまりやや弱い)
 156. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト(地山ブロックを少量含む、しまりやや弱い)
 157. 7.5YR4/1 褐色シルトと10YR/4に近い黄褐色粘質土の混土
 158. 7.5YR5/2 灰褐色粘土質シルト(地山ブロックを少量含む)
 159. 10YR/6 明黄褐色粘土質シルト(7.5YR5/2灰褐色シルトブロックを少量含む、しまりあり)

図 16 北壁 土層断面図-4 (S=1/80)

2 中世・戦国時代

後世の削平が激しく、この時期と判断できる遺構は規模の大きな溝に限られている。重複関係により、少なくとも2時期に分けられる。ただし遺物は土器・陶器小片が少量含まれるのみであり、遺物の年代観による時期差は明瞭ではない。

6055D

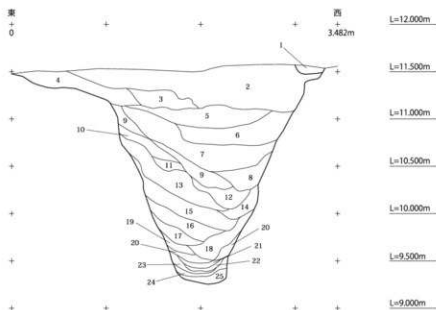
調査区を南北に通る、断面がV字状を呈するいわゆる「菜研掘」となる溝である。長さ17.5mの範囲で確認した。検出面で上端幅最大2.4m、深さ2.3mを測る。上部では溝東側に幅60cm程度の犬走り状の平坦部がみられる。溝の底部は比較的平坦で50cm程度の幅がある。ベルト(図17)で確認した埋土の堆積状況では、上部1/5程度に黒色シルト、その下は細かいブロック状斑土の灰色砂質シルト、最下層の30cm弱は砂層を挟む暗灰色の粘土質土の自然堆積が認められる。以上により、溝の存続期間にはほぼ空欄の状態であり、廃絶時は東側より短期間に埋められた状況が窺われる。なお、出土遺物のうち最下層で検出された土師質鍋は付着物の放射性年代測定、上層黒色土層と中層で検出された骨片などは種同層での分析を行っている(第4章)。

6065D (図18)

先述の6055D西側をほぼ並行するように南北に通る溝である。後世の掘乱により検出部分は断続的であり、全体像が不明瞭となっている。鳥状に残る残存部分について、調査区南側から6065D-a～fとして検討した結果、北側の6065D-e,fとやや規模が小さく一定しない南側6065D-a,b,cの2タ

イブがあり、これらの境界付近 d 地点は溝 607SD と重複し、かつ b 地点で東西方向の溝 603SD に接続するという位置関係にあることから、軸線方向はほぼ一致するものの 606SD-a,b,c と 606SD-e,f は不連続である可能性が高いと判断した。

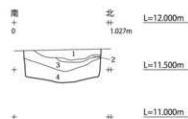
606SD-a,b,c では、a 地点は断面がやや開いた U 字状を呈し、幅 1.2m、深さ 59cm、c 地点は上端幅 0.8



1. 7.5YR3/1 黒褐色シルトと 10YR7/4 に近い黄褐色粘土質シルトの混土 (粘性ややあり、8959K 混土)
2. 7.5YR3/1 黒褐色シルト (10YR7/4 に近い黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。粘性ややあり、しまりやや弱い)
3. 7.5YR4/2 灰褐色シルト (地山ブロックを少量含む。しまりあり)
4. 7.5YR5/2 灰褐色シルト (地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い)
5. 2.5Y7/3 淡黄色極細粒砂 (2.5Y8/2 灰白色粘土ブロック、地山ブロックを全体的に含む。しまりやや弱い)
6. 2.5Y7/3 淡黄色極細粒砂 (7.5YR3/1 黒褐色シルト大ブロック、2.5Y8/2 灰白色粘土ブロックを少量含む。しまりあり)
7. 5層に比べ地山ブロック少ない
8. 7.5YR2/2 黒色シルト (9層ブロック含む。しまり弱い)
9. 2.5Y7/3 淡黄色極細粒砂 (地山ブロック少量含む)
10. 2.5Y7/3 淡黄色極細粒砂 (地山ブロックを多量、7.5YR3/1 黒褐色シルトブロックを少量含む。しまりやや弱い)
11. 2.5Y7/3 淡黄色極細粒砂 (地山ブロックを少量含む。しまりやや弱い)
12. 2.5Y7/3 淡黄色極細粒砂 (地山ブロック含む。しまりやや弱い)
13. 2.5Y6/3 に近い黄色極細粒砂 (地山ブロックを多量に含む。7.5YR3/1 黒褐色シルトブロック含む。粘性ややあり、しまりやや弱い)
14. 2.5Y6/3 に近い黄色極細粒砂 (13層に比べ、しまりあり)
15. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂 (地山ブロックを多量に含む。しまり弱い)
16. 10YR6/2 灰褐色粘土質シルト (7.5YR3/1 黒褐色シルトブロック含む。粘性ややあり、しまりやや弱い)
17. 2.5Y6/3 に近い黄色シルト質砂 (しまり弱い)
18. 7.5YR2/1 黒色シルト (粘性ややあり、しまり弱い)
19. 10YR2/1 黒色シルト (粘性ややあり、しまり弱い)
20. 7.5YR3/1 黒褐色シルト (地山ブロックを多量に含む。粘性ややあり、しまり弱い)
21. 10YR3/2 黒褐色シルト (2.5Y7/3 淡黄色極細粒砂ブロックを含む。粘性ややあり)
22. 5YR1/1 黒色粘土質シルト (しまりやや弱い)
23. 2.5YR6/3 に近い黄色シルト質砂 (しまりやや弱い)
24. 22層と同じ
25. 10YR6/1 褐灰色シルト (2.5Y7/4 淡黄色粘土ブロック含む。しまりあり)

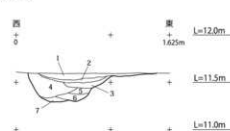
図 17 堀 605SD 断面図 (S=1/40)

6075D



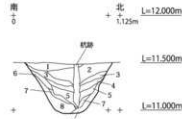
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR6/4にふい黄褐色シルト小ブロックを少量含む。しまりあり)
- 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルト(しまりあり)
- 7.5YR2/1 黒色粘土質シルト
(10YR6/4にふい黄褐色粘土質シルト小ブロックを多量含む。しまりあり)
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR6/4にふい黄褐色粘土質シルトの混土
(粘性ややあり。しまりやや弱い)

6065D-b



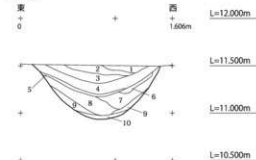
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にふい黄褐色シルトブロックを少量含む)
- 10YR5/4 にふい黄褐色細粒砂(しまりあり)
- 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト
(10YR7/4にふい黄褐色シルト小ブロックを多量含む)
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR7/4にふい黄褐色粘土質シルトの混土
(しまりあり)
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にふい黄褐色シルトブロックを多量含む。しまりあり)
- 7.5YR4/2 灰褐色粘土質シルト
(10YR7/4にふい黄褐色シルト大ブロックを多量含む。細粒砂含む。しまりあり)
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にふい黄褐色シルトブロックを少量含む。しまりやや弱い)

6035D



- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR6/4明黄褐色シルトブロックを多量含む。しまりあり)
- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト(粘性ややあり。しまりやや弱い)
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にふい黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む。しまりあり)
- 7.5YR5/1 褐色砂質シルト(粘性ややあり。しまりやや弱い)
- 10YR5/3 にふい黄褐色砂質シルト(粘性ややあり。しまりやや弱い)
- 10YR5/3 にふい黄褐色砂質シルト
(10YR7/4にふい黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む)
- 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト(粘性ややあり。しまりやや弱い)
- 10YR7/4 にふい黄褐色シルト
(7.5YR3/1黒褐色シルトブロックを多量含む。粘性ややあり。しまりやや弱い)
- 7.5Y7/3 淡黄色砂質シルト(しまりあり)

6065D-a



- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(10YR7/4にふい黄褐色粘土質シルトブロックを多量含む。
粘性ややあり。しまりあり)
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト(しまりあり)
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルトと10YR7/4にふい黄褐色粘土質シルトの混土
(粘性ややあり。しまりやや弱い)
- 10YR5/4 にふい黄褐色シルト
(10YR7/4にふい黄褐色粘土質シルト充填。しまりやや弱い)
- 7.5YR5/1 褐色粘土質シルト(しまりやや弱い)
- 7.5YR5/1 褐色粘土質シルト
(2.5YR/3淡黄色シルトブロック含む。しまりやや弱い)
- 7.5YR4/3 褐色粘土質シルト
(2.5YR6/6褐色シルト小ブロック充填。しまりやや弱い)
- 7.5YR6/6 褐色粘土質シルトと7.5YR3/1黒褐色シルトの混土
(しまりやや弱い)
- 7.5YR5/4 にふい黄褐色粘土質シルト
(2.5YR6/6褐色シルト小ブロックを多量含む。しまりやや弱い)
- 7.5YR3/1 黒褐色粘土質シルト
(2.5YR/3淡黄色シルトブロック含む。しまりやや弱い)

図 18 区画溝 6075D・6035D・6065D-a 断面図 (S=1/40)

～1m、深さは28cm、断面は浅い逆台形状を呈する。埋土は黒色シルトと明褐色粘土質土の細粒の斑土が徐々に堆積した状況が窺われる。

606SD-e.fは溝底のレベルが11.23m～10.96mと北側へ向かうほど急激に深さを増し、北壁では断面V字状の「薬研掘」の形状となり、幅は1.9mと605SDとほぼ同様の規模となる。d地点すぐ北側からe地点付近の溝底斜面には階段あるいは掘削痕のような凹凸が認められる。埋土はe地点では黒色シルトと灰色砂質シルトのブロック状斑土であり、f地点では605SDの場合と同様に上層に黒色土が堆積し、その下は礫混じりの暗灰色シルト、砂質土斑土が短期間に埋積した状況が窺われる。

606-d地点は僅かに残った溝底の痕跡である。南北どちらの溝に帰属するのか判断は難しい。また、606SDe.f 廃絶後の同地点真上に606SD-a,b,cから連続する溝の存在を仮定してみたが、その痕跡は全くみられなかった。

607SD (図18)

真北に対してほぼ直交する東西方向に直線的のびる。溝の断面形状は箱形を呈し、幅82cm、深さ35cmを測る。約29mの部分を確認した。東端は606SD-d地点で重複関係にあり、これより東側に連続する部分は確認されていない。埋土は黒色シルトと明褐色粘土質土がブロック状に混じる斑土である。

603SD (図18)

東西方向に直線的のびる。605SDと重複し、西端は606SD-bにT字状に接続する。断面形状は地山(熱田層)を掘込む部分では明瞭な逆台形、605SD重複部分では丸みを帯びたU字状を呈する。上端幅1.3～1.6m、深さ40～50cmを測る。溝底レベルは概ね西方向に傾斜しており、606SD溝底とは段差をもって接続している。埋土は黒色シルトに明褐色粘土質土の細粒が混じる斑土であり、堆積状況は606SD-a地点に類似する。溝の両側の肩に近い内側部分に径10cm前後の小ピットが連続する部分があり、これらは杭列の痕跡かと思われる。

以上より遺構の変遷では、605SDと606SD-e.fの規模が大きく断面V字状を呈する堀が並行する時期があり、遺構の重複関係からこれらの廃絶後、小規模な溝603SDと606SD-a,b,cによる区画が再構築されたと考えることができる。少量の出土があった遺物のうち、古瀬戸後期の資料は両者でみられるが、大窯I(2)段階の資料は603SDに含まれる割合が高い。

遺構の軸線では、「堀」と603SD「溝」はともに真北から4度西にふれる、またはこれに直交する方向で一致している。これらと軸線方向が一致しない607SDは、重複関係では「堀」の時期、あるいは「溝」の時期のどちらかに先行すると考えられ、以下の2通りが想定される。

- (1) 607SD → 605SD・606SD-e.f → 603SD・606SD-a,b,c
- (2) 605SD・606SD-e.f → 607SD → 603SD・606SD-a,b,c

北側に隣接する過去の調査地点では、今回の606SD-e.fに繋がると思われる同規模の遺構が確認されている(SD514、『名古屋城三の丸遺跡VI』)。一方、605SDから連続する遺構は確認されていない。設定された調査区の間には幅10mの未調査部分があり、この間に605SDは途切れるか、あるいは東側に屈曲する可能性が考えられる。605SD東側には土塁も想定され、いずれにせよ605SDと606SD-e.fは東側を内部とする区画の開口部を形成していると考えられる。

3 江戸時代

近世名古屋城の三之丸武家屋敷では屋敷表に相当する部分であり、屋敷地境を構成する遺構（溝、柱穴、その他）、建物跡を含む柱穴、井戸、廃棄土坑などがある。廃棄土坑は調査区北西部と、隣接する屋敷地境周辺の調査区北東部に集中する。その他、南御土居筋がかかる道路整地部分も範囲として捉えることができた。

<北西部>

466SE

調査区西部の北壁付近に位置する径1.1mの円形の井戸である。内部に構造物は確認されず、標高6.5mの深さまで確認した。上層から下層まで陶磁器類を含む暗褐色粘土質土を基調とした埋土である。17世紀中葉～後葉の時期を中心とした遺物を含む。

1535K

西辺が壊されているが50×60cm前後、深さ10cmの隅丸方形の土坑である。土坑内にはロクロ土師器皿2枚(485,486,写真図版遺構7)が合せ口の形で置かれていた。うち一点は外面底部に墨書が施されている。出土の状況などから胎衣埋納の痕跡かと推定される。

389SK

466SEに一部重複する廃棄土坑であり、北側は調査区外に広がる。検出された部分で幅3.7m、奥行1.8m、深さ1.1mを測る。灰褐色シルトを基調とした埋土で、部分的に炭化物を含む。

土坑の形状が判明している南側は、一部直線的であり、断面形状は壁面がほぼ垂直に立ち上がる方を呈する。土坑廃絶以後と思われるが、この南辺ラインに並行する方向のビット列が存在する。建物跡の復元には至らず、崩のようなものかもしれない。遺物の量は密度としては低い方であり、陶磁器類、瓦(本瓦葺)のほか土師器皿が比較的多く含まれる。466SEの廃絶とほぼ同時期、17世紀後

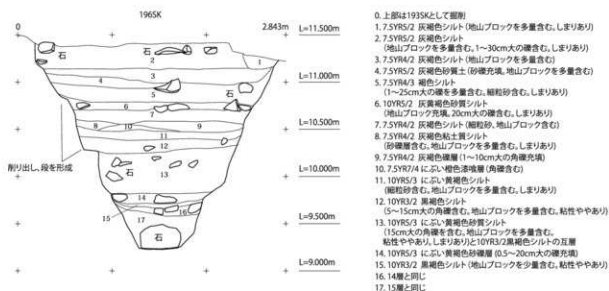
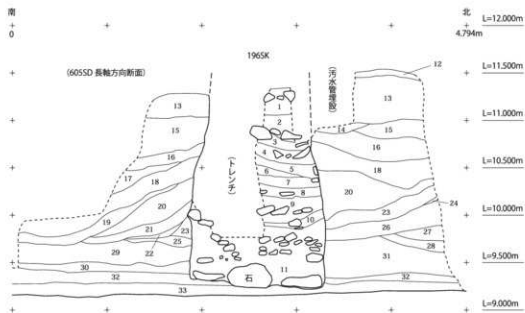


図19 1965K 断面図-1 (S=1/40)



1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(地山ブロックを多量含む, 1~30cm大の礫含む, しまりあり)
2. 7.5YR/2 灰褐色シルト(地山ブロックを多量含む)
3. 7.5YR/3 褐色シルト(1~25cm大の礫を多量含む, 細粒砂含む, しまりあり)
4. 10YR5/3 灰黄色砂質シルト(地山ブロック充満, 20cm大の礫含む, しまりあり)
5. 7.5YR/2 灰褐色シルト(細粒砂, 地山ブロック含む)
6. 7.5YR/2 灰褐色礫層(1~10cm大の角礫充満)
7. 10YR/3 に近い黄褐色シルト(地山ブロックを多量含む, 細粒砂含む, しまりあり)
8. 10YR/2 黒褐色シルト(5~15cm大の角礫含む, 地山ブロックを多量含む, 粘性ややあり)
9. 10YR/3 に近い黄褐色砂質シルト(15cm大の角礫を含む, 地山ブロックを多量含む, 粘性ややあり, しまりあり)と10YR/2黒褐色シルトの互層
10. 10YR/3 に近い黄褐色礫層(15cm大の礫含む)
11. 10YR/2 黒褐色シルト(地山ブロックを少量含む, 粘性ややあり)と
10YR/3に近い黄褐色礫層(0.5~20cm大の礫を多量含む)の互層(道部に35~45cm大の礫3点取附)
12. 7.5YR/1 黒褐色シルト(10YR/7に近い黄褐色粘土質シルトブロック含む, 粘性ややあり, しまりあり)
13. 7.5YR/1 黒褐色シルト(10YR/7に近い黄褐色粘土質シルトブロックを微量含む, 粘性ややあり, しまりやや弱い)
14. 7.5YR/1 黒褐色シルト(2.5Y7/3淺黄色極細粒砂ブロック含む)
15. 2.5Y7/3 淺黄色極細粒砂(2.5Y8/2灰白色粘土ブロック, 地山ブロックを全体的に含む, しまりやや弱い)
16. 2.5Y7/3 淺黄色極細粒砂(7.5YR/1黒褐色シルト大ブロック, 2.5Y8/2灰白色粘土ブロックを少量含む, しまりあり)
17. 10YR/4 に近い黄褐色細粒砂(7.5YR/1黒褐色シルト大ブロック, 2.5Y8/2灰白色粘土ブロックを少量含む, しまり弱い)
18. 15層と同じ
19. 10YR/2 灰黄褐色シルト(7.5YR/1黒褐色シルト大ブロック, 2.5Y7/3淺黄色極細粒砂ブロックを多量含む, 粘性ややあり, しまりやや弱い)
20. 2.5Y7/3 淺黄色極細粒砂(地山)ブロックを多量, 7.5YR/1黒褐色シルトブロックを少量含む, しまりやや弱い)
21. 19層と同じ
22. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト(7.5YR/1黒褐色シルトブロック, 2.5Y7/3淺黄色極細粒砂ブロックを多量含む, しまりやや弱い)
23. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂(しまりやや弱い)
24. 2.5Y7/3 淺黄色極細粒砂(地山)ブロック含む, しまりやや弱い)
25. 2.5Y7/3 淺黄色極細粒砂と10YR/6明黄褐色シルトの混土(しまりあり)
26. 2.5Y6/3 に近い黄色極細粒砂(地山)ブロックを多量含む, 7.5YR/1黒褐色シルトブロック含む, 粘性ややあり, しまりやや弱い)
27. 2.5Y7/2 灰黄色極細粒砂(地山)ブロックを多量含む, しまり弱い)
28. 10YR/2 灰黄褐色粘土質シルト(7.5YR/1黒褐色シルト)ブロック, 2.5Y7/3淺黄色極細粒砂ブロックを多量含む, しまりやや弱い)
29. 7.5YR/1 黒褐色粘土質シルト(2.5Y7/3淺黄色極細粒砂)ブロック含む, しまりやや弱い)
30. 2.5Y7/3 淺黄色砂質シルト(2.5Y8/2灰白色粘土ブロック含む, しまりやや弱い)
31. 2.5Y6/3 に近い黄色シルト(しまり弱い)
32. 29層と同じ
33. 2.5Y7/3 淺黄色極細粒砂(地山)ブロック含む, しまりあり)

図 20 1965K 断面図-2 (S=1/40)

半から 18 世紀初めの時期を中心とした遺物が含まれる。

3815K

調査区内では最も南側に位置する土坑である。遺構上部は東側から 3/4 を防空壕 (340SX) に削られている。平面形は整った方形を呈し、2.0m × 1.8m、深さ 2.3m を測る。壁面が垂直に立ち上がる形状であり、底部も平坦に仕上げられている。もとは地下室として構築されたと思われるが、残存部分に階段などは認められない。埋土は最下層に暗褐色土の無遺物層が堆積し、しばらく使用されなかった間に自然に堆積したものである。その上は防空壕の床面レベルまで (第 2～7 層) は暗灰色粘土などが堆積し、やや散漫に陶磁器類が含まれるが、上下層での時期差はほとんど認められない。ここには炭化物ほか、魚類骨片、貝類など食物残渣と思われる動物遺体が目立って多く含まれている。(第 4 章 -2)

陶磁器類は 18 世紀後葉から 19 世紀初めの時期のものが含まれ、一部は 492SK 出土遺物と接合関係が認められた。

492SK

土坑 3815K から北西約 5m の距離にある。平面形は不整形な楕円形かと思われ、北側は調査区外に広がる。検出された範囲で、幅約 2.8m、奥行約 2.4m、深さは最大で 40cm を測る。遺構側壁の立ち上がりは緩やかに底面には凹凸が残る。埋土は灰褐色シルトを基調とし、炭化物、貝類なども含まれる。(第 4 章 -2)

陶磁器、瓦類の密度は高く、ピット、土坑など数次の掘り込みが重複し、混入品も多いが、一括性は比較的高いと考えられる。一部は 3815K 出土遺物と接合関係にある。18 世紀末から 19 世紀前葉の時期の遺物が含まれる。

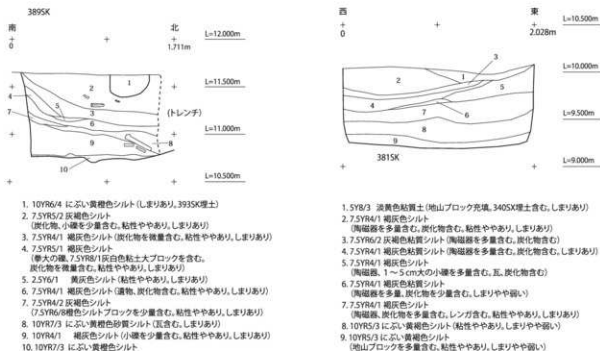
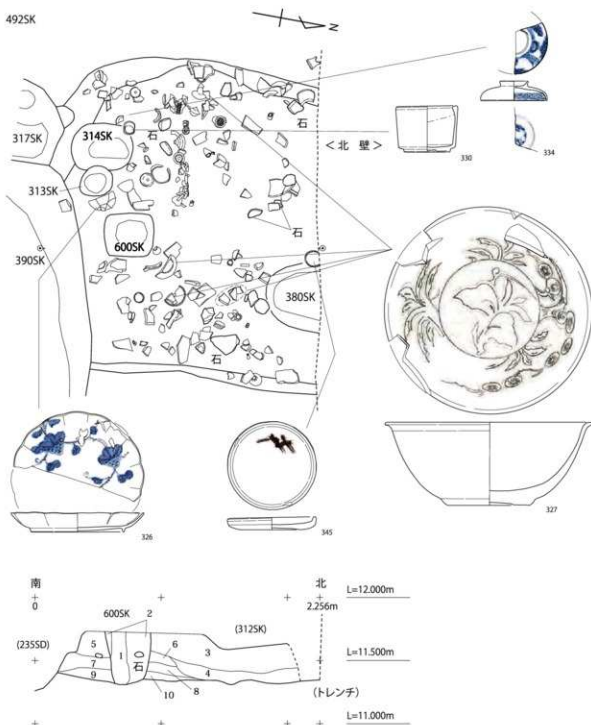


図 21 土坑 3895K・3815K 断面図 (S=1/40)

492SK



1. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(柱頭)
2. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(10YR6/1灰白色粘土ブロック含む。織、炭化物を少量含む。しまりあり)
3. 7.5YR4/1 褐色シルト(炭化物、0.5~2cm次の小礫含む。しまりあり)
4. 7.5YR4/1 褐色シルト(炭化物を多量含む。しまりあり)
5. 10YR2/2 灰黒褐色シルト
(10Y2/1灰白色細砂を多量、10YR6/1灰白色粘土ブロックを少量含む。小礫含む)
6. 7.5YR5/1 褐色シルト
(10YR7/1灰白色細砂、炭化物含む。10YR6/1灰白色粘土ブロックを少量含む)
7. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(10YR2/1灰白色細砂、炭化物、小礫を少量含む)
8. 7.5YR5/1 褐色シルト(炭化物含む。粘性ややあり)
9. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(粘土ブロックを多量含む。粘性ややあり)
10. 7.5YR5/2 灰褐色シルト(粘土ブロックを少量含む。粘性ややあり)

図 22 土坑 492SK 遺物出土状態 (S=1/30)

3875K

4925K のすぐ西側に位置する。北側の一部が調査区外にかかるが、平面形は楕円形を呈するとと思われる。検出された範囲では幅 1.8m、奥行 1.8m、深さ 30cm を測る。底面には凹凸が残る。灰褐色シルトを基調とした埋土であり、炭化物、貝類なども含まれる。陶磁器、瓦類の密度は高い。18 世紀末～19 世紀前半の遺物が含まれる。

4135K

調査区内では最も西側に位置する廃棄土坑であり、最終の廃棄は明治期にかかると思われる。平面形は不整形な楕円形を呈し、長さ 2.8m、幅 2.3m、深さ 29cm を測る。埋土は大きく上下 2 層に分かれ、上層は暗褐色シルト、下層は焼土ブロックが混じる明黄褐色の粘土が多く含まれる。遺物は主に下層

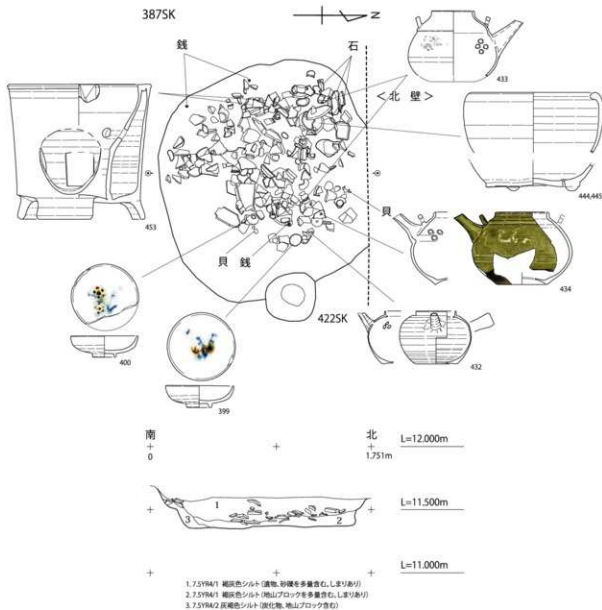


図 23 土坑 3875K 遺物出土状態 (S=1/30)

に含まれ、瓦が最も多い。瓦類では棧瓦と平坦な飾り瓦が大半を占める。その他に被熱した長方形の砂岩ブロックなども数点を確認した。

<北東部>

496SD

南北方向の溝であり、北側は調査区外へ続くが、南側は途切れる。長さ 8.0m の範囲を確認した。上端幅約 60cm、底部幅約 50cm、深さ 1.1m を測り、断面形状は逆台形～箱形を呈する。埋土は地点により異なるが、いずれも短期間に埋められた状況が認められる。廃絶後、110SK が重複して掘削されている。

北側延長線上には過去の調査地点で確認された溝（SD10、『名古屋城三の丸遺跡 III』）があり、これと形状が類似し、位置・方向ともに齟齬はないことから連続するものと考えられる。南端の平面形は方形を呈し、戦後の汚水管理設備（東西方向）がすぐ南に接する位置に配されているが、重複はしていない。屋敷地を区画する境界施設と考えられ、近世を通じて強い規制力をもっていたと考えられる。

SA001 (882SK,497SK,116SK)

496SD に沿って西側に並ぶ 3 基のやや大型の柱穴で構成される。それぞれ円礫の礎板石をもつ。礎石間には 1.7～1.8m を測る。北側は連続する可能性があるが、3 基の南側には展開しない。116SK,882SK は 496SD に重複している。竪立柱の土塼あるいは板塼などの上部構造が想定される。

SA002 (058SK,055SK,053SK,832SK)

後述する 196SK と 832SK を結ぶライン上に位置する、東西方向に並ぶやや大型の柱穴列である。土杭中心間の距離は 2.0～2.2m を測る。832SK 以外では礎石は確認されていない。築地塼あるいは土塼などの上部構造が想定される。

110SK

一部は東側調査区外に広がるという位置で確認された廃棄土坑である。検出部分で、長さ 2.7m、奥行 1.0m、深さ約 45cm を測る。灰褐色シルトを基調とする埋土であり、炭化物と薄い貝層も認められる。出土遺物では陶製、土製の玩具類、土師質鍋・釜類などに一括性の高い廃棄状況がうかがわれる。

土坑の位置関係について。溝 496SD 廃絶後にその上に重複して掘削されている。また、下には（おそらくは土坑）070SD があり、遺構西側のラインが一致して重複する。このラインに強い規制が認められることなどから、これらは屋敷地境に造られた廃棄土坑であり、位置的に東側の屋敷地に含まれると考えられる。

085SK

平面形が楕円形を呈する土坑である。長さ約 2.5m、

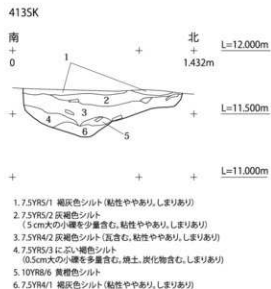


図 24 土坑 413SK 断面図（S=1/30）

幅 1.2m、深さ 55cm を測る。長軸方向は、溝 496SD にほぼ並行する。暗褐色シルトを基調とする埋土であり、17 世紀半ばから後半の陶器、土器が散漫に含まれる。

660SD

東西方向の溝であり、上部に近代の溝 (047SD) が重複して不明な部分が多いが、幅 1.5m、深さ 20cm の部分を確認した。断面は U 字状を呈する。東壁では確認できないため、柱穴列 (SA001) の西側で途切れると考えられる。

<その他>

602SD

調査区南東部で検出された、土塁と並行する東西方向のやや幅広の溝である。幅 1.6m、深さ 40cm を測り、東側は調査区外へ続く。長さ 10.1m の範囲で確認した。底部は平坦で両脇に溝状の凹みをもち、埋土には剥片礫を少々含む。東壁で確認される状況から、近世のある段階の整地の際に埋められたと考えられる。少量の近世陶器が出土した。

196SK

埋土の状況が不自然であり、当初は戦国期堀に設けられた土橋状の遺構と想定したが、精査の結果、戦国期堀 605SD の堀で掘込まれた近世の土坑であることが判明した。平面形は長方形を呈し、上端は長軸 2.6m、幅 1.0m、下端では幅 1.4m を測る。土坑部分の戦国期堀の埋土を除去し、最下層に大型の礫 3 個を小礫を使って据え置いた上で、新たに礫、漆喰の混じる黒色～暗褐色シルトを交互に水平に版築状に積み上げている。おそらくこの作業のため、断面 V 字状の堀の側面に数カ所の段が削り出されている。

同様の堆積状況は 196SK のほか東西両側で部分的に認められる。東側では隣接する 193SK、東壁にかかる 832SK があり、これはビット状で下位に礎石をもつ。また西側では連接する 194SK、195SK で認められ、これらは 196SK を含み同一線上に並んでいる。埋土中からは鉄軸 (種軸) 徳利片、磁器染付鉢か (639) が出土し、後者は 196SK 西側の 194SK 出土遺物と同一個体であった。これらの版築状埋土の遺構群は一連のものであり、帯状に展開する形態であると考えられる。

この帯状の遺構群は、屋敷地境と考えられる溝 496SD の南端に接するように東西に直交する位置にあり、かつ近世段階の特殊な構築物であることなどから、屋敷と南御土居筋を画する築地堀の基部 (痕跡) の可能性が考えられる。193SK、194SK、195SK などすべて直接基礎層 (熱田層) を掘り込むようにして直接版築が行われており、196SK では軟弱な地盤の改良のため戦国末の埋土を除去するという地業を行ったものと考えられる。なお、196SK を覆す攪乱 (汚水管理設溝) より南側全体は薄い整地層が重なり、硬化している部分も確認できる。

その他に多数の小土坑があるが、時期の不明なものが多い。形状では、隅丸方形、円形 (楕円形)、不定形などがあり、方形のタイプは一边が 40cm 前後、円形は径 30cm 弱、40cm 前後、60cm 前後などがある。隅丸方形土坑には、円礫を礎石とするものが比較的多く含まれる。

主に調査区の中央より北側に分布し、(後世の攪乱の影響もみられるが) 北西部の廃棄土坑群周辺に集中してみられる。建物あるいは塀などが配置されていたと思われるが、復元には至らなかった。また、調査区中央付近で東西に並ぶビット列が幾つか想定されるが、近代以降のものも多く含まれる。

4 近代以降

明治6年以降、名古屋城が第三師団の管轄下に置かれ、調査地点付近は被服庫→軍楽隊→第三師団経理部第一倉庫の敷地となったと思われるが（第1章3節）、その間の内部の様子は実態としては不明な部分が多い。

調査では、溝、柵列と思われるビット列、コンクリート建物基礎などのほか熟田層に深く掘り刻まれた大型の遺構5基を確認した。これらには互いに重複が認められず、ほぼ同時期に存在したと考えられる。戦時中の遺物を含み旧陸軍が占有していた時代の遺構であり、規模・機能等から「防空壕」の痕跡と判断した。

<防空壕>

3405X (0875D,0885D,0905D 含む)

南側に開く出入口（0875D）から南北方向、直線的に続く通路、通路東側に直角に接続する複数の部屋（0885D,0905D）からなる。通路の先北側は調査区外で不明である。出入口から通路を含む長さは14.5m（検出範囲）、通路幅は2.3～2.5mである。部屋は2室を検出し、奥行約6.5m、幅は約0.8m、検出面からの深さは約1.4m、床面のレベルは10.6mである。出入口は平面形が舌状のスロープとなっており、傾斜角度は約12°～16°を測る。出入口の床面は平坦でなく、中央部分が若干凹み、その両脇に小さな凹みが階段状に連続する。検出当初は中央凹み部分に周囲にはない光沢が認められた。車輪の轍跡と推測される。通路および部屋の床面は段差のない平坦面をなし、部屋(0885D)の奥、壁面の隅には用いられていた角柱状の柱の痕跡が認められる（写真図版 遺構11）。また、北側の部屋(0905D)の上部には、部屋より広い幅（1.2～1.5m）で深さ50cm程度掘りくぼめた段差があり、

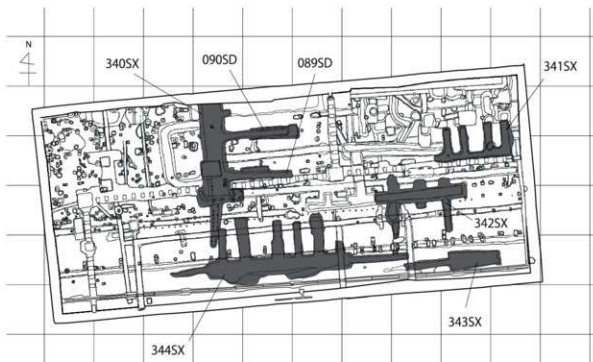


図25 防空壕 配置図

この部分のみ天井部が厚い板状の蓋をすする構造であったと考えられる。蓋受と思われる段差から床面まで 1.1m 程度しかなく、大人が立って移動することは難しい。その他、出入口から 11m ほど入った通路西側壁面には幅 25cm 程度の凹みが 2 箇所あり、照明具等が置かれたかと推測される。

3415X (021 ~ 0255D 含む)

西側に開く出入口をもつ東西通路 (0255D) と、これの北側に直角に接続する 4 室 (021 ~ 0245D) からなる。出入口から奥までの距離は 7.8m、部屋の長さは約 2.5m、通路と部屋の幅はほぼ同じで 0.8m、検出面からの深さは平均して約 80cm である。出入口は床面が平坦なスロープとなっており、傾斜科角度は約 24° である。最も西側の部屋の突当り床面中央には、排水施設の痕跡かと思われる径 10cm、深さ 5cm の円形の凹みが設けられている。

3425X

南側に開く 2 箇所出入口と、これに直交する幅約 1.5m、長さ 4.7m の東西通路、通路に直交する 4 箇所の部屋からなる。ただし、部屋と呼べるほどの空間はなく、奥行きは極端に短く 0.8m から 1.7m 程度である。出入口は床面が平坦なスロープであり、傾斜科角度は 14° と 23° を測る。うち 1 箇所はスロープ途中で堅穴状に掘り凹められており、階段はなく、出入りには梯子が必要である。遺構の重複関係は確認できなかったが、この部分は廃絶後の損乱の可能性も考えられる。機能としては不完全な状態と思われ、部屋の拡張を試みながらも築造途中で断念した箇所かもしれない。

3435X

東側に広く開く出入口に連続して東西に溝状にのびる。出入口床面は平坦であり、傾斜科角度は約 20° である。出入口は幅 1.5 ~ 2.0m の部分が 5.0m 続き、その奥は急激に狭くなり幅 80cm の部分が 4.5m 続いたあと掘削途中と思われる不整形な部分で止まっている。検出面からの深さは 75cm 前後、床面のレベルは 10.9m 前後である。幅が狭くなる箇所は基盤層ではなく、ちょうど戦国期の堀 (6055D) にあたる。この遺構も機能としては不完全であり、軟弱な地盤に遭遇したため、途中で掘削を断念したのかもしれない。

3445X

出入口は 2 箇所あり、東西方向の通路の南側中央付近から東側と西側へそれぞれスロープが設けられている。出入口の床面は平坦であり、傾斜科角度はそれぞれ 14° ~ 18° と 16° ~ 20° である。通路は幅約 1.8m と比較的広く、長さ 14m の部分と、さらに東側に続く幅 0.8m の部分 5.5m 確認した。また西側にも断面天井部がアーチ状をなす掘削の途中段階の箇所がみられる。通路北側にほぼ直交する方向で 6 箇所の部屋が接続する。用途か築造順序によるものか、幅や奥行きは一定せず規模のばらつきが大きい。規模は、西から幅 0.7m × 長さ 3.2m、幅約 1.2m × 長さ 4.0m、幅 0.9 ~ 1.2m × 長さ 3.5m、幅 0.7m × 長さ 3.3m、幅 1.0 ~ 1.3m × 長さ 4.1m、幅 0.9m × 長さ 1.1m である。検出面から 1.0m までの部分の掘削を行った。床面は確認できていない。

<その他>

0465D

幅 80cm、深さ 25cm 前後、断面形状は箱形の東西方向に直線状にのびる溝である。調査区東壁か

ら防空壕（340SX）付近まで確認できるが、それより西側では不明である。

0475D

幅95cm、深さ75cm、東西方向に直線状にのびる溝であり、断続的ながら約20mの範囲で確認した。断面下方は隅の丸い方形で、側面は直に立ちあがる。埋土は黒色～暗灰色シルトを基調とし、陶磁器のほか、レンガ・ガラス・金属製品を比較的多く含む。近世段階と思われる溝（660SD）とほぼ重複する。

0895D

防空壕（340SX）に先行する。幅約80cm、深さ約40cm、断面箱形の東西方向にのびる溝であり、防空壕（340SX）東側の約22mの範囲で確認した。完全な直線ではなく、東西では幅や方向が若干変わるため、2条の別々の溝が接している可能性も考えられる。埋土は暗灰色シルトを基調とした斑土状であり、主に西側部分を中心に軍の徽章がプリントされた硬質陶器カップ、血類など比較的一括性の高い資料が得られた。

2355D

コの字状にめぐる幅1.1～1.4m、深さ45cm前後、断面形状が逆台形を呈する溝である。防空壕（340SX）に先行する。北端はさらに北側に、南端もさらに南側に折れ、若干のびて続く椽相が一部で確認できる。平面形では屈曲部は角がなく緩やかなカーブを描いて繋がっている。

026・0275D

ほぼ同じ位置に重複して掘削された東西方向の溝であり、調査範囲内では途切れず連続する。長さ約45m、幅約90cm、深さはそれぞれ15cm、40cmを確認した。断面は皿状を呈し、埋土は暗灰色シルトを基調とする。出土遺物は少量の近世陶器のほか近代の磁器（摺絵）、珉平焼小判皿（702）などがある。

001・0025D

溝そのものは戦後建設された建物基礎の痕跡と思われる。幅約70cm、深さ90cmの部分を確認した。最下層に花崗岩礫薄片が入り、その上厚さ50cmは砂で埋められている。その上には花崗岩角礫、煉瓦片、その他石材片が入る。溝の上部に廃棄された石材には、花崗岩では支柱の基礎や、間知石など加工痕の残る建築部材が多く含まれる。煉瓦にはコンクリートが付着し、多くの赤煉瓦に混じり少量の耐火煉瓦（856、写真図版 遺物 13）が含まれる。

第3章 出土遺物

1 出土状況の概要

出土遺物は石製品・土器・陶磁器類、金属製品などコンテナ約150箱である。

材質により「土器・陶磁器」「ガラス製品・骨製品」「金属製品」「石製品」に分類して整理を行った。掲載資料の選択においては、各時期の主要遺構出土遺物を優先した。中世・戦国期では堀と区画溝、近世は武家屋敷の井戸、廃棄土坑、区画施設関連の遺構などであり、遺物量の多い近世のみ廃棄土坑群付近の包含層出土資料からも抽出した。近代以降は防空壕出土資料を基本として、比較的一括性の高いもの、遺存状態の良いものから抽出した。陶磁器類のほか金属製品・ガラス製品・骨製品がある。

中世・戦国期資料は隣接する過去の調査地点での様相と同様に少量であった。遺構そのものの機能や地点の性格、あるいは近世段階の整地の規模などに理由が求められよう。

近世の廃棄土坑は、調査区の北西部と北東部に分かれて分布しており、北西部の一群(466SE, 389SK, 381SK, 492SK, 387SK)は「屋敷表」に設置された事例とみることができ、北東部の一群(085SK, 110SK)は東西隣に接する2軒の屋敷の屋敷境を挟む廃棄土坑群である。前者ではまず18世紀前半以前に井戸廃絶も含めた廃棄があり、その後やや期間をおいて18世紀後半～19世紀前半にかけて数次の廃棄が行われていたようである。後者では東側の屋敷(図5、屋敷地2)の方が土坑の規模は大きく、境界施設の変更(屋敷間の溝496SD→共有堀?)に伴い拡張されている。

出土遺物の分析では、過去の調査地点での様相と同様、陶磁器の産地別組成では瀬戸美濃産陶器の占める割合は高く、破片数で比較した場合には7割前後と高率で推移している。分布の傾向では調査区中央付近と南側は極端に遺構・遺物が少なくなり、前者は前庭のような空間あるいは礎石建ち建物の範囲、後者は屋敷の外側、すなわち南御土居筋と考えられる。

近代以降の遺構は直線的な溝と小ピット、土坑などであり、第二次大戦末期の防空壕跡を除いて性格を特定できるものは少ない。陶磁器類の中ではやはり軍用食器類が目立ち、薬品瓶、化粧品容器、インク瓶などのガラス製品、蹄鉄など馬具に関連するもののほか大量の用途不明の金属製品が得られた。明治以降の三の丸に駐屯した陸軍第三師団に関連する具体的な資料である。

2 土器・陶磁器

<中世・戦国期>

605SD (1～9)

東濃型山茶碗の小片(4)のほか、施軸陶器類では緑釉小皿(6)、踏鉢(7.8.9)など(藤澤編年)古瀬戸後期Ⅲ段階から大窯2段階に属するものと思われる。土器類は非ロクロ土師器Ⅲ(1)、内耳鍋(3)がある。内耳鍋外面付着物の年代測定結果では、戦国期に取まる数値として、1520～1580年の年代を得ている(第4章1)。

606SD-d,ef地点(10～16)

東濃型山茶碗(10,11)のほか、施軸陶器類は緑釉小皿(12,14)、直縁大皿(15)、卸目付大皿(16)

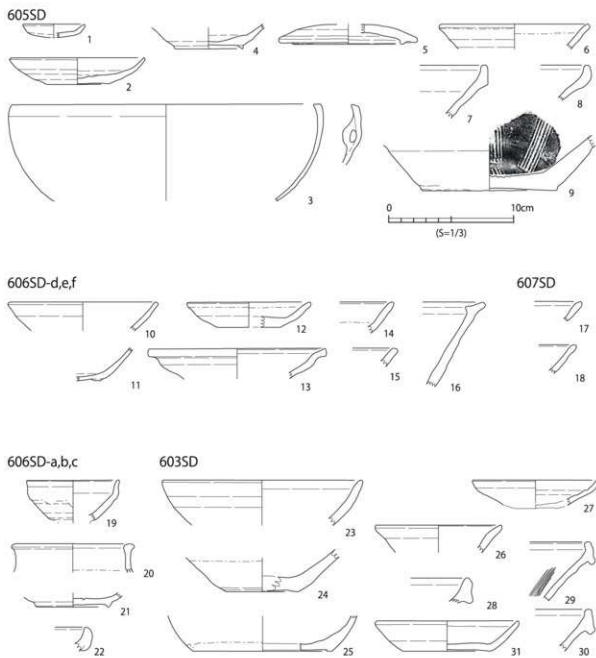


図 26 中世・戦国時代の陶磁器 (S=1/3)

などの小片であり、(藤澤編年) 古瀬戸後期 IV 段階に属するものと思われる。

6075D (17,18)

出土遺物は山茶碗と土師器皿の小片のほか、施釉陶器は古瀬戸後期 III 段階の緑釉小皿 (17) と近世の灰釉丸皿 (18) のみであるが、後者は混入と思われる。

6065D-a,b,c 地点 (19～22)

未掲載資料に山茶碗、土師器皿、銅片がある。施釉陶器は小天目 (19)、鉄釉香炉 (20)、灰釉皿 (21)、

播鉢(22)である。21は印花をもち大窯1段階に、19,22は大窯3段階に属するものと思われる。

6035D (23～30)

施釉陶器は灰釉平碗(23,24)、鉄軸徳利(25)、播鉢(28,29,30)があり、古瀬戸後期Ⅲ段階～大窯3段階に属するものと思われる。31土師器皿はロクロ成形である。未掲載資料には、山茶碗、片口鉢、土師器皿、土師質羽付釜、常滑産糞、古瀬戸灰釉四耳壺、鉄軸器種不明片などがある。

<近世>

出土量が比較的多い井戸(466SE)、土坑(389SK,381SK,387SK)について、器種・産地別カウントを行った。産地は瀬戸と美濃を併せて「瀬・美」として扱い、同様に京都・信楽系、肥前系をそれぞれ「京・信」「肥前」と表記した。計測の方法は、まず陶磁器類はa.口縁部を12分割して計測した残存率(残存1/12以下を1)と、b.接合後破片数のカウントを行った(表7～10)。a.は個体数での比較を、b.は口縁部が残存せず抽出されない器種を減らすことを目的としている。土器・常滑産陶器は、約1cm角以上の「破片数」のみを計測した。また、土師器皿はすべて灯明具に、常滑産陶器は用途が火具と判断できないものを「貯蔵具」裏として分類した。燗し瓦類、玩具類はサンプリングの方法および計測基準が異なるため、今回のカウント作業からは除外している。

なお、陶磁器類の分類については、金子健一氏の協力を得た。

【内耳鍋・茶釜形鍋】

鈴木正貴,1996,『東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜』『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム

【始格】

金子健一,1996,『尾張出土のホウロクについて』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要4

【焼塩釜】

身A類(芯に粘土紐を輪積み成形)

身B類(板状粘土を芯に巻き付け、底部に粘塊を充填。口縁部に蓋受を削り出し)

身C類(B類の蓋受が退化、痕跡程度になったもの)

身D類(全体を型成形、小型で厚手)

身E類(蓋受のない、C類より薄手で粗雑)

蓋A類(上面が曲面、側面が緩やかに凹くもの)

蓋B類(上面が平坦、側面との境に明瞭な稜をもつもの)

【瀬戸・美濃産陶磁器】

瀬戸市,1998,『瀬戸市史 陶磁史篇六』

愛知県,2007,『愛知県史』別冊 窯業2

466SE (32～480,表8)

発掘していない井戸の検出面から約4mの部分に含まれていた資料である。瀬戸・美濃産陶器の割合が高く、陶磁器類(破片数)では72.8%を占める。次いで肥前系磁器・陶器、少量の京・信楽系陶器となる。産地比(破片数)では瀬:肥=1:0.19である。

用途で見ると、供膳具が全体の5割以上を占め、その内8割が瀬戸・美濃産陶器である。供膳具全体の産地別個体数比は瀬:肥=1:0.14であるが、小碗・小杯類の器種のみ瀬:肥=1:1.2となり、肥前磁器が主体といえる。瀬戸・美濃産陶器碗類の内訳は、尾呂茶碗、灰釉・鉄軸丸碗、皿類は志野丸皿、灰釉丸皿、反り皿、輪壳皿、菊皿、型打皿、鉢類は黄瀬戸鉢、折縁鉢である。肥前産陶器は刷

表8 近世陶磁器組成表 4665E

用途	種類・銘柄	陶器						磁器				土器	瓦類	器種別組 片数/小計	用途別合計 (組片数%)		
		茶・美	茶洋	京・信	備前	肥前	不明	茶・美	肥前	中国	不明						
供膳具	碗	残存率合計 (口数/12)	65		7		6			20	2	3					
		破片数 (组数)	85		11		14			20	1	1				132	
	小碗・小鉢・雑口	残存率合計 (口数/12)	5							6						10	
		破片数 (组数)	163							1	0						
	皿	残存率合計 (口数/12)	135							2	1					138	
		破片数 (组数)	32				3			2							
	鉢 (肉付類も含む)	残存率合計 (口数/12)	61				5			5						71	
		破片数 (组数)	10				1										
	その他 (碗・皿類)	残存率合計 (口数/12)	40				9									40	400 (52.3)
		破片数 (组数)															
調理具	鍋 (内耳鍋・磁器・行 草・釜・陶製鍋)	残存率合計 (口数/12)												99		99	
		破片数 (组数)															
	鉢 (片口鉢・鍍鉢)	残存率合計 (口数/12)	12													5	
		破片数 (组数)	5														
	鍍鉢	残存率合計 (口数/12)	26													26	
		破片数 (组数)	75				2									75	
	瓶 (土瓶・醬油瓶・純 子・魚瓶)	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
	その他	残存率合計 (口数/12)														0	179 (23.4)
		破片数 (组数)															
貯蔵具	瓶 (瓶・徳利・水注)	残存率合計 (口数/12)	0							0							
		破片数 (组数)	23							3						26	
	汁次	残存率合計 (口数/12)	2				0									2	
		破片数 (组数)	4				(個人)1									10	
	甕 (平甕・常滑鍍鉢)	残存率合計 (口数/12)	0													0	
		破片数 (组数)	3	58												61	
	置物 (段架・音合音 巾)	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
	その他	残存率合計 (口数/12)								7						7	98 (12.8)
		破片数 (组数)								(個人)1						1	
灯火具	皿 (灯明具・灯明受)	残存率合計 (口数/12)															
		破片数 (组数)												2		2	
	皿・行灯脚	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
火具	鉢 (火鉢・風除・風 炉・火登・手炉・水 磨 (火漉し磨))	残存率合計 (口数/12)							2								
		破片数 (组数)		3					1							4	
	その他 (磁器・七輪)	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
化粧具	紅箱	残存率合計 (口数/12)															
		破片数 (组数)															
	盤 (お歯黒器・髷油 盤)	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
	鏡箱	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
神仏具	瓶 (神酒徳利・仏花 瓶)	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
	香炉	残存率合計 (口数/12)														4	
		破片数 (组数)														5	
	仏師具	残存率合計 (口数/12)														0	
喫茶具	天目茶碗	残存率合計 (口数/12)														1	
		破片数 (组数)														6	
	その他	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
その他	鉢 (磁漆鉢・銅鉢・漆 銅鉢・覆鉢)	残存率合計 (口数/12)														1	
		破片数 (组数)															
	水甕	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
	陶器・土器	残存率合計 (口数/12)															
		破片数 (组数)								10						11	
不明	その他 (水磨・花巻・水 磨・大入れ・灰草とし)	残存率合計 (口数/12)														0	
		破片数 (组数)															
		残存率合計 (口数/12)														2	14 (1.9)
		破片数 (组数)															
		残存率合計 (口数/12)	479	61	11	0	28	13	0	63	2	1	108	0	766	57 (7.5)	
		破片数 (组数)	(62.2)	(8.0)	(1.5)		(3.7)	(1.7)		(8.3)	(0.3)	(0.2)	(14.1)				

表9 近世陶磁器組成表 3895K

用途	群集・群形	陶器						磁器				土器	瓦葺	器種別磁片数小計	用途別合計 (磁片数%)			
		瀬・美	常滑	京・信	備前	肥前	不明	瀬・美	肥前	中国	不明							
供膳具	瓶	維持率合計 (D編/12)	111				12	2		61	5							
		磁片数 (推定数)	128				20	4		51	4					215		
	小瓶・小杯・樋口	維持率合計 (D編/12)	45							38								
		磁片数 (推定数)	9							20							29	
	皿	維持率合計 (D編/12)	141		2		21	1		2	0							
		磁片数 (推定数)	94		1		19	1		4	1						120	
	鉢 (内付類も含む)	維持率合計 (D編/12)	16							8	1							
	磁片数 (推定数)	29				11			3							43		
	その他 (皿・磁類)	維持率合計 (D編/12)															399	
		磁片数 (推定数)															(37.0)	
調理具	鍋 (内耳鍋・筒物・行 窪・釜・陶鍋類)	維持率合計 (D編/12)	0															
		磁片数 (推定数)															234	
	鉢 (片口鉢・縁鉢)	維持率合計 (D編/12)	3															
		磁片数 (推定数)	4														4	
	縁鉢	維持率合計 (D編/12)	41															
		磁片数 (推定数)	69														68	
	瓶 (土瓶・調味料・鍋 注・湯桶)	維持率合計 (D編/12)		0														
	磁片数 (推定数)		2													2		
	その他	維持率合計 (D編/12)															309	
		磁片数 (推定数)															(28.7)	
貯蔵具	瓶 (瓶・徳利・水注・汁 次)	維持率合計 (D編/12)	25						0									
		磁片数 (推定数)	37						5								42	
	甕 (甕・高さ・染入)	維持率合計 (D編/12)	0															
		磁片数 (推定数)	1														5	
	罎 (半罎・常滑縁罎)	維持率合計 (D編/12)	3															
		磁片数 (推定数)	9	47													56	
	罎物 (段罎・番合罎 七)	維持率合計 (D編/12)								1								
		磁片数 (推定数)								1							1	
	その他(罎)	維持率合計 (D編/12)																8
		磁片数 (推定数)																3
灯火具	皿 (灯明具・灯明架)	維持率合計 (D編/12)	14					14										
		磁片数 (推定数)	3					3									141	
	皿・行灯(皿)	維持率合計 (D編/12)	0															
		磁片数 (推定数)																1
	燗燗	維持率合計 (D編/12)																1
		磁片数 (推定数)																1
	その他 (瓦燈・燗台)	維持率合計 (D編/12)																148
	磁片数 (推定数)																(13.8)	
火具	鉢 (火鉢・風筒・風炉)	維持率合計 (D編/12)																
		磁片数 (推定数)																5
	火袋・手籠・水籠	維持率合計 (D編/12)																0
		磁片数 (推定数)																0
	その他 (燈炉・七輪)	維持率合計 (D編/12)																6
	磁片数 (推定数)																	(0.6)
化粧具	紅皿	維持率合計 (D編/12)																0
		磁片数 (推定数)																0
	漆 (お歯黒膏・髷油)	維持率合計 (D編/12)																0
		磁片数 (推定数)																0
	髷籠	維持率合計 (D編/12)	3															1
		磁片数 (推定数)	1															1
その他	維持率合計 (D編/12)																0	
	磁片数 (推定数)																	0
神仏具	瓶 (神酒徳利・仏花 瓶)	維持率合計 (D編/12)	0															9
		磁片数 (推定数)																16
	香炉	維持率合計 (D編/12)	14															14
		磁片数 (推定数)	2															1
	仏鑑具	維持率合計 (D編/12)	1															0
	磁片数 (推定数)																	1
その他	維持率合計 (D編/12)																	0
	磁片数 (推定数)																	0
喫茶具	天目茶碗	維持率合計 (D編/12)	8															8
		磁片数 (推定数)	8															8
	その他	維持率合計 (D編/12)	3															3
	磁片数 (推定数)	3																3
その他	鉢 (鉢木鉢・縁鉢・磁 鉢類・縁類)	維持率合計 (D編/12)																0
		磁片数 (推定数)																0
	水瀧	維持率合計 (D編/12)																0
		磁片数 (推定数)																0
	陶罐・土罐	維持率合計 (D編/12)							4									3
		磁片数 (推定数)																7
	その他 (水罎・花生・水筒 入れ・灰薬とし・薬罎)	維持率合計 (D編/12)	0															
	磁片数 (推定数)	3																3
不明	維持率合計 (D編/12)	3				1				2								64
	磁片数 (推定数)	40				6				17								(6.0)
		466	55	1	6	105	12	0	101	5	0	383	0	1079				
		(43.2)	(5.1)	(0.1)	(0.6)	(9.8)	(1.2)		(9.4)	(0.5)		(35.5)						

表 10 近世陶磁器組成表 3815K

用途	種類・形状	陶器							磁器				土器	瓦器	器種別種 片数小計	用途別合計 (種片数%)		
		瀬・美	常滑	京・信	備前	肥前	不羽	瀬・美	肥前	中国	不羽							
供膳具	碗	種片数合計 (口数/12)	148	40		0	4	31		1								
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	170	34		1	7	19		(標準)1					232			
	小碗・小杯・膳口	種片数合計 (口数/12)	3					22										
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	3					7							10			
	皿	種片数合計 (口数/12)	97	18		2	18											
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	59	7		1	8								75			
	鉢 (石皿・向付碗を合)	種片数合計 (口数/12)	11	10			2											
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	21	1			3								25				
その他 (陶器)	種片数合計 (口数/12)							2									343	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)							1						1		(36.9)		
調理具	鍋 (内瓦鍋・徳徳・行)	種片数合計 (口数/12)	13															
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	10											120		130		
	平・皿・陶鍋類	種片数合計 (口数/12)	26															
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	10												10			
	鍋鉢	種片数合計 (口数/12)	15															
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	40														40	
	瓶 (土瓶・燗酒利・鉄)	種片数合計 (口数/12)	21				0											
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	21				9								21			
	子・魚籠	種片数合計 (口数/12)	4															
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	4												4		203	
その他 (節取・漏斗)	種片数合計 (口数/12)																(21.9)	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	2												2				
貯蔵具	瓶 (酒・徳利・水注・汁)	種片数合計 (口数/12)	31					12										
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	43					2									45	
	樽 (唐・茶筒・薬入)	種片数合計 (口数/12)	10				0											
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	4				1								7			
	罎 (半罎・常滑罎類)	種片数合計 (口数/12)	15															
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	21	65											86			
	蓋物 (蓋重・香合舎)	種片数合計 (口数/12)	12					6										
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	10					2									12	
	その他 (蓋)	種片数合計 (口数/12)	17		19			15										167
	種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	8	3			2								17		(18.0)	
灯火具	皿 (灯明具・灯明架)	種片数合計 (口数/12)	35				1											
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	7				2								57		66		
燗籠	種片数合計 (口数/12)	0																
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	1															1	
その他 (瓦燈・燗台)	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																67	
火具	鉢 (火鉢・瓶罎・風炉)	種片数合計 (口数/12)	19															
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	25	15														25	
火箸・手掘・水篦	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																0	
その他 (燈印・七輪)	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																26	
化粧具	紅箱	種片数合計 (口数/12)																
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																0	
香 (お香箱・燗油)	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																0	
寶篋	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																0	
その他	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																0	
神仏具	瓶 (神楽徳利・仏花)	種片数合計 (口数/12)	0															
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	1															1	
香炉	種片数合計 (口数/12)	0																
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	2															2	
仏飯具	種片数合計 (口数/12)							0										
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)							1									1	
その他	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																4	
喫茶具	天目茶碗	種片数合計 (口数/12)	0															
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	2															2	
その他	鉢 (縁茶鉢・圓鉢・楕)	種片数合計 (口数/12)	14															
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	13															13	
水漏	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)																0	
陶鐘・土鐘	種片数合計 (口数/12)																	
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)							1									1	
その他 (水罎・花巻・水)	種片数合計 (口数/12)	11																
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	13															13	
不明	種片数合計 (口数/12)						1		1		0							
種片数 (種合率)	種片数 (種合率)	58	2				6		9		1						76	
種片数合計	種片数合計	535	82	45	0	1	27	0	54	0	2	184	0	930		(8.2)		
割合(%)	割合(%)	(57.6)	(8.9)	(4.9)	(0.1)	(2.9)	(5.8)	(0.3)	(19.8)									

表 11 近世陶磁器組成表 3875K

用途	品類・銘柄	陶器						磁器				土器	瓦器	総数別件 片数小計	用途別合 計(総片 数%)		
		器・美	常滑	京・信	備前	肥前	不明	器・美	肥前	中国	不明						
供養具	瓶	残存率合計 (口編/12)	37		2			16	5	16							
		総片数 (口編)	47		2			15	8	4					76		
	小瓶・小軒・樋口	残存率合計 (口編/12)	2						4	13							
		総片数 (口編)	4						3	14					21		
	皿	残存率合計 (口編/12)	49		0			5	7	0	9						
		総片数 (口編)	15		1			(木山標)23	4	2	5				30		
	鉢 (向付村老食七)	残存率合計 (口編/12)	17														
	総片数 (口編)	11												11			
	その他 (瓶・皿類)	残存率合計 (口編/12)												0			
		総片数 (口編)												0	138		
														(22.7)			
調理具	鉢 (内耳鉢、稻荷、行)	残存率合計 (口編/12)	53														
		総片数 (口編)	56										19		75		
	平・釜・陶製鍋	残存率合計 (口編/12)	8														
		総片数 (口編)	3												3		
	鑊鉢	残存率合計 (口編/12)	9														
		総片数 (口編)	13												13		
	瓶 (土瓶・糞溜り・鉢 手・魚籠)	残存率合計 (口編/12)	16	27	24			29									
	総片数 (口編)	(標食)45	(標食)13	(標)2			(標食)23					(土瓶)14		77			
	その他	残存率合計 (口編/12)												0			
		総片数 (口編)												0	168		
														(27.7)			
貯蔵具	瓶 (瓶・徳利・水注・ 汁次)	残存率合計 (口編/12)	3														
		総片数 (口編)	17												17		
	樽 (樽・茶壺・茶入)	残存率合計 (口編/12)							10								
		総片数 (口編)							1						2		
	罎 (平罎・常滑罎鉢 罎)	残存率合計 (口編/12)	37														
		総片数 (口編)	21	49											70		
	罎物 (段罎・曹合音 口)	残存率合計 (口編/12)	6						0								
	総片数 (口編)	1						1						2			
	その他 (罎)	残存率合計 (口編/12)	2														
		総片数 (口編)	1											1			
	罎 (灯明具・灯明受 罎・行灯罎)	残存率合計 (口編/12)	21														
		総片数 (口編)	7									24		31			
	罎罎	残存率合計 (口編/12)															
		総片数 (口編)												0			
	その他 (五疊・燗台)	残存率合計 (口編/12)												0			
		総片数 (口編)												0	31		
														0	(5.1)		
火具	鉢 (火鉢・瓶鉢・風 炉・火釜・手炉・水 罎 (火爐し敷)	残存率合計 (口編/12)	10														
		総片数 (口編)	7	13											20		
		その他 (燈炉・七輪)	残存率合計 (口編/12)												0		
			総片数 (口編)												0		
															0	35	
														15	(5.8)		
化粧具	紅箱	残存率合計 (口編/12)											4				
		総片数 (口編)											1		1		
	罎 (お徳風書・製油 罎)	残存率合計 (口編/12)													0		
		総片数 (口編)													0		
	製菓 罎	残存率合計 (口編/12)													0		
	総片数 (口編)													0			
	その他	残存率合計 (口編/12)												0			
		総片数 (口編)												0	1		
														0	(0.2)		
神仏具	瓶 (神酒徳利・仏花 罎)	残存率合計 (口編/12)													0		
		総片数 (口編)													0		
	香炉	残存率合計 (口編/12)							0								
		総片数 (口編)							2						2		
	仏瓶具	残存率合計 (口編/12)													0		
	総片数 (口編)													0			
	その他	残存率合計 (口編/12)												0			
		総片数 (口編)												0	2		
														0	(0.4)		
喫茶具	天目茶碗	残存率合計 (口編/12)													0		
		総片数 (口編)													0	0	
その他	鉢 (縁木鉢・飯鉢・鉢 煎鉢・燗器類)	残存率合計 (口編/12)	46														
		総片数 (口編)	10												10		
	水漏	残存率合計 (口編/12)							8								
		総片数 (口編)							3						3		
	陶器・土器	残存率合計 (口編/12)													0		
	総片数 (口編)													0			
	その他 (水罎・花笠・水 罎・大入丸・灰澤とし)	残存率合計 (口編/12)	14														
		総片数 (口編)	9											9			
	不明	残存率合計 (口編/12)	10					9				17					
		総片数 (口編)	37	5				2				25					
		総片数計	354	70	4	1	0	29	18	18	2	49	63	0	608	(19.6)	
		割合%	(58.3)	(11.6)	(0.7)	(0.2)		(4.8)	(3.0)	(3.0)	(0.4)	(8.1)	(10.4)				

毛目碗、青緑釉碗皿、京焼風碗皿である。

調理具鍋は土師質鍋類で占められ、内耳鍋（深いもの、浅いもの2タイプB6類）、茶釜形鍋（羽無釜B4類）、焙烙（D類）がある。播鉢では混入も含めて第3小期～6小期のものがみられるが、第4小期が主体である。陶器徳利類は尾呂徳利、舟徳利である。

その他に喫茶具の天目茶碗が少量ながら含まれ、大型の陶鍾の出土量がやや目立つことなどが特徴としてあげられる。瀬戸・美濃産陶器の年代観により、17世紀中葉～後葉の時期の資料と思われる。

3895K (96～202,表9)

466SEに一部重複する土坑資料である。陶磁器類（破片数）での瀬戸・美濃の割合は66.2%とやはり高率で、7割近くを占める。産地比（破片数）では瀬：肥＝1：0.44となり、肥前系の割合が466SEと比較してやや高くなっている。

供膳具の割合は37%であり、調理具（土師質鍋類）、灯火具（土師質皿）の増加により相対的に低い数値となっている。供膳具全体でみる産地別個体数比は瀬：肥＝1：0.45となり、小碗・小杯類では瀬：肥＝1：0.85と瀬戸・美濃産陶器の増加が認められるもの、依然として肥前磁器の占有率は高い。瀬戸・美濃産陶器碗類の内訳は、尾呂茶碗、灰釉丸碗、腰鉋茶碗、皿類は灰釉丸皿、輪壳皿、菊皿、ひだ皿、型打皿、摺絵皿、鉢類は黄瀬戸鉢少量と鉄絵鉢である。肥前系陶器は刷毛目碗、青緑釉碗、京焼風碗皿類である。

調理具鍋のほとんどが土師質鍋類であり、内耳鍋（B6類）、茶釜形鍋（羽無釜B4類）である。播鉢は第3小期～第5小期のものが含まれるが、主体は第5小期である。

陶器徳利類は尾呂徳利、舟徳利、鉋徳利である。焼塩壺はすべて身A類である。

灯火具では陶器製灯明皿が若干認められる。土師器皿はロクロ成形で橙色を呈する。比較的一括性一括性の高い資料群である。スス付着資料は一部である。

このほか喫茶具とした天目茶碗が少量みられるほか、灰釉丸碗では器高が高く深い大型のものが目立つ。瀬戸・美濃産陶器の年代観により17世紀後葉～18世紀前葉の時期の資料と思われる。

3815K (203～319,表10)

当初は地下室として築造されたと思われる方形土坑の資料である。土坑上部は防空壕（340SX）に削平されている。一部資料は492SK資料と接合関係にある。

陶磁器類（破片数）に占める瀬戸・美濃の割合は75.8%と高率である。産地比（破片数）では瀬：肥：京＝1：0.103：0.085となり、肥前系が減少し、京・信楽系は肥前系に拮抗する程度にまで増加している。

供膳具の割合が36.9%と低くなり、貯蔵具（蓋物、常滑甕など）、火具（火鉢など）、その他（植木鉢など）がそれぞれ増加している。供膳具における産地別個体数比では、瀬：肥：京＝1：0.29：0.263である。小碗・小杯類では瀬：肥＝1：7.33で肥前磁器がこの器種を独占している。瀬戸・美濃産陶器の内訳は、碗類は灰釉丸碗、上絵付碗、腰鉋茶碗、沈線碗、拳骨茶碗、小杉碗、笹文碗、せんじ、小中、箱形湯呑など多種の碗・湯呑がある。皿類は灰釉丸皿、輪壳皿、梅文皿、型打皿、摺絵皿、染付皿がある。鉢類には石皿が含まれる。京・信楽系では灰釉丸碗、上絵付碗、小杉碗などがある。肥前磁器は丸碗のほか、猪口がある。

調理具では、土師質鍋のほとんどが焙烙（J2類、J3類）に占められるようになったほか、陶製鍋（行平、耳付鍋）、土瓶などが出現している。播鉢は第8小期が主体と思われる。

貯蔵具では、陶器・磁器の両方で蓋物が増加がみられる。陶器徳利は尾呂徳利、錆徳利、貧乏徳利がある。焼塩壺は蓋B類と蓋受の退化した身C類で、「泉湊伊織」刻印が認められる。

灯火具とした土師器皿の多くの資料ではスス、タール状の付着物が認められる。

火具では火鉢類が増加しており、火具への分類に漏れた常滑産を含めると増加率はさらに高いものと予想される。

その他に分類した植木鉢、鳥飼鉢、喫煙具の増加が目立つほか、植木鉢、喫煙具への転用の痕跡も多くの資料で認められる。

個別にやや特殊な資料をとりあげる。232は鉛釉・透明が施された釉軟質焼成の鉢である。手づくね成形。236,237は碗片を利用した色見と思われる。238は水注蓋。焼締で器壁は薄く硬質の焼成である。381SK資料には上絵付陶器が比較的多く、復元されたものでは灰軸丸碗(222,228)、蓋(233)、灰軸丸皿(246,247)などがある。胎土・釉調等より判断して、233を除くほかすべては瀬戸窯の製品と考えられる。過去の出土資料にも同様の上絵付製品が確認されており、京・信楽製品に分類されているものも少なくない。具体的な生産窯は未確定であるが、瀬戸窯においても一定量の生産があったことを窺わせる資料といえよう。土製の玩具類は比較的良好な状態で出土しており、人形(294)、天神像(295,298)、箱庭道具茶室(297)、ままごと道具(296)などがある。ほかに緑軸丸瓦(293)がある。混入と思われる。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により、18世紀後葉～19世紀初頭の時期の資料と思われる。

492SK (320～393)

381SK出土資料と一部は接合関係にある。肥前系染付型打皿(326,332)や、青磁鉢(327)上絵付銚子(344)など優品が含まれる。蕎麦猪口(320～325)は揃いで6点が復元でき、一括して廃棄されたと考えられる。土瓶は381SK資料とは異なり、直線的な注口をもつタイプである。焼塩壺(380)は蓋受のないE類。土師質鍋は茶釜形鍋(383,羽無釜B4類)と焙烙(384,J類)があり、384は外面底部に沢瀉文の刻印が残る。土製・陶製・磁器製の玩具類(385～393)があり、このうち385茶室は箱庭道具としては特に大型と思われる。381SK資料と同形の緑軸丸瓦(381)1点がある。混入と思われる。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により19世紀前葉の時期の資料と思われる。

387SK (394～459,表11)

陶磁器類(破片数)にしめる瀬戸・美濃(陶器・磁器)の割合は、68.2%である。肥前系、京都・信楽系は激減し、代わりに産地不明の磁器類の増加が認められる。

供膳具の割合は22.7%に減少し、調理具が27.7%となっている。供膳具碗において産地別個体数比は瀬：肥：不明＝1：0.094：0.3となる。肥前系がほぼ独占していた磁器碗においても瀬戸・美濃産が出現し、個体数比は瀬：肥＝1：0.31と凌駕している。碗類は端反碗、上絵付碗、丸碗、掛分碗、拳骨碗、広東碗、湯呑類などがあり、皿類は梅文皿、染付皿などである。

調理具は陶製の鍋類(行平、耳付鍋)と土瓶、急須が増加している。土師質鍋はすべて焙烙であり、表面に調整痕がほとんどみられないタイプ(L類)が出現している。挿鉢は第9(10)小期が主体と思われる。

その他に分類した植木鉢、鳥飼鉢、喫煙具などの割合は相対的に増加している。

資料を個別にみると、焼締急須(432)、吊手に「玉川」刻印のある上絵付土瓶(422)、簡描文様

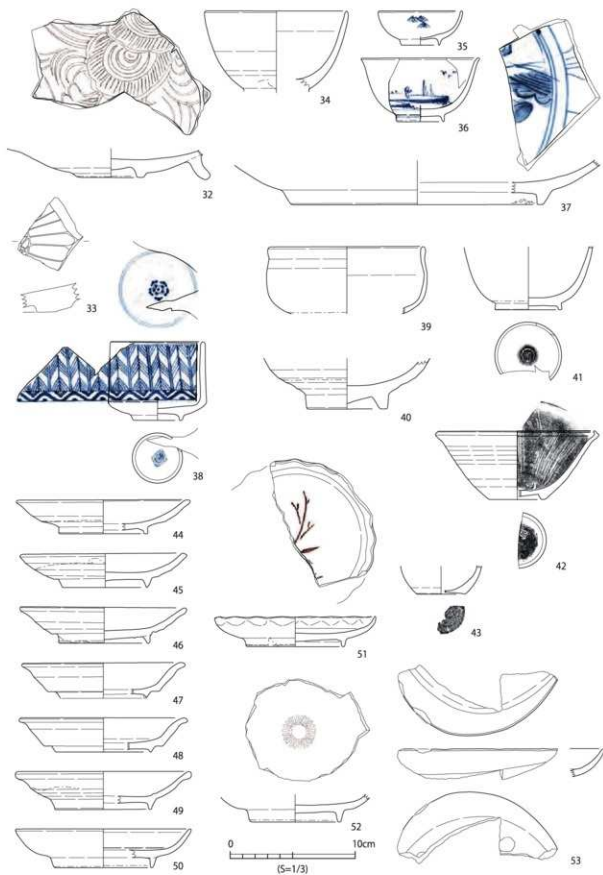


图 27 466SE 出土陶磁器 1 (S=1/3)



图 28 466SE 出土陶磁器 2 (S=1/3)

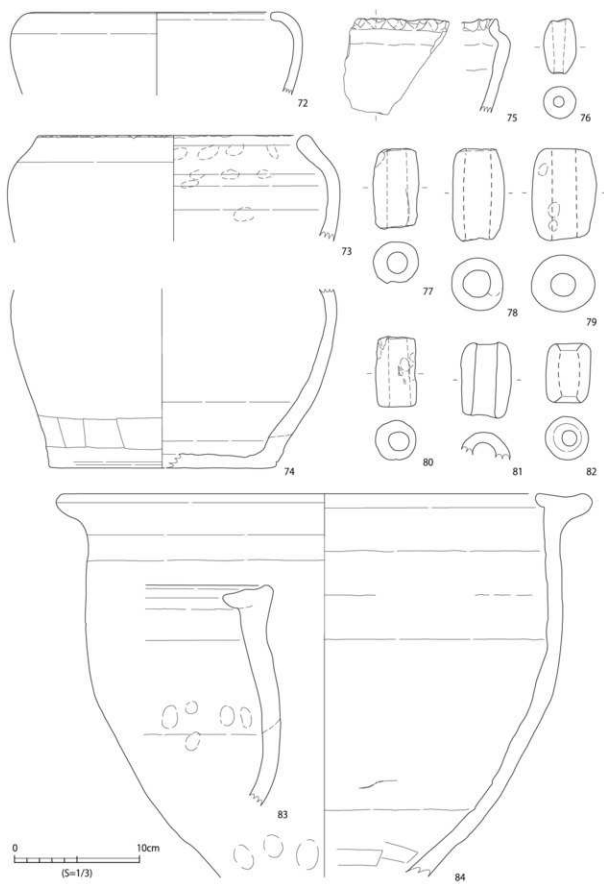


圖 29 466SE 出土陶磁器 3 (S=1/3)

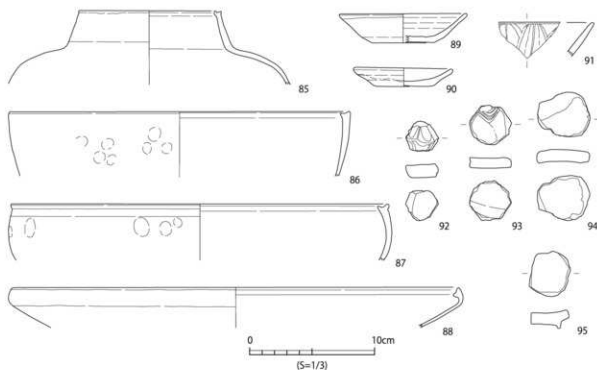


図30 466SE 出土陶磁器4 (S=1/3)

の土瓶(434)、深掛急須?と蓋(441.442)、土器二重燵炉(453)など喫茶(煎茶)と関連すると思われる器種が特に多く含まれている。

瀬戸・美濃産陶器類の年代観により、19世紀前葉の時期の資料と思われる。

413SK (460～477)

近代陶磁器は主に上層覆土に含まれる。近代陶磁器類は下層の焼土や焼けた砂岩などに混じり大量の瓦類(棧瓦、飾瓦)とともに出土した。染付、クロム青磁釉があり、施文方法は手描のほか摺繪がみられる。行平蓋(475)は黄褐色釉が施され、焼成は軟質、裏面に刻印が認められる。19世紀後期～20世紀初頭の資料と思われる。

北西部その他土坑(478～503)・包含層出土資料(504～529)

以下は特殊なもの、土器製品などを中心に記述する。380SK(478～481)は492SKに重複する土坑である。灰軸蓋物(478)、灰軸蓋(479)など18世紀後葉の資料と思われる。153SK(485.486)は併せ口の状態で出土した土師器皿2枚である。他にみられないタイプであり、白色でロクロ成形、硬質の焼成であり、1点には外面に墨書が施されている。腹衣埋納の容器かと推測される。焼塩壺では身C類(488)、身D類(526)、蓋B類(525)などがある。521は瓦質の火消し壺底部である。瓦質の製品は少ない。玩具ではままごと道具(527.528)のほか、鉄軸(柵軸)の施された陶製人形猿(529)などがある。

110SK (530～585)

屋敷地境界と想定される溝(496SD)の廃絶後に東側から掘削された土坑の資料である。下部は496SD存続期間に重なる土坑(070SK)を壊していると考えられる。瀬戸・美濃産陶器類では18世

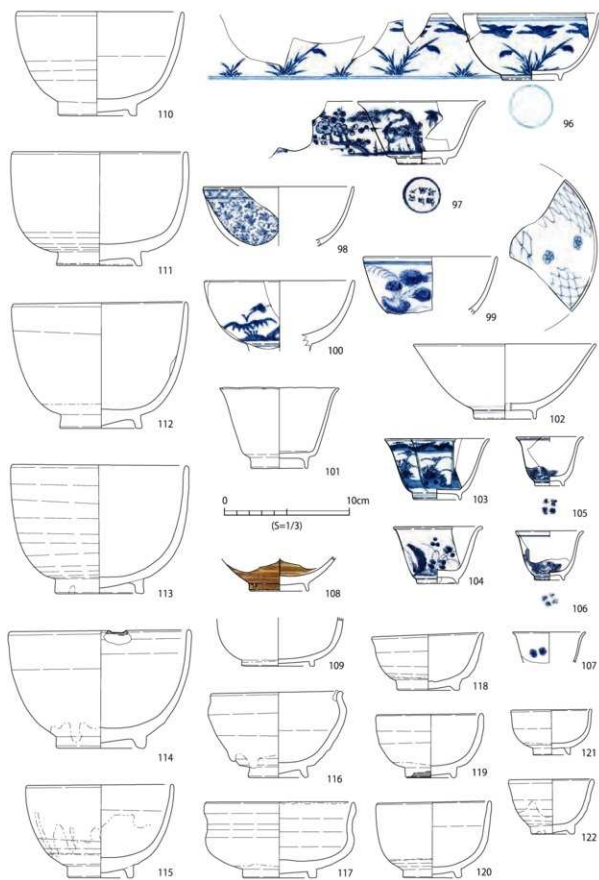


图 31 389SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)

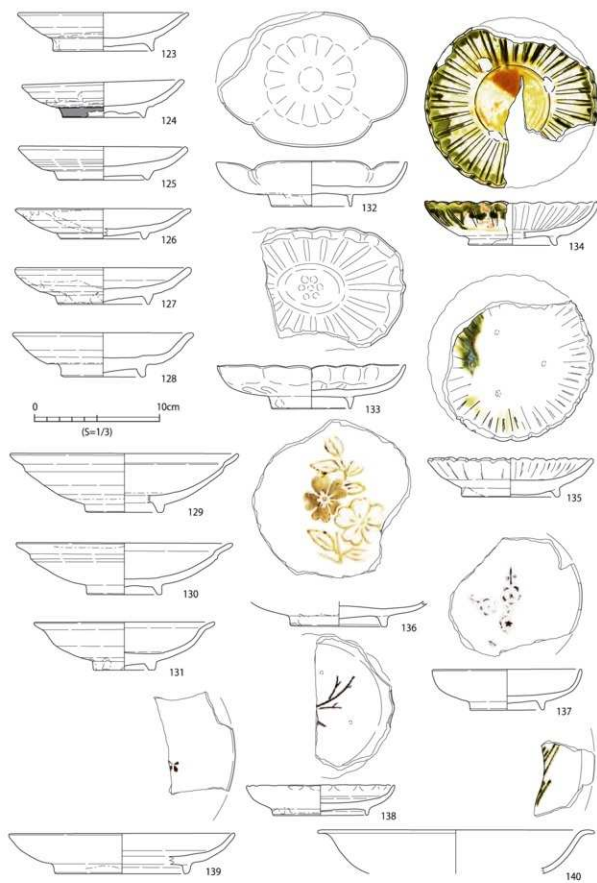


图 32 3895K 出土陶磁器 2 (S=1/3)

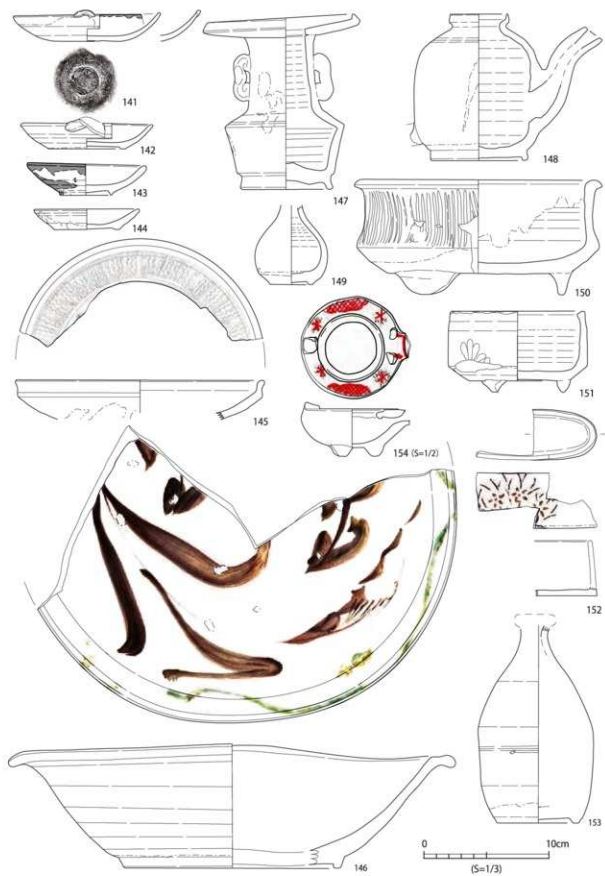


图 33 389SK 出土陶磁器 3 (S=1/3)

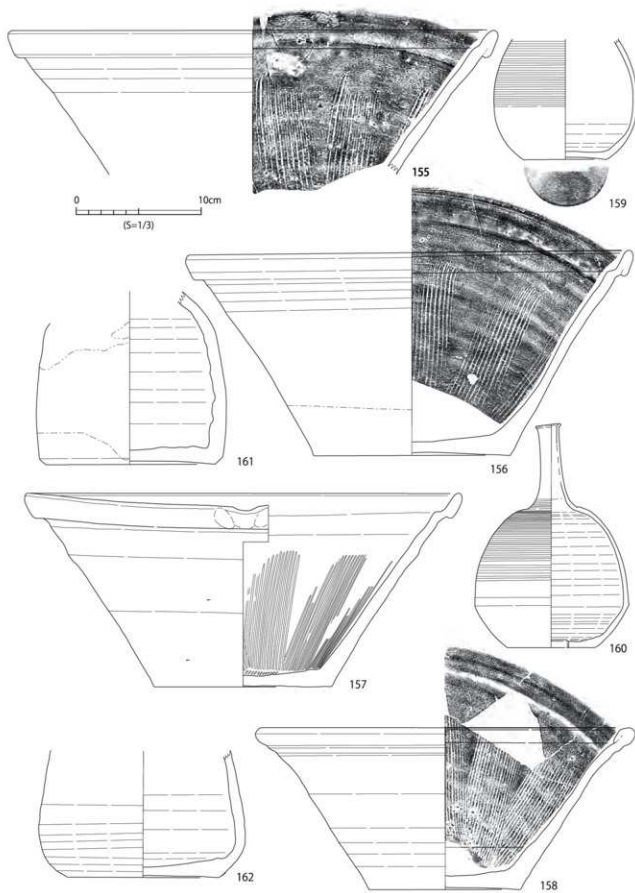


图 34 3895K 出土陶磁器 4 (S=1/3)

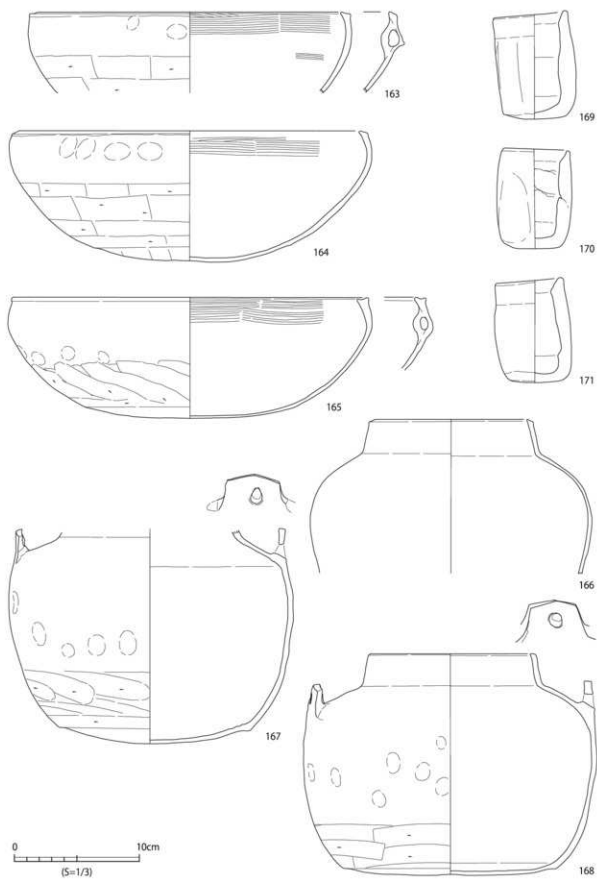


图 35 389SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)

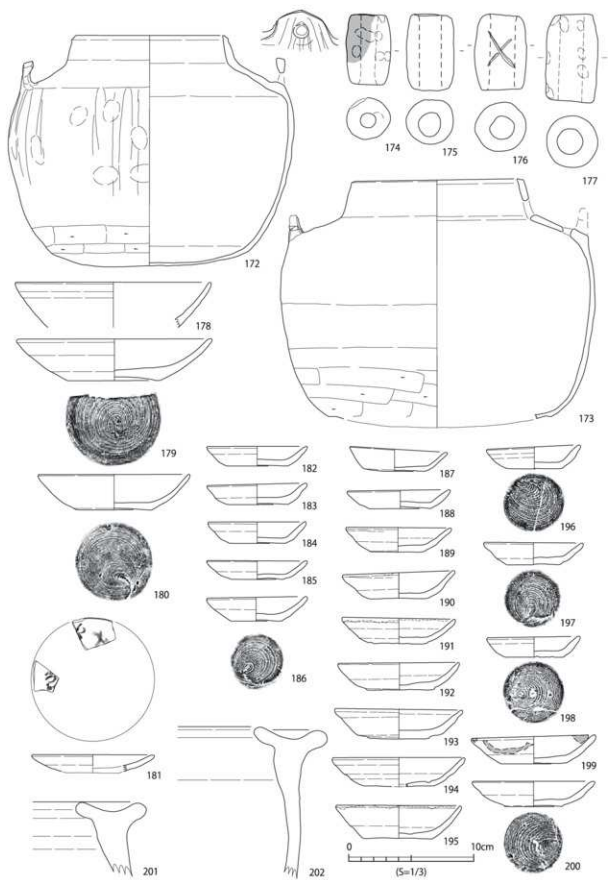


图 36 3895K 出土陶磁器 6 (S=1/3)

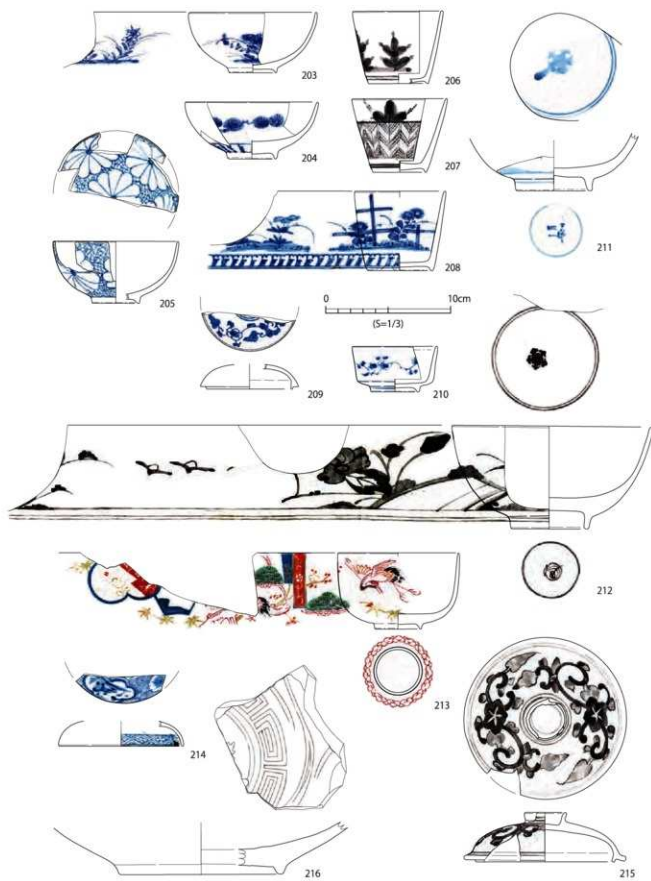


图 37 381SK 出土陶磁器 1 (S=1/3)



图 38 3815K 出土陶磁器 2 (S=1/3)

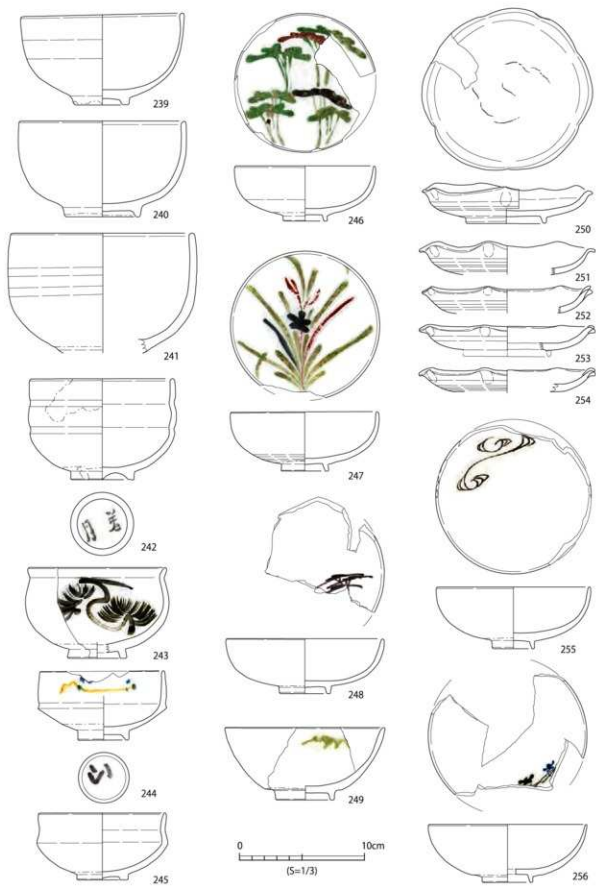


图 39 3815K 出土陶磁器 3 (S=1/3)

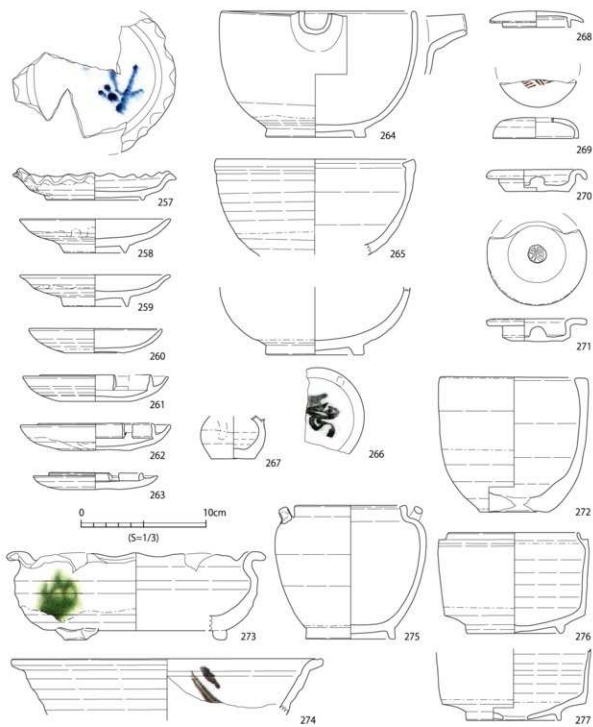


图 40 381SK 出土陶磁器 4 (S=1/3)

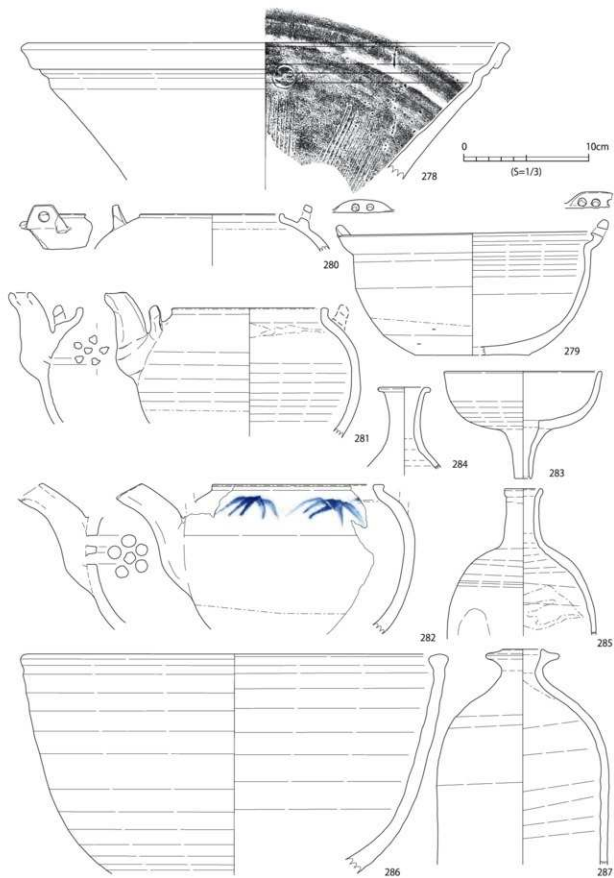


圖 41 381SK 出土陶磁器 5 (S=1/3)

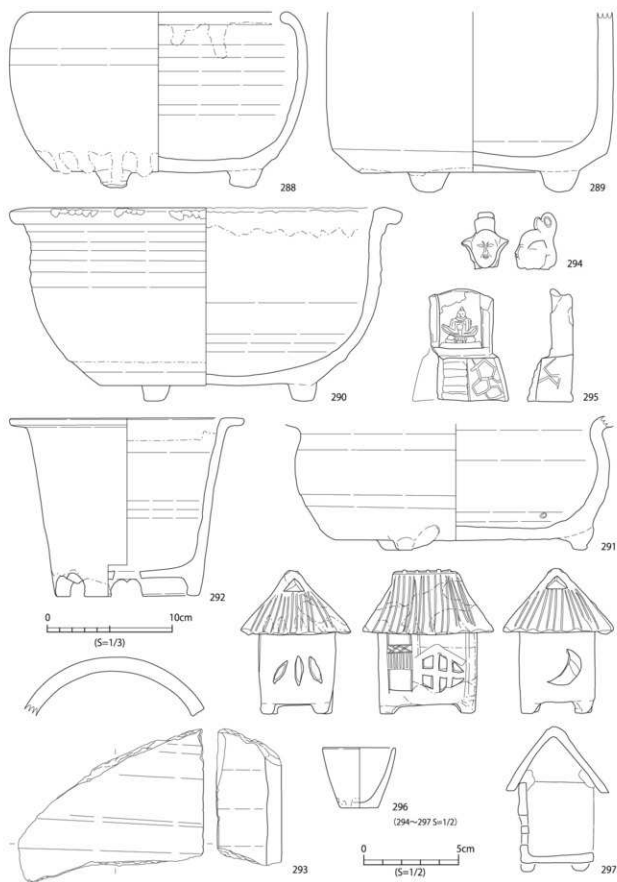


图 42 381SK 出土陶磁器 6 (S=1/3)

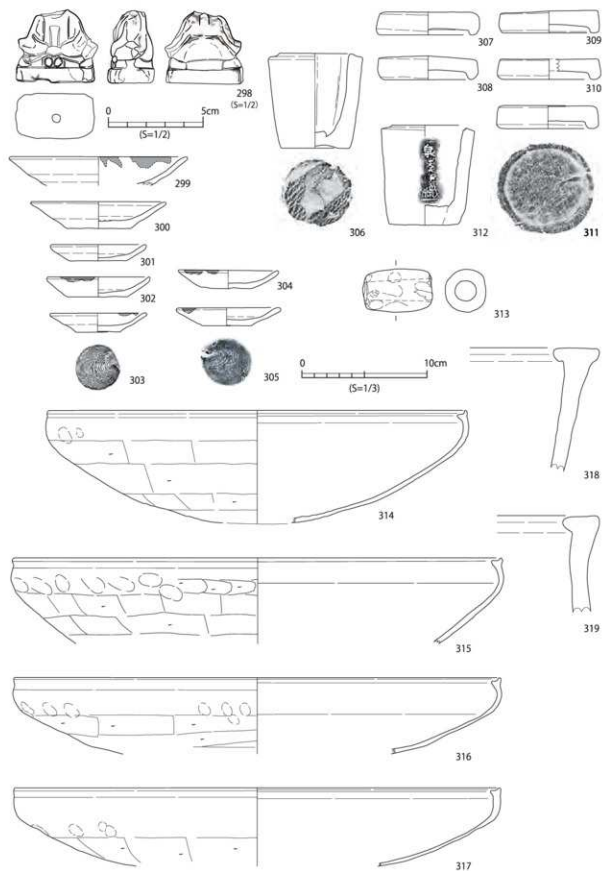


圖 43 381SK 出土陶磁器 7 (S=1/3)



图 44 4925K 出土陶磁器 1 (S=1/3)

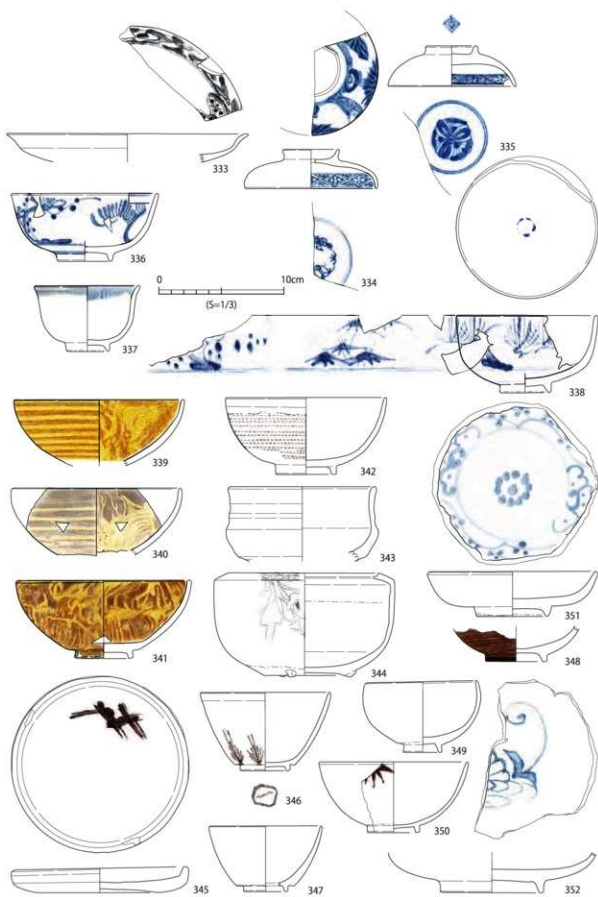


图 45 4925K 出土陶磁器 2 (S=1/3)

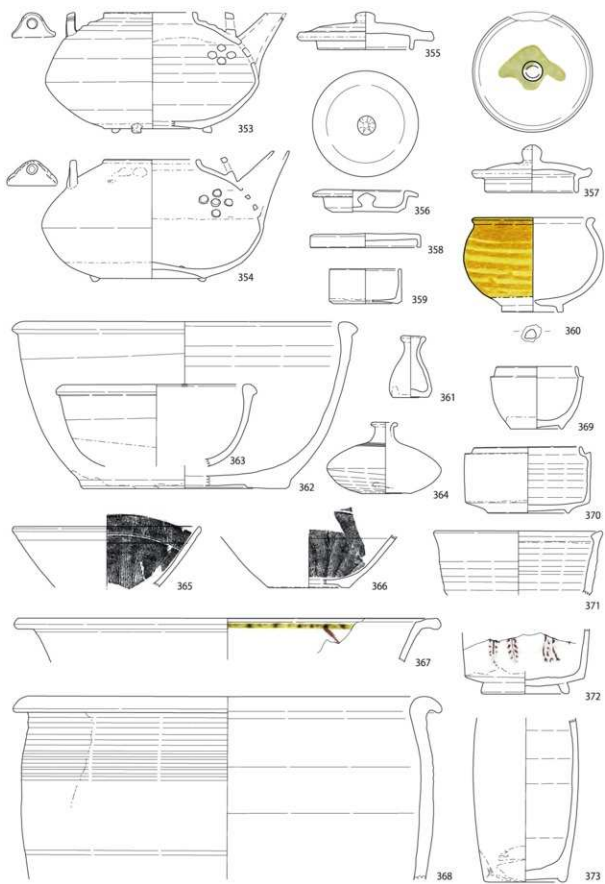


图 46 4925K 出土陶磁器 3 (S=1/3)

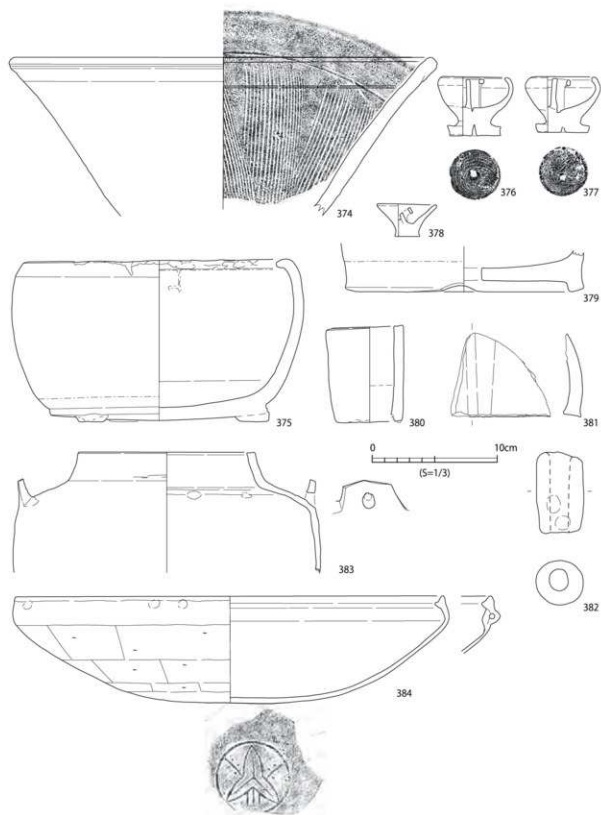


图 47 4925K 出土陶磁器 4 (S=1/3)

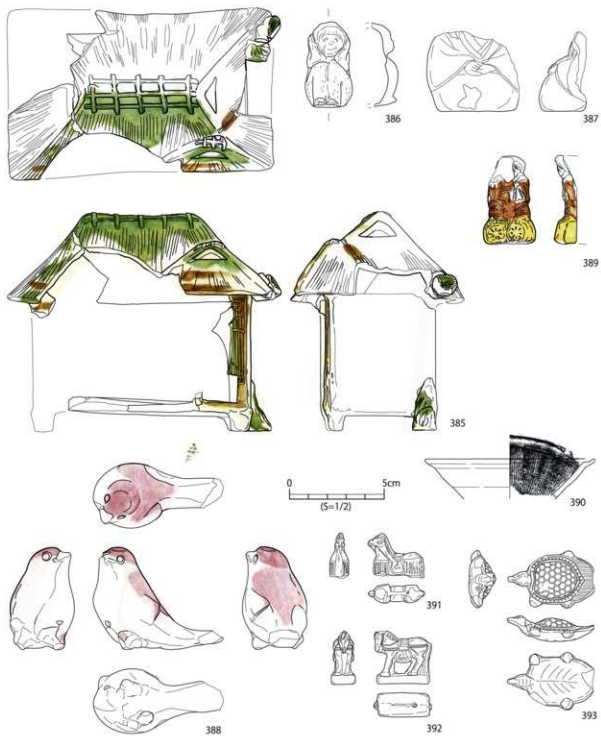


图 48 492SK 出土陶磁器 5 (S=1/2)

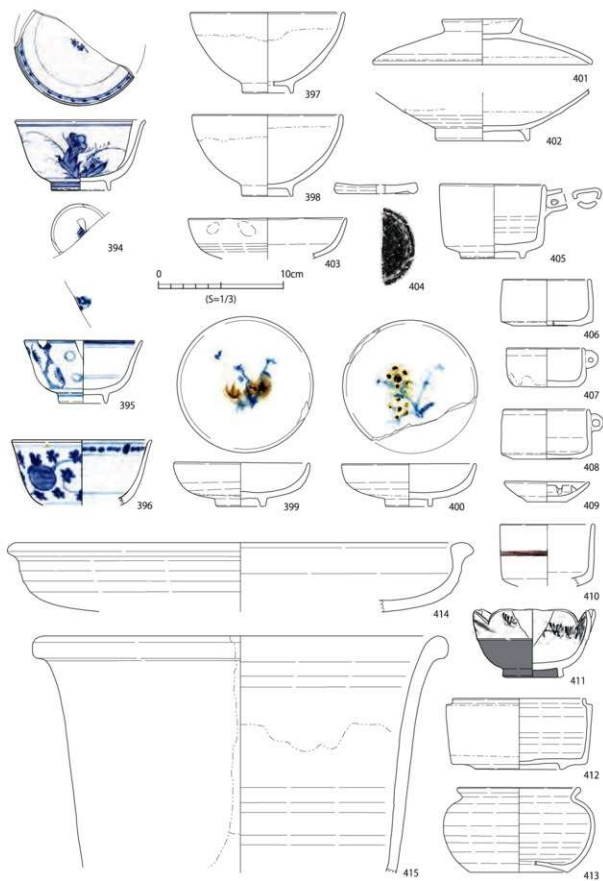


图 49 3875KSK 出土陶磁器 1 (S=1/3)

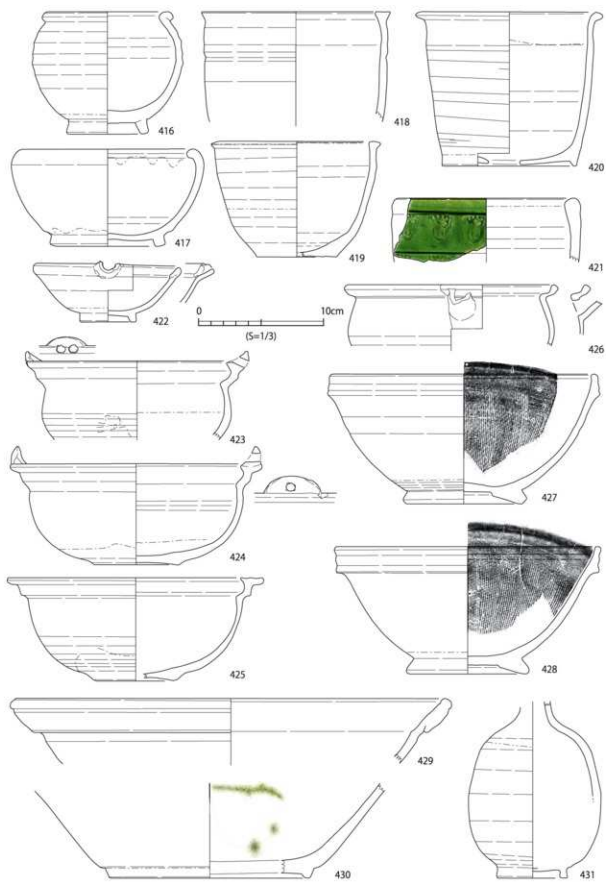


圖 50 387SKSK 出土陶磁器 2 (5=1/3)

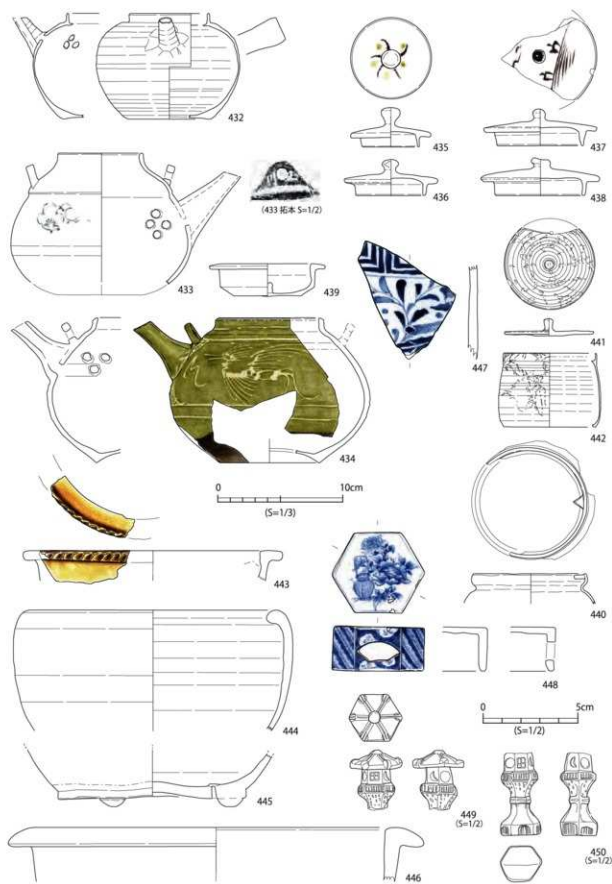


图 51 3875KSK 出土陶磁器 3 (S=1/3)

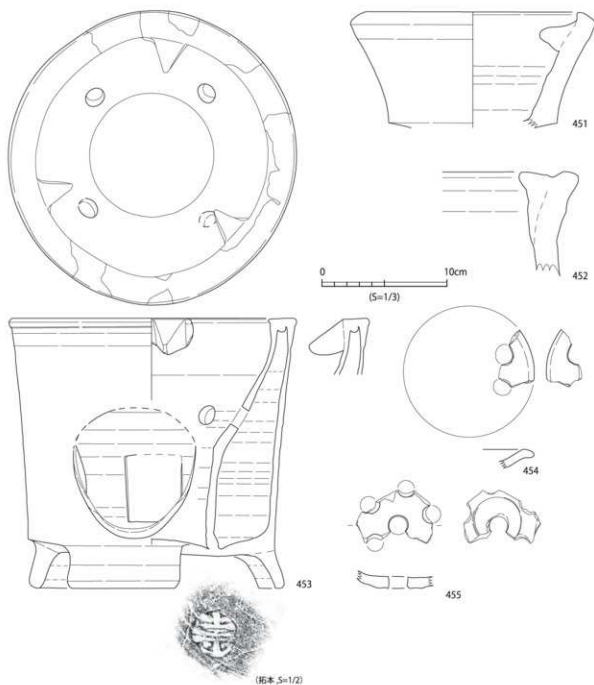


図 52 387SKSK 出土陶磁器 4 (S=1/3)

紀後葉～19世紀初頭の時期が主体であり、灰釉碗(538,539)など17世紀末～18世紀前葉の資料が混入していると考えられる。

京・信楽系では柳茶碗(541)、小杉碗(542)上絵付筒形湯呑(535)などがある。焼塩壺は「泉湊伊織」刻印のある身C類(567,569)身D類(568)、蓋B類(566)がある。調理具では瓦質鍋(550)のほか、土師質茶釜形鍋(羽無釜)、焙烙(J2類)がある。玩具類(578～585)が比較的まとまって出土しており、土製犬(582,583)、磁器製上絵付鶴(585)などがある。

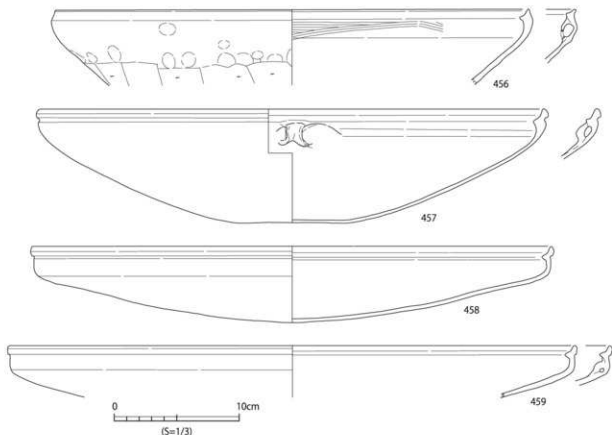


図 53 387SKSK 出土陶磁器 5 (S=1/3)

085SK (586～609)

屋敷地境界と想定される溝(496SD)の1.2m西側に位置する土坑の資料である。17世紀後葉の時期を主体に、19世紀初頭の資料が混入していると考えられる。志野織部向付(598)1点がある。

北東部その他土坑(610～647)・南部の遺構(701～718)・包含層出土資料(648～700)

以下は特殊なもの、土器製品などを中心に記述する。焼塩壺(618.686)は身A類であり内面の変色が顕著に認められる。687は身C類で「泉湊伊織」刻印があり、内面全体に黒色の付着物がある。717は身B類で、「伊織」の刻印がある。土師皿のうち619,620,622,629などは調整・胎土・色調などが異なり、中世に遡る可能性がある。織部向付(632)は把手、三足が付く。出土遺構は085SKに比較的近い。639は磁器染付の大型の鉢のような形状で、内外面に同様の文様が施されている(写真図版 遺物3)。瓦質風がまたは火鉢(647)は表面を装飾し、側面に半月形削り込みで把手が作り出されている。上絵付碗(653.654)、小瓶(656)は胎土等より判断して瀬戸窯産と思われる。玩具類(691～700)では芥子面(696)や土製猿(698)、陶製猿(699)などがある。702は珉平焼小判型皿、716染付碗はガラス継の痕跡があり、高台内に朱書が残る。鉄軸火鉢(718)は底部に穿孔があり、内面に墨書が認められる。

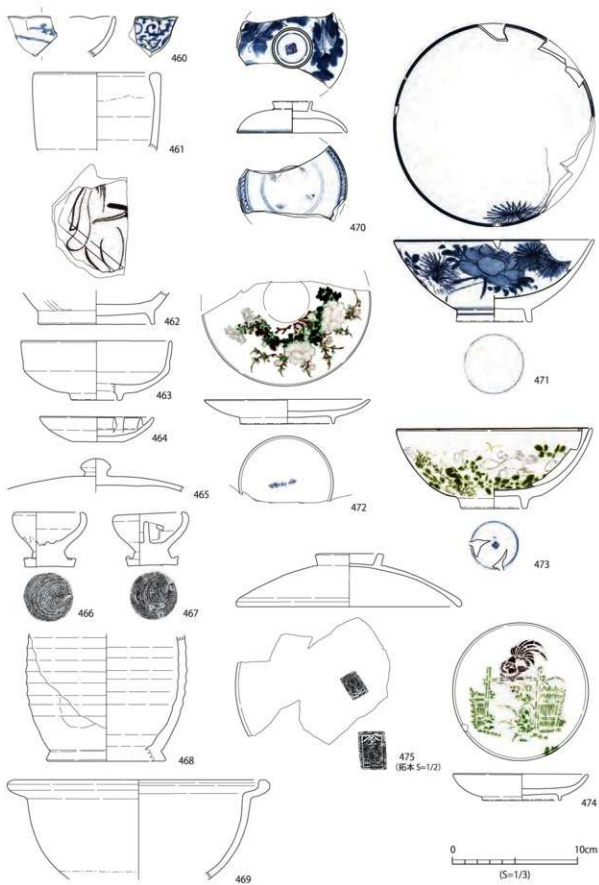


圖 54 413SKSK 出土陶磁器 1 (S=1/3)

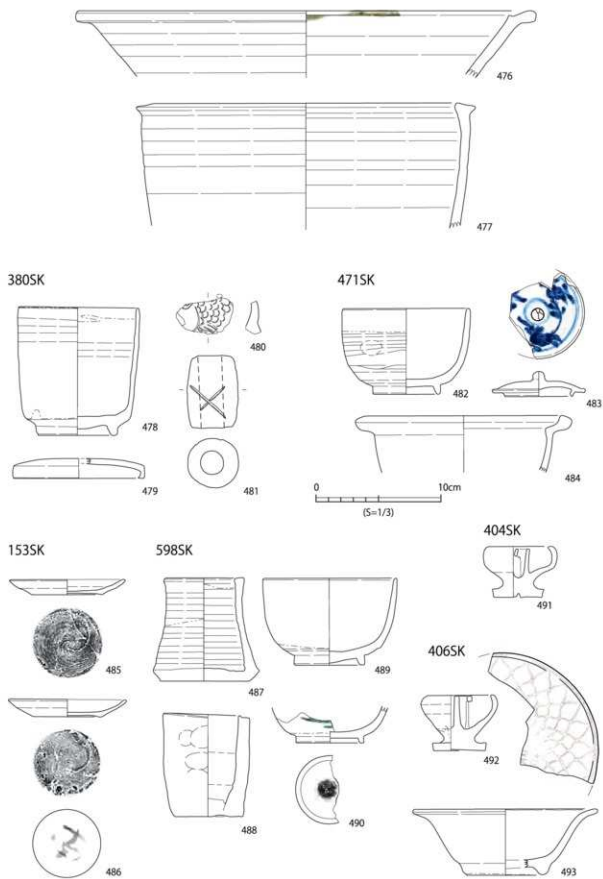


图 55 北西部土坑群出土陶磁器 1 (S=1/3)

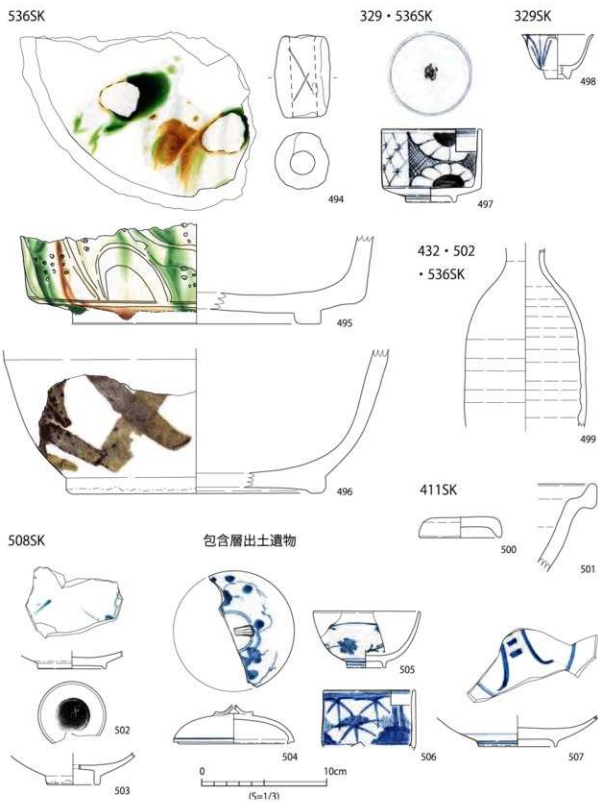


图 56 西北部土坑群出土陶磁器 2 (S=1/3)

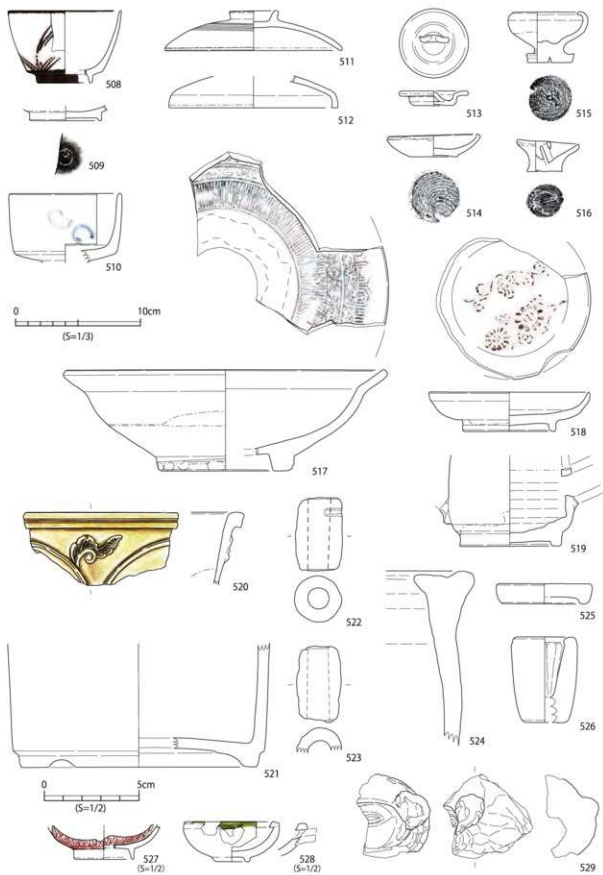


图 57 包含層（西北部土坑群）出土陶磁器（S=1/3）

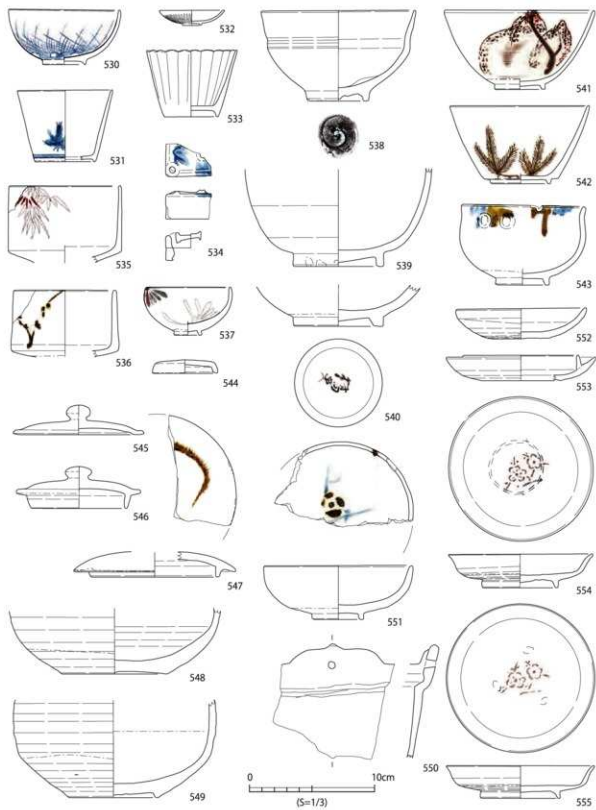


圖 58 110SKSK 出土陶磁器 1 (S=1/3)

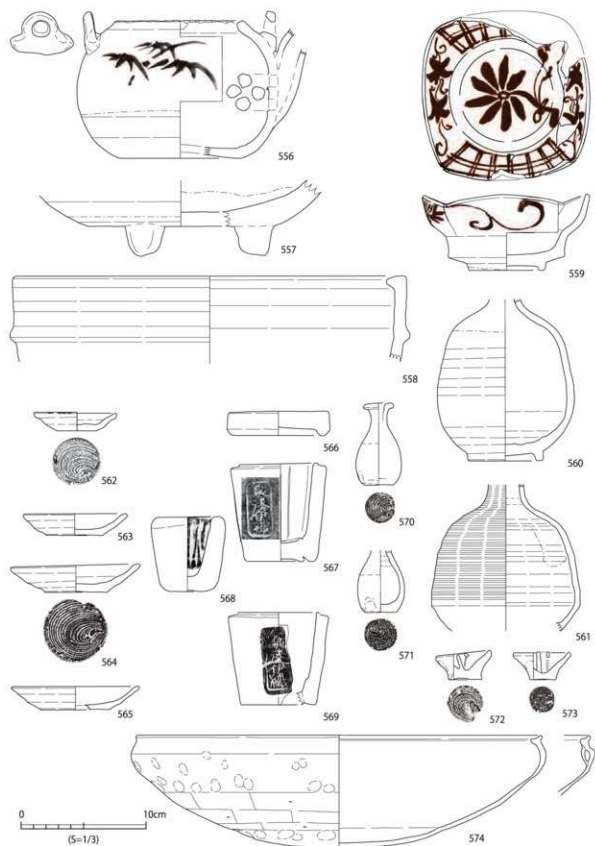


图 59 110SKSK 出土陶磁器 2 (S=1/3)

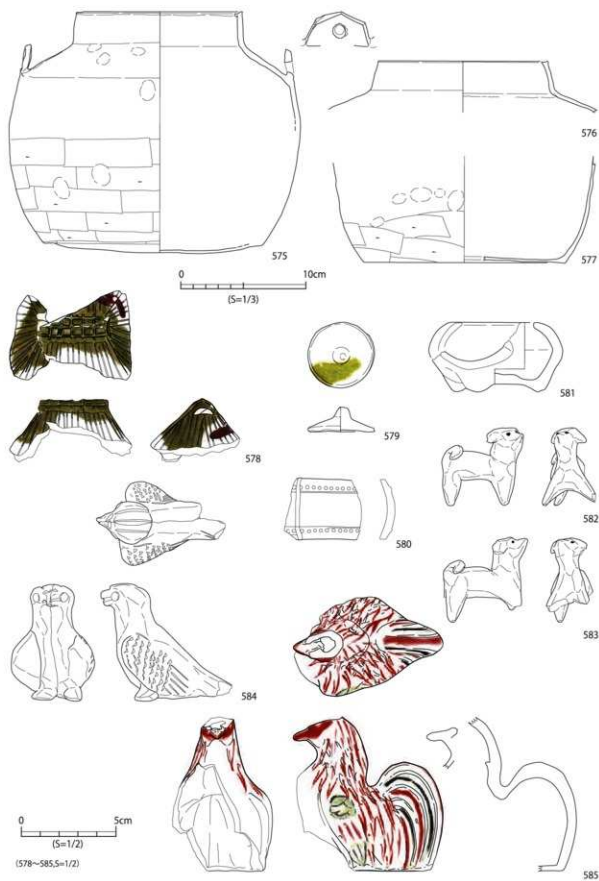


图 60 110SKSK 出土陶磁器 3 (S=1/3)

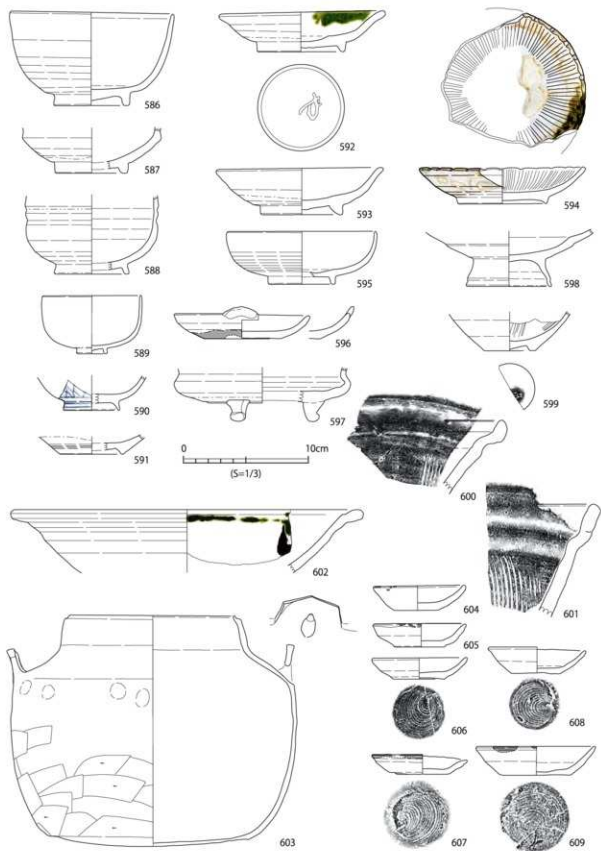


图 61 085SKSK 出土陶磁器 (S=1/3)

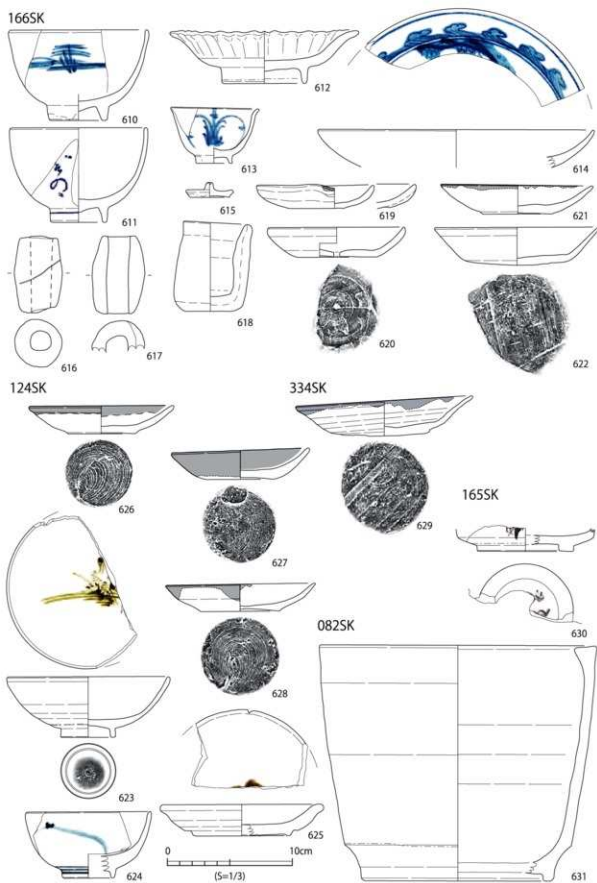


图 62 北東部土坑群出土陶磁器 1 (S=1/3)

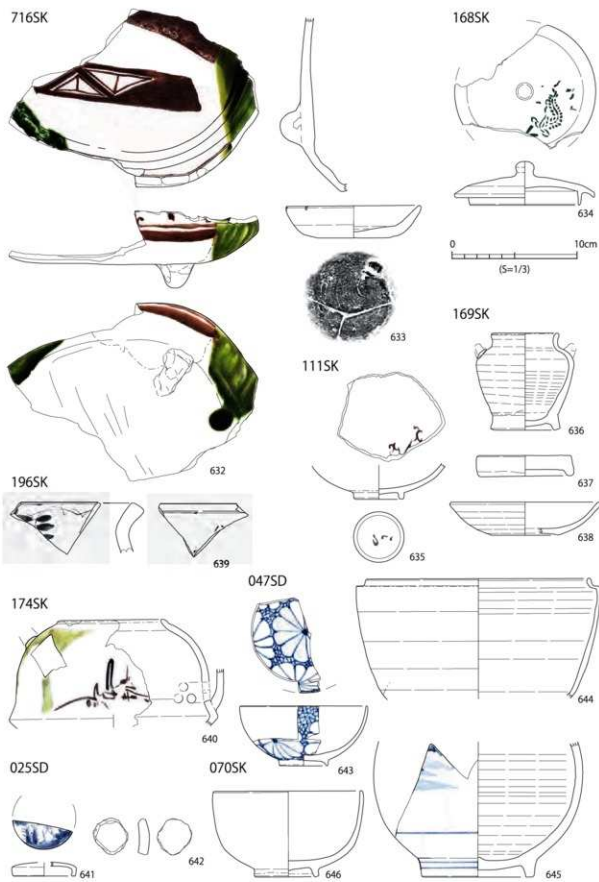
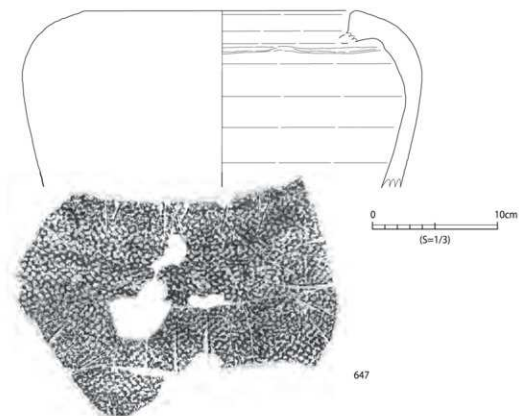


图 63 北東部土坑群出土陶磁器 2 (S=1/3)

158SK



包含層出土遺物

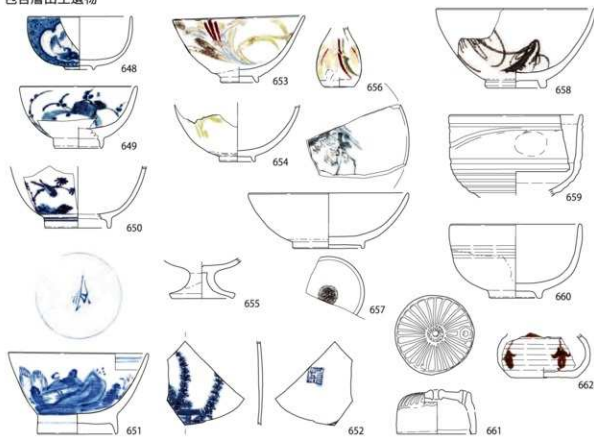


圖 64 包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 1 (S=1/3)

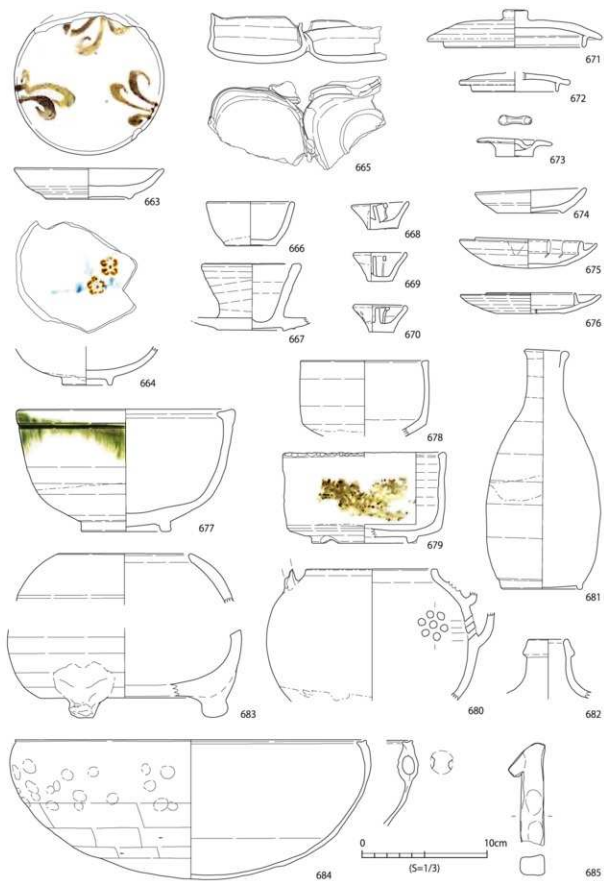


图 65 包含层（北东部土坑群）出土陶磁器 2 (S=1/3)

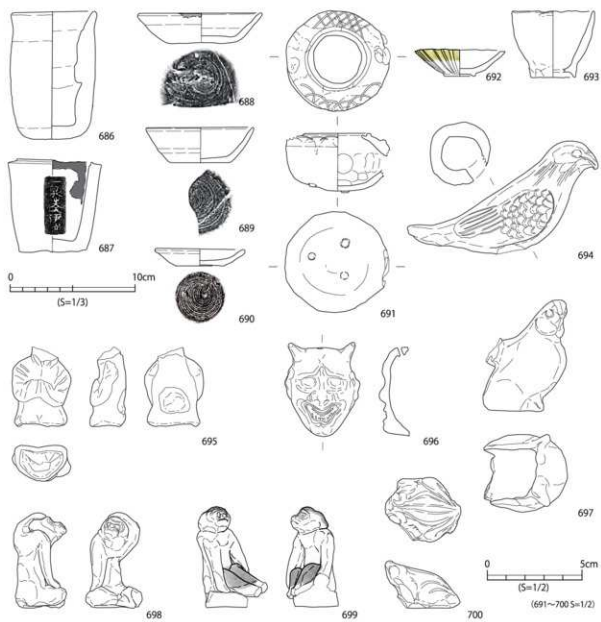


图 66 包含層（北東部土坑群）出土陶磁器 3 (S=1/3,1/2)

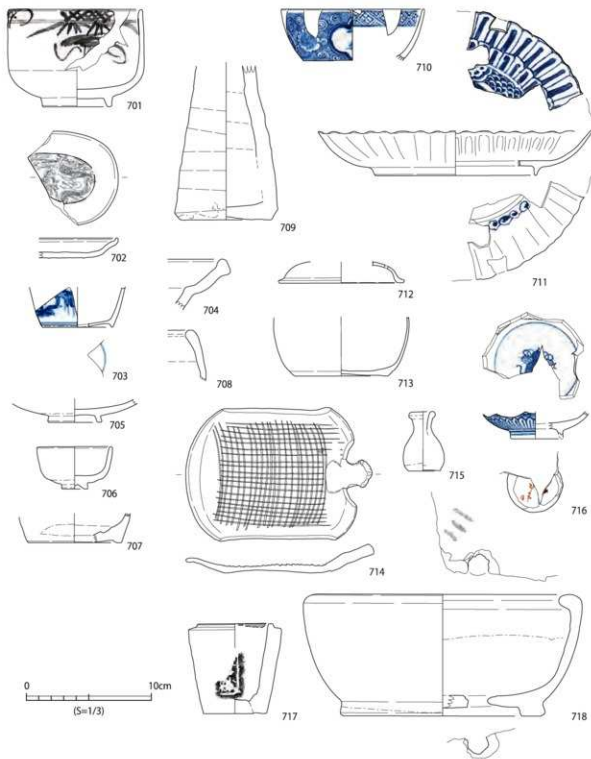


図 67 その他の地点の出土陶磁器 (S=1/3)

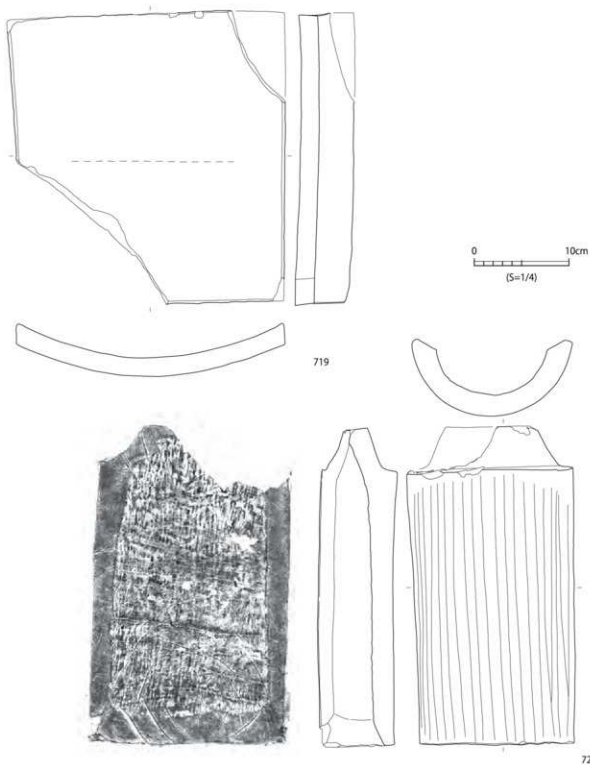


图 68 3895K 出土平瓦·丸瓦 (S=1/4)

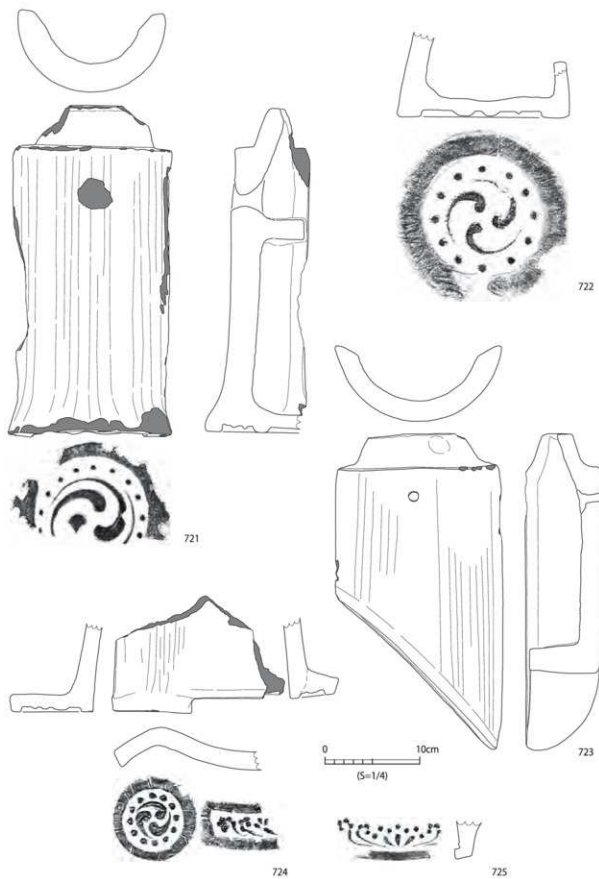


图 69 389SK 出土轩丸瓦·丸瓦·轩棧瓦 (5=1/4)

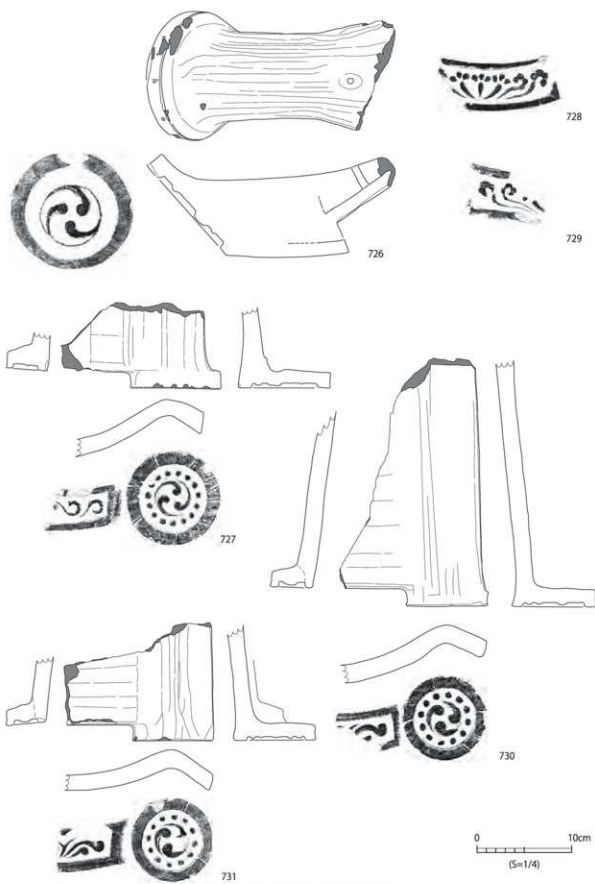


图 70 381SK 出土軒棧瓦 (S=1/4)

380SK



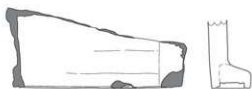
492SK



732



733



734

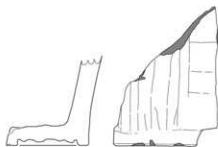
413SK



736



737



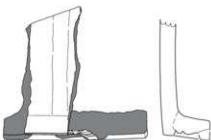
735



738



739



740

0 10cm

(S=1/4)

图 71 軒椽瓦 (S=1/4)

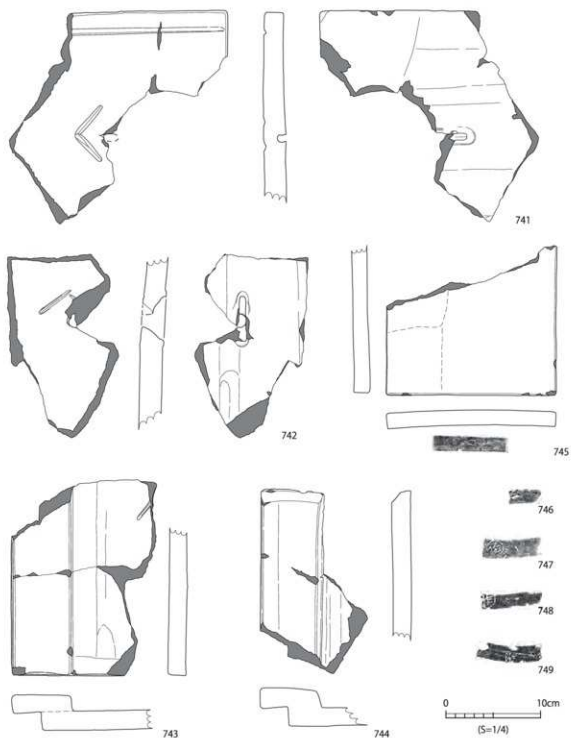


图 72 飾り瓦・刻印 (S=1/4)

瓦類 (719～749)

調査において種し瓦については、瓦当をもつもの、遺存状況の良好なものを選択・採取した。本瓦葺瓦類は少量である。また、今回の調査地点で近世段階の瓦溜りは検出されていない。

389SKは本瓦葺平瓦(719)、丸瓦(720,723)、軒丸瓦(721,722)、軒椀瓦(724,725)がある。381SKは隅巴(726)、未掲載資料に丸瓦が存在する。727～731は軒椀瓦である。唐草文から3タイプに分けられる。492SKは軒椀瓦(733～735)がある。413SKは椀瓦類が集中して廃棄されていた土坑であるが、瓦当部分は僅かであり、ほとんどが反りのない平坦な瓦類(741～749)である。軒椀瓦(736～740)は唐草文から2タイプに分けられ、それぞれ「伊」○に「作」の刻印が認められる。板状の瓦類は貫通する釘穴をもち(741～743)、側辺に沿って長方形板状粘土を接合した(743,744)形状である。表面の調整に粗密の差異がある。飾り瓦。また、小口の残る小片には、○に「一」(745,746)、○に「作」(747～749)の刻印が認められる。

椀瓦文様は、丸瓦部分は12あるいは15珠文と左巻三巴文、平瓦部分は三子葉文を中心に二反転唐草文を基本とする。413SK資料は唐草文が簡略化され、子葉文的な表現となっている。

<近代以降> (750～838)

明治期から昭和20年の終戦前後の時期の資料があり、名古屋・瀬戸・美濃地域で生産されたものが多くを占める。なお、遺構面は広範に擾乱を受けており、必ずしも一括性が高いとはいえないものの、図版では遺構単位のまとまりを優先して配置している。また、掲載資料は遺存状況の良い個体を優先しているため、必ずしも器種のバランスを反映したものでない。

磁器製品の施文技法では手描、摺絵併用、銅版転写、上絵などがみられる。手描、摺絵・手描併用が主となる時期、摺絵・銅版転写が盛行する時期、いわゆる「軍用食器」が主体となる時期に大別すると、それぞれ19世紀後期、19世紀後期から20世紀前期、20世紀前期から中期に属すると考えられる。

陸軍関連の陶磁器

無地あるいは数条の緑色圏線がめぐる簡単な装飾の磁器、および硬質陶器で、陸軍徽章、部隊名など所属や製造会社を示す社名や記号がプリントされている。仙台城二の丸遺跡報告(註1)の分類名を参考にすると、硬質陶器では碗、皿、把手付碗、大型碗、鉢、皿があり、名古屋城三の丸遺跡では、蓋付の井の形の鉢も一定量認められる。磁器では碗、大型碗、湯呑などがある。整った規格の注文生産品であり、無地のものは少なく、陸軍徽章(星印)のほか星形の枠内に「工三」(工兵第三大隊)、方形枠に「東焼」(761)などいづれかを青色で銅版転写している。緑二重圏線がある資料は「砲三ノ六」(776、砲兵第三聯隊第六小隊?)、同「砲三ノ二」(786)などは「RC NORITAKE」(ノリタケ製)とクロム軸スタンプで焼き付けられたもののほか、高台内「日陶製」(785、日本陶器製)などがある。硬質陶器では高台内に角に「硬陶」(826,827、日本硬質陶器株式会社)と銅版転写されたものがみられる。磁器湯呑は無地上絵で文字「酒保」、「工三」、「工三下集」(795)、「将集」(778)と記された痕跡が残る。塗料は完全に剥落しており(註2)、当時の色彩は不明である。工兵第三大隊は明治21年(1888)に創設されてより大正14年(1925)浜松移転まで三の丸に駐屯している。出土した「工三」銘食器類はこの間に使用され、移転時に廃棄された可能性が想定される。したがって、これらは硬質陶器が生産された日露戦争以降から大正14年頃の資料と思われる。

戦時統制品

昭和41年より施行された、いわゆる統制番号が付された一群がある。端反形の湯呑「岐724」、徳利「岐765」、丼「瀬」の一部などがある。

陶製の羽付釜(791)は、本体を型作りし、底部に三足となる突起と口縁下2箇所把手状の突起が付く。内面には薄く透明釉が残る。内面にも使用の痕跡があり胴部下半にススが附着する。胎土は常滑の赤物に似て白色砂粒を多く含む。戦時中に金属製品の代用品とされた形態と似ている。88は陶製の竈と思われる。全面に厚く鉄釉(柿釉)が施された円筒状をなし、一箇所が切れ、上部内側3箇所に円錐状の突起が付く。突起の周囲には径約1cm程度の空気孔が空けられている。使用痕は特にみられない。

(武部真木)

【註】

(註1) 須藤隆ほか、1999、「仙台城二の丸遺跡第12地点(NM12)の調査」東北大学埋蔵文化財調査年報11

(註2) 実見した高崎城出土資料では青色塗料が残存していた。

【参考文献】

瀬戸市歴史民俗資料館、1993、「明治時代の瀬戸窯業」

瀬戸市歴史民俗資料館、1994、「戦争とやきもの」

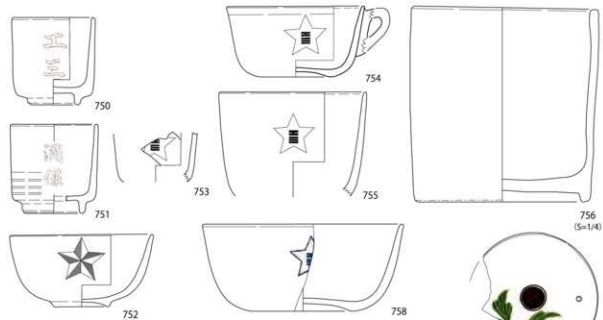
瀬戸市歴史民俗資料館、2001、「〈代用品〉としてのやきもの」

瀬戸市歴史民俗資料館、2002、「大正二年のやきもの屋」

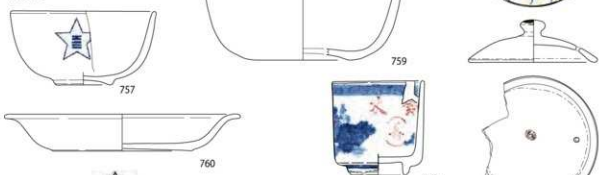
(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター、2007、「窯跡出土の“近代陶磁”－瀬戸・美濃窯の近代1－」

松原隆治、1988、「勝川遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第3集

088SD



048SD



089SD

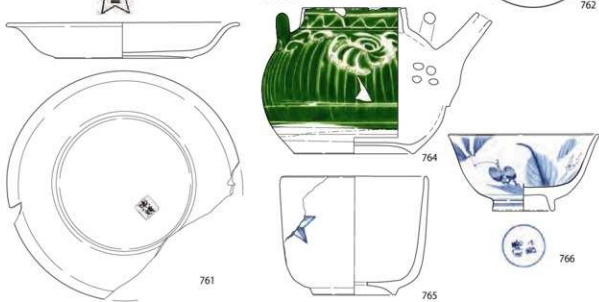


图 73 近代 出土陶磁器 1 (S=1/3)



图 74 近代 出土陶磁器 2 (S=1/3)

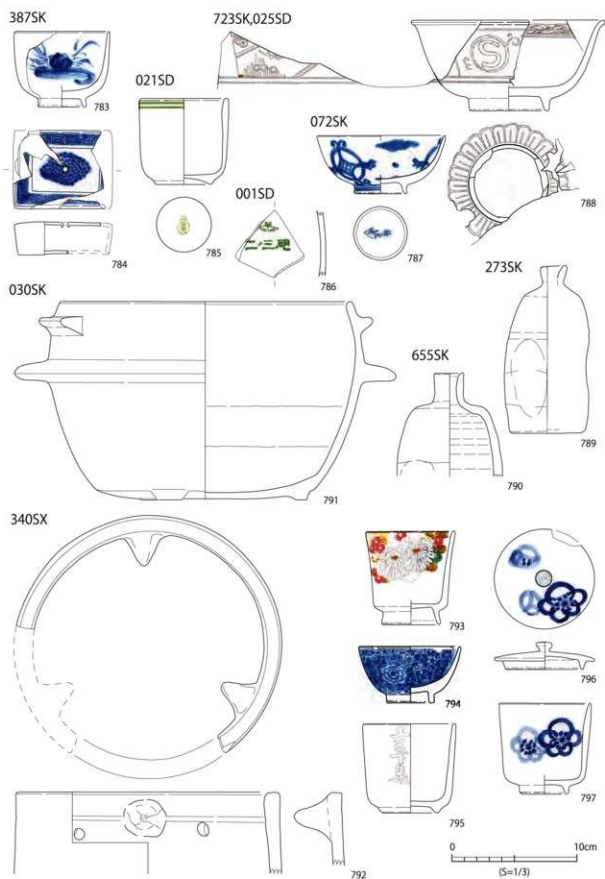


圖 75 近代 出土陶磁器 3 (S=1/3)

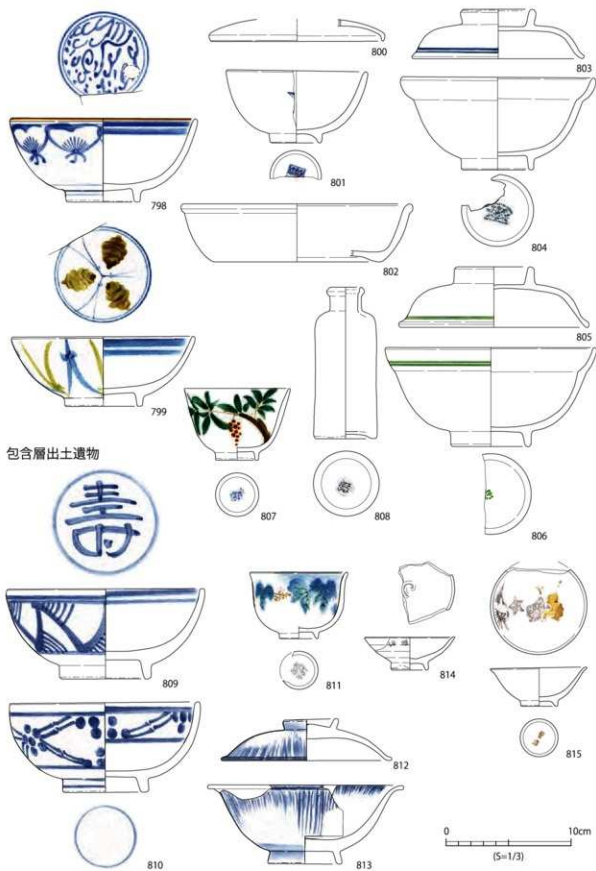


图 76 近代 出土陶磁器 4 (S=1/3)



图 77 近代 出土陶磁器 5 (S=1/3)

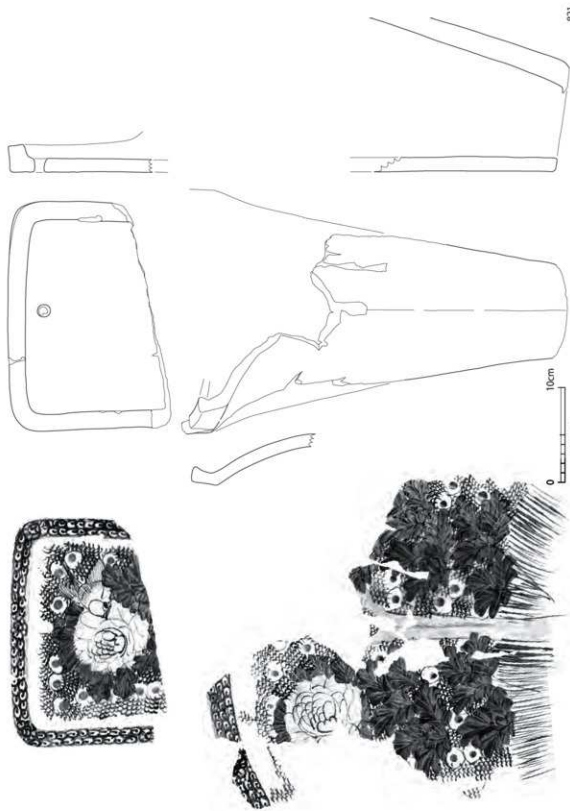


图 78 近代 出土陶磁器 6 (S=1/4)



图 79 近代 出土陶磁器 7 (S=1/3)

3 ガラス製品・その他

<ガラス製品>

今回の調査ではガラス製品が多数出土している。このうち破損が著しい大型瓶などは諸事情のため採取していないが、現在器種などある程度確認できる資料は全部で105点存在する。ここでは、おおむね標準での分類(板井2006)に従って、遺構単位で資料を紹介し出土傾向を若干考察したい。

1) 0465D 出土遺物(図81-1~15) 1は小型瓶で一般用薬瓶、2,3は胴部横断面形が方形状で、胴部中央の3面に沈線が巡るインク瓶と推測される。2,3は口部中位から下部までは対角線上の位置に型成形の合わせ目が存在する。4,5,6は首部が中心から偏る扁平なインク瓶で、内面に青色系インクが残存する。4にはコルク栓が共存し、口部上端まで型成形の合わせ目が存在する。5は体部と首部を接着した接合部を工具で大きく挟んで造られたものである。6は桜花紋に「SK」の文字をデザインした陽刻が存在する。インク瓶は図示したもの以外に7点が存在する。7は横断面形が方形のインク瓶、9は東京高田の「ヨヂュムエキ」瓶であり、沙留I遺跡で類似例がある(一般用薬瓶)。10は目盛り線のある医療用薬瓶で、背面の体部器壁中に白色の磁器片?が混入している。11,12は桃谷順天館のきび薬「美顔水」の瓶である。13,14は薬品瓶と思われ、13の内面には白濁した付着物が認められる。14は底部に星印にY字の陽刻がある。15は手鏡用の板ガラスと思われる。

2) 3405X 出土遺物(図81-16~25) 16は口縁部が特徴的な東京尾澤製のたむし薬「全治水」の瓶である。体部下端から口部上端まで型成形の合わせ目が存在し、口の成形は雑である。17~19はやや青みがかる透明なスクリュウ栓の瓶で、陽刻は存在しないがインク瓶と思われる。18は口部と体部の型成形の合わせ目がずれている。インク瓶は図示したもの以外に4点が存在する。20は目盛り線のある医療用薬瓶で、内部にコルク栓が落ちている。21は薬品瓶用と思われるガラス栓で、瓶口に嵌る部分は磨りガラス状に白濁している。22,23はインク瓶で、22は胴部有段で断面が円形となるもの、23は立方体の体部に斜めに円柱状口部が付くものである。24は彌生商會の「ハナソース」瓶、25は銘柄や用途が不明であるが、調味料瓶と思われる。

3) 0895D 出土遺物(図81-26~29) 26は底部外面に「J.M.&C」の陽刻があり、内部に黄褐色沈殿物が残存していた。27は横断面形が長方形となるもので、1面にのみラベル貼付用の枠が存在する。栓が嵌り込んで外せない状態である。28は円形の鏡用板ガラスと思われる。29は「MARUSHIRO SHIYOKAI」と陽刻されたインク瓶で図示したもの以外に2点存在する。この他に図示したもの以外には、美顔水の瓶や薬瓶やアンプルが各々1点存在する。

4) 3425D 出土遺物(図81-30~31) 30は「SANTANEY」と陽刻された化粧クリーム瓶と思われる。化粧クリーム瓶と思われるものは、この他に1点認められる。31は凸レンズである。

5) その他の遺構出土遺物(図82-32~44) 34は「COMBI」の陽刻を持つ瓶で化粧水瓶と想定される。36は底部に「M」、体部に「実用新案」と「No3218」の陽刻を持つ首部が中心から偏る扁平な丸首のインク瓶と思われる。38は横断面形が方形となる薬品瓶と思われ、体部下半部が一旦成形した後に板状工具を宛てがい整形したものと考えられる。40は堀越商會の白色剤「ホーカ液」の

ものである。43は「登録商標『丸にツ』塚本 愛知 名古屋組合 非賣容器」の陽刻を持つ瓶で牛乳瓶と想定する。44は横断面形が楕円形の大型瓶で、桜井分類では調味料瓶の酢瓶に類似する。

6) 遺構外出土遺物(図 82-45～55) 46は「晴光水 小野製」と陽刻された小瓶である。晴光水は目葉のブランドである。47は内部にコルク栓が残る。48は下端部の一部がつぶれ変形している。49は横断面形が長方形の瓶で銀色の金属製スクリーン蓋が冠っている。50は「TELLME 80cc」と陽刻された横断面形が長方形の瓶である。テルミーは昭和5年に創業した大東化学工業所のブランドである。51は首部が中心から偏る扁平なインク瓶で、底面に直線状の凹みがある。53は口縁部に型抜き失敗が認められ、内部に赤色インクが残存しているインク瓶である。54は円筒形スクリーン栓の瓶で、「ふくのり」と記されたアルミ製蓋が共存する。食用の海苔瓶の可能性もあるが、ここでは文具瓶の糊瓶と推定する。55は口縁部に青色付着物が確認された。

7) 小結

桜井準也はガラス瓶について機能を重視して9類に大別し、さらに細分している(桜井2006)。ここではこの分類に依拠し、今回の調査と2002年度に実施した旧国立名古屋病院地点の出土傾向をまとめておきたい。

今回の調査ではガラス瓶は、酒瓶1点、乳製品瓶1点、調味料瓶4点、薬瓶34点、化粧品瓶18点、文具瓶38点という組成となった。なお、この資料はブランド名が不明な小型瓶が多く、上記の組成はこれらを薬瓶に分類して算定したものである。この結果、薬瓶とインク瓶が突出して多いことが分かる。一方、2002旧国立名古屋病院地点では、酒瓶4点、清涼飲料瓶2点、乳製品瓶2点、調味料瓶2点、食品瓶17点、薬瓶14点、化粧品9点、文具瓶2点という組成となった。このうち食品瓶

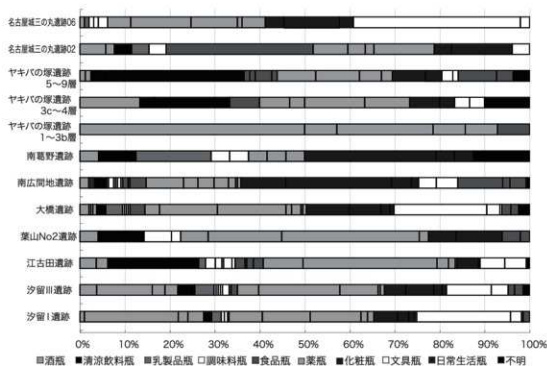
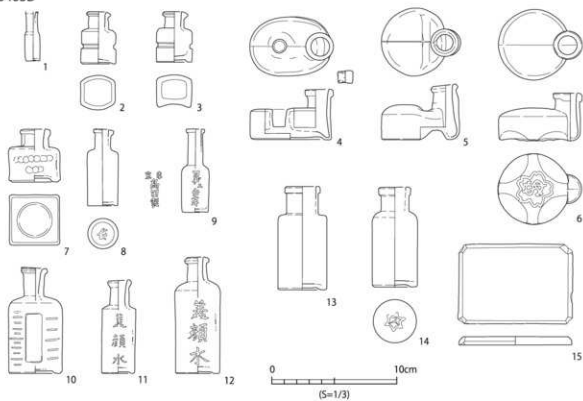


図 80 各遺跡ガラス瓶組成 (桜井2006のデータを元に作成した)

046SD



340SX



089SD

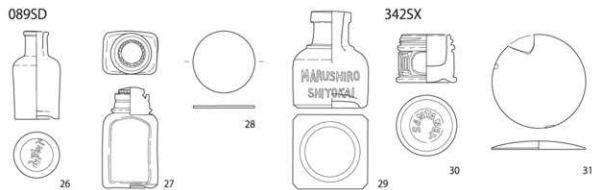


図 81 ガラス製品 1 (S=1/3)

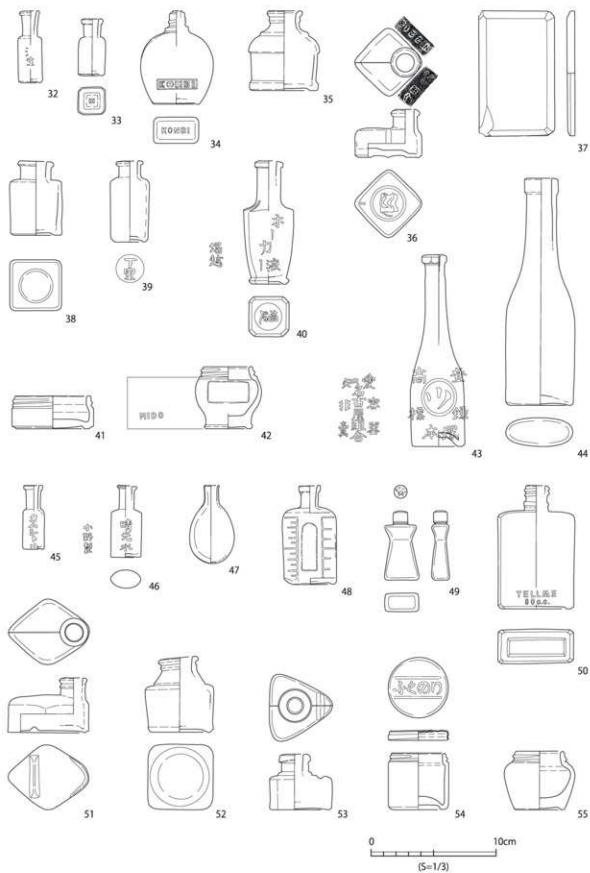


図 82 ガラス製品 2 (S=1/3)

としたものは口縁部が括れたコップ形の小型瓶が大半で、桜井はこれに類似した瓶を食品瓶の項目に掲載していたが、実際の機能は特定が難しいように思われる資料である。終戦直前に陸軍名古屋病院第二分院が建設されたこの地点では、意外と薬瓶の割合は少ないが、試験管等特殊な製品の存在が病院としての特徴を示しているといえよう。

今回の調査区は近代では陸軍第三師団のうち工兵第三大隊・輜重兵第三大隊が配され、倉庫群が置かれた場所と推定される。ここで確認されたガラス瓶は文具瓶が最も多く、薬瓶と化粧瓶がこれに次ぎ、酒瓶や食品瓶がほとんど見られないという特徴がある。こういった組成のあり方は、桜井が分析した結果をみても他に確認できない偏ったものである(図80)。インク瓶が多いという特徴から事務用品の保管場所であった可能性を指摘することもでき、この点からも場の特異性を物語る資料群と評価できるだろう。

(鈴木 正貴)

<その他> (図83—56～63)

その他の材質の出土遺物として、歯ブラシ、ボタンなどがある。遺存状況が悪く、採取されたものは僅かである。動物骨角を利用したと思われるもの、セルロイド製(61.62)がある。骨製歯ブラシ(56～60)の乳白色の表面は滑らかに加工され、光沢がある。柄の先端の孔には環状に針金が通され、孔の周辺には緑色の変色部分が認められる。倉庫に保管されていた物資の一部とも考えられるが、使用・未使用の区分は不明である。

動物骨の細工利用のうち、牛馬骨の利用は近世以降に増加する傾向がみられ、近世では「小道具」「小間物」などと称され、多くが大坂に集められたという。第一次大戦期にセルロイド製品の国内生産が本格化するまで、ブラシ類の柄などの主な材質であった。ただ衰退したとはいえ、1950年代頃まで細工用に牛四肢骨が出荷されていた記録(四日市の場合)もあり、こうした骨の利用は継続していたかもしれない。

(武部 真由)

【参考文献】

- 桜井準也.2006.『ガラス瓶の考古学』六一書房
久保和土.1999.『動物と人間の考古学』真福社
中島久恵.2005.『モノになる動物のからだ—骨・血・臓器の利用史—』批評社

表12 名古屋城三の丸遺跡のガラス製品組成表

大分類	小分類	02年度	06年度
酒瓶	ビール瓶	3	1
	洋酒瓶	1	
	小計	4	1
清涼飲料瓶	ラムネ瓶	2	
	小計	2	
乳製品瓶	牛乳瓶	2	1
	小計	2	1
	ソース瓶	1	
調味料瓶	酢瓶	1	
	その他の調味料瓶	1	
	不明調味料瓶	1	2
	小計	2	4
食品瓶	不明食品瓶	17	
	小計	17	
薬瓶	医療用薬瓶	4	5
	薬品瓶	2	13
	一般用薬瓶		10
	目薬瓶		1
	アンプル	1	5
	試験管	7	
	小計	14	34
化粧瓶	化粧水瓶	2	4
	化粧クリーム瓶	7	12
	不明		3
	小計	9	19
文具瓶	インク瓶	2	36
	小計	2	38
ガラス瓶総計		52	97
		6	
板ガラス	鏡		3
	凸レンズ		1
	板ガラス	3	1
	薬品瓶の枠?		1
その他	電球卓		1
	ロート	2	1
	コップ		
総計		63	105

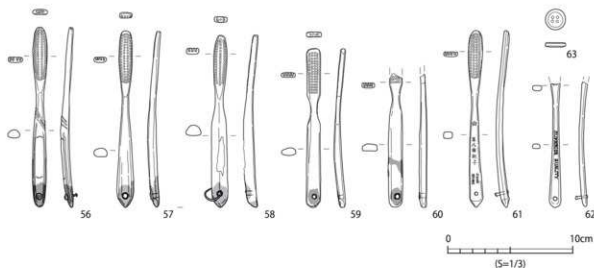


図 83 その他の素材の製品 (S=1/3)

4 金属関連資料

今回の調査において、確認された金属製品は 16 世紀初頭頃から昭和 20 年前後までのものがあり、出土した金属製品は明治時代から昭和 20 年まで調査地を含む名古屋城跡におかれた陸軍第 3 師団に関連する資料と思われるものが大半である。近代以後の新しい掘削や整地から外れた戦国時代の溝・土坑からは、鉄製品 2 点、鍛冶関連資料 1 点と江戸時代の土坑・井戸からは銅製品 13 点（他にキセルと銭 34 点）、鉄製品 59 点、鍛冶関連資料 4 点が出土した。よって今回の調査により出土した江戸時代以前の資料の大半について実測・拓本を行ない、近代以後の資料については陸軍関係と思われる、容器、服飾具、馬具など用途が特定でき、形態的特徴があるものを中心に実測と写真による資料化を行った。

<1 戦国期>

戦国時代 1 期（古瀬戸後期～大窯 2 段階）の 606SD から鉄製鏡 1 点（1）、戦国時代 2 期（大窯 3 階段）603SD から鉄鏡の基部 1 点（2）があり、鏡は幅 1.0cm 程の断面方形、長さ 16.0cm の中型品である。

<2 江戸時代>

金属製品と鍛冶関連資料は 17 世紀～18 世紀初頭の 389SK・466SE、18 世紀中頃の 110SK、18 世紀後半～19 世紀初頭の 381SK・492SK、18 世紀末～19 世紀初頭の 387SK などから出土した。江戸時代を通じてみられる出土遺物は銅製キセル（全部で 26 点）、銅銭（全部で 17 点）、鉄製釘であり、その他には銅製の釘隠し用飾り金具がある。

389SK（3～11）：銅製品 5 点、鉄製品 13 点がある。3 は長さ 9.5cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm の断面やや二等辺三角形の扁平な細板で、腐植物が表面に付着した痕跡が見られる。4 は四葉文？の凹みがある飾り金具で、左右に小さな切り込みがある。5 は口付部が欠損しているがキセルの吸口、6 と 7 はキセルの雁首で首の火皿下部に炭化物が、小口部に木質物が残る。6 の首の脂反し部の幅が 0.75cm、7 は 0.7cm を測る。鉄製品は M8 が不明の板状品であるが、木材の付着痕がある。9～11

は鉄釘で比較的頭部が明瞭にあり、長さ 5cm を超えるものが主体である。江戸時代の釘は頭部が「T」字状、鍔頭に造り出されるもので、断面方形のものである。

4665E (12～15)：鉄製品 5 点あり、全て釘である。長さ 9cm を超える 12・13 と長さ 5.5cm 前後の 14・15 に分かれる。

110SK(16～21)：銅製品 1 点、鉄製品 5 点がある。16 は銅製キセルの雁首で長さ 3.2cm と短いもので、首の脂反し部の幅は 0.55cm で、細身である。17 は鉄製の板で、厚さ 0.9cm、長さ 7.0cm、幅広部が 4.2cm と平面撥形をしたものである、刃部は確認できていない。18～21 は鉄釘で 18 が長さ 6.7cm でやや長いが 19・20 は長さ 4.0cm 程で短いもので、頭部の造り出しも不明瞭である。19 には木材の付着痕が残る。21 は釘の先端部か。

381SK (22・106)：22 は鉄製の断面長方形の棒状品である。106 は寛永通宝で 1 点出土している。492SK (23～40)：銅製品 4 点、鉄製品 14 点がある。銅製品は 23 がキセルの雁首の火皿冠部で残りが悪い、24 はキセルの吸口で、今回の調査では 24 のように肩部の無いタイプのものばかりが出土した。25・26 は銅銭と思われるもので、鉄錆による土の固着が厚くみられる。鉄製品では 27 の形態が不明なものを除いて、他は全て鉄釘であり、28・29 が長さ 6cm を超える比較的最長いもの、その他全体が明らかなものでは長さが 5.0cm 以下の短いものが多い。全体に頭部の造り出しが不明瞭である。今回の調査で出土した鉄釘では江戸時代の新しい時期の鉄釘の方が短いものが主体で、頭部の造り出しが不明瞭になる傾向が認められる。36 には木材の付着痕が見られる。

その他：整地層などからの出土遺物で、41～43 は銅製品のキセルで、41 は全体の長さ 11.4cm で、雁首が長さ 4.2cm、吸口が長さ 7.1cm、吸口の接続部が長さ 0.2cm と短いもので、雁首の脂反し部の幅は 0.7cm で、今回の出土資料の中では幅広のものである。42 は雁首で径 3.2cm 程の環状に曲げられて出土した。43 は吸口で、小口部に 3 条の線が廻る。

銅銭では寛永通宝 (101～107) がある。近世の遺構からの出土のものは先に述べた 381SK 出土の 106 と 149SK 出土の 102、329SK 出土の 104 がある。他のものは近代の土坑からの出土である。

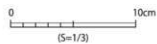
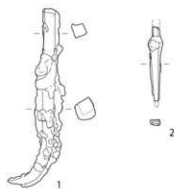
<3 鍛冶関連資料>

今回の調査ではフィゴの羽口 1 点 (44)、椀型鉄滓 4 点 (46～48) が出土した。44 は外径 7.3cm、送風孔径 2.9cm、炉壁部厚さ 2.0cm、送風角度 24 度の羽口先端部で、炉内の部分には流動鉄滓が付着している。椀型滓は 45 と 46、48 が重複椀型滓の完形品で、45 が 2 つ、48 が 3 つ、46 が 4 つ～7 つ重複しており、重複した椀型滓の 1 つは 47 のような径 4cm～6cm 前後、厚さ 1.0cm～1.5cm 前後のものである。これらの資料は 45 が戦国時代の可能性がある 604SD 出土、46 が 18 世紀後半～19 世紀初頭の 492SK 出土、47 が 17 世紀～18 世紀初頭の 466SE 出土、48 が 18 世紀後半の 110SK からの出土で、時期的な偏りはみられず、鍛冶が各時期において散在的に行なわれたことを示すのであろうか。

<4 近代以降>

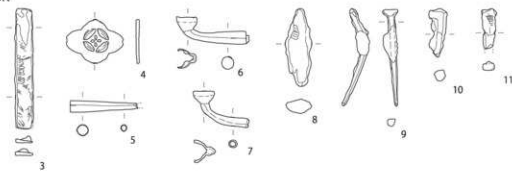
明治時代～昭和時代 20 年まで存在した近代の陸軍に関連する防空壕跡や用排水溝、および表土直

<戦国期>

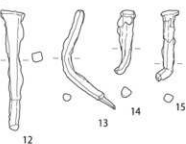


<江戸時代>

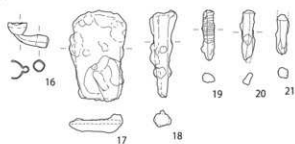
389SK



466SE



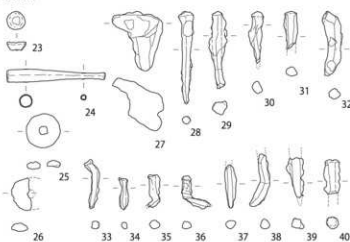
110SK



381SK



492SK



その他

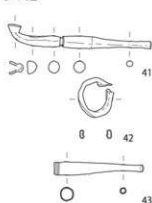
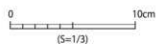
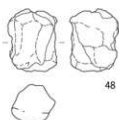
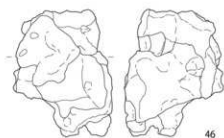
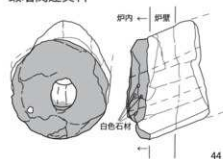


図84 金属製品1 (S=1/3)

鍛冶関連資料



近代以降

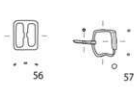
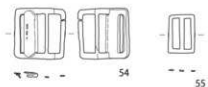
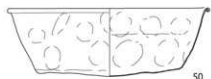
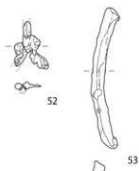
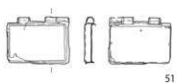


図 85 金属製品 2 (S=1/3)

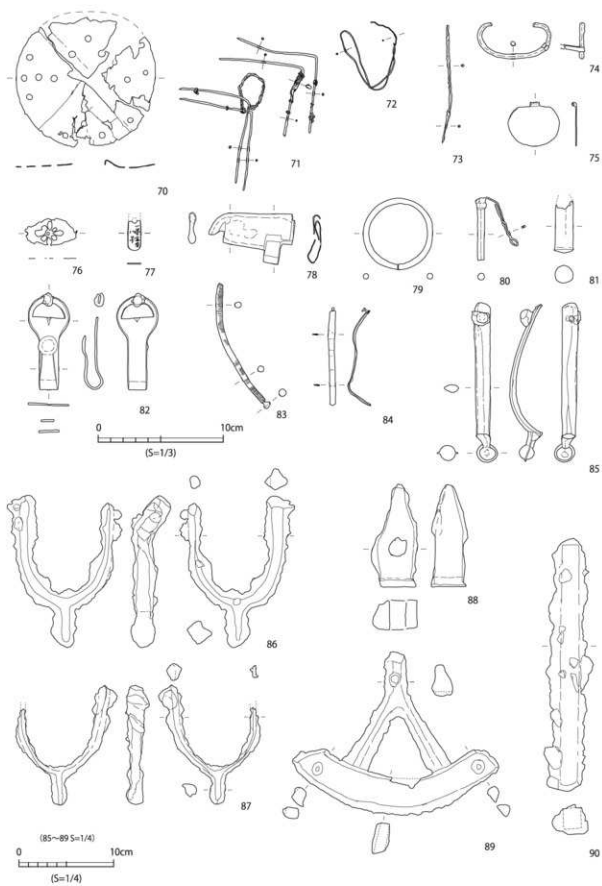


图 86 金属製品 3 (S=1/3, 1/4)

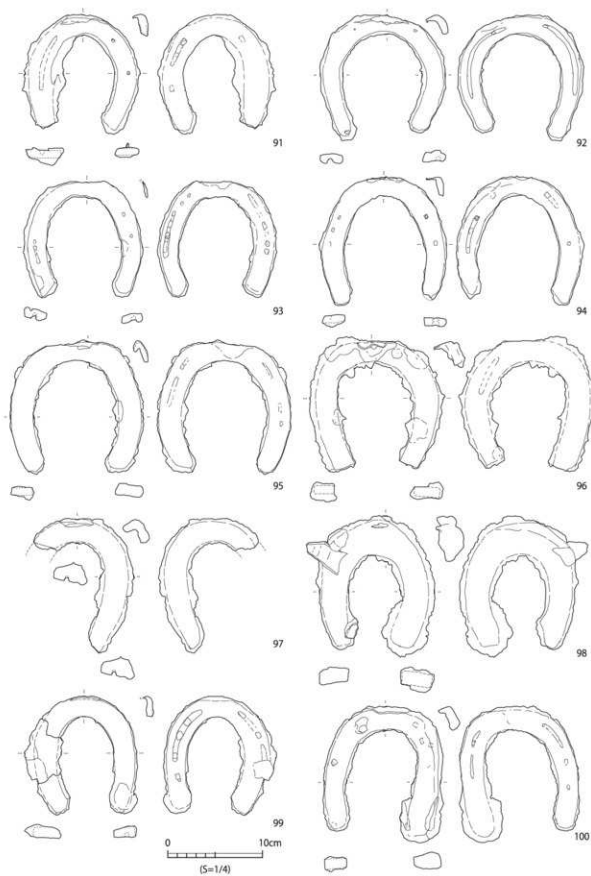


图 87 金属製品 4 (S=1/4)

下の整地層から出土したものである。今回は陸軍に関連するアルミ製品、鉛製品、銅製品、銅合金製品、鉄製品の主要なものを図化した。なお、鉄製品は総数 643 点、銅製品は総数 86 点、アルミ製品は総数 6 点が出土した。

アルミ製品 (49～51)：49 は口径 15.0cm、器高 3.5cm、底径 8.0cm の深皿で、50 は口径 16.0cm、器高 5.0cm、底径 9.0cm の碗で、どちらも口縁端部が外側に折り返して補強される形態をしている。肩から外した跡の研磨痕が横方向にみられる。51 は長さ 5.0cm、幅 3.7cm、厚さ 0.6cm の開閉式のケースで蓋の軸部側に小さい穴が空けられている。蓋外面に 2mm に 4 個の点々がある。

鉛製品 (52・53)：52 は配線の管状圧痕がみられ、配線の留め金具の可能性のあるもの、53 は長さ 11.2cm の弧状で、幅 1.0cm の断面方形をした不明品、先端部がやや燃られている。

銅製品 (54～84)：陸軍の服飾に関連するもの (54～69)、生活用具などの雑具に関連するもの (70～84) を中心に取り上げた。

54～57 はベルトの金具と思われるもので、54 は幅 4.0cm、55 は幅 3.0cm、56 は幅 2.3cm、57 は幅 2.1cm で、54 は人間の着用するベルト金具の可能性はあるが、他は馬具のベルトの留め金具の可能性はある。製品番号の「16 □ NO.1685」が刻まれている。58 は陸軍徽章で、つぶれて、残存状態は悪い。59～65 は陸軍の制服に伴うボタンで、径 2.4cm 前後のもの (59～63)、径 2.0cm 前後のもの (64)、径 1.4cm 前後のもの (65) の 3 タイプのボタンが確認できた。66・67 は蝦蟇口金具で、66 は左右対称のタイプのもの、67 は左右非対称の形態のようである。68・69 は一体型のキセルで、幅と厚さは 0.9cm～1.0cm で同じであるが、長さは 68 が 11.5cm、69 が 9.3cm と異なる。脂反し部の幅はどちらも 0.6cm 前後である。

70 は瓶の皿状のもので、復元径 11.0cm の円形の薄板で、径 0.5cm 程の穴が 20 個確認できる。穴の配置にパターンがありそうであるが、接合する部分では左右対称にならない。71～73 は径 0.1cm 程の銅線で、71 は銅線が巻き付けられている、急須の把手にかける銅線などの可能性がある。74 は環状の吊り輪のような形のもの、用途不明である。75 は楕円形の薄板が、紐通しのような環状部分によって固定される部品である。76 は釘隠しと思われる菊菱文が抜いてある金具、77 は第 3 師団司令部に關係する「一等客室八号」の彫刻のある鍵ホルダーの板と思われるもの、78 は用途不明であるが、何らかの留め金具、79 は径 5.6cm にめぐる環、同一規格品がもう 2 点出土している。80 は何かの栓のような断面円形の棒状金具、81 は径 1.5cm の葉菜と思われるもの、先端部が欠けている。82 はやや装飾性があるベルトの留め金具と思われるもので、図の上部に鉄製品の一部分が付着していたと思われる金具が固着している。83 は全体に線状痕がみられる長さ 10cm 程の断面円形の棒で、頭部が丸く造り出されている。84 は幅 0.5cm、厚さ 0.1cm の薄板で、2ヶ所で曲げられている、先端に鉤状の金具が付けられている。

銅合金製品 (85)：拍車の左側で、幅 9cm の「U」字形に脊を挟むものである。後部には径 1.7cm の球形の拍車部がある。「U」字部の先端に鉄製のネジが付けられており、脊とつながれたものと思われる。後に述べる鉄製拍車と 85 のような銅合金製品との違いは、銅合金製拍車が第 3 師団司令部の他の士官と高官用のものに区別されていた可能性がある。

鉄製品（86～100）：馬具に関連するものと、形態が明瞭なものを図化した。86・87は拍車の鉄製品で、幅9cm前後の「U」字型に舌を挟む部分があり、その先端が上に曲げられている。銅合金製品の拍車のような留め金具状態は確認できなかった。88は長さ8.1cm、幅2.7cm、厚さ2.3cmの金槌の頭部で、径1.3cm程の臍により柄が差し込まれていたものである。89は三角形の押の釣り金具と思われるもので、上部と弧状になる部分の左右に穴がある。目盛りは確認できていない。90は長さ26.8cm、一辺2.0cm前後の角棒で、用途は不明である。

91～100は馬具の蹄鉄で、全て蹄鉄の鉄頭に鉄唇がたち蹄を固定化するタイプのもので、蹄側に沿った左右の鉄板に幅0.5cmの釘溝があり、その中に蹄鉄を取り付ける釘を打ち込む釘眼とよばれる長方形の穴がみられる。91～96は前後と左右の幅がほぼ同じである円形の前足の蹄鉄、97～100は前後が左右の幅より長い楕円形状になる後ろ足の蹄鉄である。前足の蹄鉄は前後の長さで左右の長さから2タイプから4タイプに分かれる可能性があり、前後の長さ12.0cm～12.5cm、左右の長さ12.5cm前後の91・93、前後の長さ13.1cm前後、左右の長さ13.1cmの92、前後の長さ13.5cm、左右の長さ13.4cmの94、前後の長さ14.0cm前後、左右の長さ14.0cm前後の95・96がみられる。後ろ足の蹄鉄は前後の長さからやや小型の97・99とやや大型の98・100に分かれる可能性がある。明治32年6月発行の陸軍省『陸軍蹄鉄術教範』には蹄鉄の前足と後ろ足について4号の大きさによる規定がある。これによると前足の91・93は前後の長さ12.0cm、左右の長さ9.8cmの第一號蹄鉄、92は前後の長さ13.0cm、左右の長さ10.5cmの第二號蹄鉄、94・95は前後の長さ13.8cm、左右の長さ11.4cmの第三號蹄鉄、96は前後の長さ14.5cm、左右の長さ12.0cm

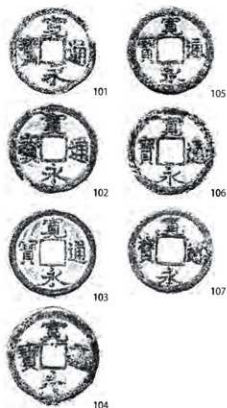


図88 寛永通宝拓本 (S=1/1)

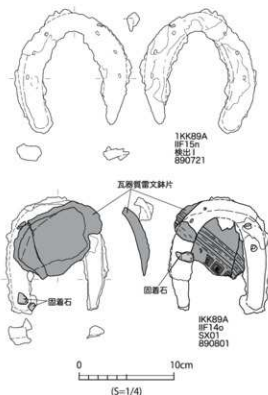


図89 勝川遺跡出土蹄鉄 (S=1/4)

の第四號蹄鐵に対応する可能性がある。しかしいずれも左右の長さでは2.0cm程幅広になっており、錯び膨れの分を引いても、修正が施されている可能性が高い。後ろ足についても、99は前後の長さ12.4cm、左右の長さ10.0cmの第一號蹄鐵、98は前後の長さ13.4cm、左右の長さ10.7cmの第二號蹄鐵、100は前後の長さ14.4cm、左右の長さ11.6cmの第三號蹄鐵に対応する可能性があるが、左右の長さが前足と同様に1.0cm～2.0cm幅広になっている。

また図89の勝川遺跡の89A区出土蹄鐵は幕末から明治時代の遺構とされるSX01と遺物包含層から出土しており、勝川遺跡の蹄鐵が、鉄側に沿った釘溝が切られていないタイプのものである点が、陸軍と愛知県春日井市にある勝川宿の民間用馬の蹄鐵の違いを示して興味深い。

(藤山 誠一)

5 石器・石製品

1は凹基無茎の石鏃で、脚部的一端が欠失している。断面形状は対称的で扁平な菱形を呈するもので、平面中央部にも瘤状残存部が認められないものである。下呂石製。2は短冊形の打製石斧で、完形である。片面は原石の礫面を一部に残しており、もう片面は全面に剥離が行なわれている。いずれも図示した右側側面に調整時の細かい剥離が認められる。使用によると考えられる磨滅が表面に著しく認められるが、特に礫面を残している平面において、図示した上半分と下半分とは痕跡の様相の異なりが指摘できる。石材はホルンフェルス。

(川添 和暁)

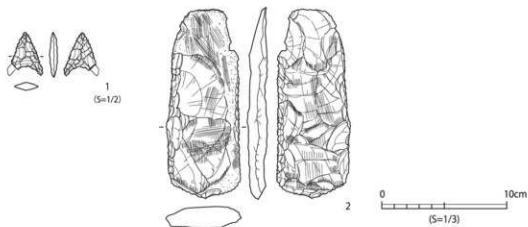


図90 石器 (S=1/2, 1/3)

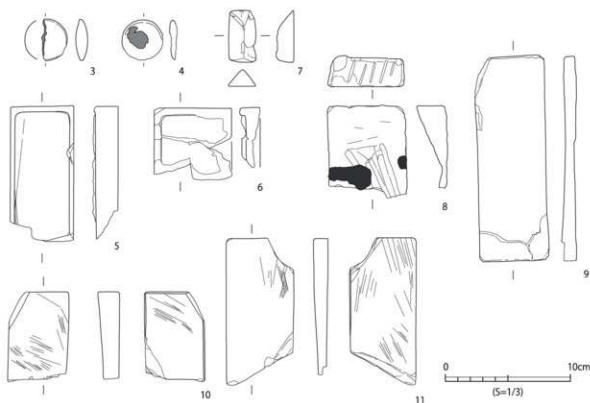


図89 石製品 (S=1/3)

3, 4は径2.2cmの白色の礫石である。4は凝灰質泥岩製、3は磁器製であり布目のような痕跡がみえる。

5, 6は硯である。5は頁岩、6は泥質凝灰岩製であり硯にしてはやや軟質である。

7～11は砥石である。7は長さ4.1cm、幅2.2cm程度の小型の三角柱状をなし、一端を斜めにカットして三角形の研磨面を形成している。石材は凝灰質泥岩。8は肌理の粗い凝灰質砂岩製であり、中央は大きく凹み、さらにV字状の凹みが数条みられる。鉄錆が付着しており、近代以降のものと思われる。9, 10, 11は近世の土坑から出土したものであり、幅がほぼ揃っている。幅5.0～5.4cm、厚み1.1cm～1.7cm程度、ほぼ完存する9は長さ16cmの長方形の形状である。9は泥質凝灰岩、10, 11は凝灰質泥岩である。

(武部 真木)

第4章 自然科学分析

1 土師質鍋付着物の放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

小林 祐一・丹生 越子・伊藤 茂・廣田 正史・瀬谷 薫

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani

1. はじめに

名古屋城三の丸遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表 13 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

表 13 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-8567	位置：II NS06, IF17r 遺構：605SD 層位：下層（最下層直上） その他：070205	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：胴部外面（煤類） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.01N, 塩酸：1.2N）
PLD-8568	位置：II NS06, IF17r 遺構：605SD 層位：下層 その他：070216	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：口縁部外面（煤類） 状態：dry	超音波洗浄 サルフィックス 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.01N, 塩酸：1.2N）

3. 結果

表 14 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、図 92 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

<暦年校正>

暦年校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を校正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年校正にはOxCal3.10(校正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表 14 放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年校正用年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-8567	-19.29±0.19	325±18	325±20	1510AD (55.0%) 1600AD	1490AD (95.4%) 1650AD
				1610AD (13.2%) 1640AD	
PLD-8568	-19.71±0.18	280±18	280±20	1520AD (24.9%) 1550AD	1520AD (45.7%) 1580AD
				1630AD (43.3%) 1650AD	1620AD (49.7%) 1670AD

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年校正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

<参考文献>

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代。3-20。
- Ramsey, C.B. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Ramsey, C.B. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Gulderson, T.P., Hoog, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Ramsey, C.B., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

<補足>

なお、分析後に試料2点は同一個体であることが判明した。土師質内耳鍋 (E-3) は形状等により時期は戦国時代に比定されるものである。測定番号 PLD-8568 で得られた2つのピークのうち戦国時代の範囲内に収まる1520～1550年という年代が、この場合最も蓋然性の高い数値としてあげられよう。

(整理担当 武部)

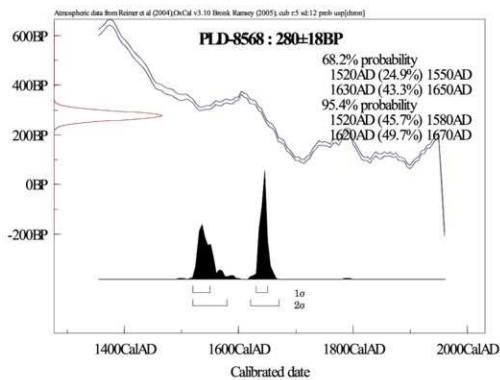
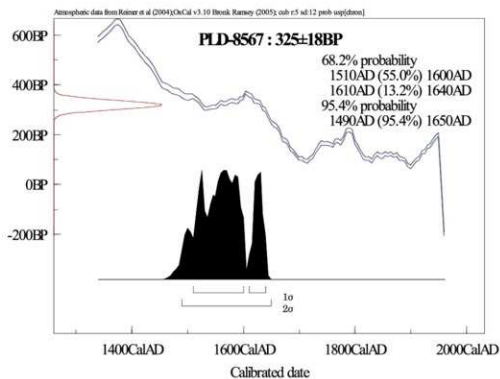


圖 92 曆年校正結果

2 動物遺体の同定（戦国期・近世・近代）

中村賢太郎・山形秀樹（パレオ・ラボ）
樋泉岳二（早稲田大学）

1. はじめに

愛知県名古屋市の名古屋城三の丸遺跡において、近世から近代にかけての時期とされる動物遺体が検出された。ここでは、動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は、381SK、605SD、387SK、110SK、413SK、492SK、603SD、遺構不明より検出された動物遺体である。381SKの試料は、土ごと取り上げられた動物遺体である。605SD、387SK、110SK、413SK、492SK、603SDの試料は、発掘調査時に動物遺体として取り上げられた未洗浄の試料である。遺構不明の試料は、獣骨がまとまって出土し、周囲の土と共に塊状で取り上げられたものである。

試料は、1mmメッシュの篩上で水洗し土を除去した。得られた残渣から5mmメッシュの篩により動物遺体を抽出した。なお、381SKと387SKの試料は、微小な動物遺体が確認されたため、1mmメッシュで得られた残渣からも動物遺体を抽出した。

抽出した動物遺体の同定と各部位の計数を行った。なお、貝の計数にあたって、巻貝（腹足綱）は殻頂、殻軸（1/2以上残存）、殻口部、蓋の数をカウントした。二枚貝（斧足綱）は殻頂が残っているものを対象に左殻右殻に分けてカウントした。ただし、ナミマガシワは左右の区別をしていない。

表1に同定された動物遺体の一覧を示す。以下、動物遺体を貝類、魚類、爬虫類、哺乳類に区分して記載する。

3. 貝類（表16）

腹足綱はアカニシ、サザエ、キセルガイ類の3分類群、斧足綱はヤマトシジミ、ハマグリ、サルボウまたはアカガイ、マガキ、アサリ、ナミマガシワの6分類群が検出された。表16に分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、巻貝は殻頂、殻軸、殻口部、蓋のうち最も大きい数、二枚貝は左右殻のうちより大きい数である。ただし、ナミマガシワは殻頂数の半数をもって最小個体数とした。

・381SK

アカニシ（殻口部のみ欠損）、サザエ、キセルガイ類、ヤマトシジミ、ハマグリ、サルボウまたはアカガイ（破片）、マガキ、アサリが検出された。最小個体数はアカニシ1、サザエ1、キセルガイ類1、ヤマトシジミ2、ハマグリ8、マガキ4、アサリ2である。ハマグリが多く、次いでマガキが多い。

・387SK

サザエが検出され、最小個体数は3である。

・110SK

ヤマトシジミ、マガキ、ナミマガシワが検出された。最小個体数は、ヤマトシジミ1、マガキ8、ナミマガシワ1である。マガキが多い。

・413SK

表 15 動物遺体種名表

貝類	
腹足綱 Class Gastropoda	
アカニシ	<i>Rapana thomasi</i>
サザエ	<i>Batillus cornutus</i>
キセルガイ類	Clausiliidae sp.
斧足綱 Class Bivalvia	
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
サルボウまたはアカガイ	<i>Scapharca subcrenata</i> or <i>Scapharca boughtonii</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>
硬骨魚綱 Class Osteichthyes	
ウナギ属	<i>Anguilla</i> sp.
ニシン科	Clupeidae sp.
マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>
コイ科	Cyprinidae sp.
タラ科	Gadidae sp.
ボラ科	Mugilidae sp.
サンマ	<i>Cololabis saira</i>
サヨリ属	<i>Hyporhamphus</i> sp.
フサカサゴ科	Scorpaenidae sp.
コチ科	Platycephalidae sp.
アイナメ属	<i>Hexagrammos</i> sp.
アジ科	Carangidae sp.
タイ科	Sparidae sp.
タイ科?	Sparidae sp. ?
サバ属	<i>Scomber</i> sp.
カレイ科	Pleuronectidae sp.
フグ科	Tetraodontidae sp.
真骨類	Teleostei sp.
爬虫綱 Class Reptilia	
スッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i>
哺乳綱 Class Mammalia	
ウシ	<i>Bos taurus</i>
ウシまたはウマ?	<i>Bos taurus</i> or <i>Equus caballus</i> ?
ウマ	<i>Equus caballus</i>
ヤギまたはヒツジ	<i>Capra hircus</i> or <i>Ovis aries</i>
哺乳綱	Mammalia sp.

サザエ、サルボウまたはアカガイ（破片）が検出された。最小個体数はサザエ 1 である。

・492SK

サザエが検出され、最小個体数は 1 である。

表 16 貝類数量表

	アカニシ		サザエ		キセルガイ類		ヤマトシジミ		ハマグリ		サルボウまたは アカガイ		マガキ		アサリ		ナミマガシフ	
	殻輪	殻口部	蓋	殻頂	殻頂	殻頂	殻頂	破片	殻頂	殻頂	殻頂	殻頂	殻頂	殻頂	殻頂	殻頂	殻頂	殻頂
	—	—	—	L	R	L	R	—	L	R	L	R	—	L	R	L	R	—
381SK	1	1		1	1	1	2	8	8	+	3	4	2					
387SK		3																
110SK							1				8	8						2
413SK		1									+							
492SK			1															

+ : あり

4. 魚類 (表 17)

硬骨魚綱はウナギ属、ニシン科、マイワシ、コイ科、タラ科、ボラ科、サンマ、サヨリ属、フサカサゴ科、コチ科、アイナメ属、アジ科、タイ科、タイ科?、サバ属、カレイ科、フグ科、真骨類の 18 分類群が検出された。表 17 に分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、特定部位の数のうち最も大きい数である。ただし、腹椎と尾椎は複数あっても 1 とカウントした。

・381SK

ウナギ属、ニシン科、マイワシ、コイ科、タラ科、ボラ科、サンマ、サヨリ属、フサカサゴ科、コチ科、アイナメ属、アジ科、タイ科、タイ科?、サバ属、カレイ科、フグ科、真骨類が検出された。

タイ科の前上顎骨、歯骨、角骨は、マダイ亜科の別種かと思われるが、種を特定するに至っていない。前上顎骨の概形はマダイ亜科（マダイ・チダイ）と同様だが、歯列形状が異なる。すなわち、マダイ・チダイの主歯列は 2 列の大型歯列とその舌側のわずかな小型歯帯からなるが、本例は頰側にやや大型の歯列が 1 列ありその舌側に中～小型歯による幅広い歯帯が伴う。歯骨の概形や歯列は基本的にマダイ亜科（マダイ・チダイ）と同様だが、主歯列舌側の小型歯帯がやや広い点で明確に異なる。歯骨も前上顎骨と同一種と思われる。

真骨類の鱗は、主にタイ科とボラ科だと考えられる。

最小個体数はウナギ属 1、ニシン科 1、マイワシ 1、コイ科 1、タラ科 1、ボラ科 1、サンマ 1、サヨリ属 1、フサカサゴ科 1、コチ科 1、アイナメ属 1、アジ科 1、タイ科 1、サバ属 1、カレイ科 1、フグ科 1 である。

椎骨のみが検出された分類群が多い。また、タラ科腹椎、ボラ科尾椎、タイ科? 第 1 椎骨の各 1 点に切断の痕跡が見られる。

・387SK

タイ科? が検出された。

5. 爬虫類 (表 18)

爬虫類はスッポンの 1 分類群が検出された。表 18 に点数を示した。

381SK よりスッポンの右中腹板+下腹板 1 点、剣状腹板左右各 1 点、甲骨破片 2 点が検出された。すべて同一個体だと考えられる。

6. 哺乳類 (表 18)

哺乳類はウシ、ウシまたはウマ?、ウマ、ヤギまたはヒツジ、哺乳綱の 5 分類群が検出された。表 18 に爬虫類と共に、分類群、部位ごとの点数を遺構別に示した。文中の最小個体数は、特定部位の数のうち最も大きい数である。

・ 605SD

ウシ、ウシまたはウマ?、ウマ、哺乳綱の 4 分類群が検出された。IF15r よりウシ下顎骨破片 1 点、ウマ左下顎白歯 2 点、IF16r より哺乳綱部位不明破片、IF17r よりウシまたはウマ?の長骨破片、歯を含む哺乳綱の骨片、IF18r よりウシまたはウマ?の長骨破片、ウマ上顎白歯破片 1 点、哺乳綱部位不明破片が検出された。最小個体数はウシ 1、ウマ 1 である。ウマは左下顎白歯 2 点が検出されたが、部位の特定はできていないため、最小個体数を 1 とした。

・ 603SD

ウマ、ウシまたはウマ?の 2 分類群が検出された。IF17s よりウマ左上顎第 2 前臼歯 1 点、IF18g よりウシまたはウマ?の長骨破片が検出された。ウマの最小個体数は 1 である。

・ 遺構不明

小型のウシ科の 1 分類群が検出された。カモシカより小さく、ヤギ・ヒツジ現生標本とほぼ同大であることから、ここではヤギまたはヒツジと同定した。ただし、四肢骨はかなり長く、また脛骨の骨幹形状がヤギ・ヒツジ現生標本とかなり異なるなど、相違点もあり、さらに検討を要する。検出された部位は、前肢と後肢および頭蓋骨の一部である。いずれも保存状態が悪く、破損が著しい。骨端のほとんどは欠損している。大腿骨骨幹に切創が見られる。すべて同一個体である。また、哺乳綱の部位不明破片多数が検出されたが、ヤギまたはヒツジと同じ個体だと考えられる。

7. おわりに

遺構ごとの動物遺体出土傾向の整理と遺構間の比較を行い、まとめとしたい。

381SK は、貝類、魚類、爬虫類が検出された。貝類はハマグリ、マガキをはじめとする 8 分類群からなり、多様である。魚類も種類が多く、淡水魚と海水魚を合わせて 18 分類群が検出された。最小個体数で見ると各分類群とも同数である。魚類は、椎骨のみが見られた分類群が多く、複数の椎骨で切断の痕跡が観察された。また、他の遺構では見られないスッポンが検出された。

387SK は、貝類と魚類が検出された。貝類はサザエのみ、魚類はタイ科?と真骨類が見られた。

110SK は、貝類のみが検出され、マガキが多く、その他にヤマトシジミとナミマガシワが見られた。

413SK は、貝類のみが検出され、サザエとサルボウまたはアカガイが見られた。

492SK は、貝類のみが検出され、サザエが見られた。

605SD や 603SD の溝状遺構は、哺乳類のみが検出され、ウシ、ウマが見られた。387SK などの土坑とは異なり貝類は検出されず、廃棄される動物の種類が土坑とは異なっていたと考えられる。

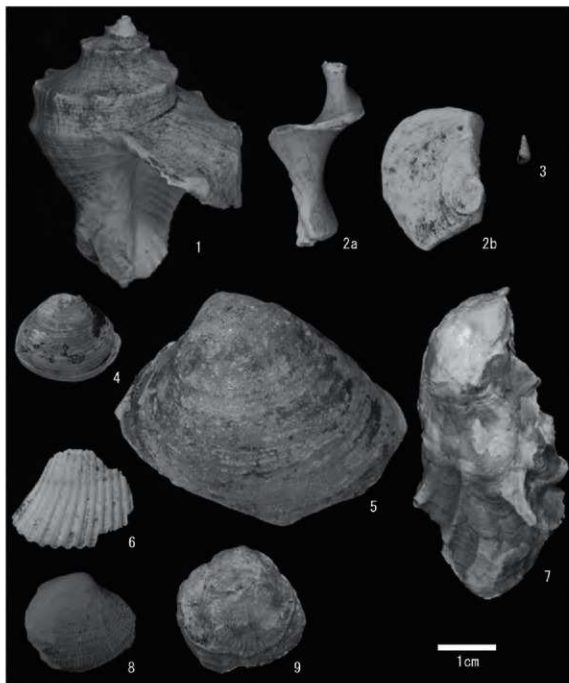
遺構不明は、ヤギまたはヒツジと同定された小型のウシ科のみが検出された。前肢、後肢、頭蓋が検出され胴部が見られないことと、大腿骨に切創が見られたことから、ヤギまたはヒツジ（小型のウシ科）が解体された痕跡だと考えられる。

遺構間を比較すると、動物遺体の種類に差がある。このうち、魚類については試料採取方法による見落としの問題を考えなければならないため、遺構間での出土傾向の差を過去の廃棄行動を十分に反映したものだと考えることは難しい。一方、溝と土坑で見られた哺乳類と貝類の有無の差は、溝と土坑で廃棄される動物の種類が異なっていたことを示すと考えられる。

<補足>

動物遺体を含む遺構の年代について、溝 605SD,603SD は戦国期那古野城の時期、土坑 110SK は 17 世紀後葉と 18 世紀後葉、381SK,492SK,387SK は 18 世紀後半から 19 世紀前葉、土坑 413SK は明治期が最終の廃棄時期と考えられる。試料はいずれも貝あるいは骨が目視で確認できた堆積層から採取している。

（調査担当 武部）



貝類

1. アカニシ 2. サザエ (a: 殻軸, b: 蓋) 3. キセルガイ類
 4. ヤマトシジミ 5. ハマグリ 6. サルボウまたはアカガイ
 7. マガキ 8. アサリ 9. ナミマガシワ

図 93 検出された貝類



爬虫類と哺乳類

1. スッポン (a : 中腹板+下腹板R, b : 剣状腹板R, c : 剣状腹板L)
2. ウシ下顎骨
3. ウマ上顎L第2前臼歯
4. ヤギまたはヒツジ-小型のウシ科- (a : 側頭骨岩様部L, b : 上腕骨L骨幹, c : 橈骨L近位端, d : 中手骨L近位端, e : 上腕骨骨幹, f : 脛骨L骨幹, g : 距骨L)

図 95 検出された爬虫類と哺乳類骨

第5章 総括

1 戦国期の区画施設

今回調査地点での主な成果は、以下のようにまとめられる。

- (1) 断面V字状で土塁をもつ大型の堀（605SD）と同じく大型の堀（606SD-e,f）が成立し、両者は区画の開口部を形成している。
- (2) 堀（605SD）の廃絶後に規模の小さい溝（603SD,606SD-a,b）による方形区画が形成される。
- (3) 堀には大塚3段階の時期の遺物は含まれておらず、区画溝への変更は16世紀半ば前後の時期と考えられる。

三の丸遺跡の中世・戦国期の溝の方位を基にした分類（註1）に従えば、すべて「正方位」溝群に含まれるものであり、期間を通して区画の基本的な方位は変更はみられない。土塁を伴うとみられる大型の堀を廃棄し、方位を継承しつつ新たな区画を設定するという大規模な変更が行われており、溝の形状からは「防御」から「区画」への変化を読み取ることが可能である。調査区北側に近接する簡易・家庭裁判所地点（報III）では、大塚3段階以降の時期に更に大規模な堀が設定されており、これとの関連が注目される。三の丸遺跡の広い範囲で行われた区画再編の一事例を加えることとなった。

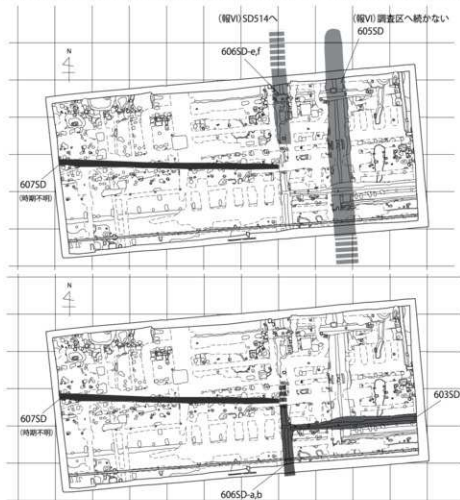


図96 中世・戦国期 主要遺構の変遷

2 近世武家屋敷の空間利用

今回の調査により、ある武家屋敷地の1区画について、大凡の範囲の推定が可能となった。近世武家屋敷の内部構造の実態を考古学的に検証するための貴重な事例を加えることができた。これまでの調査成果と併せて、(1)近世武家屋敷の境界、(2)内部空間の利用方法(主にゴミの廃棄)についてまとめておきたい。

(1) 近世武家屋敷の境界

関連する隣接調査地点との位置を図97に示す。今回の調査地点から南辺土塁に沿って西側約195mの距離に県図書館地点(報告書I)があり、北側は約10m幅の未調査部分を挟んで裁判所庁舎地点(報VI)その更に北側に簡易・家庭裁判所地点(報III)という位置関係にある。名古屋城内の拝領武家屋敷地一境界の変更が厳しく制限される一という特殊事情を前提として、時期幅をもつ複数の遺構群の関係性を検討した結果、今回の調査により一つの屋敷地をめぐる境界線を結ぶことが可能となった。

まず、(報I)は御蘭御門内北側に設けられた広場「内片端」と西御土居筋が交わる範囲を含む地点である。調査では柱列と布掘の溝が鋭角に屈曲するコーナー部分が検出され、上部構造として塀が推定されている。土塁基部の位置も確認されており、土塁と塀の間、道路幅は約30m(15間)と推定されている。道路そのものの構造については明確な情報を得られていないが、道路側溝は存在しないことが確認された。

(報III)地点で検出された規模の大きい一群の溝の配置は、近世を通じて強い規制力をもった区画の存在を示している。このうち東西方向の溝群は隣接する屋敷の裏手の「背割」の境界線を構成するものと推定される。またその周辺に土坑群が密集して展開することから、どの屋敷でもほぼ同様に屋敷裏をゴミの処理の空間に当てていたと考えることができる。さらに東西溝に直交して北側、南側にそれぞれ接続する溝も規模や形状など類似する点も多く、それぞれ屋敷地の側面を画する境界を構成していたと考えられる。

以上の調査地点の成果からまず(報I)の情報と今回調査地点の196SK、東壁際 832SK(どちらも版築状堆積層をもつ)を結んだラインを南御土居筋と屋敷地との境界線として提示しておく(図97)。扱った遺構の形態は一定しておらず地点により異なっている(註2)ことなど、共通する上部構造を復元するとすれば問題点も多く残されているが、ここでは遺構の密集度を大きく区分する境界という性格を強調しておきたい。

次に図5で設定した屋敷地1・2の範囲は、(報III)で検出された背割の境界線を参考にすると、図98のように推定することができる。南御土居筋から屋敷の背割までの距離は約85mである。屋敷1・2が接する側面の境は、形状や遺物を含まず短期間に埋積している点など廃絶の様相なども一致する(報III)SD10と今回調査の496SDを結んだラインを推定している。496SD廃絶後に成立するSA001に土塀あるいは板塀が想定されるが、(報VI)SD001はこれに付随する施設である可能性が考えられる。なお『坪間路頭帳』(註3)によれば屋敷地1は間口二十九間半、奥行四十三間半であり、屋敷地2は間口三十間四尺五寸、奥行四十五間三尺五寸である。

屋敷地1の間口を約53mと仮定すれば、東西幅でも大半の部分が今回の調査範囲内に含まれると考えられる。今回の調査では南面する屋敷の出入口となる門の跡は確認されていないが、調査区の中央に近い381SKより西側にはビット・土坑の分布が特に集中するため、正面の門はそれより東側に

存在したと思われる。

(2) 内部空間の利用方法

屋敷地1の内部について遺構の分布状況を見ると、17世紀前半～18世紀初頭に機能していた背割の溝(SD08)の南側において、廃棄土坑は北西端(a)・北東端(b)の高コーナー付近、南部東側屋敷境付近(c)、南部西側(d)の大きく4カ所の範囲が判明している。(a,b)の範囲は屋敷境のすぐ際にまで達しており、遺物量は格段に多い。(a)は17世紀中葉段階を含む溝状土坑群がL字状溝(SD19)の北・西側に掘削されていたものが、SD19廃絶後に18世紀中葉には重複して大型の土坑が掘削されている。(b)は平面形が方形となるものが多く、側面の境(SD10)廃絶後に重複して18世紀末～19世紀初頭の遺物を含む土坑が掘削されている。(c)は東側屋敷境に沿って細長くのび、しかも南辺ラインからやや距離をおく(4m程度)範囲を想定しているが、17世紀後半、18世紀中葉～19世紀前半の遺物の廃棄が認められる。井戸は17世紀後半～18世紀前半の遺物を含む1基(SE003)がすぐ近くにあり、若干距離をおいて18世紀後半～19世紀半ばの遺物を含む(SE201)が検出されている。今回調査の範囲では遺物量は少ない。(d)は南辺ラインから7～8m距離をおいて横並びに分布する。17世紀後半の遺物を含む井戸・土坑各1基、18世紀後半～19世紀前半の土坑・地下室である。

名古屋城三の丸の武家屋敷内部の様相を伝える資料として、西面する屋敷地である野崎一学邸(註4)がある。屋敷は大名小路と中小路との交点東南角に位置する。街路に沿う西側・北側部分に「長屋」が配置され、隣あう屋敷との境は塀である。西側に「門番所」、「中間部屋」のつく「長屋門」であり、北側長屋には物置のほか「馬屋」、「薪部屋」「炭部屋」が入る。門から入ると母屋正面に玄関があり、玄関右手(敷地南側)は「書院」「中の間」など表向の空間、玄関奥が「待詰所」「侍部屋」「広間」など中奥の空間、そして玄関左手(敷地北側)が「台所板間」「茶ノ間」「女中部屋」奥向の空間となっている。この母屋とは別に「土蔵」(敷地南東隅)、「穀蔵」(同南西隅)がある。母屋の建物南側には縁がめぐり、敷地南側に広く開いた空間(庭)が存在する。中奥と奥向の間(敷地中央東側)にも空

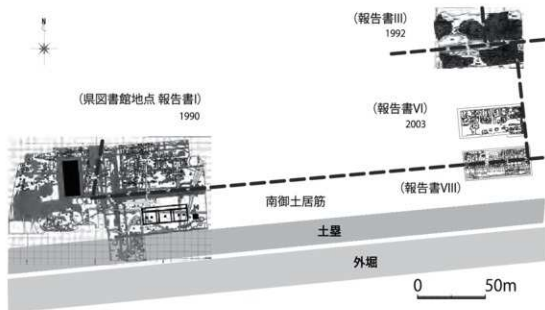


図 97 武家屋敷 南辺境界の推定図

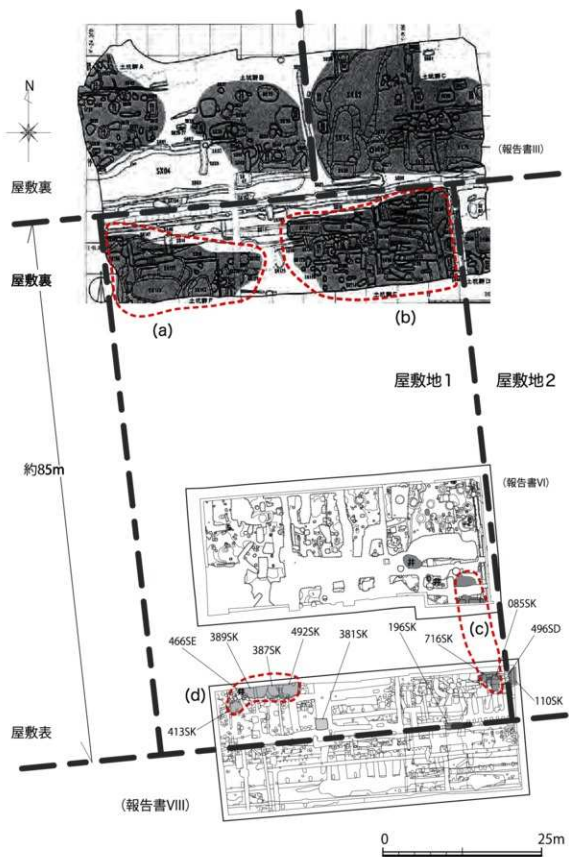


図 98 屋敷地1・2 境界の推定図

間(庭)が存在する。また、母屋建物と長屋との間に、「カマド」(台所)に接する「内庭」が設けられ、井戸が設置されている。側は母屋の北西端にある。敷地周縁には「路地」がめぐり、「カコイ」が多用されて細かく区切られている。

以上を参考にして再び屋敷地1の遺構の配置を眺めると、南脚土居筋に面する敷地境界付近に一定の一定幅で遺構の希薄な範囲があり、何らかの建物が存在していたと考えられる。(報VI)地点は全体に遺構・遺物ともに希薄であり、母屋建物が存在した空間である可能性は高い。ただし、調査区北東部には、植栽痕と思われる土坑数基が検出されており、これらが「表庭」に含まれるとすれば母屋建物は敷地内のやや西寄りに配置されていたと考えられる。井戸は(c)付近で2基、(d)で1基が確認されているが、これらの付近に台所の存在が想定される。(報III)の範囲には建物は及ばず、すべて「裏庭」の空間に含まれると考えられる。

「屋敷表」「屋敷裏」という空間的特質の違いは、遺構(主に廃棄土坑)の分布状況などからこれまでも指摘されており、屋敷表である今回の調査範囲には大規模な廃棄土坑は存在しないものと予想されていた。調査の結果では屋敷裏と比較して土坑の規模・密度・遺物量のいずれも「表」と「裏」の差は明瞭であった。しかし屋敷表の範囲も全くの空白地ではなく、少なくとも18世紀後半頃には、建物、塀などで目隠しとなればどこも廃棄場所となった可能性がある。因に、屋敷地2の廃棄土坑(110SK)は、境界を隔てた屋敷地1のものより大規模であることが予想され、範囲としては当初の境界線(496SD)上まで拡張されている。屋敷地2側ではより本格的な廃棄場所とされていたかもしれない。このようないわゆる「ゴミ処理」の行為は、日常的、あるいは屋敷替やその他事情による後片付けの廃棄(一時的)であるのか、性格の違いにより場所が選択されたと予想される。廃棄状況や遺物内容と居住者の屋敷替時期との関連性の検討が課題である。

3 軍用防空壕の構造

第1章・3節にあるように、名古屋城三の丸遺跡は明治6年以降終戦まで陸軍第三師団が駐屯しており、調査では旧陸軍に関連する遺物も陶磁器類をはじめ金属製品、ガラス製品など多数出土している。当該時期の遺構は調査区全体に分布し、これらは近世の基本的な軸線方向をほぼ踏襲していることがわかった。写真・記録資料の援用も試みたが、図6.7.8にみられるような建物(兵舎、倉庫、厩等)をそれぞれ特定するには至っていない。

今回の調査では、その他に「防空壕」跡5基を確認した。防空壕の多くは終戦間際の混乱期に急造されており(註5)、これらの詳細な記録は残されていない可能性がある。記録が多く残る民間用防空

表19 防空壕の構造と規模

	家庭用*特選所(記録)	備考	検出遺構					
			340SX	341SX	342SX	343SX	344SX	
構成	出入口・非常口・収容室	出入口は収容室に対して 屈曲	1~2	1	2	1	2	
出入口	2箇所・「斜路」を確保	発掘調査等では「階段」 が多い	収容室数	2	4	3~4	単室	5~6
			出入口床面が平床斜面	○	○	○2カ所	○	○2カ所
規模	収容室幅	それぞれ片側席/両側 席タイプがある	収容室幅	80cm	80cm	120cm	-	70~ 120cm
	収容室高さ (小型) 140cm (大型) 150cm		収容室(残存)高	160cm	85cm	160cm	80cm	90cm
			通路幅	250cm	80cm	150cm	150~ 200cm	180cm
	その他		その他	一部天井 覆受付		築造途中	築造途中	途中

*公共、学校、家庭、工場別に特選所の規定がある

壕と今回検出された遺構群を比較すると表 19 のようになる。

検出された防空壕の特徴には、複数の収容室をもつこと、出入口が平坦な斜面であること、などが指摘できる。また複数の収容室を結ぶことから必然的に通路が長くなり、全体に規模が大きくなっている。防空壕は同時に存在したとみられ、計画的であるが密度の高い配置状況である。おそらく上部から掘削可能な（建物のない？）空間が限定されていたためであろう。一部に掘削途中とみられる箇所を確認したが、344SX 西側などは通路側面から水平方向に掘削を行っている。建物の床下に拡張を試みたものであろうか。

昭和 20 年における調査地点は、「第三師団経理部第一倉庫」となっている（図 8）。防空壕出入口が階段ではなく平坦なスロープが多く採用されている点は、人員の収容だけでなく物品等の運搬を目的とした構造であった可能性が考えられる。複数の収容室と通路をもつ比較的大規模な構造であることも含め「軍用」の施設としての特徴と考えられよう。

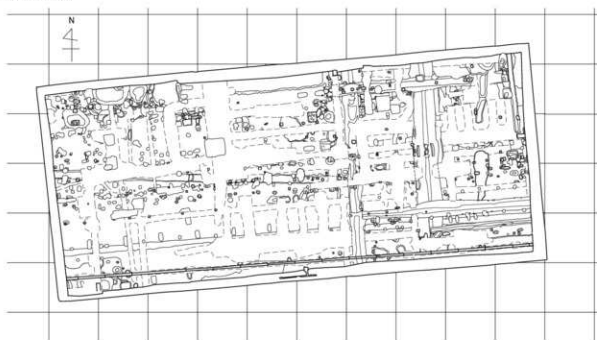
【註】

- （註 1）松田潤 2002、「遺構からみた那古野城の残影」研究紀要 3、愛知県埋蔵文化財センター
（註 2）南御土居筋の東端と東御土居筋が接する地点の調査では、屋敷を区画する遺構として石組と柱穴列（2 タイフ）から遺跡が復元されている。名古屋教育委員会 1989、「名古屋城三の丸 1・2・3 次調査の概要」
（註 3）名古屋博物館所蔵、宝暦 3 年（1753 年）
（註 4）幕末期 1200 石取。水野耕嗣 1985、「武家地とその建築」『名古屋城』
（註 5）「防空待避施設指導要領」内務省防空局制定、昭和 17 年 7 月。

【参考文献】

- 大岡敏昭 1999、「日本の風土文化とすまい—すまいの近世と近代」相模書房
四国城下町研究会 2006、「近世の屋敷境とその周辺」第 7 回四国城下町研究会発表要旨・資料集
町田 保 1943、『都市計画編 5』土木防空
服部弥二郎 1942、『空襲と防空壕 待避所の造りかた』東見社
財団法人大日本防空協会 1941、『防空壕 用途と配置 構造と施工』
十菱敏武・菊池 実 2002、『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
十菱敏武・菊池 実 2003、『続 しらべる戦争遺跡の事典』柏書房
名古屋教育委員会 1989、『名古屋城三の丸遺跡—1・2・3 次調査の概要—』
名古屋教育委員会 1997、『名古屋城三の丸遺跡第 8・9 次発掘調査概要報告書』
梅本博志 1990、『名古屋城三の丸遺跡（I）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 37 集
金子健一 1992、『名古屋城三の丸遺跡（III）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 37 集
松田 潤 2003、『名古屋城三の丸遺跡（VI）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集

全体図（下面）



全体図（上面）

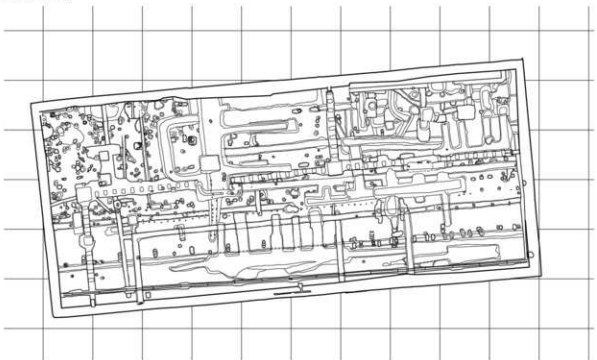


図 版

<基本平面図> (S=1/100)

- (1) 上面西部 (2) 上面中央 (3) 上面東部
(4) 下面西部 (5) 下面中央 (6) 下面東部

<登録遺物一覧表>

- ・土器・陶磁器 (1～14)
- ・ガラス製品
- ・その他 (骨製品)
- ・金属製品 (1～2)
- ・石製品

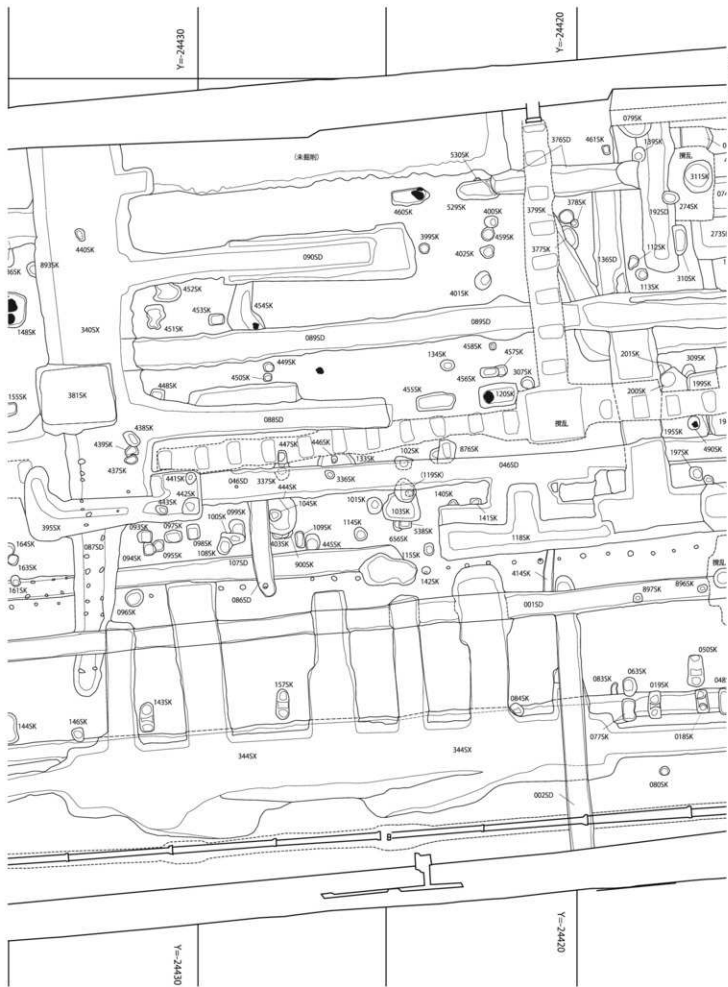
<写真図版>

- 遺構 1～13
遺物 1～18

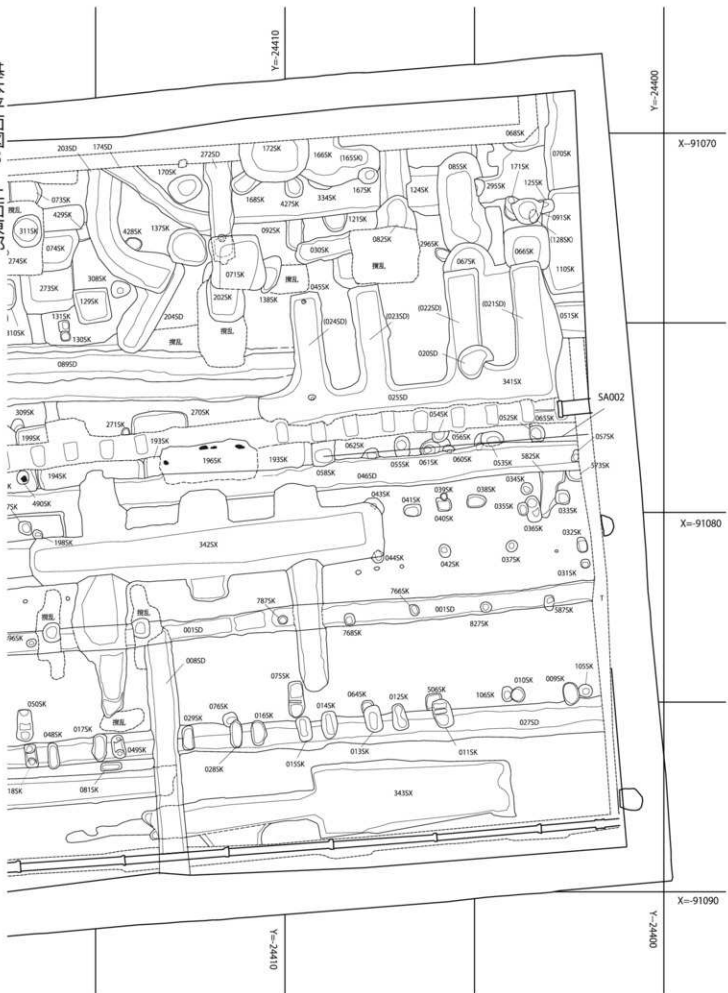
基本平面图 1 上面西部



基本平面図2 上面中央



基本平面図 3
上面東部



Y=24410

Y=24400

X=91070

X=91080

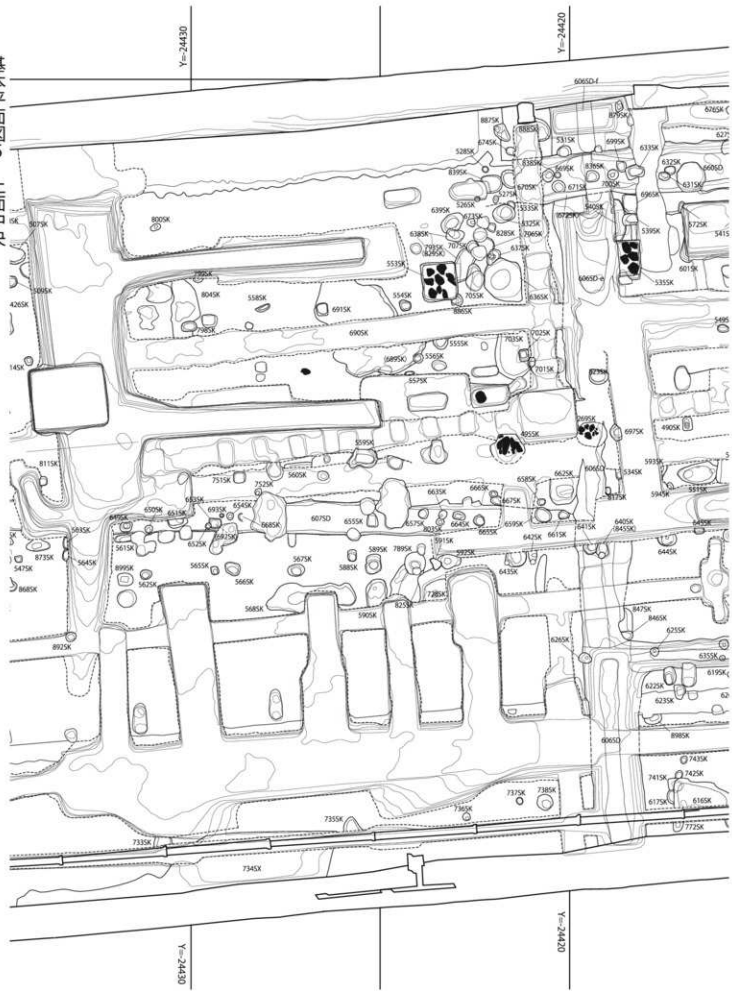
X=91090

Y=24410

Y=24400

基本平面図 5

上面中央



土器・陶磁器(1)

Eno.	群名	種別	遺跡	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口ノリ%	残存率 底ノリ%	備考	産地
1	土師器蓋	土	6035D(縄文下層)	F16,17r	4.8	1.1	3.9	2	3	土師器蓋口口口	
2	灯明皿	陶	6035D(縄文土下層)	F15r	10.6	2.2	5.0	1	6	鉄輪。(大塚1か2)	堺
3	内耳瓶	土	6035D(縄文下層)	F16,17r	24.2	*7.7	-	2	-	外周スス(母体遺棄)	
4	山茶碗	陶	6035D(縄文土下層)	F16c	-	*1.7	5.4	-	4	東濃型(大塚大浜台),14c前半	東濃
5	土師蓋	陶	6035D(縄文土上層)	F16c	8.8	*1.6	最大径11.0	3	2	鉄輪。(大塚1か2)	堺
6	線刻小皿	陶	6035D(縄文土上層)	F16c	11.6	*2.0	-	1	-	鉄輪。(古瀬戸後期),15c第2四半期	堺
7	楕鉢	陶	6035D(縄文土下層)	F16r	-	*4.2	-	1	-	鉄輪。(大塚2),16c前半	堺
8	楕鉢	陶	6035D(縄文土上層)	F16,17r	-	*2.9	-	1	-	鉄輪。(古瀬戸後期),15c末	堺
9	楕鉢	陶	6035D(縄文下層)	F17b	-	*1.6	10.6	-	4	鉄輪。(古瀬戸後期),15c末	堺
10	山茶碗	陶	6068D-O	F17g	10.0	*2.3	-	1	-	東濃型(大塚東か敷之島),15c前半	東濃
11	山茶碗	陶	6068D-E(縄文期)	F16g	-	*2.6	-	-	2	東濃型(大塚東),15c前半	東濃
12	線刻小皿	陶	6068D-F(上層,黒褐色土)	F15p,q	9.6	2.0	5.0	1	5	反輪。(古瀬戸後期),15c半ば	堺
13	折縁中皿	陶	6068D-F(中下層,褐色土)	F15p,q	14.0	*2.4	-	2	-	反輪。(古瀬戸後期),15c第2四半期	堺
14	線刻小皿	陶	6068D-F(上層,黒褐色土)	F15q	-	*2.4	-	1	-	反輪。(古瀬戸後期),15c第2四半期	堺
15	楕鉢大皿	陶	6068D-F(上層,黒褐色土)	F15q	-	*1.5	-	1	-	反輪。(古瀬戸後期),15c第2四半期	堺
16	御首付大皿	陶	6068D-O	F17g	-	*6.7	-	1	-	反輪。(古瀬戸後期),15c半ば	堺
17	線刻小皿	陶	6073D	F17m	-	*1.6	-	1	-	鉄輪,15c第3四半期	堺
18	反輪丸皿	陶	6073D(縄文土上層)	F17c	-	*2.3	-	-	-	鉄輪,17c後半(導入)	堺
19	小天目	陶	6068D-B(黒褐色土)	F18q	7.2	*3.1	-	4	-	鉄輪。(大塚3前),16c第3四半期	堺
20	香炉	陶	6068D-B(黒褐色土下層)	F18q	9.0	*2.3	-	1	-	鉄輪。(古瀬戸後期),15c第2四半期	堺
21	反輪皿	陶	6068D-B(黒褐色土)	F18q	-	*0.8	5.6	-	2	反輪,印文。(大塚1か2),15c末-16c前期	堺
22	楕鉢	陶	6068D-C(褐色土上層)	F18q	-	*1.9	-	1	-	鉄輪。(大塚3前),16c第3四半期	堺
23	平碗	陶	6035D(縄文土上層)	F17,18q	15.8	*3.6	-	2	-	鉄輪。(古瀬戸後期),15c半ば	堺
24	平碗	陶	6035D(縄文土上層)	F18q	-	*2.2	5.8	-	5	反輪。(古瀬戸後期),15c第2四半期	堺
25	壺小瓶	陶	6035D(縄文土上層)	F17c	-	*2.8	11.0	-	2	鉄輪,16c代	堺
26	楕鉢	陶	6035D(縄文土上層)	F17c	10.0	*2.1	-	2	-	鉄輪。(大塚3),16c後半	堺
27	灯明皿	陶	6035D(縄文土上層)	F17,18q	10.0	*3.0	-	2	-	楕鉢。(大塚1),15c末	東濃
28	楕鉢	陶	6035D	F17b	-	*2.0	-	1	-	鉄輪。(大塚3前),16c第3四半期	堺
29	楕鉢	陶	6035D	F17c	-	*4.7	-	2	-	鉄輪。(大塚3前),16c第3四半期	堺
30	楕鉢	陶	6035D(縄文土上層)	F17,18r	-	*3.4	-	1	-	鉄輪。(大塚3前),16c第3四半期	堺
31	土師器蓋	土	6033D(褐色砂質土小土層)	F17,18r	12.0	2.4	7.0	4	5	口口口,黒褐色,鉄質	
32	青磁鉢	磁	4665E	F15A	-	*2.5	5.4	-	7	片切目,黒褐色,輪高台と三足	徳島県
33	青磁鉢小	磁	4665E	F15A	-	*2.5	-	-	2	黒那目	肥
34	青磁碗	磁	4665E	F15A	11.2	*6.4	-	2	-		肥
35	染付小瓶	磁	4665E	F15A	6.5	2.7	3.1	6	8	染付,墨文	肥
36	染付小瓶	磁	4665E	F15A	9.2	5.1	3.8	3	6	染付,黒皮印	?
37	青花皿	磁	4665E	F15A	-	*3.5	20.0	-	3	染付,青	中野
38	線刻湯呑	磁	4665E	F15A	7.3	6.3	4.0	3	11	染付,朱書,五弁花,青彫形に施	肥
39	鉄輪皿	磁	4665E	F15A	12.2	*5.3	-	4	-	鉄輪,17c後半-18c初	堺
40	反輪皿	磁	4665E	F15A	-	*4.0	6.4	-	3	反輪,黒出高付,17c後半	堺
41	京焼飯碗	磁	4665E	F15A	-	*5.0	5.3	2	9	高台付「雲」	肥
42	楕鉢	磁	4665E	F15A	12.4	5.4	0.3	2	6	磨盤,磨高付内「雲」印,磨目付	中野?
43	茶入	磁	4665E	F15A	-	*2.2	3.8	-	4	足高付,黒皮磨目付,磨(磨?)輪	中野?
44	反輪丸皿	磁	4665E	F15A	13.4	2.7	7.1	2	2	反輪,片高台,17c後半	堺
45	反輪丸皿	磁	4665E	F15A	13.3	2.7	6.8	7	7	反輪,17c後半	堺
46	反輪丸皿	磁	4665E	F15A	13.3	2.9	7.2	5	8	反輪,片高付,17c後半	堺
47	反輪反り皿	磁	4665E	F15A	13.0	*2.8	-	2	-	反輪,17c後半	堺
48	反輪反り皿	磁	4665E	F15A	13.4	2.7	7.6	3	4	反輪,鉄輪,17c後半	堺
49	長石丸皿	磁	4665E	F15A	13.6	3.0	7.6	4	5	長石,17c後半	堺
50	反輪丸皿	磁	4665E	F15A	13.8	3.1	8.0	2	3	磨盤,片高台,黒皮,17c前半	堺
51	ひだ皿	磁	4665E	F15A	12.8	2.4	7.8	5	6	長石,鉄輪,18c初	堺
52	反輪丸皿	磁	4665E	F15A	-	*2.2	7.0	-	11	磨盤,片高台,黒皮,17c前半	堺
53	志野型打皿	磁	4665E	F15A	-	*2.5	-	5	-	志野,灰,三足付	堺
54	反輪中皿	磁	4665E	F15A	23.0	4.4	10.8	2	4	反輪,三足欠角縁半高付使用(磨耗),17c後半	堺
55	楕鉢	磁	4665E	F15A	26.6	*4.8	-	1	-	鉄輪,印文,17c後半	堺
56	東瀬戸鉢	陶	4665E	F15A	28.6	*4.9	-	3	-	反輪,鉄輪,17c第2四半期	堺

土器・陶磁器(3)

E-no.	品名	類別	造形	グリップ	口径 (cm)	高さ	底径	残存率 口ノ12	残存率 底ノ12	備考	産地
125	反駒丸皿	陶	389SK下層	F15	13.0	2.7	7.2	4	12	反駒,高台にスス付着,磨耗,17c前半	諏
126	反駒丸皿	陶	389SK下層	F15	13.7	2.4	6.6	4	5	反駒,17c前半	諏
127	反駒丸皿	陶	389SK	F15	14.1	2.9	7.2	12	12	反駒,口縁に白土付着,17c後半	諏
128	輪郭皿	陶	389SK	F15	14.4	3.5	6.7	3	12	反駒,口縁油汚,高台磨耗,17c前半	諏
129	鉢縁皿	陶	389SK	F15	17.9	4.2	5.9	1	5	鉢縁,蛇の目刻削	諏
130	鉢縁皿	陶	389SK下層	F15	17.0	4.1	5.8	2	12	鉢縁,蛇の目刻削	諏
131	鉢縁皿	陶	389SK	F15	14.2	3.8	5.0	4	12	鉢縁,蛇の目刻削	諏
132	型打皿	陶	389SKペレット下層	F15	15.2	3.5	6.3	8	12	反駒,高台付,17c末	諏
133	型打皿	陶	389SK	F15	14.8	3.5	6.4	6	12	反駒,高台付,17c末	諏
134	皿	陶	389SK	F15	15.8	3.5	7.1	6	10	反駒,鉢縁,17c後半~18c初	諏
135	菊皿	陶	389SKペレット上層	F15	13.0	3.1	7.8	4	12	反駒,磨耗,17c後半~18c初	諏
136	埋藏皿	陶	389SK	F15	-	*1.8	7.8	-	12	反駒,高台付,平文,18c初	諏
137	埋藏皿	陶	389SK	F15	11.7	3.2	5.9	2	12	反駒,鉢縁,高文,18c後半	諏
138	ひだ皿	陶	389SK下層	F15	11.6	2.4	7.4	2	5	長石粒,2,磨耗,18c前半	諏
139	埋藏皿	陶	389SK	F15	17.8	3.2	10.4	2	4	反駒,磨損,18c前半	諏
140	衣鉢風皿	陶	389SK	F15	22.0	*3.5	-	3	-	反駒,磨損	諏
141	灯篭皿	陶	389SK	F15	11.5	2.3	5.2	12	12	鉄輪(内),口縁部にスス付着	諏
142	灯篭皿	陶	389SK	F15	10.3	2.4	6.2	9	12	鉄輪,鉢縁,19c初(混入)	諏
143	反駒丸皿	陶	389SK	F15	9.2	2.6	4.0	12	11	反駒,高台付,スス付着	諏
144	反駒小皿	陶	389SK	F15	8.2	1.6	5.2	6	6	反駒,高台付,スス付着	諏
145	鉢	陶	389SK	F15	19.4	*3.1	-	5	-	三島写,17c後半~18c前半	諏
146	鉢縁鉢	陶	389SK	F15	34.9	9.9	17.4	7	8	反駒,磨耗,鉢縁,17c後半	諏
147	瓦甌	陶	389SK	F15	12.5	13.9	7.3	12	12	鉢縁,反駒,5~1,磨耗,高台,18c前半	諏
148	木辻	陶	389SK	F15	4.6	11.6	7.6	1	11	鉄輪,鉢縁,流し,17c前半	諏
149	小皿	陶	389SK	F15	-	*6.3	3.4	-	12	反駒,18c後半	諏?
150	水甌	陶	389SK	F15	16.8	9.1	7.2	4	4	反駒,磨損,文様,三足付,19c初(混入)	諏
151	香炉	陶	389SK	F15	10.7	6.5	8.0	4	6	反駒,平蓋ノ2,磨り,三足付,口縁部に磨付	諏
152	製水入	陶	389SK	F15	*9.5	4.4	*4.9	3	4	反駒,鉢縁,平文,17c末	諏
153	反駒縁鉢	陶	389SK	F15	-	*15.6	6.5	-	12	反駒,高台付,18c前半	諏
154	瓦甌	壺	389SK	F15	3.5	2.9	-	12	12	土甌,土給付(赤緑)	諏?
155	鉢縁鉢	陶	389SK	F15	38.4	*11.4	-	4	-	鉄輪,17c末4前半	諏
156	鉢縁鉢	陶	389SK	F15	34.9	16.3	13.7	9	12	鉄輪,17c末4前半	諏
157	鉢縁鉢	陶	389SK	F15	34.2	15.4	14.2	8	12	鉄輪,17c末4前半	諏
158	鉢縁鉢	陶	389SK	F15	30.8	12.8	12.0	5	12	鉄輪,17c末4前半	諏
159	徳利	陶	389SK	F15	-	*9.6	6.6	-	12	透明釉,赤文様,口縁に「O」印	諏
160	徳利	陶	389SK	F15	2.0	17.8	7.0	11	5	鉄輪,赤目	諏
161	内徳利	陶	389SK	F15	-	*13.6	13.4	-	12	鉄輪(鉢縁),鉢縁,17c後半	諏
162	湯少	陶	389SK	F15	-	*10.0	12.0	-	12	鉄輪,内面,18c	諏
163	内耳鉢	土	389SK	F15	24.0	*9.5	-	6	-	鉢木分層内耳鉢B群(褐色)	諏
164	内耳鉢	土	389SK上層	F15	27.0	10.4	16.1	7	11	鉢木分層内耳鉢B群(褐色),底面,板反灰	諏
165	内耳鉢	土	389SK	F15	28.0	9.6	16.7	4	4	鉢木分層内耳鉢B群(褐色)	諏
166	茶甌	土	389SK下層	F15	12.1	*12.2	-	4	-	鉢木分層内耳鉢B群	諏
167	茶甌	土	389SK	F15	-	*17.1	15.1	-	9	鉢木分層内耳鉢B群,やや凸底	諏
168	茶甌	土	389SK	F15	12.6	17.6	16.7	11	10	鉢木分層内耳鉢B群,ほぼ平底	諏
169	焼酎甌	土	389SK	F15	5.8	8.4	5.0	6	9	身A群,内面,赤色あり	諏
170	焼酎甌	土	389SK	F15	5.0	8.0	4.1	11	12	身A群	諏
171	焼酎甌	土	389SK上層	F15	5.0	8.1	4.0	8	12	身A群,内面,赤色あり	諏
172	茶甌	土	389SK	F15	11.6	18.3	15.6	9	10	鉢木分層内耳鉢B群	諏
173	茶甌	土	389SK	F15	12.6	*19.0	17.5	12	2	鉢木分層内耳鉢B群,やや凸底	諏
174	陶鉢	陶	389SK	F15	R1.2~ 1.5	R5.6	R6.9~ 3.6	-	-	鉄輪,63.7g	諏
175	陶鉢	陶	389SK	F15	R1.6~ 1.8	R6.0	R6.2~ 3.7	-	-	鉄輪,76.6g	諏
176	陶鉢	陶	389SK	F15	R1.8~ 1.9	R6.0	R6.2~ 3.4	-	-	鉄輪,34.9g,「X」刻	諏
177	陶鉢	陶	389SK上層	F15	R1.8	R6.8	R6.3~ 4.0	-	-	鉄輪,114.0g	諏
178	土師器皿	土	389SK	F15	15.4	*3.6	-	4	-	口夕口,褐色	諏
179	土師器皿	土	389SK	F15	15.6	3.3	7.4	5	8	口夕口,褐色	諏
180	土師器皿	土	389SK下層	F15	12.1	3.8	6.0	3	12	口夕口,流域で全体が赤色	諏
181	土師器皿	土	389SK	F15	9.5	*1.3	-	3	-	口夕口,褐色,内面に磨着	諏
182	土師器皿	土	389SK	F15	7.8	1.6	4.8	3	6	口夕口,褐色	諏
183	土師器皿	土	389SK	F15	7.9	1.6	4.8	9	12	口夕口,褐色	諏
184	土師器皿	土	389SK	F15	7.6	1.7	4.4	4	6	口夕口,褐色	諏
185	土師器皿	土	389SK	F15	7.8	1.3	4.0	4	6	口夕口,褐色	諏
186	土師器皿	土	389SK	F15	7.8	1.9	4.0	12	12	口夕口,褐色	諏
187	土師器皿	土	389SK	F15	7.6	1.7	4.6	6	8	口夕口,褐色	諏
188	土師器皿	土	389SK	F15	8.0	1.5	4.9	10	12	口夕口,褐色	諏
189	土師器皿	土	389SK	F15	8.1	1.9	4.2	12	12	口夕口,褐色	諏
190	土師器皿	土	389SK	F15	8.6	2.1	4.6	11	12	口夕口,褐色,口縁部スス付着	諏
191	土師器皿	土	389SK	F15	8.8	2.1	4.2	11	12	口夕口,褐色,口縁部スス付着	諏
192	土師器皿	土	389SK	F15a	9.5	2.2	4.8	12	12	口夕口,褐色,口縁部スス付着	諏

土器・陶磁器(4)

E-no.	名称	種別	通称	グリッド	口径 (cm)	高さ	底径	残存率 縦/2	残存率 横/2	備考	産地
193	土師器皿	土	3895K	F15I	9.9	2.4	4.8	11	12	ロクロ、褐色、口縁端にス付着	
194	土師器皿	土	3895K	F15I	10.4	2.3	5.6	3	4	ロクロ、褐色	
195	土師器皿	土	3895K	F15I	9.7	2.6	5.3	9	12	ロクロ、淡褐色、口縁周辺にス付着	
196	土師器皿	土	3895K	F15I	7.3	1.8	4.3	11	12	ロクロ、褐色	
197	土師器皿	土	3895K	F15I	7.8	1.8	4.2	11	12	ロクロ、褐色	
198	土師器皿	土	3895K	F15I	7.2	1.6	4.5	11	12	ロクロ、褐色	
199	土師器皿	土	3895K	F15I	9.7	2.2	5.2	5	12	ロクロ、淡褐色、口縁端にス付着	
200	土師器皿	土	3895K	F15I	9.6	2.0	4.6	6	12	ロクロ	
201	甕	陶	3895K	F15I	-	*5.9	-	2	-	真鍮	京
202	甕	陶	3895K下層	F15I	-	*11.3	-	1	-	真鍮	京
203	染付丸筒	磁	3815K第4~7層、 DB7D	F16,17h	10.2	4.3	3.8	4	8	染付、草花文	肥
204	染付丸筒	磁	3815K	F16h	10.6	4.5	3.8	3	12	染付、折枝松文	肥
205	染付丸筒	磁	3815K、黄土層	F16h	9.8	4.9	3.8	2	6	染付、青花ちらし	肥
206	蕎麦置口	磁	3815K	F16h	7.0	5.8	4.7	6	5	染付、唐松文	肥
207	蕎麦置口	磁	3815K	F16h	7.4	5.9	4.2	6	8	染付、赤、青緑の地に唐松	肥
208	蕎麦置口	磁	3405X	F16h	7.3	6.3	5.2	7	12	染付、土、草花文	肥
209	染付蓋	磁	3815K	F16h	6.6	*2.0	-	4	-	染付、唐草文	肥
210	染付蓋付鉢	磁	3815K第4~7層	F16h	6.6	3.6	3.7	6	12	染付、海松文?	肥
211	染付筒	磁	3815K第4~7層	F16h	-	*4.3	5.8	-	12	染付、五弁花(コニヤク印)	肥
212	染付筒	磁	3815K第4~7層	F16h	15.8	8.2	6.0	7	12	染付、五弁花(コニヤク印)、磨し、透梅	肥
213	上絵付両造	磁	3815K第4~7層	F16h	9.7	6.1	3.6	6	12	上絵付(赤、青、緑、金)、輪軸文、19c前	肥?
214	染付両造	磁	3815K(第4~7層) - O905D	F16h	9.8	*2.0	-	2	-	染付	肥
215	染付蓋	磁	3815K	F16h	11.0	3.9	-	11	-	染付、唐草文	肥
216	大皿	磁	3815K第4~7層	F16h	-	*4.1	12.7	-	2	雲文、高台内底の八角形部	肥?
217	型付皿	磁	3405X輪軸土	F16h	-	*3.7	-	3	-	染付、唐草文、八角形部	肥?
218	染付中皿	磁	3815K	F16h	15.6	2.6	10.0	4	6	染付、折枝松文	肥
219	染付皿	磁	3815K	F16h	13.8	1.3	7.8	2	9	染付、草文、唐草文、五弁花(コニヤク印)、磨し、透梅	肥
220	染付皿	磁	3815K第4~7層	F16h	12.4	2.1	8.8	9	12	染付、草文文?、唐草文、底の目形高台	肥
221	惣利	磁	3815K第4~7層	F16h	2.1	18.0	5.6	12	7	染付、唐草文	肥
222	上絵付筒	陶	3405X	F16h	9.6	5.4	3.6	3	12	反輪、上絵付(赤、緑)、19c前	肥
223	反輪丸筒	陶	3815K第2層	F16h	9.0	5.4	2.9	6	12	反輪、18c第4四半期	肥
224	反輪丸筒	陶	3815K第4~7層	F16h	9.9	5.6	3.4	9	12	反輪、19c前?	肥
225	反輪丸筒	陶	3815K第4~7層	F16h	9.2	5.8	3.2	12	12	反輪、赤、黄緑、19c前	肥
226	反輪丸筒	陶	3815K	F16h	9.9	5.5	4.1	1	12	反輪、18c末	肥
227	反輪丸筒	陶	3815K第2層	F16h	15.3	6.6	3.9	12	12	反輪、18c末	肥
228	上絵付筒	陶	3815K第4~7層	F16h	10.2	*5.4	-	3	-	反輪、上絵付(赤、緑、青)	肥
229	反輪丸筒	陶	3815K	F16h	-	*1.9	3.6	-	12	反輪、高台内底、丸に「真」	肥
230	小形皿	陶	3815K第4~7層	F16h	13.2	5.9	4.0	8	12	反輪、磨成不具合?	肥
231	小形皿	陶	3815K第4~7層	F16h	10.7	6.9	4.2	8	12	反輪、磨成不具合、18c第3四半期	肥
232	鉢か	陶	3815K	F16h	11.4	7.0	4.7	10	12	動物、透明輪軸、雲文、軟貨	京?
233	上絵付筒	陶	3815K	F16h	7.0	*1.6	8.6	7	-	反輪、上絵付(赤、緑)	肥
234	罐形両造	陶	3815K第4~7層	F16h	11.8	2.4	-	5	-	罐形筒、磨成異七趾形赤り	肥
235	罐形両造	陶	3815K第4~7層	F16h	14.4	4.2	7.4	5	12	罐形筒、no.234と類似か	肥
236	色見	陶	3815K第4~7層	F16h	14.2	4.2	-	2	-	反輪、磨成不具合	肥
237	色見	陶	3815K第4~7層	F16h	-	*1.8	3.3	-	9	長石粉、靑片	肥
238	水注壺	陶	3815K	F16h	6.4	4.7	8.4	6	-	透明輪	肥
239	反輪丸筒	陶	3815K	F16h	13.0	7.4	4.4	5	12	反輪輪軸、18c後半	肥
240	反輪丸筒	陶	3815K第3~7層	F16h	13.4	7.6	6.0	4	12	反輪、見地に線無、高台磨削、18c後半	肥
241	反輪丸筒	陶	3815K第1層第4~7層	F16h	14.2	*9.5	-	8	-	反輪、磨削下平にス付着、18c半ば	肥
242	反輪筒	陶	3815K第4~7層	F16h	11.6	8.0	5.0	4	12	反輪、次第線無、高台内底中央、磨削「西月」、7c後半	肥
243	反輪丸筒	陶	3815K第4~7層	F16h	11.0	7.2	4.7	8	5	反輪、白化粧?に鉄粒、19c前	肥
244	蓋形筒	陶	3815K	F16h	9.8	5.5	4.0	10	12	反輪、赤、黄緑、せじ、高台内磨削「山」、18c第4四半期	肥
245	蓋形筒	陶	3815K	F16h	10.2	5.3	4.0	6	5	反輪、18c第4四半期	肥
246	上絵付筒	陶	3815K	F16h	11.8	4.1	3.5	8	8	反輪、上絵付(赤、緑、金)、19c前	肥
247	上絵付筒	陶	3815K	F16h	11.8	4.7	3.7	7	12	反輪、上絵付(赤、緑、金)、19c前	肥
248	反輪皿	陶	3815K第2層	F16h	12.4	4.4	3.8	2	8	反輪、磨削	肥
249	惣利茶碗	陶	3405X輪軸土	F16h	12.7	5.8	4.6	2	12	反輪、底透明輪軸文、18c末~19c前	肥
250	惣利輪軸茶碗	陶	3815K	F16h	12.9	2.9	6.1	12	11	反輪、18c後半	肥
251	惣利輪軸茶碗	陶	3815K第4~7層	F16h	14.0	*3.3	-	3	-	磨削、18c後半か	肥
252	惣利輪軸茶碗	陶	3815K第4~7層	F16h	13.6	*2.1	-	3	-	磨削、18c後半か	肥
253	惣利輪軸茶碗	陶	3815K第4~7層	F16h	14.0	*2.0	-	4	-	磨削、18c後半か	肥

土器・陶磁器(5)

E-no.	器種	種別	通径	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	産地
254	鉄輪鉢花皿	陶	381SK	F16a	14.0	*1.9	-	3	-	鉄輪,15c後半	京
255	反輪皿	陶	381SK	F16a	12.3	4.9	3.4	7	5	反輪,鉄輪,18c第4前半期	佐
256	反輪皿	陶	381SK第2・3層	F16a	12.6	4.6	4.0	6	3	反輪,鉄輪・高橋組,18c第4前半期	佐
257	ひだ皿	陶	381SK第4~7層	F16a	13.0	2.6	7.8	5	8	反輪,高橋組,18c後半	京
258	反輪丸皿	陶	381SK	F16a	12.0	2.2	4.9	6	12	反輪,17c後半	京
259	反輪丸皿	陶	381SK	F16a	12.0	2.5	5.1	5	8	反輪,17c後半	京
260	灯明皿	陶	381SK第2層	F16a	10.6	2.0	4.7	8	12	鉄輪,19c前半	京
261	灯明皿	陶	381SK第4~7層	F16a	11.4	2.1	5.0	6	5	鉄輪,内面と底面にスス付着,19c第1四半期	京
262	灯明皿	陶	381SK	F16a	12.0	2.2	5.5	7	12	鉄輪,19c初	東濃
263	灯明皿	陶	381SK第3層	F16a	9.8	1.3	3.7	12	12	鉄輪,19c前半	京
264	内口	陶	381SK第4~7層	F16a	15.4	10.0	8.0	2	12	鉄輪,反輪二重掛け,付着台,18c前半	京
265	片口	陶	381SK第1層	F16a	15.7	*7.6	-	7	-	反輪,保形下半にスス付着,19c初	京
266	碗鉢鉢	陶	381SK・340SX	F16a	-	*5.4	7.8	-	5	反輪,底面付着「ス」か	京
267	小瓶	陶	340SX	F16a	-	*3.4	3.5	-	12	鉄輪,焼成破砕品	京
268	反輪皿	陶	381SK第1層	F16a	5.2	1.3	-	10	-	反輪	佐
269	反輪皿	陶	381SK	F16a	6.8	1.6	-	4	-	反輪,高橋組,18c初	京
270	鉄輪皿	陶	381SK	F16a	5.0	1.8	最大径 6.5	-	-	鉄輪,反輪二重掛け	京
271	土瓶蓋	陶	381SK第4~7層	F16a	4.1	1.9	最大径 6.5	8	-	鉄輪(片)	京
272	鉢蓋	陶	381SK	F16a	11.9	10.7	5.4	7	12	鉄輪,蓋部穿孔,18c末	京
273	水甕	陶	381SK	F16a	20.6	7.0	14.4	6	3	反輪,鉄輪ちらし,三足付,19c初	京
274	鉄輪鉢	陶	381SK	F16a	24.6	*4.4	-	2	-	反輪,17c末	京
275	反輪鉢有蓋	陶	381SK第2層	F16a	9.0	10.6	7.1	5	12	反輪	京
276	反輪蓋物	陶	381SK・340SX	F16a	10.4	8.0	7.6	4	12	反輪,付着台,18c後半	京
277	反輪蓋物	陶	381SK第2層	F16a	-	*5.7	7.6	-	9	反輪,蓋部穿孔,18c後半	京
278	鐵鉢	陶	381SK第4~7層	F16a	38.8	10.8	-	3	-	鉄輪,丸に「大」刷印,19c後半	京
279	耳付鉢	陶	381SK第2層	F16a	18.8	10.7	9.0	8	2	鉄輪,耳穴2ツヨク,19c前半	京
280	土瓶	陶	381SK第4~7層	F16a	11.4	*3.5	-	1	-	鉄輪,片手付に穿孔	京
281	土瓶	陶	381SK第2,4~7層	F16a	12.4	*11.5	-	4	-	鉄輪,内面鉄輪,18c末	京
282	土瓶	陶	381SK第4~7層	F16a	13.6	*12.0	-	3	-	鉄輪,高橋組管文,19c初	京
283	蓋斗	陶	381SK第4~7層	F16a	12.6	8.5	1.3	4	-	鉄輪(鉄輪) 鉄輪,19c初	京
284	鉄輪鉢斗	陶	340SX	F16a	4.2	*6.4	-	12	-	鉄輪(鉄輪),18c前半	京
285	漆料	陶	381SK	F16a	3.1	*11.6	-	11	-	鉄輪,19c初	京
286	鉢鉢	陶	381SK	F16a	34.0	*16.8	-	5	-	反輪,19c初	京
287	漆器料	陶	381SK	F16a	3.7	*17.1	-	12	-	鉄輪(鉄輪),19c初	京
288	風炉または 火鉢	陶	381SK第2層・ 340SX	F16a	20.4	13.9	16.6	8	6	鉄輪,内径形三足付,19c初	京
289	風炉または 火鉢	陶	381SK第2層	F16a	-	*14.2	17.3	-	12	長石焼,内径形三足付,内面にスス付着,19c初	京
290	火鉢	陶	381SK第2層,第4 ~7層・340SX	F16a	31.2	15.3	16.8	3	4	鉄輪,内面反輪,内径形三足付,内面にスス付着, 口縁部に起付痕,19c初	京
291	火鉢	陶	340SX深褐色土	F16a	-	*10.6	19.5	-	12	三足付,縁面鉄輪	京
292	積木鉢	陶	381SK第4~7層	F16a	18.6	14.2	11.4	9	12	反輪,付着台	東濃
293	鉄輪丸瓦	陶	340SX深褐色土	F16a	8.1	-	-	-	-	外面鉄輪,17c第2前半期	京
294	瓦片	土	381SK第4~7層	F16a	-	*3.0	-	-	-	土製,人形,変作り,個人	京
295	瓦片	土	381SK	F16a	-	6.0	-	-	-	土製,彩色,変作り,天津	京
296	瓦片	陶	381SK	F16a	3.9	3.2	2.0	1	12	陶製,反輪,手付痕,小径	京
297	瓦片	陶	381SK	F16a	正書輪 6.9	7.9	6.9	5.8	-	土製,彩色,変作り,溝室	京
298	瓦片	陶	381SK	F16a	-	*3.8	-	-	-	土製,彩色,変作り,天津	京
299	土師器蓋	土	381SK第4~7層	F16a	14.2	*2.2	-	2	-	ロク口,淡褐色,スス付着	京
300	土師器蓋	土	381SK第4~7層	F16a	10.6	2.1	5.0	2	9	ロク口,褐色	京
301	土師器蓋	土	381SK第4~7層	F16a	*7.4	1.3	*4.4	5	7	ロク口,白~ピンク系	京
302	土師器蓋	土	381SK第4~7層	F16a	8.2	1.6	4.8	12	12	ロク口,白~ピンク系,口縁部にスス付着	京
303	土師器蓋	土	381SK第4~7層	F16a	7.5	1.5	3.5	8	12	ロク口,淡褐色,スス付着	京
304	土師器蓋	土	381SK	F16a	8.0	1.5	4.0	12	12	ロク口,褐色,口縁部にスス付着	京
305	土師器蓋	土	381SK第4~7層	F16a	8.3	1.6	3.3	6	12	ロク口,褐色,口縁部にスス付着	京
306	焼塩蓋	土	381SK	F16a	6.5	7.5	5.4	12	12	身付輪,刷印あり	京
307	焼塩蓋	土	381SK	F16a	7.7	1.8	-	12	-	蓋付類	京
308	焼塩蓋	土	381SK第2層	F16a	7.4	1.8	-	12	-	蓋付類	京
309	焼塩蓋	土	340SX(高橋月夕 7層)	F16,17a	7.9	1.8	-	10	-	蓋付類	京
310	焼塩蓋	土	381SK	F16a	7.2	1.6	-	4	-	蓋付類	京
311	焼塩蓋	土	381SK	F16a	7.5	1.8	-	12	-	蓋付類	京

土器・陶磁器(6)

E-no.	名称	種類	通径	グリッド	口径 (cm)	高さ	底径	残存率 口ノリ2	残存率 底ノリ2	備考	産地
312	埴輪	土	381SK	#16n		7.6	5.4	12	12	身中彫、「鳥居伊羅」刷印	
313	埴輪	黒	381SK第4ノ層	#16n	8.1.8	8.5.5	幅3.4	-	-	口径5.2,5g	
314	埴輪	土	381SK第2層	#16n	33.0	8.9	*14.0	1	-	会子分顔縁跡ノ類(褐色)	
315	埴輪	土	381SK	#16n	38.6	*8.8	-	3	-	会子分顔縁跡ノ類(褐色<淡褐色)	
316	埴輪	土	381SK第2層	#16n	38.6	*8.0	-	1	-	会子分顔縁跡ノ類(褐色<淡褐色)	
317	埴輪	土	381SK	#16n	38.6	*8.2	-	1	-	会子分顔縁跡ノ類(褐色<淡褐色)	
318	甕か	黒	492SK	#15m	*42.7	*9.8	-	1	-	赤色	京
319	甕か	黒	381SK	#16n	*31.0	*7.5	-	1	-	赤色	京
320	甕妻樋口	黒	492SK・381SK	#15m	7.5	6.4	4.8	10	12	染付	肥
321	甕妻樋口	黒	492SK・381SK	#15m	7.5	6.3	4.8	10	12	染付	肥
322	甕妻樋口	黒	492SK・381SK	#15m	7.4	6.1	4.8	12	12	染付	肥
323	甕妻樋口	黒	492SK・381SK	#15m	7.1	6.2	5.1	9	12	染付	肥
324	甕妻樋口	黒	492SK・381SK	#15m	7.5	6.0	4.9	9	12	染付	肥
325	甕妻樋口	黒	492SK・381SK	#15m	7.6	6.2	5.1	11	10	染付	肥
326	染付製打中皿	黒	492SK(黒染)	#15m	21.1	3.1	14.8	7	7	染付,黒染通草文	肥
327	青磁鉢	黒	492SK(黒染)・黒 髹	#15m	32.2	13.2	12.8	10	12	青磁,片切り彫り,黒松文	津波良
328	小軒	黒	492SK(黒染)	#15m	5.5	2.5	3.6	7	12	染付	肥
329	紅皿	黒	492SK(黒染トロン チ)	#15m	2.3	1.0	0.8	4	6		肥
330	青磁彫形香 炉	黒	492・380SK	#15m	9.9	7.3	7.4	12	12	青磁,蛇の目彫形高台	肥
331	焼形湯呑	黒	492SK・380SK	#15m	7.4	5.6	3.3	9	12	染付,竹文,五弁花(コシニキク印)	肥
332	染付製打皿	黒	492SK,赤染,黒 トロンチ	#15m	16.4	3.3	10.1	9	8	染付,口縁,草花文	肥
333	染付皿	黒	492SK	#15m	19.0	*2.3	-	3	-	染付	肥
334	煎茶	黒	492SK	#15m	10.4	3.1	幅5.5	4	-	染付,新小倉人物,竹文	肥
335	煎茶	黒	492SK(黒染)・ 381SK第2層	#15m	10.0	3.2	幅4.1	4	-	内面青磁輪,染付,新小倉,三方割餅香文,方彫 付口縁	肥
336	染付丸瓶	黒	492SK・381SK	#15m,16n	11.4	5.4	4.1	7	7	陶胎染付,桜竹梅文,19c初	京
337	兵庫陸運香 炉	黒	492SK(黒染,青 彫)・312SK	#15m	8.2	5.2	3.3	7	12	灰輪,鉄流,19c初	京
338	染付丸瓶	黒	492SK	#15m	11.0	6.2	3.9	7	12	陶胎染付,桜竹梅文19c初	京
339	刷毛目茶碗	黒	492SK	#15m	13.6	*5.3	-	4	-	19c初	京
340	刷毛目茶碗	黒	492SK(黒染)	#15m	13.3	*5.3	-	3	-	19c初	京
341	刷毛目茶碗	黒	492SK・381SK	#15m,16n	13.6	6.2	4.6	8	12	19c初	京
342	煎茶碗	黒	492SK・312SK	#15m	12.8	8.1	4.8	6	9	寛政戸輪,内面磨輪,竹高台,19c初	京
343	灰輪	黒	492SK	#15m	11.4	*5.9	-	3	-	灰輪,黒髹	京
344	土絵付磁子	黒	492SK・380SK	#15m	11.8	8.2	6.5	2	8	陶胎,土絵付,三足付,趾土や中精流	京?
345	行打皿	黒	492SK	#15m	13.1	2.1	9.4	12	12	志野輪,鉄輪	京
346	小砂瓶	黒	492SK	#15m	10.4	6.2	3.8	4	12	鉄輪,鉄流,若松文,高台内磨輪付に「一」,18c末	京
347	小砂瓶	黒	492SK(黒染)	#15m	8.8	0.2	3.5	3	4	灰輪,19c初	京
348	刷毛目文瓶	黒	492SK(黒染+スト リ)	#15m	-	*2.8	4.9	-	12	灰輪	肥
349	反動丸瓶	黒	492SK	#15m	8.8	5.7	3.1	6	12	鉄輪,19c初	京
350	反動丸瓶	黒	492SK	#15m	11.8	5.6	4.0	3	5	灰輪,鉄輪,赤文,19c初か	京
351	染付皿	黒	492SK	#15m	13.1	3.6	5.5	1	12	陶胎染付,雲輪草花文,18c末	京
352	灰輪	黒	492SK	#15m	-	*3.2	7.5	-	7	灰輪輪,長須輪,18c末	京
353	土瓶	黒	492SK	#15m	7.3	9.6	7.7	12	3	鉄輪,三足付,19c初	京
354	土瓶	黒	492SK(黒染)・ 422SK・598SK	#15m	7.6	10.3	8.1	11	12	鉄輪?三足付,19c初	京
355	土瓶	黒	492SK	#15m	10.9	3.0	7.7	12	12	鉄輪,反動輪付流し,19c初か	京
356	土瓶	黒	492SK	#15m	下磨輪 5.2	1.8	幅大径 8.4	12	12	鉄輪?no.354と類似,19c初	京
357	土瓶	黒	492SK	#15m	7.5	3.7	幅大径 9.3	11	-	灰輪,鉄輪ちらし,19c初	京
358	蓋物茶碗	黒	492SK	#15m	8.8	1.1	-	12	-	灰輪,19c初?	京?
359	鳥獣鉢	黒	492SK(黒染)	#15m	5.5	2.7	5.0	5	6	灰輪,19c初?	京
360	刷毛目茶碗	黒	492SK	#15m	9.1	7.5	4.8	4	12	産部厚丸,磨鉢か,19c初	京
361	反動小瓶	黒	492SK	#15m	1.8	4.0	2.8	12	12	灰輪,神仏具	京
362	鉢	黒	492SK・黒染	#15m	25.0	13.2	16.2	3	3	灰輪,18c末	京
363	鉢	黒	492SK・黒染トロン チ	#15m	14.0	*6.5	-	4	-	灰輪,18c末	京
364	靑油壺	黒	492SK	#15m	2.1	5.7	3.9	12	12	鉄輪,19c初?	京
365	煎茶	黒	492SK	#15m	14.6	*4.8	-	5	-	鉄輪,使用痕あり,19c初	京
366	煎茶	黒	492SK・598SK	#15m	*4.0	6.4	-	7	-	鉄輪,使用痕あり,19c初	京
367	鉢形鉢	黒	492SK	#15m	33.0	-	-	2	-	灰輪,鉄輪ちらし,17c後半	京
368	半瓶	黒	492SK	#15m	31.0	*14.5	-	2	-	鉄輪,反動輪付流し,19c初	京
369	彫形茶入	黒	492SK	#15m	6.6	5.0	4.2	5	7	鉄輪,17c第2西半期	京
370	反動蓋物	黒	492SK(黒染)・ 381SK	#15m,16n	8.4	5.3	6.4	10	12	灰輪,18c初か	京
371	鉄輪香炉	黒	492SK	#15m	13.2	*5.1	-	3	-	鉄輪,黒髹,17c後半	京
372	反動香炉	黒	492SK	#15m	-	*5.1	6.8	-	12	灰輪,磨輪輪,17c 第4西半期	京

土器・陶磁器（7）

E-no.	品種	類別	遺跡	グリッド	口径 (cm)	底高	口径	残存率 口ノ12	残存率 底ノ12	備考	産地
373	灰釉徳利	陶	4925K	F15m	-	*13.0	6.6	-	12	灰釉,19c前半	県
374	徳利	陶	4925K	F15m	34.0	*12.5	-	3	-	鉄釉	県
375	鉄胎大鉢	陶	4925K	F15m	22.0	12.9	17.2	6	9	鉄胎,口縁端に斜打痕,19c前半	県
376	茶碗	陶	4925K	F15m	5.1	4.7	4.0	12	12	鉄胎,肩付,19c初	県
377	茶碗	陶	4925K	F15m	5.1	4.4	4.0	8	12	鉄胎,肩付,19c初	県
378	茶碗	陶	4925K	F15m	4.6	2.6	2.0	12	12	灰釉,19c初	県
379	緑木鉢	陶	4925K	F15m	-	*2.8	19.0	-	6	19c前半	県
380	鉄胎壺	土	4925K (北西)	F15m	4.9	7.7	5.0	11	9	身ノ破	県
381	鉄胎丸瓦	陶	4925K	F15m	厚1.0	-	-	-	-	外面鉄釉,17c第2前半期	県
382	陶鉢	陶	4925K	F15m	厚1.6 1.8	長6.4	幅3.6	-	-	鉄釉,表面磨耗,89.4g	県
383	茶碗	土	4925K (北西)	F15m	14.0	*9.6	-	2	-	鉄木分器跡無目4枚	県
384	磁瓶	土	4925K (南東)	F15m	33.8	8.4	-	10	-	金子分器跡無目2枚のみ(鉄褐色),産地に沢瀉文刷印	県
385	灰皿	土	4925K (南西,北西)	F15m	幅22.0	17.4	奥行13.8	-	-	土製,彩色,手摺りと型作り,漆室	県
386	水皿	磁	4925K	F15m	高4.4	幅2.5	-	-	-	磁器製,鉄釉,型作り,磨少破	県
387	灰皿	土	4925K (南西)	F15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,お多磨	県
388	灰皿	土	4925K	F15m	-	-	-	-	-	土製,彩色,手摺り,福貞産	県
389	灰皿	土	4925K	F15m	-	-	-	-	-	土製,彩色,型作り,大黒	県
390	灰皿	陶	4925K西ベルト	F15m	9.0	*2.1	-	2	-	陶製,鉄釉,漆鉢	県
391	灰皿	土	4925K	F15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,磨り具	県
392	灰皿	土	4925K (北東)	F15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,磨り具,大黒	県
393	灰皿	土	4925K	F15m	-	-	-	-	-	土製,型作り,大黒	県
394	福灰皿	磁	3875K	F15f	10.4	5.6	4.7	5	6	染付,草花文,見込「□」年製,「高台内角僅か	県
395	小瓶	磁	3875K	F15f	9.4	5.0	3.9	3	7	染付	県
396	福灰皿	磁	3875K	F15f	11.1	*5.2	-	6	-	染付	県
397	貞徳御茶碗	陶	3875K	F15f	12.3	6.4	4.0	2	4	灰釉鉄胎,高径,19c前半	県
398	貞徳御茶碗	陶	3875K	F15f	12.0	6.5	4.1	3	12	灰釉鉄胎,高径,19c前半	県
399	陶文皿	陶	3875K	F15f	10.8	3.5	4.0	12	12	灰釉,鉄・貞徳跡,18c末	県
400	陶文皿	陶	3875K	F15f	10.7	3.4	3.7	8	12	灰釉,鉄・貞徳跡,18c末	県
401	行平皿	陶	3875K	F15f	17.4	3.7	-	11	-	灰釉,19c初	県
402	灰皿	陶	3875K	F15f	-	*4.1	7.2	-	12	灰釉,行高台	県
403	鉄胎丸皿	陶	3875K	F15f	12.4	*3.2	-	3	-	鉄胎,口縁端のみあり	県
404	鉄胎香皿	陶	3875K	F15f	6.6	1.0	-	6	-	磨少破	県
405	納戸	陶	3875K	F15f	8.6	5.9	5.1	9	12	灰釉,目打用穴,縁高台,18c後半	県
406	貞徳鉢	陶	3875K	F15f	6.8	3.7	5.4	4	6	灰釉,19c初	県
407	貞徳鉢	陶	3875K	F15f	6.2	3.1	5.0	7	11	灰釉,19c初	県
408	貞徳鉢	陶	3875K	F15f	6.9	4.0	5.3	6	8	灰釉,19c初	県
409	打明茶皿	陶	3875K	F15f	6.8	1.7	3.2	12	12	鉄胎	県
410	陶形漆器	陶	3875K	F15f	7.5	*4.9	-	7	-	灰釉,鉄胎,19c初	県
411	漆分小鉢	磁	3875K	F15f	9.7	5.4	4.0	5.0	12	染付,松竹文,裏鉄	県
412	茶碗	陶	3875K	F15f	10.6	3.7	7.0	6	12	灰釉,19c初	県
413	茶碗	陶	3875K	F15f	9.8	6.7	7.8	10	6	磨少破(裏)・産地に番書	県
414	鉄胎大皿	陶	3875K	F15f	37.0	5.5	-	5	-	灰釉	県
415	手水鉢	陶	3875K	F15f	33.0	*18.7	-	4	-	灰釉,うのふ輪,縁輪掛け分け	県
416	鉄胎壺	陶	3875K	F15f	10.4	9.7	6.5	6	7	鉄胎2重掛け,19c初	県
417	手水ぶし	陶	3875K	F15f	13.4	7.7	9.2	2	8	鉄胎,19c初	県
418	半瓶	陶	3875K	F15f	15.0	*9.7	-	5	-	鉄胎,19c初	県
419	鉄壺	陶	3875K	F15f	13.4	9.2	6.4	12	6	鉄胎	県
420	緑木鉢	陶	3875K	F15f	14.8	12.2	10.7	8	10	鉄胎,産部穿孔,19c初	県
421	式入	陶	3875K	F15f	13.8	*5.1	-	3	-	鉄胎(高平輪),即花,19c初	県
422	平口	陶	3875K	F15f	11.8	8.8	4.5	5	10	灰釉,19c初	県
423	耳付鉢	陶	3875K	F15f	17.8	*7.0	-	4	-	鉄胎,肩穴2ヶ,19c前半	県
424	耳付鉢	陶	3875K	F15f	20.0	9.4	6.8	7	8	鉄胎2重掛け,肩穴1ヶ,19c前半	県
425	耳付鉢	陶	3875K	F15f	24.0	8.3	6.2	4	5	鉄胎,19c前半	県
426	行平皿	陶	3875K	F15f	16.4	*4.9	-	3	-	灰釉,19c初	県
427	徳鉢	陶	3875K	F15f	21.4	10.3	9.8	2	12	鉄胎,19c中葉	県
428	徳鉢	陶	3875K	F15f	21.3	10.1	9.7	3	6	鉄胎,19c中葉	県
429	徳鉢	陶	3875K	F15f	35.0	5.1	-	2	-	鉄胎,19c初	県
430	鉄胎鉢	陶	3875K	F15f	-	*7.5	15.8	-	3	灰釉,縁輪ちらし,17c末	県
431	徳鉢	陶	3875K	F15f	-	*14.1	5.5	-	12	鉄・灰釉掛け分け,19c初	県
432	手水急須	陶	3875K	F15f	6.2	8.3	6.5	12	8	磨少破	県
433	上繪付土瓶	陶	3875K・5965K	F15f	6.4	*10.4	-	4	-	上繪付,梅花文,「玉川」刷印,18c末か	県
434	土瓶	陶	3875K	F15f	8.6	11.5	8.0	8	3	灰釉,磨少破(イッチン),19c中葉	県

土器・陶磁器(8)

E-no.	器種	種別	通称	グッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	産地
435	土甌蓋	陶	3875K-2365D	F15I	4.5	3.1	最大径 6.3	12	-	三好土甌の蓋,19c	
436	土甌蓋	陶	3875K	F15I	5.4	2.9	最大径 7.4	12	-	鉢輪	儀
437	土甌蓋	陶	3875K	F15I	6.9	2.9	最大径 9.6	3	-	灰輪,鉢輪,19c前	蓋
438	土甌蓋	陶	3875K	F15I	7.0	3.0	最大径 9.4	12	-	鉢輪,19c前半	儀
439	土甌蓋	陶	3875K	F15I	5.4	2.6	最大径 9.2	5	5	灰輪,no.434と組,19c前	
440	磁種不明	陶	3875K	F15I	9.2	2.4	-	8	-	摩訶,手捻り,外側に巾目	
441	蓋	陶	3875K,3885K	F15I	7.2	1.4	-	11	-	蓋部,no.442と組,19c中葉か	蓋
442	煎茶鉢か	陶	3875K	F15I	7.3	5.9	7.3	4	5	湯桶,19c中葉か	蓋
443	水鉢	陶	3875K	F15I	最大径 20.6	*2.4	-	2	-	鉢輪,19c前	蓋
444	火鉢	陶	3875K	F15I	20.0	9.5	-	6	-	鉢輪,19c前	蓋
445	火鉢	陶	3875K	F15I	-	*4.2	15.0	-	12	鉢輪二重輪,蓋部三足内側にひご穴あり,19c前	蓋
446	磁種か	陶	3875K	F15I	33.0	*4.3	-	2	-	鉢輪,19c前	蓋
447	不明	陶	3875K	F15I	-	-	-	-	-	染付,摩訶と高文か,大型の彫形磨器か	
448	台か	陶	3875K	F15I	7.4	3.5	-	10	-	染付,竹魚巻と牡丹文,型打成形,六角形,側面3面に彫透し穴	
449	磁具	陶	3875K	F15I	*3.2	-	-	-	-	土製,形名不明,蓋部	
450	磁具	陶	3875K	F15I	*4.4	-	-	-	-	土製,形名不明,蓋部	
451	燈伊	陶	3875K	F15I	16.7	9.2	-	2	-		蓋
452	蓋	陶	3875K	F15I	-	*8.4	-	2	-	赤物	蓋
453	燈伊	土	3875K-2365D	F15I	22.7	21.5	19.0	10	12	黒焼,二重燈伊,蓋面に「寿」刻印	
454	目皿	土	3875K	F15I	10.4	*1.4	-	2	-	黒焼,口クロ,底色なし	
455	目皿	土	3875K	F15I	-	-	-	-	-	黒焼,口クロ,底色あり	
456	磁種	土	3875K	F15I	37.9	*6.0	-	3	-	金字磨機D6種か(淡褐色),外蓋口縁部付近ナツ	
457	磁種	土	3875K	F15I	40.0	9.0	9.0	6	5	金字磨機L種(淡褐色),蓋部に高文刻印(不明瞭)	
458	磁種	土	3875K	F15I	41.5	6.1	-	4	-	金字磨機L種か(褐色),外蓋口縁部付近ナツリ	
459	磁種	土	3875K	F15I	44.8	*4.1	-	1	-	金字磨機L種か(褐色),外蓋口縁部付近ナツリ	
460	型打蓋	磁	4135K(7番)	F16K	-	*3.2	-	1	-	染付,唐文文	蓋
461	青磁香炉	磁	4135K	F16K	8.8	*6.2	-	4	-	青磁輪	蓋
462	磁種向付	陶	4135K	F16K	-	*2.7	9.3	-	4	磨肌,鉢輪有蓋(赤袋?),型打,付高台,17c 第1回半葉	
463	灰輪磨折筒	陶	4135K	F16K	11.7	4.7	4.0	3	1	灰輪,寸なし,18c後半	蓋
464	灯明受皿	陶	4135K	F16K	9.1	2.0	4.0	12	12	鉢輪,19c前	蓋
465	灰輪蓋	陶	4135K	F16K	-	*2.6	-	-	-	灰輪,17c	蓋
466	茶碗	陶	4135K	F16K	5.2	4.3	3.9	12	12	鉢輪,脚付	蓋
467	茶碗	陶	4135K	F16K	5.3	4.2	3.9	12	12	鉢輪,脚付	蓋
468	花瓶か	陶	4135K	F16K	-	*10.1	9.6	-	3	磨肌,側面筋みあり,平底	蓋付?
469	写付蓋	陶	4135K	F16K	20.8	*7.9	-	3	-	鉢輪,19c中葉	蓋
470	磨肌	磁	4135K	F16K	6.8	2.5	-	3	-	染付,「蓮花年輪」,19c後期	蓋
471	平盤	陶	4135K-3505K	F16K-15,16	16.0	6.5	6.0	10	12	染付,蓋部赤雲文か,19c後期	蓋
472	カッパ足磁	陶	4135K	F16K	13.2	1.9	7.5	6	7	夕口片青磁,鉢輪,高台内「春先製」焼,19c後期	蓋
473	弁	磁	4135K	F16K	15.6	6.4	5.4	11	12	夕口片青磁,鉢輪,19c後期	蓋
474	皿	磁	4135K	F16K	10.8	2.2	6.3	12	12	夕口片青磁,鉢輪,径に筋,20c初	蓋
475	行平皿	陶	4135K	F16K	18.0	4.2	-	2	-	磨色焼,裏面に刻印,19c後期	蓋
476	磨肌磨	陶	4135K	F16K	35.4	*5.3	-	2	-	灰輪,磨機ちりし,17c後半	蓋
477	茶碗	陶	4135K	F16K	26.9	*9.9	-	2	-	鉢輪,18c	蓋
478	蓋物か	陶	3805K	F15m	9.6	10.2	6.0	7	12	灰輪,高台付磨機輪,18c末	蓋
479	灰輪蓋	陶	3805K	F15m	10.4	1.6	-	4	-	灰輪,18c後半	蓋
480	灰輪水盥	陶	3805K	F15m	底*4.6	輪*3.7	-	-	-	灰輪,磨器	蓋
481	磨機	陶	3805K	F15m	底1.7	輪5.6	輪3.9	-	-	磨機,「X」刻印,9.4.8g	蓋
482	磨機蓋物	陶	4715K	F15I	9.8	6.8	5.2	9	12	灰輪,鉢輪,18c前半	蓋
483	染付蓋	磁	4715K	F15I	5.3	2.0	2.4	4	-	染付	蓋
484	写付蓋	陶	4715K	F15I	15.4	*4.5	-	2	-	鉢輪,19c中葉	
485	土師磨器蓋	土	1535K	F16m	9.0	1.2	5.6	12	12	口クロ,白色	
486	土師磨器蓋	土	1535K	F16m	9.1	1.4	5.4	12	12	口クロ,白色,蓋部磨器	
487	灰瓦なし	陶	5985K	F15m	6.2	8.2	7.0	9	12	磨 - 灰輪磨機付付,18c後半	蓋
488	磨肌磨	土	5985K	F15m	5.5	8.2	5.4	9	8	磨肌磨	
489	尾呂茶碗	陶	5985K	F15m	10.5	6.9	5.4	6	12	鉢輪,17c後半	蓋
490	灰輪磨機	陶	5985K	F15m	-	*2.8	5.4	-	6	灰輪,高台内「小松吉」印	蓋
491	磨機	陶	4045K	F15K	5.0	4.1	3.9	3	12	鉢輪,磨機	蓋

土器・陶磁器(9)

E-no.	品類	種別	遺構	グリッド	口径 (cm)	底高	底径	残存率 口ノ12	残存率 底ノ12	備考	発地
492	美濃	陶	405SK	F15k	5.0	4.4	4.0	-	12	鉄輪, 脚付	窯
493	青磁鉢	陶	405SK	F15k	14.4	5.2	6.1	4	-	青磁鉢, 型付, 眉目文, ガラス継あり	窯
494	陶鉢	陶	535SK	F15k	丸1.7	高6.6	幅4.5	-	-	焼跡, 105.1g	窯
495	水甕	陶	535SK	F15k	-	*9.0	19.7	-	3	鉄輪, 継, 縁輪跡, 肩付, 19c前半	窯
496	水甕	陶	535SK	F16b	-	*11.5	20.7	-	5	鉄輪, 縁輪, 19c	窯
497	磁形湯呑	陶	525, 535SK	F16b	7.7	5.8	3.8	6	12	染付, 手摺, 心松葉文	窯
498	小鉢	陶	525SK	F16b	5.7	3.5	1.9	2	2	染付, 唐文	窯
499	反輪陶筒	陶	432, 502, 535SK	F15k-15, 16k	-	*14.1	-	-	-	鉄輪, 18c後半	窯
500	鉄輪唐皿	土	411SK	F15k	6.3	1.7	-	9	-	唐A類	窯
501	磁鉢	陶	411SK	F15k	-	*7.0	-	1	-	鉄輪, 17c後半	窯
502	衣鉢底陶	陶	505SK	F16am,n	-	5.4	-	9	-	鉄輪, 高, 浅台内「唐水」印	窯
503	反輪陶	陶	505SK	F16am,n	-	*2.3	4.1	-	5	鉄輪	窯
504	染付唐	陶	練土	F15m	8.8	*3.1	-	6	-	染付	窯
505	小鉢	陶	練土(顔色物類)	F15k	8.5	4.5	3.1	1	9	染付, 五弁文(コンニャク印), 松葉文	窯
506	磁形湯呑	陶	427SK・535SK・599SK	F15m	7.1	*4.8	-	11	-	染付, 文	窯
507	染付唐	陶	北野トレンチ	F15k	-	*1.3	6.0	-	4	染付, 吉祥文字	窯
508	磁形湯呑	陶	北野トレンチ	F15k	9.0	2.7	4.2	5	11	透甲輪, 口縁, 唐縁, 縁輪	窯
509	衣鉢底陶	陶	北野トレンチ	F15k	-	*1.2	5.6	-	7	鉄輪, 高, 浅台内	窯
510	陶形湯呑	陶	練土	F15k	8.7	*5.5	-	3	-	鉄輪, 高, 浅台内, 19c初	窯
511	行平皿	陶	練土	F15k	13.9	3.2	-	5	-	19c前半	窯
512	反輪唐	陶	北野トレンチ	F15m	13.4	*2.5	-	4	-	鉄輪, 18c末	窯
513	反輪唐	陶	練土(顔色物類)	F15m	5.5	1.2	下部 3.2	12	-	鉄輪	窯
514	反輪小皿	陶	北野トレンチ	F15m	7.0	1.8	3.8	7	11	鉄輪, 19c初～中葉	窯
515	美濃	陶	練土(顔色物類)	F15m	5.1	4.0	3.5	8	12	鉄輪, 脚付	窯
516	美濃	陶	北野トレンチ	F15k	4.9	2.2	2.8	12	12	鉄輪	窯
517	二形湯呑 (狭小)	陶	練土	F15k	25.0	8.0	10.0	2	10	透甲輪, 印花, 足花, 蛇の目輪, 磁目, 砂目積	窯
518	磁形湯呑	陶	北野トレンチ	F15k	12.6	2.6	7.2	3	12	鉄輪, 縁輪, 高, 浅台, 18c前半	窯
519	反輪水注	陶	練土	F15k	-	*7.2	8.1	-	12	鉄輪, 17c後半	窯
520	植木鉢	陶	練土	F15k	-	*5.8	-	3	-	鉄輪(動物), 脚付文	窯
521	大酒甕	瓦葺	北野練土	F15k	-	*9.8	19.0	-	4	-	-
522	陶鉢	陶	練土	F16k	丸1.7	高5.8	幅3.2~ 3.7	-	-	焼跡, 0.1g	窯
523	陶鉢	陶	北野トレンチ	F15m	-	高6.1	幅3.5	-	-	焼跡, 表面積約*42.4g	窯
524	唐	陶	練土	F15m	-	*13.9	-	3	-	赤物	窯
525	鉄輪唐皿	土	北野トレンチ	F15m	6.5	1.6	最大径 7.6	4	-	唐B類	窯
526	唐鉢	土	練土(顔色物類)	F15k	4.5	6.8	3.0	1	4	唐C類	窯
527	伝真	陶	練土(顔色物類)	F15k	-	*1.8	*3.2	3	-	磁形鉢, 上縁付, 陶	窯
528	伝真	土	練土(顔色物類)	F15k	5.0	2.1	1.9	6	12	土製, 彩色, 口口	窯
529	伝真	陶	練土(顔色物類)	F15k	高*6.7	-	-	-	-	鉄輪, 高, 縁(縁輪付)	窯
530	染付丸筒	陶	1105K	F15k	8.7	4.4	3.4	10	12	染付	窯
531	香粉口	陶	1105K	F15k	7.4	5.7	4.8	1	9	染付, 唐文	窯
532	紅蓋	陶	1105K	F15k	5.2	1.2	1.5	3	12	窯	窯
533	白磁小鉢	陶	1105K	F15k	7.1	5.3	4.2	3	8	白磁鉢, 型付	窯
534	水甕	陶	1105K	F15k	-	2.3	-	-	-	染付, 文	窯
535	上縁付湯呑	陶	1105K	F15k	8.9	*6.1	-	5	-	鉄輪, 上縁付(赤), 唐文, 磁形	窯
536	磁形湯呑	陶	1105K	F15k	8.1	*5.3	-	5	-	鉄輪, 縁輪, 18c末~19c初	窯
537	上縁付小筒	陶	1105K	F15k	6.7	3.8	2.2	6	12	鉄輪, 高, 浅台内, 高, 縁輪, 火ぶくれあり, スス付	窯
538	反輪陶	陶	1105K	F15k	12.0	7.2	5.0	11	12	高, 17c半ば～後半	窯
539	反輪丸筒	陶	1105K	F15k	-	*7.8	7.0	-	8	鉄輪縁輪, 18c前半	窯
540	反輪丸筒	陶	1105K	F15k	-	*3.3	7.0	-	12	鉄輪, 高, 浅台内, 肩付, 口口, 18c前半	窯
541	磁形陶	陶	1105K	F15k	12.0	6.3	4.0	9	12	鉄輪, 縁輪唐文	窯
542	小形筒	陶	1105K	F15k	11.1	6.2	4.8	9	10	鉄輪, 縁輪唐文, 18c, 第3四半期	窯
543	長石釉陶	陶	1105K	F15k	9.9	6.2	4.3	12	12	長石釉, 縁輪, 高, 浅台, 18c後半	窯
544	反輪唐	陶	1105K	F15k	5.2	1.1	-	12	-	鉄輪	窯
545	反輪唐	陶	1105K	F15k	10.4	2.4	10	-	-	鉄輪, 19c初	窯?
546	反輪唐	陶	1105K	F15k	7.7	3.3	高 3.9	12	-	鉄輪	窯
547	反輪唐	陶	1105K	F15k	10.0	*2.0	-	3	-	鉄輪, 縁輪	窯
548	内口口	陶	1105K	F15k	-	*9.2	8.4	-	12	鉄輪(内外面縁輪), 平底	窯
549	手あぶり	陶	1105K	F15k	-	*7.8	7.0	-	12	鉄輪, 19c初	窯
550	鍋	瓦葺	1105K	F15k	-	*9.1	-	1	-	-	窯
551	陶文甕	陶	1105K・103SK・ 練土	F15k	11.6	4.5	4.1	5	7	鉄輪, 縁輪, 高, 浅台, 18c第3四半期	窯
552	打物唐	陶	1105K	F15k	10.4	2.5	4.5	11	12	窯	窯
553	打物唐	陶	1105K	F15k	11.8	2.1	6.3	3	2	鉄輪	窯
554	唐鉢	陶	1105K	F15k	11.5	2.7	6.0	12	12	鉄輪, 縁輪唐文, 18c第2四半期	窯
555	唐鉢	陶	1105K	F15k	11.8	2.6	5.4	12	12	鉄輪, 縁輪唐文, 18c第2四半期	窯
556	土甕(大入り に転用)	陶	1105K	F15k	10.4	11.7	9.6	12	9	鉄輪, 縁輪唐文, 口縁に肩付, 19c初	窯
557	水甕小	陶	1105K	F15k	-	6.0	14.8	-	3	鉄輪, 三足付	窯
558	半甕	陶	1105K	F15k	31.4	*6.8	-	1	-	鉄輪	窯

土器・陶磁器 (10)

E-no.	名称	種別	通称	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	産地	
559	北野塚部内 村	陶	1109K・0473D	F15t	13.3	6.0	6.0	8	12	罐形, 鉄線付に煎焼, 胎高台, 19c前半	東	
560	徳利	陶	1109K	F15t	-	*12.8	6.0	-	-	鉄・灰線付け分け, 18c前半	東	
561	鉢	陶	1109K	F15t	-	*10.6	-	-	-	鉄粉, 19c前	東	
562	土師器皿	土	1109K	F15t	6.6	1.5	3.3	12	12	ロク口, 褐色, スス付着	東	
563	土師器皿	土	1109K	F15t	8.3	1.7	4.5	7	8	ロク口, 褐色	東	
564	土師器皿	土	1109K	F15t	10.3	2.3	4.8	10	12	ロク口, 褐色	東	
565	土師器皿	土	1109K	F15t	10.2	1.9	5.4	5	4	ロク口, 淡褐色	東?	
566	鉄燗器蓋	土	1109K	F15t	7.3	1.9	-	-	12	蓋口縁, 褐色付着物		
567	鉄燗器	土	1109K	F15t	6.1	7.7	5.4	12	12	赤口縁, 「東洋伊織」印		
568	鉄燗器	土	1109K	F15t	5.4	6.0	2.9	12	12	赤口縁		
569	鉄燗器	土	1109K	F15t	6.4	7.3	5.8	6	7	赤口縁, 「東洋伊織」印		
570	反動小瓶	陶	1109K	F15t	2.4	6.5	2.4	9	12	反動, 神仏具	東	
571	反動小瓶	陶	1109K	F15t	-	*4.9	2.5	-	12	反動, 神仏具	東	
572	茶碗	陶	1109K	F15t	4.4	2.4	2.7	12	12	反動	東	
573	茶碗	陶	1109K	F15t	4.7	2.2	2.0	12	12	反動	東	
574	茶碗	土	1109K	F15t	32.0	8.9	*16.8	6	7	赤子分級物, 胎片破		
575	茶碗	土	1109K	F15t	13.2	14.1	17.3	12	11	赤木分級物, 胎片破 (淡褐色)		
576	茶碗	土	1109K	F15t	15.4	*4.1	-	-	8	-	赤木分級物, 胎片破 (4割)	
577	茶碗	土	1109K	F15t	-	*8.5	16.0	-	4	赤木分級物, 胎片破 (4割)		
578	玩具	土	1109K	F15t	幅6.5	幅3.4	奥行4.7	-	-	土製, 彩色, 型作り, 漆室 (黒緑)		
579	玩具	土	1109K	F15t	3.5	1.3	-	-	12	土製, 彩色, 手造り, 通		
580	玩具	土	1109K	F15t	幅*4.1	幅3.2	-	-	-	土製, 型作り		
581	玩具	土	1109K	F15t	4.2	3.7	4.3	4	12	土製, 型作り, 漆室		
582	玩具	土	1109K	F15t	幅4.1	-	-	-	-	土製, 型作り, 漆室		
583	玩具	土	1109K	F15t	幅4.5	-	-	-	-	土製, 型作り, 漆室		
584	玩具	土	1109K	F15t	幅6.2	幅4.4	-	-	-	土製, 型作り, 漆室		
585	玩具	土	1109K	F15t	幅3.1	幅3.3	奥行7.9	-	-	磁器製, 上掛け (赤黒緑), 型作り, 漆室	東	
586	瓦片茶碗	陶	0855K	F15a	13.0	7.5	6.1	10	12	鉄粉, 18c前	東	
587	鉄燗器	陶	0855K	F15a	-	*8.6	5.7	-	5	鉄粉, 高台付	東	
588	徳利分茶碗	陶	0855K	F15aL	-	*6.2	5.9	-	5	鉄・灰線付け分け, 胎土磨	東?	
589	反動丸瓶	陶	0855K	F15aL	7.7	4.6	2.4	1	12	反動	東	
590	染付丸瓶	陶	0855K	F15a	-	*2.6	4.5	-	5	染付, 黒目	東	
591	香堂茶碗	陶	0855K	F15a	-	*1.4	5.0	-	3	反動, 17c後半	東	
592	輪奘皿	陶	0855K・716SK	F15a	13.2	3.2	6.9	12	12	反動, 鉄線跡し掛け, 高台内 (中) 煎焼, 17c前3割 手製	東	
593	輪奘皿	陶	0855K	F15a	13.3	3.8	6.5	12	12	反動, スス付着, 17c後半	東	
594	輪奘皿	陶	0855K	F15a	13.2	2.9	7.2	4	12	17c後半	東	
595	鉄燗丸瓶	陶	0855K	F15aL	11.6	4.2	5.2	2	4	鉄粉, 19c前 (遺入)	東	
596	灯明皿	陶	0855K	F15t	10.8	2.6	6.0	11	12	反動, 蓋部跡がズリ, 19c前 (遺入)	東	
597	香炉	陶	0855K	F15a	-	*4.3	8.4	3	1	鉄粉 (内面), 灰粉 (内面), 海緑, 三足付, 17c後半	東	
598	台付鉢	陶	0855K	F15a	-	*4.6	6.8	-	9	赤線跡, 高脚, 17世紀前	東	
599	椀鉢	陶	0855K	F15a	-	*3.1	4.0	-	6	鉄粉, 高台内「目」印, 煎目跡か	東?	
600	椀鉢	陶	0855K	F15a	-	*5.8	-	-	1	鉄粉, 17c後半	東	
601	鉢	陶	0855K	F15aL	-	*9.0	-	-	1	鉄粉, 19c前 (遺入)	東	
602	鉄燗鉢	陶	0855K	F15a	27.0	*5.0	-	-	2	-	反動, 鉄粉, 煎焼し掛け, 17c後半	東
603	茶碗	土	0855K, 0473K	F15aL	13.0	16.4	16.0	12	12	赤木分級物, 胎片破 (4割)		
604	土師器皿	土	0855K	F15t	7.4	2.0	3.5	10	12	ロク口, 褐色, スス付着	東	
605	土師器皿	土	0855K	F15a	7.4	1.9	4.1	11	12	ロク口, 褐色, スス付着	東	
606	土師器皿	土	0855K	F15t	7.6	1.7	4.0	10	12	ロク口, 褐色	東	
607	土師器皿	土	0855K	F15a	7.6	1.6	4.2	12	12	ロク口, 褐色, スス付着	東	
608	土師器皿	土	0855K	F15a	7.8	2.1	4.0	12	12	ロク口, 褐色	東	
609	土師器皿	土	0855K	F15a	9.6	2.3	5.6	7	12	ロク口, 褐色, スス付着	東	
610	染付丸瓶	陶	166SK	F15a	10.8	7.2	4.5	2	12	染付	東	
611	鉄燗器	陶	166SK	F15a	10.5	7.5	4.0	1	12	染付	東	
612	輪奘皿	陶	166SK	F15a	14.7	4.1	6.4	3	6	厚い白裏粉, 裏入り, 18c半ば～後半	東	
613	小鉢	陶	166SK, 0473D, トレソ	F15a	6.9	4.3	2.9	7	12	染付, 黒文, 黒底	東	
614	染付中皿	陶	166SK	F15a	21.7	*3.0	-	-	4	-	染付	東
615	反動鉢	陶	166SK	F15a	3.8	1.2	-	-	12	反動, 17c前2割半	東	
616	高脚	陶	166SK	F15a	R1.7	幅2.2	幅3.6	-	-	鉄粉, 裏面磨耗, 59.4g	東	
617	高脚	陶	166SK	F15a	R1.8	幅2.2	幅4.1	-	-	鉄粉, 裏面磨耗, *56.6g	東	
618	鉄燗器蓋	土	166SK	F15a	4.9	6.9	3.6	6	12	赤口縁, 内面褐色	東	
619	土師器皿	土	166SK	F15a	9.4	1.9	4.2	11	10	ロク口, 淡褐色, スス付着	東	
620	土師器皿	土	166SK	F15a	11.0	1.4	6.6	5	7	ロク口, 淡褐色, 中央に穿孔, スス付着	東	
621	土師器皿	土	166SK	F15a	12.2	2.2	5.5	10	12	ロク口, 褐色, スス付着	東	
622	土師器皿	土	166SK	F15a	13.2	3.0	8.0	1	9	ロク口, 淡褐色, 見込中央ユビナガ, 蓋部に煎焼 痕, 手製	東	
623	京焼風皿	陶	124SK	F15a	12.7	4.8	4.2	5	12	反動, 高台内印	東	
624	染付丸瓶	陶	166SK	F15a	9.8	5.3	3.9	2	3	染付	東	
625	鉄燗器	陶	166SK	F15a	12.4	2.5	7.6	3	5	反動跡, 鉄粉, 17世紀前	東	

土器・陶磁器 (11)

E-no.	品名	種別	原料	グリッド	口径 (cm)	高さ	底径	残存率 口ノ12	残存率 底ノ12	備考	産地	
626	土師器皿	±	1249K	F15a	11.4	2.3	5.4	11	12	口ノ口、褐色。口縁部掘入式付着		
627	土師器皿	±	1249K	F15a	10.8	2.5	5.6	11	12	口ノ口、褐色。内面全体に黒付着物		
628	土師器皿	±	1249K	F15a	11.7	2.2	6.2	12	12	口ノ口、褐色		
629	土師器鉢	±	3349K	F15a	13.9	3.2	7.0	11	12	口ノ口、淡褐色。底部に粘土質スス付着		
630	伊予小	陶	1639K	F15a	-	*2.0	7.6	-	5	灰胎。黒胎。高台内に墨書。19c初	黒	
631	中野	陶	0629K	F15a	-	*22.0	19.8	*15.3	5	3	鉄胎。特製。19c	黒
632	瀬川付丸	陶	7165K	F15a	-	-	*6.1	-	-	-	17c末	黒
633	土師器皿	±	7165K	F15a	10.5	2.6	5.8	8	12	口ノ口、淡褐色。スス付着		
634	灰胎皿	陶	1689K	F15r	8.6	3.6	-	4	-	灰胎。黒胎。高台内墨書。18c	黒	
635	灰胎丸皿	陶	1115K	F15r	-	*2.8	4.0	-	12	灰胎。黒胎。高台内墨書。18c末	黒	
636	有蓋器	陶	1699K	F15t	5.0	7.7	4.6	9	12	鉄胎。19c初	黒	
637	灰胎香盤	±	1489K	F15t	7.4	1.7	-	10	10	鉄胎	黒	
638	打明瓦	陶	1489K	F15t	12.0	2.7	5.6	2	5	鉄胎	黒	
639	鉢か	陶	1949K-1969K	F16qr-17a	-	*3.4	-	1	-	染付。外側に焼文。大型の鉢か。19c初～中葉	黒	
640	土瓶	陶	1749D-3159K-4929K-5989K	F16r	7.8	*8.5	-	1	-	灰胎。黒胎。19c初か	黒	
641	染付皿	陶	0259D	F16a	5.0	1.1	-	5	-	染付。土物作り	黒	
642	加工内輪	陶	0259D	F16a	8.2	0.8	8.2	0.8	-	鉄胎。陶片。表面研削	黒	
643	染付丸皿	陶	0479K-(1109K)	F15t	10.0	4.8	3.8	1	6	染付。菊文。ちらし	黒	
644	灰胎鉢	陶	0479D-0049K	F15t	17.6	*9.5	-	3	-	灰胎。18c末	黒	
645	染付皿	陶	0479D	F15t	-	*10.7	8.9	-	6	染付	黒	
646	灰胎丸皿	陶	0729K	F15a	11.6	6.5	5.1	6	12	灰胎。鉄胎。18c後半	黒	
647	火鉢の蓋付	瓦葺	1589K	F15a	21.5	*14.0	-	3	-	焼成途中で中絶。表面に縦かな割目	黒	
648	染付丸皿	陶	標記	F15t	8.3	4.2	2.3	3	12	染付	黒	
649	染付丸皿	陶	標記・北斐トレンチ	F15t	9.2	4.9	3.6	9	1	染付	黒	
650	染付丸皿	陶	標記	F15t	-	*4.9	5.2	-	3	染付。赤鳥文	黒	
651	染付皿	陶	北斐トレンチ	F15a	11.0	6.5	6.3	11	6	染付。赤鳥文	黒	
652	染付皿	陶	北斐トレンチ	F15a	-	-	-	-	-	染付	黒	
653	上絵付皿	陶	北斐葉・標記	F15t	10.5	5.3	3.0	12	12	灰胎。上絵付(赤、青、緑)。18c末	黒	
654	上絵付皿	陶	北斐トレンチ	F15t	-	*4.5	2.9	-	12	灰胎。上絵付(緑)。19c初	黒	
655	仏具	陶	標記	F15t	-	*3.0	4.8	-	12	灰胎。19c初～中葉	黒	
656	上絵付小皿	陶	北斐トレンチ	F15r	-	*4.8	2.4	-	12	灰胎。上絵付(赤、緑)。神仏具。19c初か	黒	
657	灰胎丸皿	陶	標記(北斐葉)	F15t	12.6	4.4	5.7	2	5	灰胎。淡褐色。台内に「印」	黒	
658	御茶碗	陶	標記	F15t	*12.5	6.3	4.6	3	6	灰胎。黒胎。鉄文	黒	
659	辻鉢茶碗	陶	標記	F15a	10.4	*9.4	-	3	-	鉄胎。19c初	黒	
660	藤鉢茶碗	陶	北斐葉	10.3	5.9	4.2	8	12	灰胎。鉄胎。18c後半	黒		
661	水皿	陶	標記	F15t	-	3.5	6.3	-	1	鉄胎。灰作	黒	
662	赤野小皿	陶	北斐トレンチ	F15a	-	*3.5	5.2	-	4	赤野。磨り込み高台。17世紀前半	黒	
663	灰胎皿	陶	東海地区	-	11.7	2.5	6.8	8	12	灰胎。鉄胎	黒	
664	陶文皿	陶	北斐トレンチ	F15a	-	*3.1	4.0	-	11	灰胎。黒胎。高直。18c末	黒	
665	辛味次か	陶	北斐トレンチ	F15a	-	3.7	-	-	-	灰胎。鉄胎。小鉢で焼成。18c末	黒	
666	小鉢	陶	北斐	F14.15a	6.7	3.5	4.0	5	7	長石胎。底部回転ケズリ	黒	
667	打明瓦	陶	北斐葉	8.0	5.3	5.4	11	12	鉄胎。厚肉高台。18c中葉	黒		
668	灰胎	陶	F15a	4.6	2.2	2.4	7	12	灰胎	黒		
669	灰胎	陶	標記	F15t	4.0	2.3	2.1	5	12	灰胎	黒	
670	灰胎	陶	標記	F15t	4.0	2.1	2.0	12	12	灰胎	黒	
671	灰胎皿	陶	北斐トレンチ	F15r	下線部 11.0	3.0	最大径 13.9	8	-	灰胎	黒	
672	土瓶蓋	陶	北斐	F14.15a	8.8	1.5	-	6	-	灰胎	黒	
673	灰胎皿	陶	標記	F15a	6.0	1.5	-	11	-	灰胎	黒	
674	赤野丸皿	陶	標記	F15a	8.6	2.0	5.2	5	12	赤野。磨り込み高台。17世紀前半	黒	
675	打明瓦	陶	標記	F15t	10.8	2.3	5.9	9	12	鉄胎。19c初	黒	
676	打明瓦	陶	北斐トレンチ	F15t	11.2	1.7	5.5	7	6	鉄胎。黒胎。19c初	黒	
677	内口	陶	標記	F15t	17.4	9.7	7.1	5	12	灰胎。黒胎。ちらし。18c末	黒	
678	灰野香炉	陶	北斐トレンチ	F15a	10.2	*6.0	-	1	-	鉄胎	黒	
679	灰野香炉	陶	標記	F15a	12.6	7.2	8.3	3	5	灰胎。黒胎。高直。18c	黒	
680	土瓶	陶	標記	F15t	9.9	*10.5	-	11	-	鉄胎(特製)。鉄胎(内面)。19c初	黒	
681	徳利	陶	北斐トレンチ	F15t	3.1	19.0	6.2	12	12	灰・鉄胎。磨りけり。18c初	黒	
682	灰胎徳利	陶	北斐葉・東海地区	2.9	*4.7	-	12	-	-	灰胎。黒芝形。灰胎	黒	
683	手ぬぶり	陶	北斐トレンチ	F15t	10.4	-	13.4	4	3	無胎。芝形	黒	
684	内耳皿	±	標記	F15t	27.8	11.0	*14	8	7	鉄胎。芝形。耳縁に鉄線	黒	
685	土瓶	陶	北斐トレンチ	F15t	-	-	-	-	-	白色無胎。磨り高台	黒	
686	灰胎香	±	北斐トレンチ	F15a	6.3	10.1	-	8	12	身ノ脚	黒	
687	灰胎香	±	1239K	F15t	5.9	7.2	5.4	12	12	身ノ脚。「東洋海運」刷印。内面黒色付着物	黒	
688	土師器皿	±	2259K	F15t	9.9	2.4	5.3	6	9	口ノ口、褐色。スス付着	黒	
689	土師器皿	±	標記	F15t	8.4	2.8	4.9	3	5	口ノ口、褐色。赤	黒	
690	土師器皿	±	標記	F15t	7.2	1.4	3.9	12	12	口ノ口、淡褐色	黒	
691	灰胎	±	北斐トレンチ	F15t	3.8	*3.5	-	12	12	土胎。白色。灰作。19c	黒	
692	灰胎	±	北斐トレンチ	F15t	4.8	1.7	1.7	9	12	土胎。彩色。灰胎	黒	
693	灰胎	±	北斐	F14.15a	4.4	3.5	2.4	5	5	土胎。彩色。手造り。灰	黒	
694	灰胎	±	北斐トレンチ	F15t	8.0	6.0	-	-	-	土胎。灰作。19c	黒	
695	打心磚	陶	標記	F15a	幅3.1	4.2	奥行1.9	-	-	青磁。内面。(磨り高台)	黒	
696	灰胎	±	北斐トレンチ	-	-	-	-	-	-	土胎。灰作。19c。灰胎(被覆)	黒	

土器・陶磁器 (2)

E-no.	品名	種別	産地	グリッド	口径 (cm)	器高	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	産地
697	瓦葺	土	北条	トロンプ	F15c	高さ 45.3	幅4.5			土製,製作日,手造り,瓦	
698	瓦葺	土	北条	トロンプ	F15c	高さ 45.1	幅2.4			土製,製作日,手造り,瓦	
699	瓦葺	土	北条	トロンプ	F15c	高さ 45.3	幅3.4			陶製,跡物,製作日,手造り,産り物	
700	瓦葺	土	北条	トロンプ	F15c	高さ 45.2	幅4.0			土製,製作日,瓦	
701	染付丸瓶	陶	02750-0775K	F18q	10.3	7.8	5.4	11	12		窯
702	小判箱	陶	02750	F18c	幅7.0	1.6	-	5	6	製法不明 黒目 19c前期	窯
703	蕎麦罌口	陶	60250 (褐色土)	F18a	-	*3.2	5.6	-	3	染付	窯
704	磁鉢	陶	60250	F18c	-	*4.0	-	1	-	鉄軸,19c初	窯
705	反動丸瓶	陶	60250	F18c	-	*1.8	4.3	-	4	反動	窯?
706	反動小杯	陶	60250	F18c	6.0	3.4	2.1	5	12	反動	窯
707	反動徳利	陶	60250 (褐色土)	F18cA	-	*2.3	7.4	-	3	反動	窯
708	平あぶり	陶	60250 (褐色土, 黄赤土)	F18a	-	*4.0	-	1	-	鉄軸,19c	窯
709	甕	陶	トロンプ	F18c	-	*12.2	7.2	-	12	反動,19c初~中期	窯
710	染付丸瓶	陶	5535K	F15,16p	11.2	*4.1	-	2	-	染付,no.214納骨と文様類似	窯
711	空行品	陶	1185K	F17p,c	21.0	*3.1	*12.8	3	2	染付	中国
712	蓋	陶	徳丸 (淡草黄赤 ガワ)	F16a	9.8	*1.7	-	4	-	無軸,網褐色	
713	急須	陶	徳丸 (淡草黄赤 ガワ)	F16a	-	*4.7	7.4	-	3	無軸,網褐色	
714	磁鉢	陶	04850	F17p	高さ 14.9	2.3	幅10.7	-	-	鉄軸,19c初	窯
715	反動小瓶	陶	徳丸 (04850)	F17c	2.1	4.7	2.5	12	12	反動,神仏具,19c初	窯
716	染付丸瓶	陶	徳丸 (04850)	F17c	-	*1.9	4.2	-	8	染付,方口スリ線,基台内朱書	窯
717	鉄燗徳	土	08950	F16q	6.0	7.1	5.0	5	12	身筒,「口」割	
718	火鉢	陶	09050	F16q	20.0	9.6	16.2	3	4	鉄軸,産部別	窯
719	平瓦	瓦	3895K	F15p	高さ 30.5	幅28.5	高さ 5.6			本瓦葺,焼互瓦	
720	丸瓦	瓦	3895K	F15c	高さ 33.5	幅16.5- 17.5	高さ 8.0			本瓦葺,焼互瓦	
721	軒丸瓦	瓦	3895K	F15c	高さ 34.5	幅15.5- 16.7	高さ 17.2			本瓦葺,左巻き三巴文,焼文	
722	軒丸瓦	瓦	3895K	F15c	-	-	高さ 18.2			本瓦葺,左巻き三巴紋,12枚文	
723	丸瓦	瓦	3895K	F15c	高さ 33.4	幅17.6	高さ 8.0			本瓦葺	
724	軒様瓦	瓦	3895K (7層)	F15c	軒平厚 4.6	丸径8.6	-			左巻三巴紋,12枚文	
725	軒様瓦	瓦	3895K (7層)	F15c	-	-	-			三子葉紋,唐草文	
726	焼巴	瓦	3815K赤土層	F16a	-	丸径12.6	-			本瓦葺,左巻三巴紋	
727	軒様瓦	瓦	3815K	F16a	軒平厚 4.3	丸径9.7	-			左巻三巴紋,15枚文	
728	軒様瓦	瓦	3815K	F16a	軒平厚 4.8	-	-			三子葉紋,唐草文	
729	軒様瓦	瓦	3815K (4-7層)	F16a	軒平厚 4.8	-	-			唐草文	
730	軒様瓦	瓦	3815K	F16a	軒平厚 4.5	丸径8.8	-			三子葉紋,唐草文 (透化)	
731	軒様瓦	瓦	3815K	F16a	軒平厚 4.2	丸径8.8	-			左巻三巴紋	
732	軒様瓦	瓦	3805K	F15m	軒平厚 4.6	丸径8.9	-			左巻三巴紋,12枚紋,唐草文	
733	軒様瓦	瓦	4925K	F15m	軒平厚 4.5	-	-			三子葉紋,唐草文	
734	軒様瓦	瓦	4925K	F15m	軒平厚 4.1	-	-			三子葉紋,唐草文	
735	軒様瓦	瓦	4925K	F15m	-	丸径7.7	-			左巻三巴文,12枚文	
736	軒様瓦	瓦	4135K	F16a	軒平厚 4.8	-	-			三子葉紋,唐草文	
737	軒様瓦	瓦	4135K	F16a	軒平厚 5.1	-	-			三子葉紋,唐草文	
738	軒様瓦	瓦	4135K	F16a	軒平厚 5.0	-	-			三子葉紋,唐草文	
739	軒様瓦	瓦	4135K	F16a	軒平厚 4.9	-	-			唐草文 (透化),〇に「作」印あり	
740	軒様瓦	瓦	4135K	F16a	軒平厚 5.0	-	-			三子葉紋,唐草文	
741	焼互瓦	瓦	4135K	F16a	幅2.2	-	-			反りなし,厚丸あり	
742	焼互瓦	瓦	4135K	F16a	幅2.4	-	-			反りなし,厚丸あり	
743	焼互瓦	瓦	4135K	F16a	幅1.9	-	-			反りなし,断面少ランク	
744	焼互瓦	瓦	4135K	F16a	幅2.0	-	-			反りなし,断面少ランク	
745	焼互瓦	瓦	4135K	F16a	幅1.6	-	-			反りなし,〇に「=」印	
746	平瓦	瓦	4135K	F16a	幅1.7	-	-			小口割印,〇に「=」印	
747	平瓦	瓦	4135K	F16a	幅2.1	-	-			小口割印,〇に「作」印	
748	平瓦	瓦	4135K	F16a	幅1.6	-	-			小口割印,〇に「作」印	
749	平瓦	瓦	4135K	F16a	幅1.8	-	-			小口割印,〇に「作」印	
750	漆器	陶	08850	F16a,p	*6.4	7.0	3.8	3	12	鉄軸,転写「上」,19c末~20c前期	
751	漆器	陶	08850	F16a,p	7.0	7.1	4.6	6	5	上絵「漆器」,19c末~20c前期少	窯
752	甕	陶	08850	F16a,p	11.2	5.6	4.2	7	12	鉄軸,転写唐草文,20c前期~中期	

土器・陶磁器(13)

E-no.	器種	種別	通身	グリッド	口径 (cm)	高さ	底径	残存率 口/12	残存率 底/12	備考	産地
753	小瓶	陶磁	0885D	F16a	-	*9.9	-	-	-	銅板転写等に「E三」,20c前期	
754	大手付瓶	陶磁	0885D	F16a	10.8	5.7	5.4	10	12	銅板転写等に「E三」,20c前期	
755	大花瓶	陶磁	0885D	F16a	11.4	*9.3	-	3	-	銅板転写等に「E三」,20c前期	
756	陶器容器	陶	0885D	F16a	20.1	20.9	18.8	10	12	衛生容器,19c後期~20c中期	
757	瓶	陶磁	0485D	F17c	11.3	5.9	4.4	6	12	銅板転写等に「E三」,銅板転写等に「E三」,20c前期	
758	鉢	陶磁	0485D	F17c	15.6	6.9	8.0	6	8	銅板転写等に「E三」,20c前期	
759	鉢	陶磁	0485D	F17c	15.7	6.9	7.4	4	7	20c前期	
760	鉢	陶磁	0485D	F17c	18.0	2.9	11.0	12	12	中央に銅板転写等に「E三」,20c前期	
761	皿	陶磁	0485D	F17c	18.6	2.9	10.8	9	12	中央に銅板転写等に「E三」,底面に「真鍮」,20c前期	
762	土瓶蓋	陶	0485D,焼部	F17c	10.4	3.2	-	9	-	裏面「天山」印,土出漬,19c後期	天山
763	湯呑	陶	0485D	F17c	7.0	7.5	4.4	12	12	染土製「鶴」(火)印,19c後期~20c前期	
764	土瓶	陶	0895D	F16p	8.3	11.6	9.6	9	10	緑色釉,陶器キ「イッチ」,19c後期~20c中期	
765	大花瓶	陶磁	0895D	F16a	11.3	9.4	6.7	2	5	銅板転写等に「E三」,20c前期	
766	飯沼瓶	陶	0895D-1365D	F16a	11.8	6.1	4.8	6	12	染付,高台内に「香正製」,19c後期~20c前期	
767	大手付瓶	陶磁	0485D	F16,17g	10.5	5.5	5.3	10	12	銅板転写等に「E三」,20c前期~中期	
768	瓶	陶磁	0485D-1188K	F17p	11.0	5.5	4.2	12	10	20c前期	
769	瓶	陶	0485D	F16c	11.2	5.7	4.3	4	5	クロム緑二重線,底面にスタンプ「RC NORITAKE」,19c前期~中期	ノリタケ
770	陶器容器	陶	0485D	F17p	7.8	11.6	9.8	3	5	19c後期~20c中期	
771	湯呑	陶	0885D	F16a	6.6	7.1	3.8	6	12	上絵付「酒保」,「E三」,19c末~20c前期	
772	陶器容器	陶	0485D	F16c	6.6	7.8	5.0	11	12	衛生容器,19c後期~20c中期	
773	陶器容器	陶	0485D	F16c	17.9	17.8	17.5	4	12	衛生容器,19c後期~20c中期	
774	中皿	陶	0485D-1188K	F1617g	15.4	1.6	8.3	7	11	染付,高台内に「香正製」,19c後期~20c前期	窯?
775	中皿	陶	0905D	F16a	12.6	5.6	6.0	5	2	クロム緑二重線,20c前期	
776	鉢	陶	0905D	F16a	14.3	6.0	5.2	11	12	クロム緑二重線,スタンプ「RC NORITAKE 陶」,19c前期~中期	ノリタケ
777	瓶	陶	0905D	F15,16a	10.7	4.7	4.4	4	9	三ノノ,20c前期	
778	湯呑	陶	0905D	F15,16a	6.0	7.0	3.6	4	12	飯沼瓶,コバルト緑文,19c後期	窯?
779	中皿	陶	0905D,焼部	F15,16a	14.2	2.3	7.6	6	12	上絵付「荷馬」,19c末~20c中期	
780	中皿	陶	0905D	F15,16a	13.2	2.9	5.8	4	6	襷絵,19c後期	
781	瓶	陶	0475K	F13c	11.8	5.1	3.8	2	12	衛生容器,スタンプ「E」,19c後期~20c前期	
782	手付小	陶	0475K	F13c	14.8	3.3	-	7	-	「飯沼」印	
783	湯呑	陶	3875K	F13c	7.6	6.0	3.8	3	8	染付,手掻き,19c後期	窯
784	水盃	陶	3875K	F13c	6.0	2.7	6.2	8	4	染付,型打形,19c後期	窯
785	湯呑	陶	0215D	F16c	6.8	6.8	4.4	12	12	クロム緑二重線,底面「日輪製」,20c前期~中期	日本製
786	鉢	陶	0015D	F18m	-	-	-	-	-	20c前期~中期	
787	染付丸瓶	陶	0725K	F13g	10.3	4.6	4.2	10	12	飯沼瓶,裏面に「飯沼」,高台内に「梅花堂」,19c後期~20c前期	
788	上絵付鉢	陶	023,025D	F16a	15.4	7.3	6.4	1	8	上絵付文様,〇に「F」,19c後期~20c中期	
789	徳利	陶	2735K	F15g	1.9	13.3	5.5	12	12	反輪,19c後期~20c中期	
790	徳利小	陶	6535K	F17a	2.3	*8.2	-	12	-	反輪,19c後期~20c中期	
791	蓋	土	0309K,焼部	F13a-19a	23.0	15.8	17.2	4	5	透明釉(内面),スス付,19c後期~20c中期	
792	蓋小	陶	3819K	F16a	20.4	*6.5	-	8	-	飯輪(後輪),19c後期~20c中期	窯
793	湯呑	陶	3405X	F16a	7.1	7.4	4.6	11	12	上絵付,菊花文,19c後期	
794	小瓶	陶	3405X,茶褐色土	F16a	8.1	4.5	3.8	8	12	銅板印,牡丹文,19c後期~20c前期	窯
795	湯呑	陶	3405X	F17a	7.2	7.1	4.6	7	12	上絵付「E三下」,19c末~20c前期	
796	湯呑器	陶	3405X,茶褐色土	F16a	6.0	2.2	7.9	11	-	染付,手掻き,19c後期~20c前期	
797	湯呑	陶	3405X,茶褐色土	F16a	7.3	7.2	3.8	12	12	染付,手掻き,19c後期~20c前期	
798	井	陶	3405X	F15a	14.9	6.6	5.9	10	12	手掻き,鉄・コバルト,19c後期~20c前期	
799	井	陶	3405X	F15a	14.6	5.5	6.2	6	12	手掻き,鉄・コバルト,19c後期~20c前期	
800	大型陶器	陶磁	3425X	F17c	13.6	*1.8	-	3	-	20c前期~中期	
801	瓶	陶磁	3405X,茶褐色土	F16a	11.3	5.6	4.1	6	7	銅板転写等に「E三」,高台内に「梅花堂」,20c前期~中期	日本製
802	深皿	陶	3405X,茶褐色土	F16a	18.4	4.6	13.0	7	3	19c末~20c中期	陶製
803	丹塗	陶	北東郷土製	-	13.7	3.9	-	8	-	コバルト黄色二重線,20c前期~中期	
804	丹塗	陶	3405X,茶褐色土	F16a	15.5	7.3	5.7	6	10	コバルト黄色二重線,20c前期~中期	飯沼製
805	丹塗	陶	3405X,茶褐色土	F16a	15.1	4.8	-	7	8	クロム緑二重線,20c前期~中期	
806	井	陶	3405X,茶褐色土	F16a	16.8	7.9	6.4	4	7	クロム緑二重線,高台内「E三」,20c前期~中期	
807	小鉢	陶	3405X,茶褐色土	F16a	8.4	5.7	3.4	8	12	手掻文様,高台内スタンプ「梅724」,20c中期	窯
808	皿	陶	3405X,茶褐色土	F16a	3.0	12.0	4.8	12	12	底面エンボス「梅765」,20c中期	
809	井	陶	南東郷土製	-	15.4	7.1	6.8	6	12	手掻き,鉄・コバルト,19c後期~20c前期	
810	井	陶	北東郷土製	-	14.8	7.1	6.5	11	12	手掻き,コバルト,19c後期~20c前期	
811	湯呑	陶	北東郷土製	-	7.8	5.3	3.0	11	8	高台内エンボス「梅497」,20c中期	窯
812	湯呑	陶	北東郷土製	-	13.6	3.3	-	5	-	手掻き,コバルト,19c後期~20c前期	

土器・陶磁器 (14)

E-no.	器種	種類	通稱	グリッド	口径 (cm)	器高	直径	残存率 ロ/12	残存率 部/12	備考	産地
813	井	甕	黄土甕類		15.6	6.2	5.8	1	12	手掻き, コバルド, 15c後期~20c前期	
814	酒杯	甕	1115K	F15r	7.0	2.7	3.0	2	6	灰釉, 内面に糸子付, 外面上緑「明成」口, 19c後期	
815	酒杯	甕	徳印	F16a	7.7	3.1	3.0	10	12	高台内「曹田」金彩, 19c後期~20c前期	
816	小杯	甕	136SD	F16q	8.8	4.9	3.9	5	9	高台内「秀」作, 19c後期~20c前期	
817	鉢	甕	高麗赤土甕類		21.1	8.0	9.0	9	12	スラング赤土, 若狭文, 19c後期~20c前期	
818	中皿	甕	3809K	F15m	15.0	4.3	6.8	7	12	磨粒, 19c後期~20c前期	
819	中皿	甕	136SD	F15q	13.9	3.3	7.6	1	12	磨粒, 19c後期~20c前期	
820	便器	甕	4049K	F13r	-	-	-	-	-	手掻染付, 丹色, 19c後期	
821	便器	甕	4049K, 黄土甕類	F15KJ	-	-	-	-	-	手掻染付, 磨粒, 19c後期	
822	小碗	甕類	徳印	F16a	7.8	5.3	4.4	6	5	磨粒スタンプ高台内C口 FNJ, 19c末~20c前期	
823	碗	甕	北越	F15q	11.3	5.1	3.7	8	12	磨粒スタンプ見込C口 FNJ, 19c末~20c前期	
824	碗	甕	高麗		12.2	4.5	4.0	4	7	磨粒スタンプ見込「山」, 見込C口 FNJ, 19c末~20c前期	
825	碗	甕	北越	F15q	-	*4.4	4.6	-	12	磨粒スタンプ見込C口 FNJ, 19c末~20c前期	
826	碗	甕類	靑瓦, 靑空塚石瓦(ガワ)	F16n	10.8	5.7	4.0	6	7	磨粒転写磨粒筆, 高台内「磯丸」角印, 20c前期~中期	日本製瓦 陶器
827	小杯	甕類	靑瓦	15, 16, 17n	8.4	5.9	4.7	1	5	磨粒転写裏面に「磯丸」角印, 20c前期	日本製瓦 陶器
828	酒呑	甕	徳印, 靑瓦	F16a	7.4	8.2	4.1	6	12	上級高台内「1」, エンボスC口「真」, 口縁と高台に磨粒, 19c末~20c中期	
829	鉢	甕	高麗赤土甕類		16.5	7.1	7.8	4	12	磨粒転写磨粒筆, 19c後期~20c中期	
830	大型碗	甕	高麗赤土甕類		10.9	9.4	6.2	4	3	磨粒転写磨粒筆, 19c後期~20c中期	
831	煎	甕	靑瓦	F16r	11.4	5.8	6.5	6	6	クロム緑二重磨粒「NORITAKE」, 20c前期~中前期	ノリタケ
832	皿	甕	北米赤土甕類		14.8	3.5	8.0	3	3	磨粒転写磨粒筆, 20c前期~中期	
833	皿	甕類	徳印	F15t	18.8	2.8	11.0	4	7	見込磨粒筆, 裏面「名古屋」口付, 19c20c前期~中期	奈良陶器
834	把手付碗	甕類	靑	F18q	11.0	5.7	5.4	7	10	磨粒転写全に「E三」, 20c前期	
835	把手付碗	甕類	靑瓦	F17a	10.8	5.6	5.5	11	12	磨粒転写全に「E三」, 20c前期	
836	把手付碗	甕類	黄土甕類		11.4	5.7	5.4	7	12	磨粒転写全に「E三」, 20c前期	
837	皿	甕類	046SD	F17i	18.8	3.0	11.1	8	12	20c前期~中期	
838	不詳	甕	北越	F15q	-	-	-	-	-	19c後期	
839	飯茶碗	甕	088 - 089SD	F16a	10.9	4.9	4.3	4	12	青・緑染文, 写真図版 遺物15	
840	飯茶碗	甕	089SD	F16n	11.7	5.0	4.0	9	12	磨粒, 写真図版 遺物15	
841	飯茶碗	甕	046SD	F17p	11.4	5.2	4.0	6	2	手掻, 写真図版 遺物15	
842	小杯	甕	046SD	F16r	9.5	*4.4	-	5	-	灰・磨粒, 写真図版 遺物15	
843	飯茶碗	甕	046SD	F16r	11.6	5.2	3.9	4	12	磨粒転写, 写真図版 遺物15	
844	飯茶碗	甕	090SD	F15a	11.5	4.9	-	4	2	子ム印	
845	大皿	甕	021SD	F16b	9.1	*6.3	-	1	-	高台内「青角丸」, 写真図版 遺物15	
846	飯茶碗	甕	北越	F14, 15r	11.2	5.5	4.0	2	12	手掻, 写真図版 遺物15	
847	飯茶碗	甕	東阿蘇瓦		11.0	6.1	4.0	4	12	手掻, エンボス「梅40」, 写真図版 遺物15	鹿
848	ビン型罌子	甕	黄土		11.3					写真図版 遺物18	
849	ノップ罌子	甕	黄土		2.8	4.2				写真図版 遺物18	
850	ノップ罌子	甕	東トレンテ	F16a	3.7	4.3				写真図版 遺物18	
851	ノップ罌子	甕	0519K	F16r	3.7	4.9				写真図版 遺物18	
852	罌子	甕	黄土		5.5	2.6				写真図版 遺物18	
853	罌子	甕	021SD	F16t	6.6	4.2				写真図版 遺物18	
854	フリート罌子	甕	089SD	F16a	8.4	4.0	4.2	1	12	写真図版 遺物18	
855	ビン型罌子	甕	089SD	F16a	5.4	7.5				写真図版 遺物18	
856	耐火煉瓦	煉瓦	黄土甕類		4.22.5	10.6	5.9			「チ C.K.R.」磨粒スタンプ	

ガラス製品

X-no.	分類1	分類2	銘柄	発色	気泡	濁濁	グリッド	口径 (cm)	器高 (cm)	器径 (cm)	備 考
1	薬瓶	一般用薬瓶		透明でわずかに赤色	縮み気泡	0465D	F17p	0.5	73.9	1.1	
2	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに青緑色	わずかにあり	0465D	F16n	1.2	4.2	2.8	
3	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	0465D	F16n	1.2	4.0	2.9	
4	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	0465D	F17p	1.5	4.0	最大6.4	
5	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	0465D	F17p	1.5	4.4	最大6.2	
6	文真瓶	インク瓶	桜花にSK	透明でわずかに黄色	なし	0465D	F16r	1.5	3.8	最大6.3	桜花時に「SK」
7	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	縮み気泡	0465D	F16r	1.5	4.2	4.1	
8	薬瓶	薬品瓶	丘か長	透明でわずかに青色	わずかにあり	0465D	F17p	0.9	6.1	2.4	
9	薬瓶	一般用薬瓶	ヨヂュムエキ	透明でわずかに青色	わずかにあり	046D	F17o	0.9	6.6	2.1	「ヨヂュム造 東京高田製」
10	薬瓶	医療用薬瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	0465D	F17p	1.2	8.4	4.2	目録付き
11	薬瓶	一般用薬瓶	美勝水	半透明で濁青色	わずかにあり	0465D	F17p	1.1	7.4	2.6	「美勝水」
12	薬瓶	一般用薬瓶	美勝水	半透明で濁青色	わずかにあり	0465D	F17p	1.2	9.2	3.5	「美勝水」
13	薬瓶	薬品瓶		透明でわずかに青緑色	なし	0465D	F17q	2.1	8.2	3.6	
14	薬瓶	薬品瓶	直にY	透明でわずかに青緑色	わずかにあり	0465D	F17o	1.9	7.9	3.4	
15	瓶ガラス	罇		透明でわずかに青色	なし	046D	F17p	6.4X	厚0.6	-	角形瓶ガラス、中・小種 色が赤心
16	薬瓶	一般用薬瓶	全油水	透明でわずかに青色	わずかにあり	3405X	F16n	0.9	7.1	2.2	「全油水」
17	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに青緑色	わずかにあり	3405X	F16n	3.8	4.5	4.7	スクリュウ栓
18	文真瓶	インク瓶		透明	わずかにあり	3405X	F15n	3.8	4.6	4.5	スクリュウ栓
19	文真瓶	インク瓶		半透明で青緑色	大きな気泡	3405X	F15n	4.6	4.4	5.0	スクリュウ栓
20	薬瓶	医療用薬瓶		透明でわずかに青緑色	わずかにあり	3405X	F15n	1.0	6.8	2.7	目録付、コルク付蓋
21	栓	薬品瓶の栓?		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	3405X	F16n	4.3	3.5	下開	栓
22	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに緑色	縮み気泡	3405X	F17m	外径3.2	6.5	4.6	
23	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに緑色	わずかにあり	3405X	F15m	1.4	4.7	4.0	
24	調味料瓶	ソース瓶	ハナソース	透明でわずかに青緑色	わずかにあり	3405X	F16n	1.7	14.9	3.6	「ハナソース 衛生酒」
25	調味料瓶	不明調味料瓶		透明でわずかに緑色	なし	3405X	F16n	2.0	16.4	4.5	
26	薬瓶	薬品瓶?	J.M.B.C	透明でわずかに黄色	縮み気泡	0895D	F16p	1.2	7.0	3.6	「J.M.B.C」
27	化粧瓶?	不明		半透明で白色	なし	0895D	F16p	2.6	8.0	4.4	化粧瓶、スクリュウ栓
28	瓶ガラス	罇		透明でわずかに青緑色	なし	0895D	F16p	4.9	厚0.2	-	角形瓶ガラス
29	文真瓶	インク瓶	MARUSHIRO SHIYOKAI	透明でわずかに黄色	わずかにあり	0895D	F16p	1.4	5.1	3.9	「MARUSHIRO SHIYOKAI」
30	化粧瓶	化粧クリーム瓶	SANTANEY	半透明で白色	なし	3425X	F17s	3.9	3.8	4.8	スクリュウ栓
31	瓶ガラス	凸レンズ		透明でわずかに青緑色	なし	3425X	F17s	7.5	厚0.7	-	
32	薬瓶	薬品瓶	津生	透明でわずかに赤色	なし	0885D	F16pn	1.1	5.7	1.5	「津生」
33	薬瓶	薬品瓶		透明でわずかに青色	なし	0519K	F16r	1.0	4.5	1.7	
34	化粧瓶	不明	COMBI	透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	1859K	F17m	0.6	7.4	3.6	「KONBU」
35	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	0235D	F16s	2.3	6.3	5.5	
36	文真瓶	インク瓶	丸輪	透明でわずかに緑色	多くあり	0725K	F15q	1.4	3.8	4.8	〇に「M」
37	瓶ガラス	罇		透明でわずかに青緑色	なし	0709K	F15t	10.0	厚0.6	-	角形瓶ガラス
38	薬瓶	薬品瓶?		透明でわずかに黄緑色	なし	1275K	F15r	1.6	5.9	3.7	
39	薬瓶	薬品瓶?	下里	半透明で青色	わずかにあり	1109K	F15t	1.3	6.4	2.2	
40	化粧瓶	化粧水	ホーカ一演	透明でわずかに黄色	わずかにあり	2035D	F15r	1.4	9.8	3.2	「ホーカ一演 化粧」
41	化粧瓶	化粧クリーム瓶		透明でわずかに青緑色	わずかにあり	3339K	F15l	6.0	2.5	5.8	スクリュウ栓、スクラム容積、スクリュウ栓
42	化粧瓶	化粧クリーム瓶	MIDO	半透明で白色	なし	1589K	F15q	3.9	4.9	3.8	「登録商標 導本」 〇に「少 愛知 名古屋組合 容積 昇算」
43	化粧品瓶?	牛乳瓶?	導本	透明でわずかに青緑色	わずかにあり	3765D	F15p	1.0	15.2	4.2	
44	調味料瓶	酢瓶		半透明で青緑色	わずかにあり	0015D	F17s	1.7	18.0	5.4	
45	薬瓶	一般用薬瓶	タムシトリ	半透明で青色	わずかにあり	0185D	F15p	0.9	5.1	1.8	
46	薬瓶	目薬	陽光水	透明でわずかに青緑色	多くあり	東都トランプ	F15t	0.9	3.7	2.5	
47	薬瓶	一般用薬瓶		透明でわずかに黄色	多くあり	東都トランプ	検表	1.1	6.2	-	
48	薬瓶	医療用薬瓶		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	混丸	F15,16,17n	1.0	7.8	4.2	目録付
49	化粧瓶	不明	ロマン	透明でわずかに赤色	なし	北壁探丸	F16r	1.1	5.5	最大4.8	香木ビン、スクリュウ栓、キヤップ付「TELLME 500cc」, スクリュー栓
50	化粧瓶	化粧水	TELLME	半透明で白色	なし	北壁探丸	F15l	1.9	9.8	6.0	
51	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに黄緑色	わずかにあり	混丸	F15o	1.4	4.4	最大6.5	
52	文真瓶	インク瓶		半透明で青色	わずかにあり	混丸	F15,16,17n	3.2,内径1.9	6.0	4.7	
53	文真瓶	インク瓶		透明でわずかに黄色	わずかにあり	検出	F16r	1.4	4.4	最大4.6	
54	文真瓶	罇	ふくのり	半透明で黄緑色	多くあり	北壁探丸	F15l	4.3	4.5	4.8	「ふくのり」蓋付、スクリュウ栓
55	化粧瓶	化粧クリーム瓶		半透明で白色	なし	混丸	検表	4.0	4.6	3.8	スクリュウ栓

その他（骨製品）

X-no.	群種1	材質	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	透視	グリッド	備考
56	歯ブラシ	骨か	14.2	幅1.1	厚0.7	089SD	F16p	4列
57	歯ブラシ	骨か	14.0	幅1.3	厚0.7	127SK	F15r	
58	歯ブラシ	骨か	13.7	幅1.2	厚0.9	047SD	F15s	
59	歯ブラシ	骨か	12.7	幅1.1	厚0.6	089SD	F16o	4列
60	歯ブラシ	骨か	*10.6	幅1.1	厚0.6	127SK	F15r	4列、ブラシ部欠損
61	歯ブラシ	セルロイド	14.1	幅1.1	厚0.5	覆乱	F15n	4列 f 著人藤野子 内外工務株式会社
62	歯ブラシ	セルロイド	*9.8	幅*0.9	厚0.4	覆乱	F15n	4列 f SUPERIOR QUALITY
63	ボタン	骨か	厚1.6	-	厚0.35	047SD	F15s	

金属製品（1）

M-no.	群種	材質	計第1 (cm)	計第2 (cm)	計第3 (cm)	透視	グリッド	取上No.	備考
1	歯か	鉄製品	長16.0	幅1.0	厚1.0	606SD f中層	F16q		処理No.111
2	鉄線	鉄製品	-	幅1.2	厚1.2	603SD	F17r	399	未処理
3	鉄線	鉄製品	長9.5	幅1.4	厚0.3	389SK	F15l	77	処理No.92
4	鉄り金具	鉄製品	長4.6	幅3.5	厚0.3	389SK f層	F15l		処理No.42
5	歯口	鉄製品	長-	幅0.9	厚1.0	389SK	F15l	114	処理No.11
6	歯口	鉄製品	長5.7	幅1.5	厚0.1	389SK	F15l		処理No.9
7	歯口	鉄製品	長4.5	幅1.8	厚0.8	389SK	F15l	106	処理No.10
8	棒状合衆歯物	鉄製品	長6.2	幅2.0	厚1.2	389SK	F15l		未処理
9	釘	鉄製品	長7.7	幅1.2	厚0.6	389SK	F15l		未処理
10	釘	鉄製品	-	幅1.5	厚0.8	389SK	F15l		未処理
11	釘	鉄製品	幅1.2	厚0.5	389SK	F15l		未処理	
12	釘	鉄製品	長9.5	幅2.0	厚0.6	466SE	F15k		処理No.112
13	釘	鉄製品	長9.0	幅0.6	厚0.6	466SE	F15k		処理No.112
14	釘	鉄製品	長5.1	幅1.0	厚0.6	466SE	F15k		処理No.112
15	釘	鉄製品	長5.5	幅1.4	厚0.6	466SE	F15k		処理No.112
16	歯口	鉄製品	長3.2	幅1.4	厚0.9	110SK	F15t		処理No.5
17	合衆歯物	鉄製品	長9.0	幅4.2	厚0.9	110SK	F15t		処理No.113
18	釘	鉄製品	長6.7	幅1.7	厚1.0	110SK	F15t		処理No.113
19	釘	鉄製品	長4.0	幅0.9	厚0.7	110SK	F15t		処理No.113
20	釘	鉄製品	長3.9	幅1.0	厚0.8	110SK	F15t		処理No.113
21	釘	鉄製品	-	幅0.9	厚0.9	110SK	F15t		処理No.113
22	合衆歯物	鉄製品	長7.1	幅2.2	厚1.0	381SK	F16n	462	処理118
23	歯口	鉄製品	-	-	-	492SK	F15n	467	処理No.13
24	歯口	鉄製品	長7.9	幅1.0	-	087SD	F17n		処理No.2
25	歯か	鉄製品	長2.7	厚0.5	-	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
26	歯か	鉄製品	長2.5	厚0.7	-	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
27	歯口	鉄製品	長4.5	幅4.0	厚1.5	492SK	F15m	686	処理No.120
28	釘	鉄製品	長7.3	幅1.2	厚0.6	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
29	釘	鉄製品	長6.0	幅0.8	厚0.8	492SK (北西)	F15m		未処理
30	釘	鉄製品	-	幅1.0	厚0.6	492SK (北西)	F15m		未処理
31	釘	鉄製品	-	幅0.9	厚0.7	492SK (北西)	F15m		未処理
32	釘	鉄製品	長5.0	幅1.4	厚0.9	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
33	釘	鉄製品	長3.9	幅0.7	厚0.6	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
34	釘	鉄製品	長2.5	幅0.8	厚0.5	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
35	釘	鉄製品	長2.6	幅1.0	厚0.7	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
36	釘	鉄製品	長3.5	幅0.7	厚0.6	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
37	釘	鉄製品	-	幅0.7	厚0.6	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
38	釘	鉄製品	-	幅0.7	厚0.7	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
39	釘	鉄製品	-	幅1.2	厚0.7	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
40	釘	鉄製品	-	幅1.5	厚0.7	492SK (西ベルト)	F15m		未処理
41	歯口 (脚)	鉄製品	長11.4	幅0.9	-	048SD	F17i		処理No.20
42	歯口 (一体型) か	鉄製品	-	幅0.3	-	048SD	F17p		処理No.1
43	歯口	鉄製品	長7.1	幅0.9	-	長尺歯口	-		処理No.15
44	フイゴの口	陶器	外径7.3	孔径2.9	-	北製トレンテ	F15r		
45	重機用鉄片	金属	長8.1	幅6.2	厚3.6	604SD	F16s		
46	重機用鉄片	金属	長10.5	幅8.6	厚5.3	492SK	F15m	426	
47	歯口鉄片	鉄製品	長5.2	幅4.6	厚2.0	466SE	F15k		処理No.112
48	歯機用鉄片	金属	長4.9	幅3.7	厚3.1	110SK	F15n		F15t
49	歯	アルミ	15.0	3.5	8.0	340SX (茶褐色土)	F16n		
50	歯	アルミ	16.0	5.0	9.0	340SX (茶褐色土)	F16n		
51	歯機ケース	鉄製品	長5.0	幅3.7	厚0.6	東製トレンテ	F16t		処理No.64
52	歯機用金具	鉛か	長3.8	幅1.2	厚0.6	606SD f上層黄色土	F15q		処理No.32
53	棒状歯	鉄製品	長11.2	幅1.0	厚0.1	089SD	F16p		処理No.109
54	ベルト金具	鉄製品	長4.0	幅4.0	厚0.1	376SK	F15p		処理No.41
55	ベルト金具	鉄製品	長2.1	幅3.0	厚0.1	046SD	F17p		処理No.1
56	ベルト金具	鉄製品	長1.9	幅2.3	厚0.1	264SK	F17k		未処理
57	ベルト金具	鉄製品	長3.3	幅2.1	厚0.3	204SD	F15r		処理No.31
58	歯車歯車	鉄製品	長2.5	厚0.1	-	089SD	F16p	55	処理No.27
59	ボタン	鉄製品	長2.4	厚0.8	-	340SX	F15n		処理No.45
60	ボタン	鉄製品	長2.3	厚0.6	-	127SK	F15r		処理No.39



1 調査区南東隅
(駐車場右側が南辺土塁、側を外堀がめぐる、
北西から)



2 調査区全景
(下面、戦国期の堀はベルトを残した状態、
西から)



- 3 戦国期の堀
（中央の南北溝が 605SD, 北から）
- 4 堀（605SD 北壁での断面, 南から）
- 5 堀（605SD ベルト断面, 北から）
- 6 溝（606SD-e 地点断面, 南から）



- 7 上面 東半部分（戦国期の堀・区画溝の検出状況，北から）／ 8 溝（東西にのびる 603SD，東から）
9 溝（南北にのびる 606SD,603SD と T字に接続する，南から）／ 10 溝断面（603SD 東壁にて，西から）／
11 溝断面（606SD-a 地点，北から）／ 12 溝断面（606SD-c 地点，南から）



- 13 下面 完掘状況（戦国期の堀・区画溝, 北東から）
- 14 溝断面（607SD, 東から）
- 15 堀断面（606SD-f地点北壁にて, 南から）
- 16 溝完掘状況（607SD, 西から）



17 屋敷境の溝と柱穴列

(496SD, 画面左の壁面に境の溝埋込後に掘削された土坑0705K,1105Kがみえる。北から)

18 調査区北東隅壁面

(廃棄土坑の重複が著しい, 南から)



19 土坑完掘状況 (0855K, 北から)

20 土坑遺物出土状況

(0855K ベルト南側部分, 東から)



21 調査区北西部 廃棄土坑群

(瓦瀧 413SK は明治期, 西から)

22 土坑 遺物出土状態

(492SK, 北から)

23 土坑断面 (389SK, 南東から)

24 土坑完掘状況と調査区北壁

(387SK, 492SK 付近, 南から)

25 土坑完掘状況と調査区北壁

(389SK, 南から)

26 土坑遺物出土状態と壁面

(380SK, 南から)



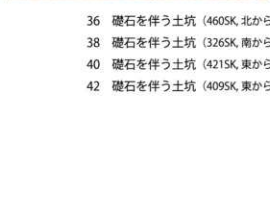


- 27 土坑検出状況 (413SK 上層掘削段階, 南東から)
- 28 土坑遺物出土状態 (413SK の椀瓦と焼土塊, 北から)
- 29 土坑完掘状況 (413SK 底面南寄りに2カ所の凹みをもつ楕円形土坑, 東から)
- 30 土坑遺物出土状態 (153SK 胎衣埋納遺構か, 東から)
- 31 土坑遺物出土状態 (3875K, 南東から)
- 32 土坑ベルト断面 (3875K, 東から)
- 33 地下室断面 (3815K 下層褐色土層は無遺物, 南から)



34 地下室完掘状況 (381SK, 南東から)

35 下層遺物出土状態 (381SK, 東から)



36 礎石を伴う土坑 (460SK, 北から) / 37 礎石を伴う土坑 (120SK, 北から)
 38 礎石を伴う土坑 (326SK, 南から) / 39 礎石を伴う土坑 (412SK, 東から)
 40 礎石を伴う土坑 (421SK, 東から) / 41 礎石を伴う土坑 (408SK, 南から)
 42 礎石を伴う土坑 (409SK, 東から) / 43 礎石を伴う土坑 (495SK, 北から)



44 版築状埋土断面

(1965K, 南から)

45 土坑最下層

(1965K, 手前が東)

46 版築状埋土と段削り出し

(1965K, 南から)

47 土坑検出状況

(1965K, 長軸が60SSDの幅にあたる, 北西から)



48 版築状埋土最下層 (1945K 付近, 南から)

49 土坑断面 (版築状埋土の8325K, 東壁にて)

50 土坑最下層 (5535K, 西から)



51 溝完掘状況 (0265D・0275D 重複, 東から)



52 溝断面 (東壁 0265D・0275D 付近, 西から)



53 調査区南東隅壁面 (西から)



54 調査区南壁面 (6065D 付近, 北から)

55 石材廃棄 検出状況

(0015D・0025D, 北西から)

56 石材廃棄状況 部分 (0015D, 北から)





- 57 防空壕埋土 (090SD, 西から)
- 58 防空壕出入口スロープ (340SX, 北から)
- 59 防空壕完掘状況 (090SD, 西から)
- 60 防空壕と地下室 (340SXと白線が381SK, 北東から)
- 61 防空壕と当時の掘削痕 (340SX周辺, 北から)
- 62 産業廃棄物の分別 (煉瓦、石材、コンクリート、鉄筋等)



63 上面 完掘状況（南東から）



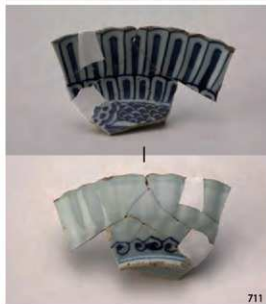
64 下面 完掘状況（東半部分、北から）



65 下面 完掘状況 (中央部分, 北から)



66 下面 完掘状況 (西半部分, 北から)

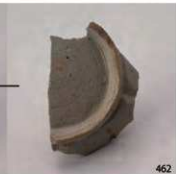
























385



721



726



856



789



474



762



1



702



472



2











ふりがな	なごやじょうさんのまるいせき							
書名	名古屋城三の丸遺跡 VIII							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第161集							
編著者名	武部真木(編集)・鈴木正貴・加藤博紀・鬼頭 剛・巖山誠一・川添和聡							
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前々須野方802-24 TEL 0567(67)4161							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なごやじょう 名古屋城 さんのまる 三の丸	あいらいけんなごやし 愛知県名古屋市中区三の丸一丁目	23106	007027	35度 10分 43秒	136度 53分 54秒	2006.11 ~2007.3	1,089	名古屋高等 ・地方・簡易 裁判所庁舎 増築
(世界測地系による)								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
名古屋城 三の丸遺跡	城館跡	戦国時代 江戸時代 近代	堀・区画溝・井戸 ・土坑・防空壕	近世陶磁器、土器 近代陶磁器 金属製品		旧陸軍関連遺構		
文書番号	発掘届出(18埋セ第37号) 通知(18教生第1275号) 終了届(18埋セ第105号) 発見届・保管証(18埋セ第105号) 監査結果通知(19教文第10-3号)							
要約	戦国期那古野城に関連する堀、溝等を確認し、近世では南面する武家屋敷の屋敷表の範囲、および道の一部が明らかになった。明治以降この地を占有した陸軍第三師団に関連する遺物、防空壕跡などを確認した。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第161集

名古屋城三の丸遺跡Ⅷ

2008年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社